

冷水バイパス関係 埋蔵文化財調査報告

筑紫野市・朝倉郡夜須町所在遺跡群の調査

1982

福岡県教育委員会

冷水バイパス関係 埋蔵文化財調査報告

筑紫野市・朝倉郡夜須町所在遺跡群の調査

序

冷水道路は、国道200号線バイパスとして福岡県道路公社が昭和49年から建設の計画を進めてこられたものであります。県教育委員会は、県道路公社から委託を受けて、この道路建設計画地内に埋蔵する文化財を昭和51年度から56年度までの6年間にわたり道路建設計画等に応じて発掘調査を実施してきたのであります。

この報告書は、この間に実施した筑紫野市および朝倉郡夜須町所在の8遺跡の調査記録であります。その内容は、縄文時代の遺物、弥生時代の集落跡、古墳、奈良・平安時代の建物・溝等です。本報告書を学問研究に、文化財愛護の普及あるいは学校教育等にご活用いただければ幸甚に存じます。

また、本文中に記名した方々はもとより、種々のご協力をいただいた関係各位に深く謝意を表します。

昭和57年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 友野

隆

例　　言

- この報告書は、冷水バイパス建設によって破壊される遺跡の発掘調査の報告書である。
- 発掘調査は、昭和51年度の予備調査を基に、福岡県道路公社の委託事業として、昭和55・56年度に福岡県教育委員会が実施した。
- 本書の執筆は、下記のとおりである。

I	福岡県教育庁管理部文化課	栗原 和彦
II	タ	浜田 信也
III-1	タ	浜田 信也
-2	タ	馬田 弘稔 中間 研志
-3	タ	浜田 信也
-4	タ	浜田 信也 中間 研志
-5	タ	馬田 弘稔 中間 研志
-6	タ	馬田 弘稔 中間 研志
-7	タ	浜田 信也 中間 研志
-8	タ	中間 研志 栗原 和彦

- 掲載図の実測・製図には、栗原、前川威洋(故人)、浜田、中間、馬田があたり、整理補助員の平田春美、豊福弥生の両氏に多大なる援助を頼ったほか、一部を奥村俊久君(筑紫野市教育委員会)にお願いした。掲載写真は各担当者が撮影したが、遺物の一部は九州歴史資料館の石丸洋氏の指導の下に平島美代子氏にお願いした。
- 遺物の整理作業にあたっては、岩瀬正信氏の下に、九州歴史資料館の整理作業員が行なった。
- 本書の編集は、浜田と中間が担当した。

本文目次

I 調査の経過	1	5. 浮殿C遺跡	37
II 位置と環境	5	1. はじめに	
III 各遺跡の調査	7	2. 造構と遺物	
1. 池田8号古墳	7	3. 小結	
2. 池田遺跡	17	6. 浮殿D遺跡	41
1. はじめに		1. はじめに	
2. 造構と遺物		2. 造構と遺物	
3. 小結		3. 小結	
2. 大島遺跡	51	7. 大島遺跡	51
1. はじめに		1. はじめに	
2. 造構と遺物		2. 造構	
3. 小結		3. 遺物	
3. 浮殿A遺跡	23	4. 小結	
1. はじめに		8. 八ヶ坪遺跡	163
2. 造構と遺物		1. はじめに	
3. 小結		2. 造構と遺物	
4. 浮殿B遺跡	33	3. 小結	
1. はじめに			
2. 造構と遺物			
3. 小結			

図版目次

図版 1 (1) 池田 8 号古墳墳丘近景 (南より)

(2) 池田 8 号古墳開口後 (西より)

図版 2 (1) 石室閉鎖石の状態

(2) 石室閉鎖石除去後の状態

図版 3 (1) 墳丘内列石

(2) 墳丘内列石 (南側)

図版 4 (1) 石室奥壁

(2) 石室内敷石の集石状態

図版 5 (1) 墳丘除去後の状態 1

(2) 墳丘除去後の状態 2

図版 6 (1) 墳丘除去後の状態 3

(2) 墳丘除去後の状態 4

図版 7 (1) 墳丘除去後の状態 5

(2) 墳丘除去後の状態 6

図版 8 須恵器

図版 9 須恵器・土師器

図版 10 (1) 池田遺跡全景 (北より)

(2) 池田遺跡全景 (南より)

図版 11 (1) トレンチ近景 (南より)

(2) 溝

図版 12 (1) 土 墓

(2) 中央付近造構

図版 13 (1) 中央付近造構

(2) 繩文土器出土黄色土落込み

(3) 同上土層断面

図版 14 (1) 硬玉製勾玉

(2) 繩文土器底部・石核

(3) 勾玉出土状態

(4) 繩文土器底部出土状態

図版 15 (1) 繩文土器 (外面)

- 図版 15 (2) 純文土器（内面）
- 図版 16 (1) 浮殿A遺跡地下式横穴
(2) 地下式横穴（豎穴部より玄室部を望む）
- 図版 17 (1) 地下式横穴（玄室部より豎穴部を望む）
(2) 地下式横穴豎穴部
- 図版 18 (1) 覆石土壙墓（南より）
(2) 同 上（東より）
- 図版 19 (1) 覆石下の土壙
(2) 土 壙
- 図版 20 (1) 第1・2号石棺墓遠景（東より）
(2) 第1・2号石棺墓（北より）
- 図版 21 (1) 第1・2号石棺墓（西より）
(2) 第1号石棺墓（南より）
- 図版 22 (1) 第1号石棺墓（北より）
(2) 第2号石棺墓（西より）
- 図版 23 第2号石棺墓（粘土・蓋石除去の各状態）
- 図版 24 (1) 浮殿B遺跡地下式横穴（西より）
(2) 地下式横穴（東より）
- 図版 25 (1) 浮殿C遺跡トレンチ内遺構出土状態
(2) トレンチ内段落ち部
- 図版 26 (1) トレンチ内遺構出土状態
(2) トレンチ内溝出土状態
- 図版 27 (1) 浮殿D遺跡発掘前全景（南より）
(2) 中央区全景（東より）
- 図版 28 (1) 北区全景（南より）
(2) 南端トレンチ
- 図版 29 (1) 北区遺構出土状態（北より）
(2) 北区南北隅遺構出土状態（南より）
- 図版 30 (1) 捜立柱建物
(2) 第1号土壙土器出土状態
- 図版 31 土師器・延石
- 図版 32 (1) 大島遺跡東側全景（西より）
(2) 大島遺跡全景（東より）

- 図版 33 (1) 第1号住居跡（西より）
(2) 第2号住居跡（北より）
- 図版 34 (1) 第3号住居跡（南より）
(2) 第4号住居跡（西より）
- 図版 35 (1) 第19・21～24号貯蔵穴（西より）
(2) 第26～31号貯蔵穴（南より）
- 図版 36 第8・10・12・22号貯蔵穴
- 図版 37 (1) 第12号土壤・第37・22号貯蔵穴
(2) 第39・21号貯蔵穴
- 図版 38 第26・27・32・33号貯蔵穴
- 図版 39 第34・41・46・47号貯蔵穴
- 図版 40 第1・6・7・9・12号土壤
- 図版 41 (1) 第1号竪穴
(2) 第2号竪穴
(3) 溝（西より）
- 図版 42 弥生時代前期甕
- 図版 43 弥生時代前期甕・鉢・壺
- 図版 44 弥生時代前期壺
- 図版 45 弥生時代前期甕・中期甕
- 図版 46 弥生時代中期壺
- 図版 47 弥生時代中期壺・鉢等
- 図版 48 弥生時代中期甕・高环
- 図版 49 (1) 弥生時代中期器台
(2) 第2号竪穴出土甕
(3) 打製石鐵
- 図版 50 (1) スクレイバー
(2) 石のみ・砥石
(3) 石磨丁
(4) 土製品
- 図版 51 (1) 紡錘車
(2) 大型蛤刃石斧
(3) 磨製石斧
(4) 磨石

- 図版 52 縄文土器
- 図版 53 縄文土器(内外面)
- 図版 54 (1) 八ヶ坪遺跡全景(南より)
(2) 八ヶ坪遺跡B区全景(北より)
- 図版 55 (1) 第1号住居跡(東より)
(2) 第1号住居跡周壁溝
- 図版 56 (1) 第2号住居跡(北より)
(2) 第2号住居跡床面土器出土状態
- 図版 57 (1) A区全景(南より)
(2) 溝1土層断面
- 図版 58 (1) 溝3(北より)
(2) 溝4(東より)
(3) 溝5・6(東より)
(4) 溝7(北より)
- 図版 59 (1) 溝3北端土器出土状態
(2) A区東南隅包含層土器出土状態
(3) 第1・2号掘立柱建物
(4) 第3・4号掘立柱建物
- 図版 60 第2号住居跡出土土器
- 図版 61 (1) 第2号住居跡出土遺物
(2) 溝3北端出土土器
- 図版 62 (1) 溝3北端出土土器
(2) 溝4出土土器
- 図版 63 溝4出土土器
- 図版 64 A区東南隅包含層出土遺物
- 図版 65 B区東端段落ち出土遺物

挿 図 目 次

	頁
第 1 図 冷水道路および調査遺跡 (1/20,000)	2
第 2 図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)	6
第 3 図 池田 8 号古墳周辺地形図 (1/1,000)	8
第 4 図 池田 8 号古墳墳丘実測図 (1/200)	9
第 5 図 墳丘土層図 (1/60)	10
第 6 図 石室実測図 (1/60)	11
第 7 図 土器実測図 1 (1/3)	13
第 8 図 土器実測図 2 (1/3)	14
第 9 図 土器実測図 3 (1/3)	15
第 10 図 耳環実測図 (1/2)	16
第 11 図 池田遺跡周辺地形図 (1/1,000)	18
第 12 図 池田遺跡地形図 (1/400)	19
第 13 図 造構配置図 (1/200)	20
第 14 図 繩文土器実測図 (1/2)	21
第 15 図 石核・勾玉実測図 (2/3)	22
第 16 図 土師器・青磁実測図 (1/3)	22
第 17 図 浮殿 A 遺跡周辺地形図 (1/1,000)	24
第 18 図 造構配置図 (1/300)	25
第 19 図 地下式横穴実測図 (1/60)	26
第 20 図 覆石土墳墓実測図 (1/40)	27
第 21 図 青磁・指環実測図 (1/2・1/1)	27
第 22 図 土壇実測図 (1/40)	28
第 23 図 第 1 号箱式石棺実測図 (1/30)	29
第 24 図 第 2 号箱式石棺実測図 (1/30)	30
第 25 図 浮殿 B 遺跡周辺地形図 (1/1,000)	34
第 26 図 浮殿 B 遺跡地形図 (1/300)	35
第 27 図 地下式横穴実測図 (1/60)	36
第 28 図 繩文土器実測図 (1/2)	36
第 29 図 浮殿 C 遺跡周辺地形図 (1/1,000)	38
第 30 図 調査区実測図 (1/400)	39

第 31 図 出土遺物実測図 (1/3)	39
第 32 図 浮殿D遺跡周辺地形図 (1/1,000)	42
第 33 図 浮殿D遺跡地形図 (1/600)	43
第 34 図 振立柱建物実測図 (1/60)	44
第 35 図 第 1 号土壙出土土器実測図 (1/3)	45
第 36 図 第 2 号土壙出土土器実測図 (1/3)	46
第 37 図 その他の遺構出土土器実測図 (1/3)	47
第 38 図 包含層出土土器実測図 (1/3)	48
第 39 図 垣石実測図 (1/2)	47
第 40 図 楕文土器実測図 (1/2)	50
第 41 図 大島遺跡周辺地形図 (1/1,000)	52
第 42 図 第 1 号住居跡実測図 (1/60)	53
第 43 図 第 2 号住居跡実測図 (1/60)	54
第 44 図 第 3 号住居跡実測図 (1/60)	55
第 45 図 第 4 号住居跡実測図 (1/60)	56
第 46 図 貯蔵穴実測図 1 (1/50)	57
第 47 図 貯蔵穴実測図 2 (1/50)	58
第 48 図 貯蔵穴実測図 3 (1/50)	60
第 49 図 貯蔵穴実測図 4 (1/50)	62
第 50 図 貯蔵穴実測図 5 (1/50)	63
第 51 図 貯蔵穴実測図 6 (1/50)	64
第 52 図 貯蔵穴実測図 7 (1/50)	65
第 53 図 土壙実測図 1 (1/40)	69
第 54 図 土壙実測図 2 (1/40)	70
第 55 図 穴穴実測図 (1/40)	73
第 56 図 溝断面図 (1/60)	74
第 57 図 第 1・2 号住居跡出土土器実測図 (1/4)	75
第 58 図 第 2 号住居跡出土土器実測図 (1/4)	76
第 59 図 第 2 号住居跡出土土器実測図 (1/4)	77
第 60 図 第 3・4 号住居跡出土土器実測図 (1/4)	78
第 61 図 第 1・2・4・9 号貯蔵穴出土土器実測図 (1/4)	80
第 62 図 第 10・12 号貯蔵穴出土土器実測図 (1/4)	81
第 63 図 第 16・17・19 号貯蔵穴出土土器実測図 (1/4)	82

第 64 図 第20~25号貯藏穴出土土器実測図 (1/4)	83
第 65 図 第27・28号貯藏穴出土土器実測図 (1/4)	84
第 66 図 第29・30号貯藏穴出土土器実測図 (1/4)	85
第 67 図 第30号貯藏穴出土土器実測図 (1/4)	86
第 68 図 第30~32・34号貯藏穴出土土器実測図 (1/4)	87
第 69 図 第35・36・38~40号貯藏穴出土土器実測図 (1/4)	88
第 70 図 第43・44号貯藏穴出土土器実測図 (1/4)	89
第 71 図 第44・45号貯藏穴出土土器実測図 (1/4)	90
第 72 図 第46号貯藏穴出土土器実測図 (1/4)	91
第 73 図 第46~48号貯藏穴出土土器実測図 (1/4)	92
第 74 図 第2~5号土壙出土土器実測図 (1/4)	93
第 75 図 第6・9号土壙出土土器実測図 (1/4)	94
第 76 図 第11・12号土壙出土土器実測図 (1/4)	95
第 77 図 第2号竪穴、溝出土土器実測図 (1/4・1/6)	96
第 78 図 溝下層出土土器実測図 1 (1/4)	97
第 79 図 溝下層出土土器実測図 2 (1/4)	98
第 80 図 溝上層出土土器実測図 1 (1/4)	100
第 81 図 溝上層出土土器実測図 2 (1/4)	101
第 82 図 溝上層出土土器実測図 3 (1/4)	102
第 83 図 溝上層出土土器実測図 4 (1/4)	103
第 84 図 溝上層出土土器実測図 5 (1/4)	104
第 85 図 溝上層出土土器実測図 6 (1/4)	105
第 86 図 溝上層出土土器実測図 7 (1/4)	106
第 87 図 溝上層出土土器実測図 8 (1/4)	107
第 88 図 溝上層出土土器実測図 9 (1/4)	108
第 89 図 溝上層出土土器実測図 10 (1/4)	109
第 90 図 石鎌実測図 (2/3)	148
第 91 図 スクレイバー実測図 (1/2)	149
第 92 図 土製品・磨製石器実測図 (1/2)	150
第 93 図 石斧・磨石・砥石実測図 (1/2)	151
第 94 図 繩文土器実測図 1 (1/2)	155
第 95 図 繩文土器実測図 2 (1/2)	156
第 96 図 繩文土器実測図 3 (1/2)	157

第 97 図	縄文土器実測図 4 (1/2)	158
第 98 図	八ヶ坪遺跡周辺地形図 (1/20,000)	164
第 99 図	各トレンチ出土遺物実測図 (1/3)	163
第 100 図	第 1・2 号住居跡実測図 (1/60)	165
第 101 図	第 1 号住居跡出土土師器実測図 (1/3)	166
第 102 図	第 2 号住居跡出土土師器実測図 1 (1/3)	168
第 103 図	第 2 号住居跡出土土師器・砥石実測図 2 (1/3)	169
第 104 図	第 2 号住居跡出土玉実測図 (2/3)	170
第 105 図	第 2 号住居跡出土鉄器・土製品・須恵器・縄文土器実測図(1/2)	171
第 106 図	溝 1 土層断面実測図 (1/40)	172
第 107 図	溝 2 出土土師器実測図 (1/3)	173
第 108 図	溝 3 北端出土土器実測図 (1/4)	173
第 109 図	溝 4 出土土器実測図 1 (1/4)	176
第 110 図	溝 4 出土土器実測図 2 (1/4)	177
第 111 図	溝 4 出土土器実測図 3 (1/4)	178
第 112 図	溝 6 出土弥生土器・須恵器実測図 (1/3)	180
第 113 図	溝 7 出土須恵器・土師器実測図 (1/3)	181
第 114 図	A 区東南隅包含層出土土器実測図 1 (1/4)	182
第 115 図	A 区東南隅包含層出土土器実測図 2 (1/4)	183
第 116 図	B 区東端段落ち出土須恵器・土師器・土製品実測図 (1/3)	185
第 117 図	B 区東端段落ち出土石製模造品実測図 (1/2)	186
第 118 図	第 1・2 号掘立柱建物実測図 (1/60)	187
第 119 図	第 3・4 号掘立柱建物実測図 (1/60)	188
第 120 図	第 5 号掘立柱建物実測図 (1/60)	189
第 121 図	A 区各ピット出土須恵器・土師器・白磁実測図 (1/3)	189

付 図 目 次

- 付図 1 浮殿D遺跡遺構配置図 (1/200)
- 付図 2 大島遺跡遺構配置図 (1/200)
- 付図 3 八ヶ坪遺跡遺構配置図 (1/200)

表 目 次

第1表	調査遺跡一覧表	3
第2表	大島遺跡・貯藏穴一覧表	67~68
第3表	大島遺跡・土壤一覧表	71
第4表	大島遺跡・弥生期土器觀察表	111~147
第5表	大島遺跡・石器・土製品一覧表	152~153
第6表	八ヶ坪遺跡・第2号住居跡出土玉計測表	171

I 調査の経過

一般国道200号線は、北九州市八幡西区を起点とし筑豊地方の直方市・飯塚市を経て筑紫野市原田に至り、一般国道3号線につながっている。福岡県の北部と中・南部を短絡する重要な幹線であるため、近年の交通混雑の状況はすさまじいものである。建設省や福岡県では、交通混雑の解消や車社会の発達に応じて、直方市下境から嘉穂郡桂川町までの約20kmに、同国道バイパスを建設した。

ところで、同国道は三郡山系中の冷水峠を越えなければならない。同峠は道路勾配が急な上、急カーブが多く、さらに冬季の積雪・凍結により、しばしば交通が規制されるなどの欠点があり、早期改良が望まれていた。

福岡県道路公社(以後県道路公社と略す)は、料金を徴収することのできる道路の新設や維持・改良などの管理を総合的に行なうなど、地方幹線道路の整備を促進することを目的として、昭和49年12月に発足した。

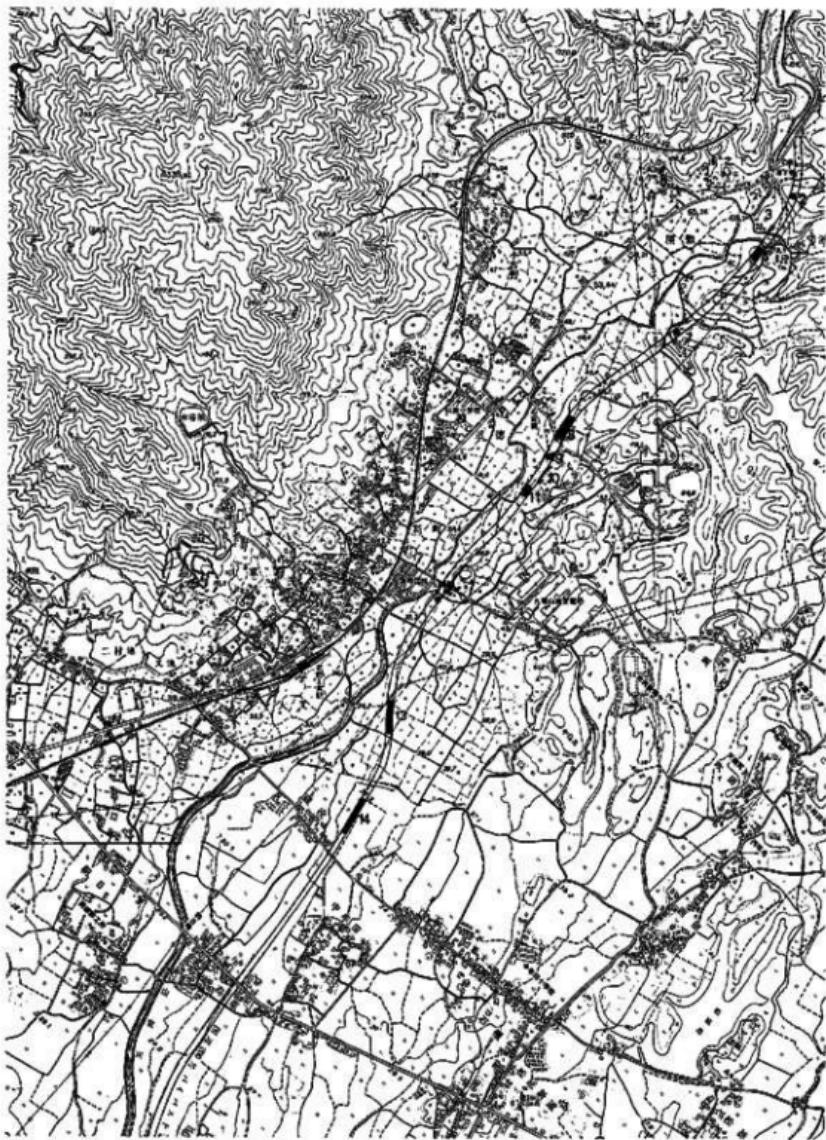
九州地方建設局では、桂川町以西の同国道バイパスの基本的な路線計画を作成していたが、嘉穂郡筑穂町内野付近から、朝倉郡夜須町朝日付近までの約10kmの間を有料道路とし、この間を冷水バイパスとして県道路公社が建設することとなった。

福岡県教育委員会(以後県教委)は、冷水バイパス建設計画地周辺の文化財等の分布状況について九州地方建設局における基本設計の段階で一応把握はしていたが、県道路公社に事業が引き継がれると共に、同公社と協議をすすめ、路線決定の資料を得る目的で再度分布調査を実施した。この結果、国・県指定の文化財は、建設計画予定地には遺存していない、発掘調査によって保存を必要とするような文化財が発見された場合を例外として、基本的な路線計画を了解した。

分布調査によって認められた埋蔵文化財包蔵地については、県道路公社との協議により、県教委が委託を受けて発掘調査することとなった。

発掘調査は、昭和51年度から実施することとなつたが、用地未買収という状況のもとでは本調査の実施は困難な状態であったので、予備調査的な事業でしかなかった。本格的な発掘調査は昭和55年に始まるが、この間にルートの変更などで1・3・6地点は要発掘調査地区から除外されることとなった。

本調査は、用地買収済の地区から始めることとした。昭和55年度に第2・第14地点の発掘調査を実施し、昭和56年度は第5・7・8・9・12・13地点の発掘調査を実施した。このうち、5・12地点はトレンチ調査で、9地点は全面の表土剥ぎ作業の段階で遺構のないことが解かり、



第1図 冷水道路および調査路 (1/20,000)

それ以上の調査は実施しなかった。また、7地点は用地買収が遅れ、昭和57年3月に実施することとなり、当報告書に掲載することはできなかった。

なお、第1表に示すとおり、所在地は全て筑紫野市大字山家となっているが、これは国土調査によって旧地名を廃止し統一したものであって、遺跡名は旧地名の小字を付し、8~11地点は字名が同じであるところから、A・B・C・Dを付した。

第1表 調査遺跡一覧表

地点	遺跡名	所 在 地	種 別	調 査 期 間	調査面積	備 寄
1		嘉穂郡筑後町内野	散布地			路 線 外
2	池田8号古墳	筑紫野市大字山家 3304-1	円 墳	昭和56年3月12日~3月27日	300m ²	
3		筑紫野市大字山家 3297		昭和51年8月2日~8月25日	30m ²	予 備 調 査 遺 構 な し
4	池田遺跡	筑紫野市大字山家 3442-2	集落跡 (?)	昭和51年6月16日~6月23日 昭和51年7月8日~7月30日	1,000m ²	
5		筑紫野市大字山家 3480, 3510, 3511		昭和56年6月3日~6月4日	260m ²	トレンチ調査 遺 構 な し
6						欠 番
7	池田9号古墳	筑紫野市大字山家 3720-3	円 墳	昭和57年3月1日~3月13日		
8	浮殿A遺跡	筑紫野市大字山家 3686-4, 3686-5	墓 地	昭和56年11月24日~12月8日	400m ²	
9	浮殿B遺跡	筑紫野市大字山家 4100	墓 地	昭和51年9月1日~9月27日 昭和56年7月27日~7月29日	60m ² 300m ²	予 備 調 査 本 調 査
10	浮殿C遺跡	筑紫野市大字山家 4113	集落跡 (?)	昭和51年9月24日~10月5日	70m ²	予 備 調 査
11	浮殿D遺跡	筑紫野市大字山家 4114, 4116	集落跡	昭和51年10月7日~12月28日	1,100m ²	
12		筑紫野市大字山家 4235, 4238, 4241-1, 4241-3		昭和56年4月14日~4月18日	300m ²	トレンチ調査 遺 構 な し
13	大島遺跡	筑紫野市大字山家 4178, 4180-3, 4181	集落跡	昭和56年6月15日~8月11日	1,200m ²	
14	八ヶ坪遺跡	美和夜須町中牟田字八ヶ坪	集落跡	昭和55年7月26日~10月27日	3,010m ²	

昭和51年の予備調査に始まり、その後のルート変更や用地買収の遅延から本調査の着手は遅れ、数年のブランクを置き、前述のような経過のもとに6年という年月を要して発掘調査は終了した。

調査関係者は次のとおりである。

総 括	福岡県教育委員会	教 育 長	友野 隆
	福岡県教育委員会管理部文化課	課 長	藤井 功
庶 務	*	主任主事	三瓶 幸夫
	*	々	古賀 秀幸
調 査	*	調査二係長	栗原 和彦

調査	福岡県教育委員会管理部文化課	主任技師	前川 威洋(故人)
々	々	々	浜田 信也
々	々	々	中間 研志
々	々	々	馬田 弘穂
々	々	々	池辺 元明
々	調査補助員	々	稻富 裕和
々	々	々	川村 博
々	々	々	田浦 郁子

なお、発掘調査にあたっては、福岡県道路公社、施行業者ならびに地元の方々に種々のご配慮をいただいた。記して感謝の意を表するところである。

II 位置と環境

冷水バイパスは、国道200号線のバイパスとして建設される。車社会の発達と既設国道の減少から起る交通混雑を解消する為にあちこちで国道バイパスが建設されている。国道200号は北九州市八幡西区で、国道3号から分かれ、筑豊を経由し筑紫野市で再び国道3号に合流する。ほぼ国鉄筑豊本線に沿って南下する国道200号は、筑豊と筑紫平野を割する三郡山塊すなわち冷水峠を越えて山家川沿いに下り、筑紫平野に出てくる。

山家川は筑紫平野の北部を潤す宝満川の支流である。宝満川やその支流域には数多くの遺跡が所在する。山家川を挟んで対峙する宮地岳と砥上岳の両山麓にも多くの遺跡地が知られている（第2図）。宮地岳中腹の殿様塚1号墳は近年知られた豪華ある石室で、円文や唐が描かれている。砥上岳山麓には、池田古墳群や牧の谷古墳群等の弥生時代から古墳時代の遺跡地が多い。

今回、調査の対象となった国道200号冷水バイパスは、砥上岳南西麓の山家川の南に沿って平野部から峠に向かって延びるルートで計画された。バイパスは同岳南西麓に展開する丘陵を横断し、低台地を縦断する。分布調査で要調査地域は14ヶ所があげられたが、予備調査をも含め調査を実施したのは、No. 2（池田古墳）、No. 4（池田遺跡）、No. 8（浮殿A遺跡）、No. 9（浮殿B遺跡）、No. 10（浮殿C遺跡）、No. 11（浮殿D遺跡）、No. 13（大島遺跡）、No. 14（八ヶ坪遺跡）の8遺跡であった。

池田古墳は、砥上岳南西麓に延びる丘陵先端に所在する。山家川沿いに展開する平野部の最深部に位置し、墳頂からはよく平野部が望める。池田の集落を挟んで対峙する丘陵上には、7基の円墳から成る池田古墳群が遺存する。池田遺跡は、池田の集落のある丘陵の先端に所在する。浮殿の遺跡群は山家川沿いに南西に延びる丘陵上やその裾部に所在する。A遺跡は標高62mの丘陵端部に位置し、谷を挟んで標高52mの平坦な丘陵にB遺跡がある。両遺跡とも中世代の墓であり、近接することから同一遺跡と見てもよからう。C遺跡はさらに小谷を挟んだ丘陵の緩斜面に所在するものである。D遺跡はC遺跡の所在する丘陵の南西裾部に広がる低い台地上に遺存する集落跡である。さらに山麓から南西に幅広く延びる台地上のほぼ中央北縁すなわち山家川に面する位置に大島遺跡が所在する。この台地の先端付近に八ヶ坪遺跡が所在している。恐らく両遺跡は幅広く展開するものと思われ、弥生時代から古墳時代までの大集落が遺存するものであろう。さらに大島遺跡で縄文時代後期の土器片が多數採集されており、隣接地に同時代の遺跡の遺存するものと思われる。



第2図 周辺通路分布図 (1/25,000)

III 各 遺 跡 の 調 査

1. 池田 8 号古墳

III 各遺跡の調査

1. 池田8号古墳

1.はじめに

池田8号古墳は、砥上岳の南西麓にあり、北に延びる丘陵端に所在する。その先端部には、山家川が西に流れ、これより西に平野部の広がるところである。古墳は標高102mの平坦部の先端に位置し、構築にあたっては丘陵斜面を利用しているので、墳丘はそれほど高くない。平坦部は墓地となっており、この古墳のほかにもそれらしい石材などが散在していたが、古墳としての確証は得られなかった。当古墳は1基のみの所在ではなく、筑紫野市教育委員会にて周辺に池田古墳群が確認されている(註1)。当古墳はこの古墳群の1基と考えられ、8号墳とした。

2. 遺構と遺物

(1) 墳丘(第3・4図、図版1・3)

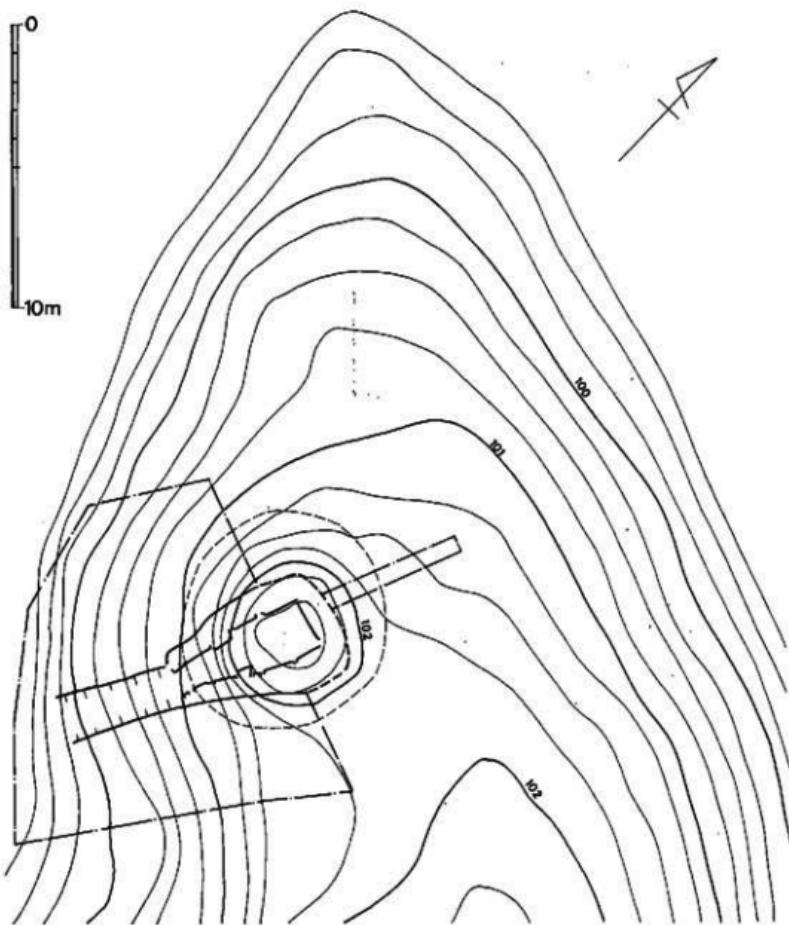
墳丘は南北径7.9m、東西径7.2mを測る。高さは、平坦部より1.1mで低い。墳丘の盛土状態は細いものでなく、厚く広く積み上げている。石室の掘り方が深いため、石室はほとんど掘り方内におさまる、このため盛土は掘り方内と積石間を封土後に天井石を載せ、一気に積上げを完了しているようだ。この盛土再間にあたっては、ほぼ掘り方線にそろのように盛土の流出を防ぐためのものと思われる石を配している(図版3)。全体に盛土は薄く石室の天井石が露呈している状態であった。掘り方は墓道をも含め、やや不整な羽子板状を呈し、深さは約3.1mを測る。

(2) 石室(第5図、図版2・3・4)

石室は、南西(平野部)に向て開口する单室の横穴式である。腰石には巨石を配し、その上部は大小の石を積上げている。奥壁は巨石を立て、間隙を小石で埋めているという状態である。積上げにあたっては、石の面をそろえており、その点には十分留意している。羨道部は、それほど大きな石は使用していない。天井石を受けていた石が一部で崩落しており、積み方はやや難である。床面は大小の角礫を敷いていたものと思われるが、盜掘によりほとんどが動かされていた。敷石は若干の遺存状態と石の量からして、上下2段あったと思われる。石室の両袖間と羨道部のほぼ中央付近の2ヶ所に権石を据えている。羨道部の権石の外側に板状の石を立て、



第3図 池田8号古墳周辺地形図 (1/1,000)



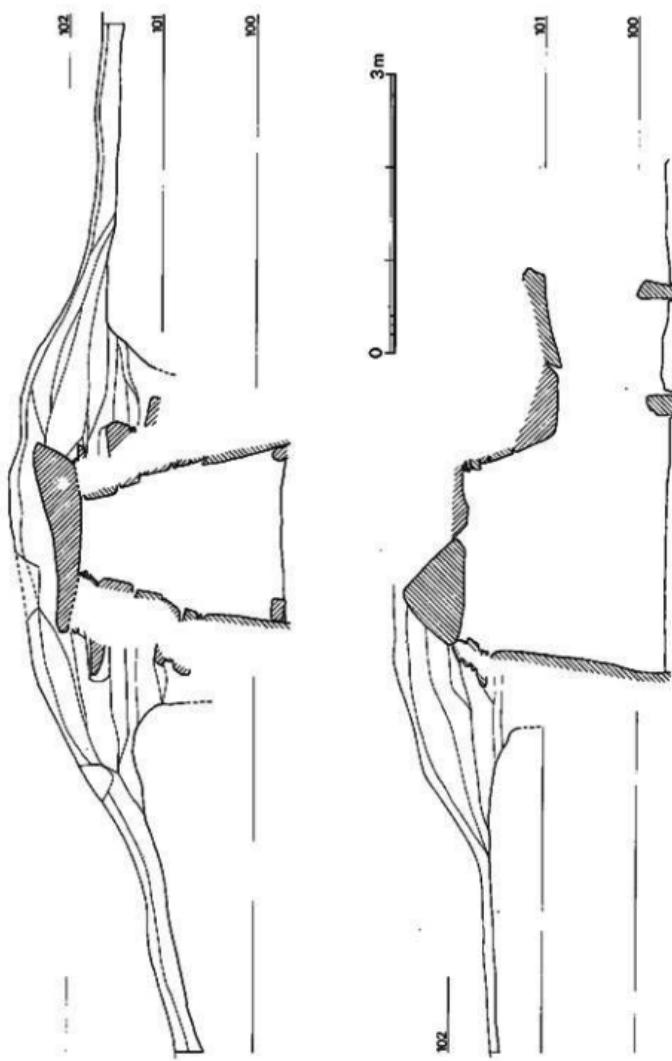
第4図 池田8号古墳墳丘実測図 (1/200)

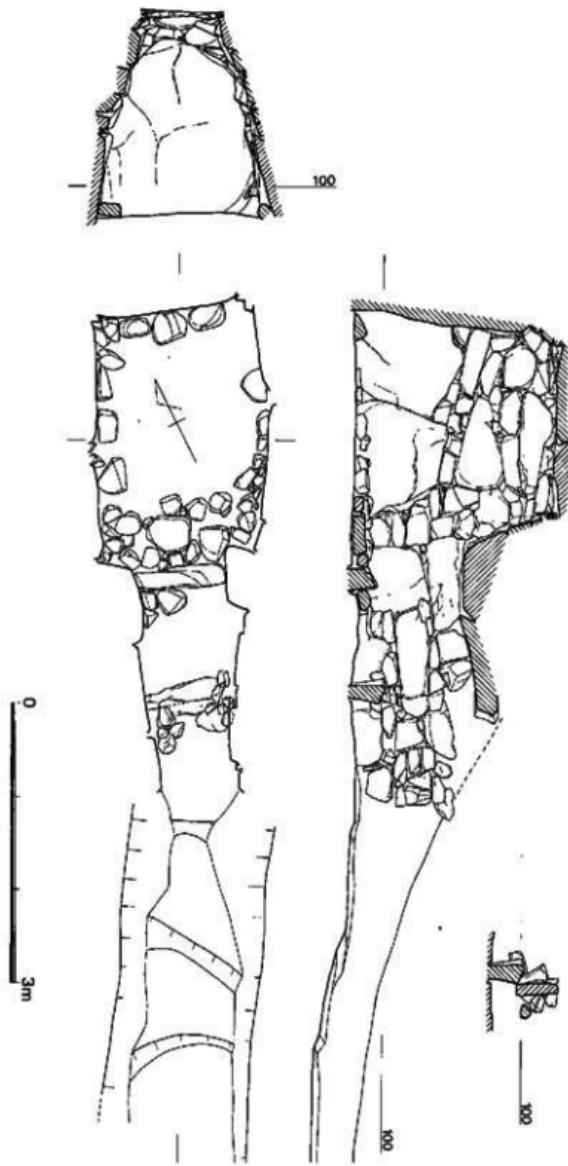
小石と封土をもって閉鎖している。

石室の規模は、主軸長4.2mである。玄室はやや不整な長方形を呈し、長さ2.7m、幅約1.8m、高さ約2.25mを測る。また、喉道部にも框石間に敷石があった模様であり、構造的には単室の石室であるが、この框石間を前室に見立てているようである。

墓道は、4mほどの長さで確認された。その先端部との落差は50cmほどで、道底は3段に平

第5圖 填 土 丘 斷 面 (1/60)





第6図 石 壁 実 測 図 (1/60)

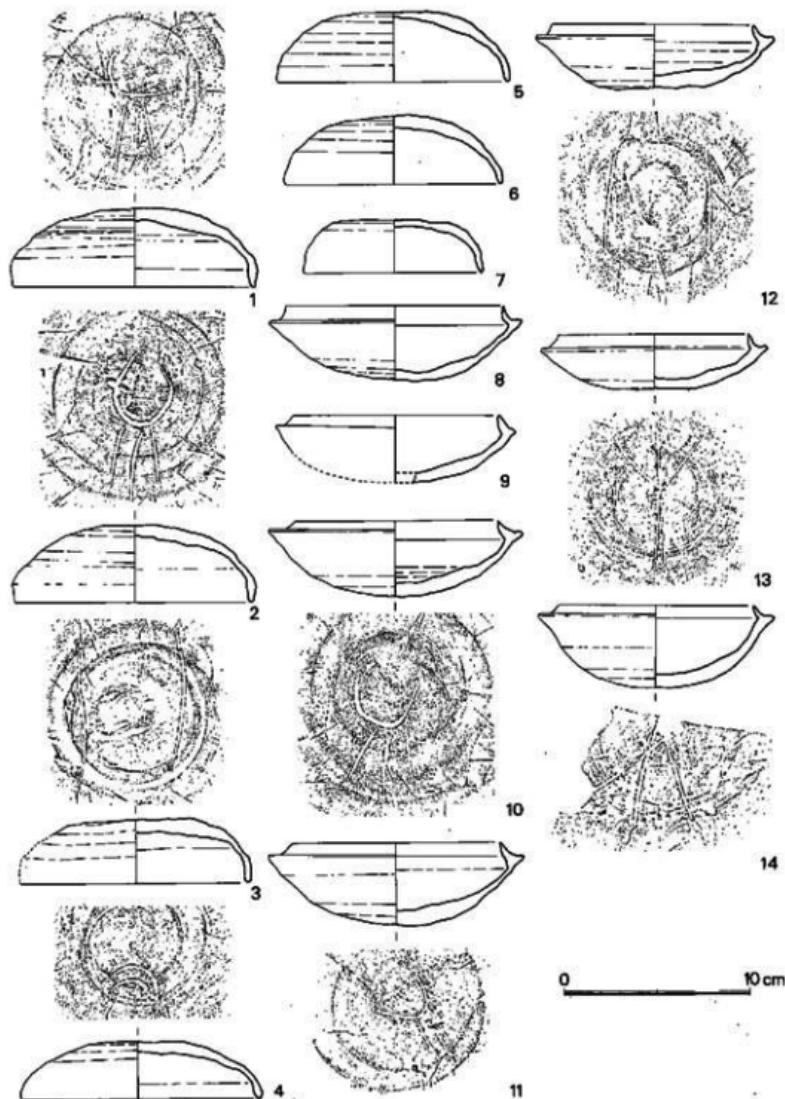
坦部を設けている。

(3) 遺物 (第7~10図、図版8・9)

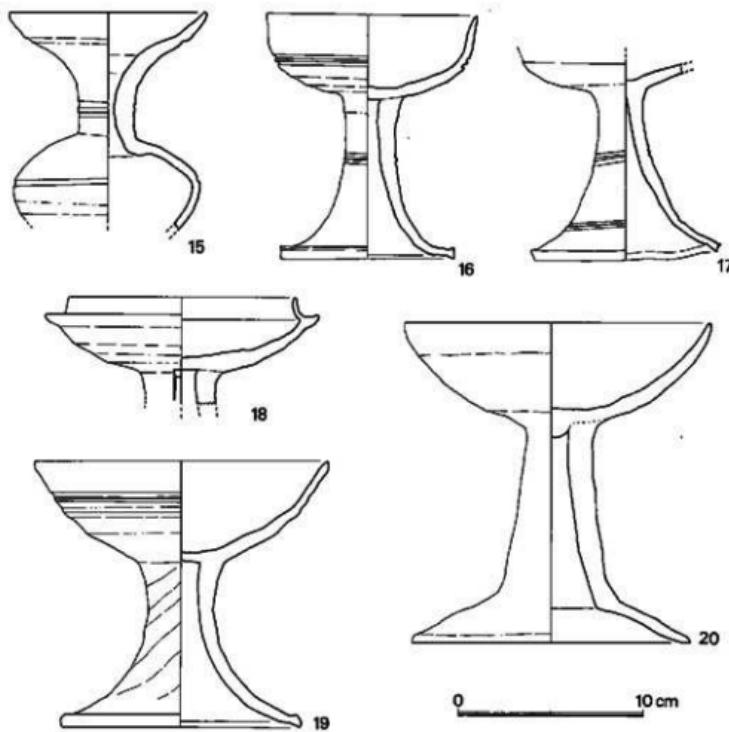
遺物の出土は、石室内から耳環1個のみで、他は墓道部からの出土である。墓道埋土中よりの出土で、須恵器、土師器のみである。甕などは細片となって集中していた。

壺蓋 (1~7) 1は径12.8cm、器高4.3cmを測る。端部はやや肉厚となり内側に1稜を有す。外面の中ほどより上部は回転ヘラケズリで、他は水びき、撫である。焼成良好で、胎土に若干の粗い砂粒を含む。天井部外面にヘラ記号がある。灰色を呈す。2は径12.6cm、器高4.1cmを測る。1と同じような造りである。胎土に若干の粗い砂粒を含むが、焼成良好で紫灰色を呈す。1と同様にヘラ記号がある。3は径12cm、器高3.5cmを測り、前二者に比べ天井部が平坦になっている。この部分は回転ヘラケズリである。焼成良好で、胎土に若干の粗い砂粒を含む。天井部外面にヘラ記号がある。淡紫灰色を呈す。4は径13cm、器高3.1cmを測る。やや扁平な感のある器形である。身受け部はやや傾き、若干肉厚となっている。胎土に若干の粗い砂粒を含むが焼成良好である。天井部外面にヘラ記号がある。淡紫灰色を呈す。5は径12.2cm、器高3.8cmを測る。やや丸味のある器形をなす。天井部は器肉が薄くなっている。胎土は粗い砂粒を若干含むが焼成良好である。濃紫灰色を呈し、天井部外面に横一棒に半円のヘラ記号がある。6は径11.4cm、器高3.7cmで、やや丸味のある器形である。焼成は良いが、胎土は粗い砂粒が多く、器面に浮き出ている。淡灰茶色を呈す。7は径9.5cm、器高2.8cmを測る。天井部は平坦となり箱形の器形である。紫灰色(内面)、灰色(外面)を呈す。短頭蓋の蓋とも考えられる。これらの蓋の天井部外面は、すべて回転ヘラケズリである。

坏身 (8~14) 8は径13.6cm、器高4.1cmを測る。全体に器肉は薄い仕上りである。口縁部は、受け部から内傾しながらも端部は直立している。胎土はよく精製されており、焼成も良好である。紫灰色を呈す。9は半損品であるが、径約12.9cm、器高3.5cmを測る。器肉は全体に厚い。蓋受け部は短かく、平坦部もほとんどない。焼成良好であるが、胎土に粗い砂粒を含み、器肌に浮き出ている。灰黒色を呈す。10は径13.6cm、器高4.1cmを測る。厚みのある口縁部は他に比べ大きく内傾している。焼成良好で胎土に若干の粗い砂粒を含む。内面は紫灰色、外面は灰色を呈すも、自然灰釉がかかっている。外底部に、1・2と同様のヘラ記号を記す。11は径13.8cm、器高4.4cmを測る。やや深みのある丸味のある坏身である。底部の器肉が非常に厚い。蓋受け部は平坦で、口縁部は内傾している。胎土は精製されており、焼成も良好である。内面は紫灰色、外面は灰黄色(自然灰釉)を呈す。外底部に10と同様のヘラ記号がある。14は半損品であるが、径12.6cm、器高4.4cmを測る。径に比べ深みがあり丸味のある器形をなす。全体に器肉が厚いが、口縁部の器肉は薄く、内傾している。焼成は良好であるが、胎土は粗い砂粒が多く、器面に浮き出ている。淡紫灰色を呈す。外底部にヘラ記号がある。13は径12.2cm、器高2.9cmを測る。底部はやや平坦となっている。焼成良好であるが、胎土に粗い砂粒が多く、



第7図 土器実測図 1 (1/3)



第8図 土器実測図2 (1/3)

器面に浮き出ている。暗灰色を呈す。外底部にヘラ記号がある。12は径12.8cm、器高3.5cmを測る。底部は平坦になっている。焼成良好であるが、胎土は粗い砂粒を含み、これが器面に浮き出ている。紫灰色を呈す。外底部にヘラ記号がある。3の环蓋とセットとなるものと思われる。

これらの环身の外底は回転ヘラケズリの整形を施している。他面は水びき、内底部はナデである。

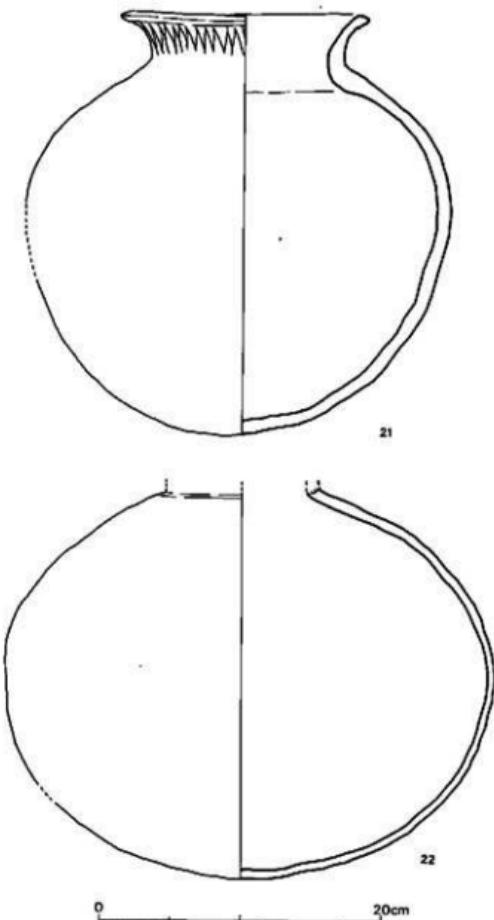
越 (15) 脊下部を欠失する。細い頸部から大きく外反する口縁部となっている。胴部に比べ器肉が厚い。胴部は算盤玉状をなしている。頸部に2条の、胴部に1条の浅い沈線がめぐる。焼成はよいが、胎土に粗い砂粒を含む。灰黒色を呈す。

高坏 (16~20) 16は無蓋の高坏である。坏部径11.4cm、器高13.2cm、脚端径9.4cmを測

る。環部はやや深く、これに細い脚がついている。脚部はラッパ状に開き、端部は跳ねあげ、内側に一稜を有す。環部に2条、脚部に2条のヘラ描き沈線を施す。焼成は良好であるが、胎土に粗い砂粒が多く、器面に浮き出ている。紫灰色を呈す。17は環部を欠失する。器高13cm前後と考えられる。脚端径は10.2cm前後であろう。環部は、その中ほどに一段を有す。脚はラッパ状に開く、端部は上下に跳ね出している。脚部の2個所に各々2条のヘラ描き沈線を施す。焼成良好で、胎土には細砂粒を含む。灰黒色を呈し、焼き歪みのある土器である。

18は脚部を欠失する。有蓋の高環である。環部径14.8cmを測るやや大きなものである。蓋受け部は大きく、平坦部をなし、口縁部は内傾しながらその端部は直立している。脚部には3個所に長方形の透しがある。焼成は良好で、胎土に粗い砂粒が多く、器面に浮き出ている。淡紫灰色を呈す。

19は環部径15.8cm、器高15.4cm、脚端径13cmを測る土器質の土器である。環部中ほどに2条の沈線状の凹線があり、その下方は回転ヘラケズリ整形である。他は水びき整形であり、脚部は胎土をひねった痕跡がみられる。整形やつくりは須恵器の手法を用いる。焼成あまく、胎土に粗い砂粒が多い。いわゆる赤焼土器か。20は環部径16.5cm、器高17.2cm、脚端径15cmを測



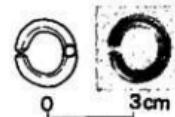
第9図 土器実測図3 (1/3)

るやや大きな土師器高环である。脚部は粗いヘラ削りの後に撫でによる整形である。他は水びき、撫でによる整形を行なっている。焼成あまく、胎土に粗い砂粒が多い。赤茶褐色を呈す。土師器高环片はこの他9個体分あるが、いずれも小片である。又、これらは脚の短いもので、焼成不良で非常にもらひものばかりである。

壺 (21) 口縁部径17.5cm、胴部径29.8cm、器高29.8cmを測る。口縁部が若干盃み、胴部には須恵器片が窓着している。頸部の鋸歯文はヘラによる施文で、半周するのみである。胴部外面上部は格子目の叩きで、下胴部はカキ目で叩きを消す。内面は同心円叩きである。焼成は良好であるが、胎土に粗い砂粒が多く、器肌に浮き出ている。

横瓶 (21) 口縁部を欠失する。胴部径34.1cmを測る。やや薄手の製品である。胴部最大部に孔(凝頭部)を粘土板でふさぎ整形しており、胴部の整形は口頸部を造る以前に完了しているようだ。図示する頸部より右は平行文叩きで、その他は平行文叩きのあとカキ目を施している。胴部内面は同心円叩きである。

耳環 (第10図) 石室より出土した。径2.05×1.85cmを測る。断面は円形で0.35cmである。鉄地金銅張りのものである。



第10図
耳環実測図 (1/2)

3. 小 結

池田8号古墳は、7地点の9号古墳と同じで、池田古墳群の中心からやや離れたところに位置し、単独に丘陵の先端に所在する。池田古墳群は、筑紫野市教育委員会により7基が確認されており、冷水バイパス建設に係る分布調査によって新に8・9号墳が発見された。発掘調査を実施したのは8号墳だけだ。当古墳群の実体は正確に把握しがたい。筑紫野市教委の調査に係る7基の古墳群は、墳径が20mを超えるものもあるが、5m弱という小規模なものがある。主体部は判明するものは横穴式石室であり、複室ものもある(註2)。

8号墳は、古墳としてはよく見られるもので、何ら変化のあるものではない。丘陵斜面をうまく利用し、墳丘盛土を容易にしている。石室は盗掘を受け、副葬品などの検出はなく、墓道での須恵器・土師器のみの発見にとどまった。出土遺物のうち、18の高环は、明茶色を呈し、土師質の土器であるが、整形の手法は須恵器のそれと同じで、いわゆる「赤焼土器」といわれるものである。最近この種の土器がよく発見されており、整理・検討の進められているところであり、今後の研究に待つところである。

須恵器は环(身・蓋)が多く、これらに記された鹿記号のうち、1・2・10・11に描かれた記号は特徴あるものである。环は、その形態からⅢb期に属し、当古墳はおおむね6世紀後半頃に築造されたものであろう。

註1 福岡県教育委員会編「福岡県遺跡等分布地図」(筑紫野市・春日市・大野城市・筑紫郡編) 1980年

註2 註1と同じ



1 池田 8 号古墳埴丘近景



2 池田 8 号古墳（開口後）



1 石室閉鎖石の状態



2 石室閉鎖石除去後の状態



1 墳丘内列石



2 墳丘内列石（南側）



1 石室奥壁



2 石室内散石集石状態



1 墓丘除去後の状態 1



2 墓丘除去後の状態 2



1 墓丘除去後の状態 3



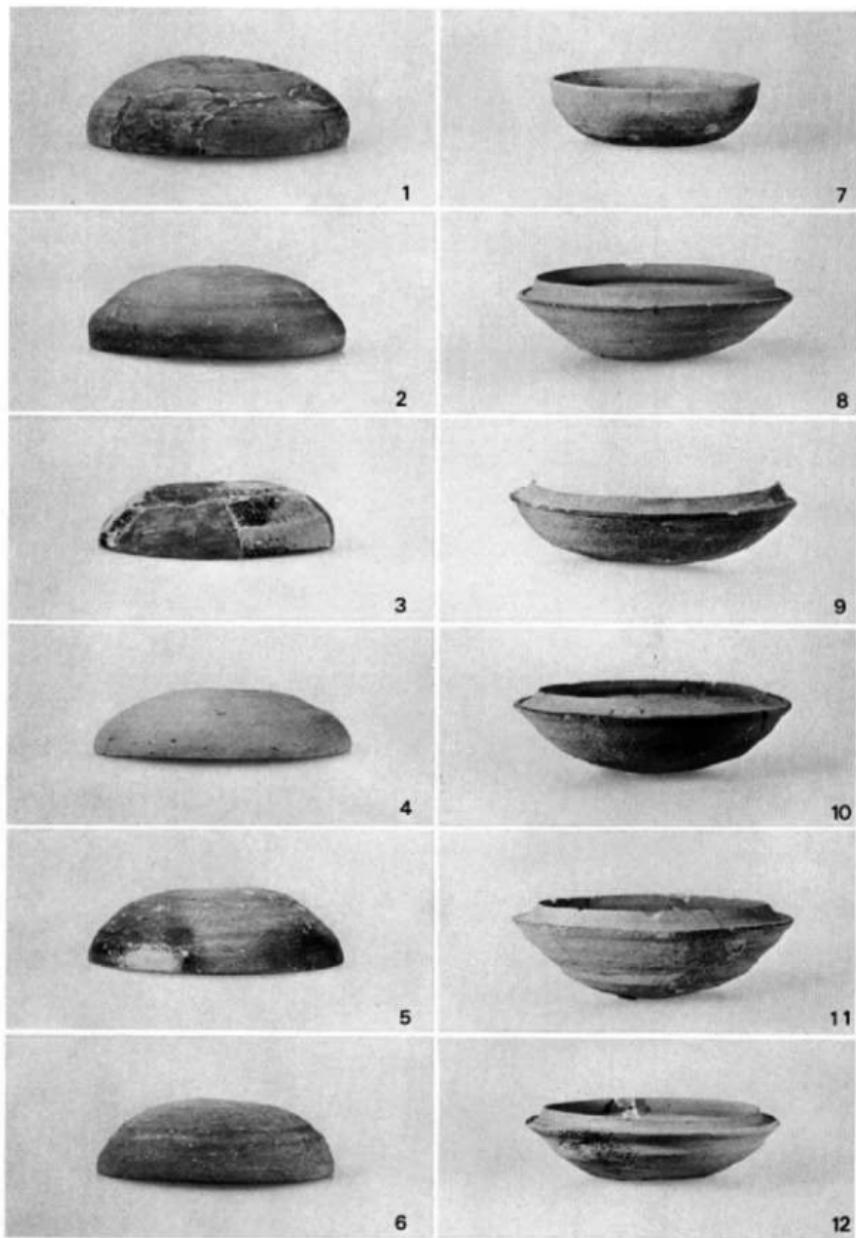
2 墓丘除去後の状態 4



1 塗丘除去後の状態 5



2 塗丘除去後の状態 6





18



16



17



15



19



20



21



22

III 各 遺 跡 の 調 査

2. 池 田 遺 跡

2. 池田遺跡

1. はじめに

水稻が作付けされていない水田を調査対象地として借り上げたが、周囲の水田の漏水防止のために小範囲の試掘にとどめた。幅5mのトレンチを、南区で10m、北区で20mの長さで設けて発掘し、土壌・柱穴様小ピット等の遺構と縄文土器・須恵器片等の遺物が出土した。

2. 遺構と遺物

遺構

水田耕作土中から、土師器・須恵器・サスカイトの小片が多数出土した。上から40cm掘り下げる土壌を除去すると、灰黄褐色の花崗岩バイラン土に至り、遺構が検出された。

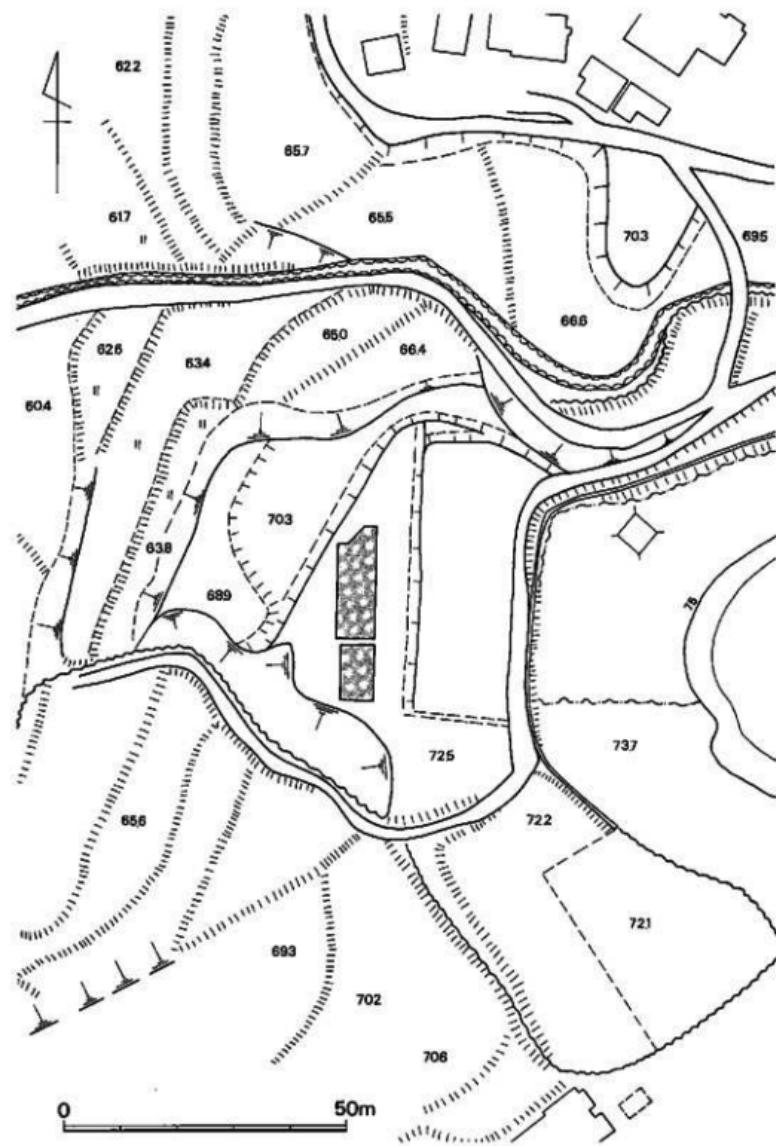
南区トレンチでは、径約60cmで深さ10cm前後の小ピットが若干と、長さ2.84m×幅1.48m×深さ0.43mの隅丸長方形土壌が検出され、須恵器等の小片が出土した。

北区トレンチでは、柱穴様小ピットと不整形土壌が検出された。柱穴様小ピットは、トレンチ北半部に多く、図版14-3に示したピット内上部から勾玉(第15図)が出土したのをはじめ、他のピット内から土師器・須恵器破片が出土した。南半部には不整形ピットが多く検出され、東西方向に連続するかのような状態を示し、径10cm大の花崗岩の石が若干認められた。ピット内の埋土は、須恵器片を出す柱穴様小ピットの暗灰褐色埋土と異なり、黄褐色を呈しており、床面に凹凸が多く、縄文時代早期の押型文土器片が出土した。このため、北区トレンチを西側に拡大し、第14図に示すような底部片が出土したが、この不整形ピット内からまとまって出土するという状態ではなく、小片が散在して埋土中から検出された。

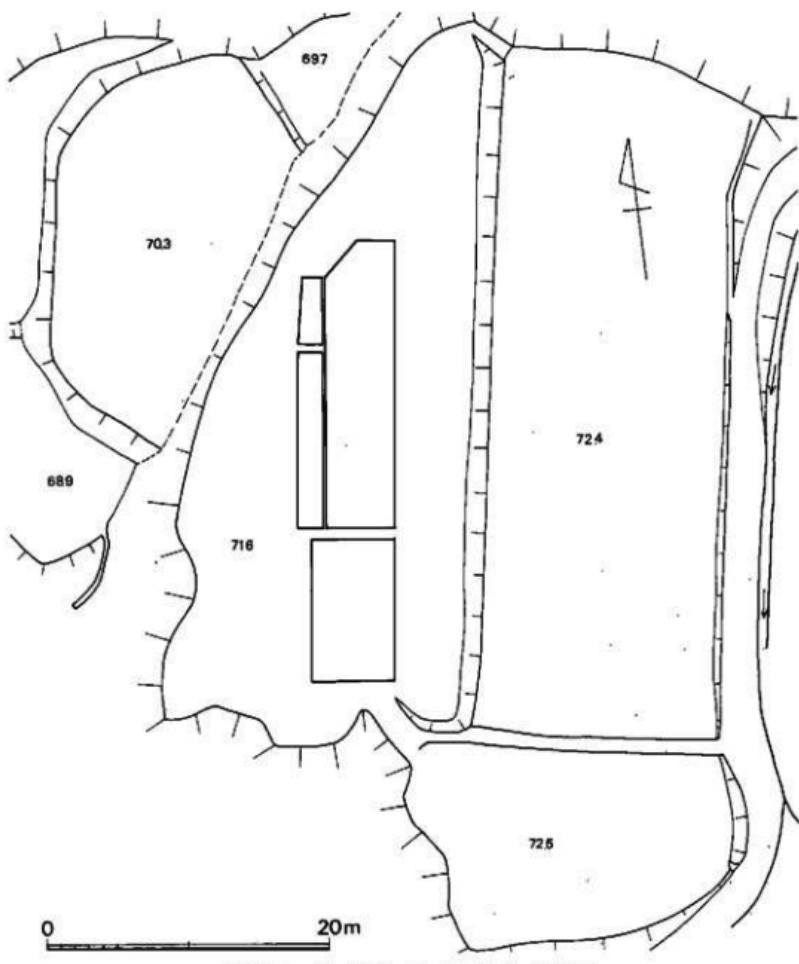
出土遺物

縄文土器(第14図)

第2・3トレンチの不定形窓穴及び黄色土落込み等から縄文早~前期の土器片若干の出土をみた。1~6は横円形押捺文を施すもので各種ある。1は、ピット内出土で、外面及び内面上端、更に口唇部にも、横走の横円形文様を押捺する。口縁外反して開く類で、焼成良好、暗褐色をなし。胎土に微砂粒を混入する。2も外反して開く類であるが、横円形押捺文を外面は斜走、内面上端は横走させる。黄色土落込出土、焼成やや不良で暗褐色をなし、微砂粒を混入する。



第11図 池田遺跡周辺地形図 (1/1,000)



第12図 池田遺跡地形図 (1/400)

3も黄色土落込出土で、外面にやや小さめの楕円形押捺文を縦走させるもので、焼きやや不良で褐色をなす。4は大きい楕円形押捺文を横走させるもので、黄色土出土。焼きは良く、黄褐色をなす。5は斜走させるもので、暗褐色をなす。6は、外面の殆んどが剥落するが、厚手で大きい楕円形押捺文を縦走させるものでピット12出土品。7は、薄手で横走する山形押捺文を



第13図 池田遺跡遺構配図 (1/200)

施す。黄色土落込出土で、焼きは良く黄褐色をなす。8は尖底部で焼きは良く黄褐色をなし、胎土に砂粒多く含む。押捺文土器の底部となろう。9・10はアナグラ属貝殻による条痕文を表裏に施すもので、6は黄色土落込出土、焼きは良く黄褐色をなす。7は微砂粒を含み、淡赤褐色をなす。11は粗製土器口縁で、外面に強い指横ナデを施す。焼きは良く明黃白色をなし、砂粒多く含む。この他にも粗製土器片若干が出土している。12・13は突帯文を付し刻目を施すタイプで、12は黄色土落込出土で暗褐色をなす。13は4区黄色土出土で、黄褐色をなす。

以上の土器のうち、押捺文土器群は、1・2の口縁の形態等より、早期後半～末の、田村式・ヤトコロ式の段階と考えられ、中でも田村式併行期の可能性が強い。9・10は前期轟式系の条痕文土器であろう。12・13の突帯文土器も前期の一類であると考えられる。これらの時期の明確な遺構は確認し得なかったが、全体として包含層的な出土状況を示しており、当地より上の段付近に遺跡の中心部が考えられるところである。

石器（第15図-1）

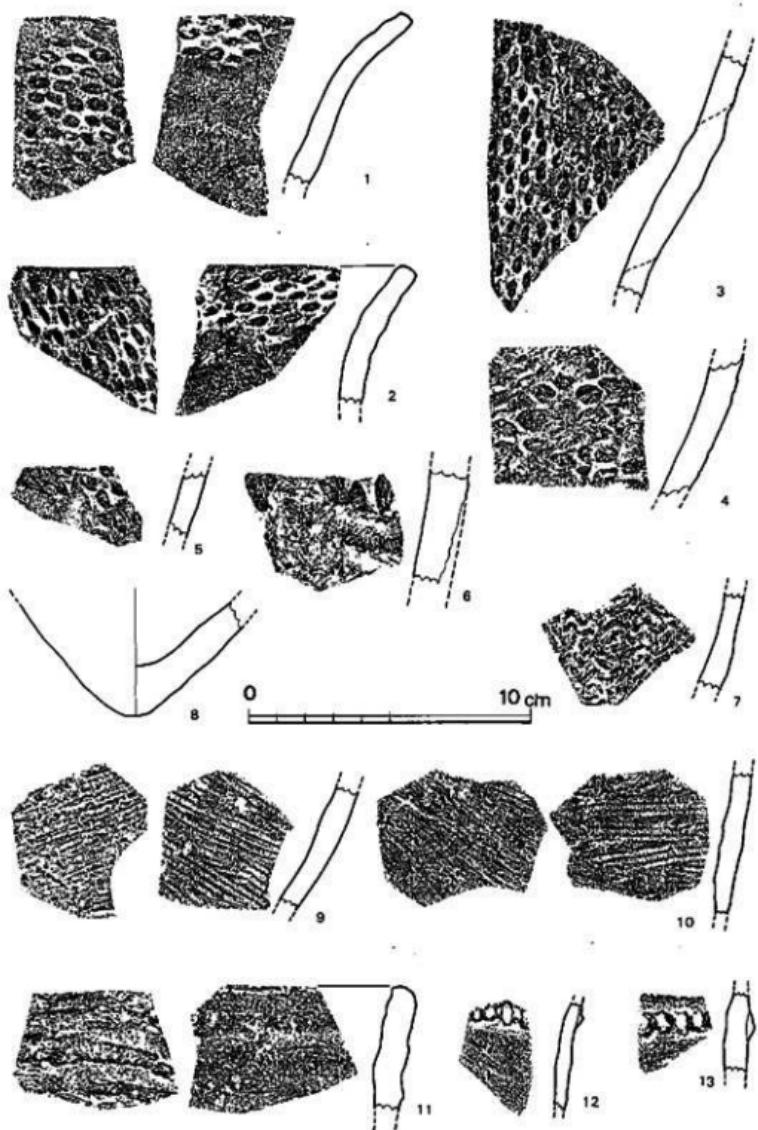
サスカイト製の石核で、ピット内出土品である。円錐形石核が二次的に半裁されたものかと考えられる。細長の細い石刃状剥片を剥ぎ出したものである。

勾玉（第15図-2）

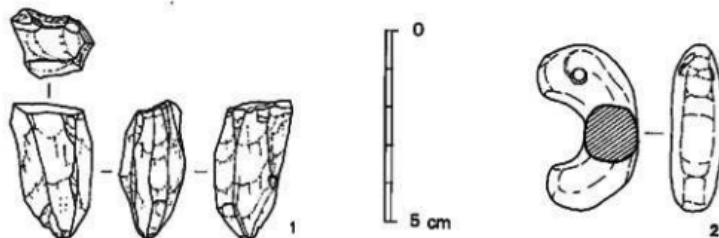
硬玉製の大型のもので、全体に丁寧に磨研する。孔は両面より穿孔され、孔の上側に両面とも穿孔時の抉り部がみられる。表面の半分以上は（黄）乳白色で、灰緑色部も鈍く彩を欠く。重さ19.5gを量り、周辺の古墳副葬品等が混入したものかと考えられる。

土師器（第16図1～5）

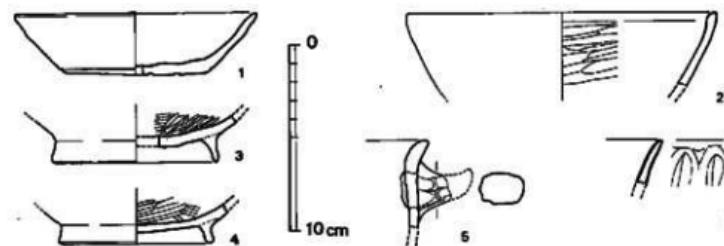
1は口径12.9cm、器高3.3cm、底径7.5cmで、薄手精製、胎土精良で暗茶色をなす。P.11出土品。底部はヘラ切離しでスノコ状痕がみられる。2は、口径16.7cmの大型の楕状品で、内面ヘラ磨きを施す。P.13出土、胎土精良で焼成良く、黄白褐色をなす。3は内面黒色土器で、高台径9.0cmを測る。胎土精良、外面淡褐色をなす。4は黒色土器で、高台径8.3cm胎土精良。3・4・5ともに擴張区1・2層出土品。5は、口径15cm程度の小型の變形土器に把手を付けたもので、内外面複数の横ナデを行なう。外面に煤付着し、把手は器壁に挿入するタイプである。



第 14 圖 標 本 實 測 圖 (1/2)



第15図 石核・勾玉実測図 (2/3)



第16図 土師器・青磁実測図 (1/3)

青磁 (第16図-6)

鍋蓮弁の青磁碗で、胎土は灰色で密、釉は厚く、暗青緑色を呈する。

3. 小 結

遺跡は標高70m前後の舌状台地で、西側の眼下13m下には山家川が南流し、東の後背地には山塊がせまるという好立地にある。縄文時代早期の住居等の遺構が存在していたことが、出土遺物によって考えられるが、その後須恵器を出土する歴史時代に一部擾乱され、開田によつてバイラン土地山面まで著しく削平を受けて縄文期の遺構は明確には確認されなかつた。



1 池田遺跡全貌（北より）



2 池田遺跡全貌（南より）



1 トレンチ（南より）



2 溝



1 土壠



2 中央付近遺構



1 中央付近遺構



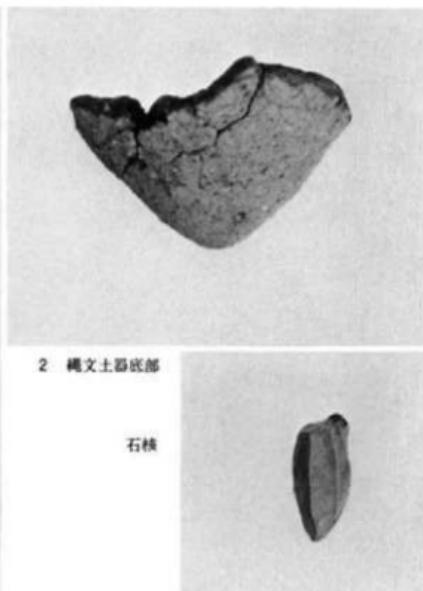
2 視文土器出土黄色土塗込み



3 同上土塗断面



1 硬玉製勾玉



2 繩文土器底部

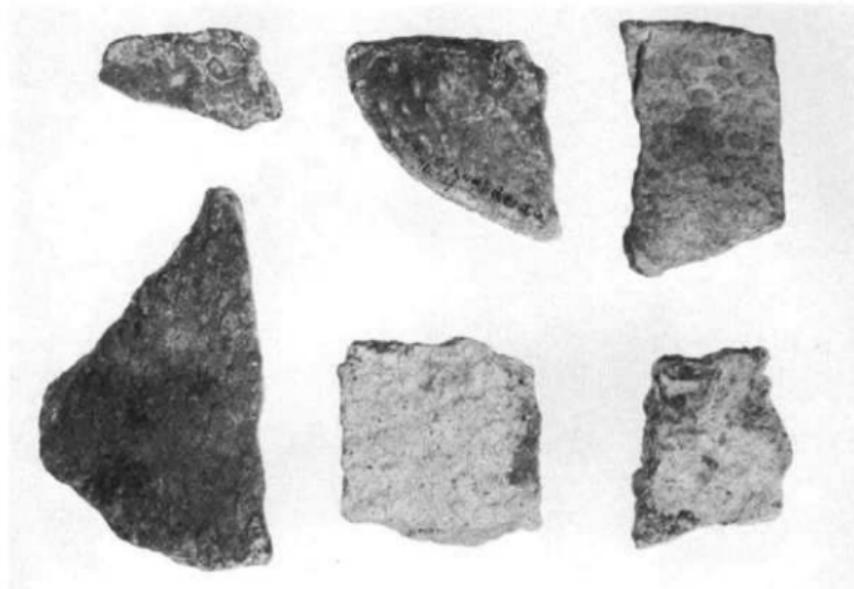
石核



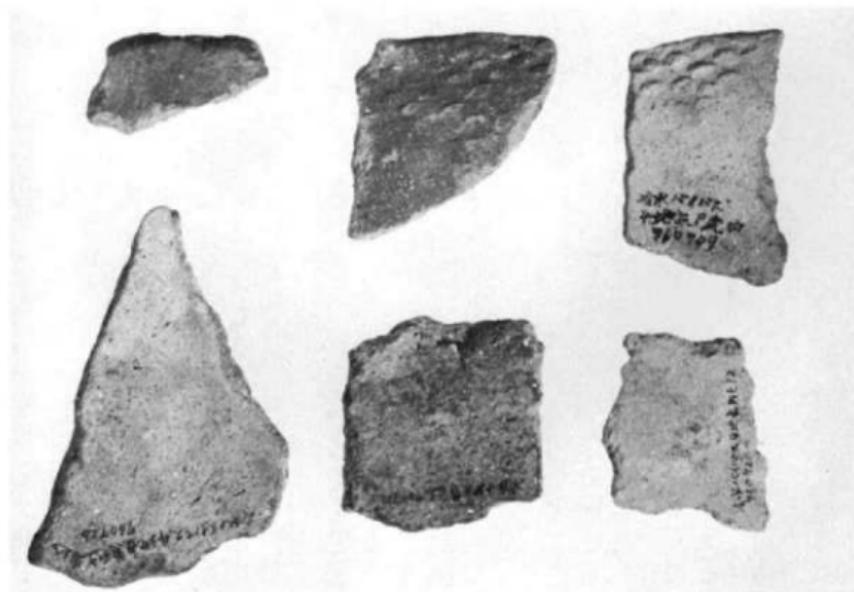
3 勾玉出土狀態



4 繩文土器底部分出土狀態



1 縹文土器（外面）



2 縹文土器（内面）

III 各 遺 跡 の 調 査

3. 浮 殿 A 遺 跡

3. 浮殿 A 遺跡

1. はじめに

砥上岳山麓に展開する低丘陵の一つに所在する。丘陵は西に延び、標高62.5mを測る。丘陵は細い尾根が続き、その先端付近が若干広くなっている。この部分に遺跡は所在している(第17図)。丘陵端部は県道によって分断されており、最もよく遺構の遺存している部分は削平されているものと思われる。遺構は丘陵頂部付近に地下式横穴、覆石土壙墓、土塚があり、先端に箱式石棺墓2基が検出された(第18図)。

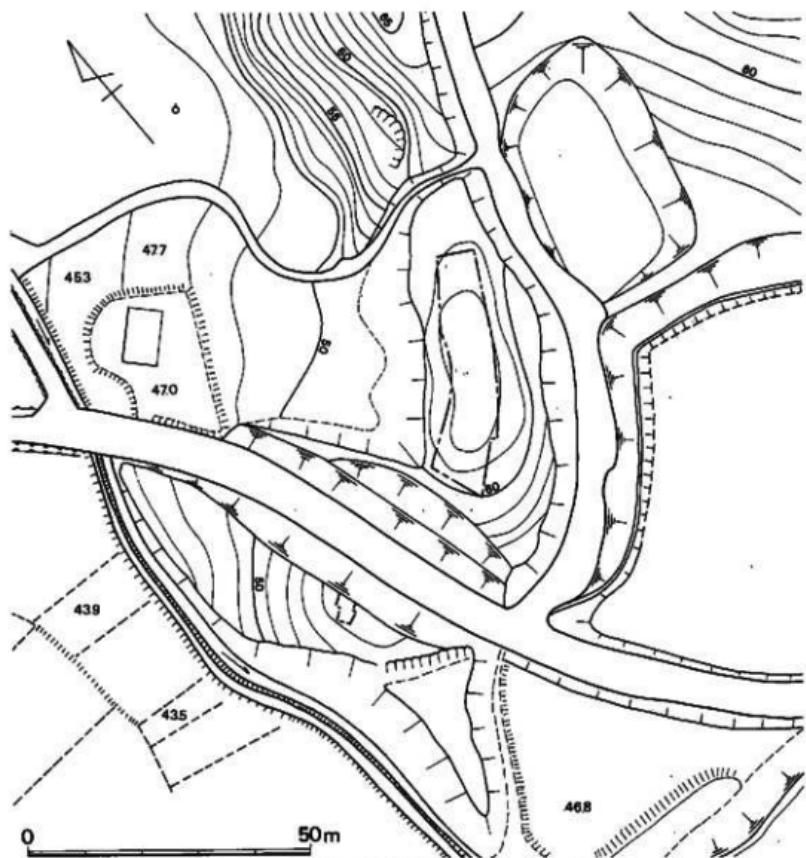
2. 遺構と遺物

(1) 地下式横穴(第19図、図版16・17)

天井部が崩壊し、その全容は定かではない。幅110cm、深さ230cmほどの豊坑を掘り、その下底部から横穴を穿った構造のものと考えられる。玄室は豊坑底より10cmほどの段差をつけ奥壁側の床面が下がっている。玄室プランは長方形となり、豊坑側に三角形に延びる部分は狭道部と考えられる。この間の床面は玄室部に比べ、若干の傾斜をもって造られている。これによると、玄室は長辺約2.2m、幅は、奥壁側で160cm、狭道側で115cmを測る。狭道は長さ約100cmほどと考えられ、天井部はアーチ状をなし、その高さは110cm前後と考えられる。玄室の高さは側壁などの遺存状態から110cm以上はあったと推定されるのみである。副葬品などの遺物は全くなかった。

(2) 覆石土壙墓(第20図、図版18、19-1)

平坦部から斜面にかかる位置に設けられた遺構である。調査前から表土層の礫群の一部がわりあい広い範囲で露呈していたが、調査の結果土壙上部に集中していることがわかり、周辺部のものは崩壊などにより動いているものであることがわかった。花崗岩礫は、河原石をほとんど使用したもので、 $2.7 \times 1.8\text{ m}$ の長円形の範囲に積み上げられ、土壙内にまで及んでいた。土壙は長辺250cm、短辺125cm、深さ62cmを測る大きなもので、南側壁には半円形の浅い掘り込みがある。当初南側の半円形の掘り込みは木根の抜き跡かと思われたが、角礫が原位置の状態で確認されたことから、何らかの付属施設であると考えられる。角礫の間には、ほとんど土が



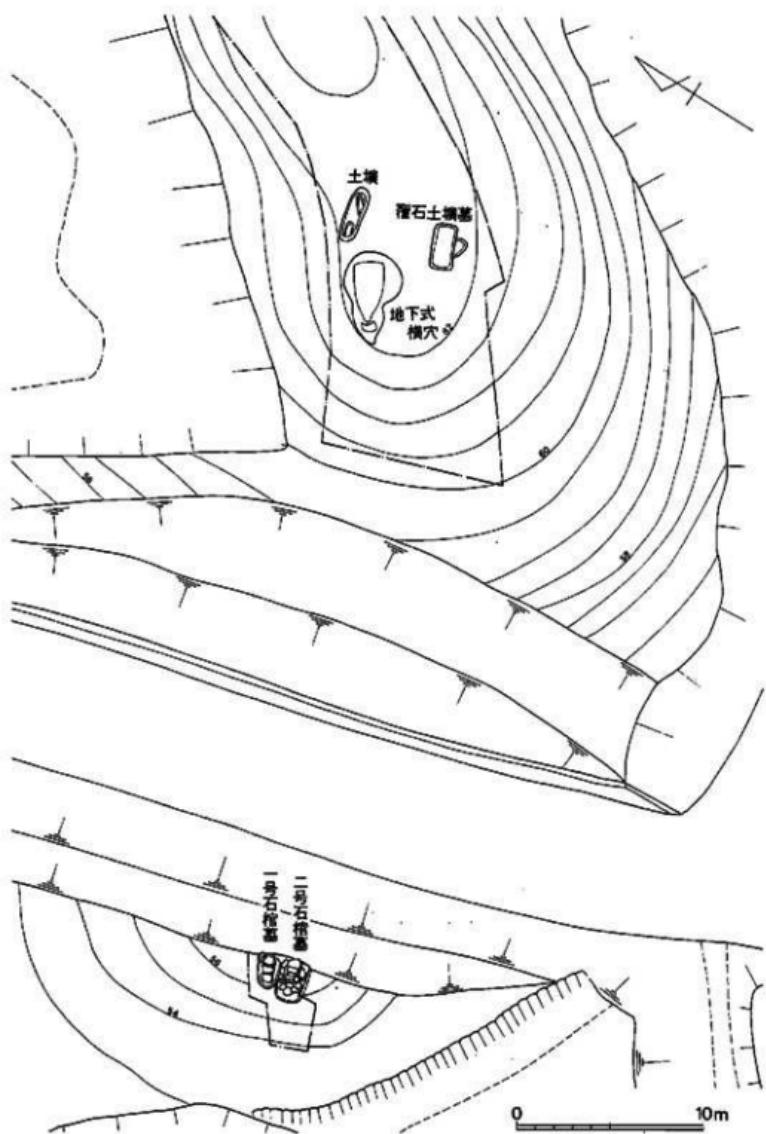
第17図 浮殿A遺跡周辺地形図 (1/1,000)

詰っておらず、腐植土の流れ込み程度で、その上部から土を覆ったという状態ではなかった。さらに、これらの角礫が石棺あるいは石室状に組み立てられていたという状態でもなかった。本来、土壇内に埋没した礫群は、木板で覆われた土壇の上部に積上げられていたものと推定される。

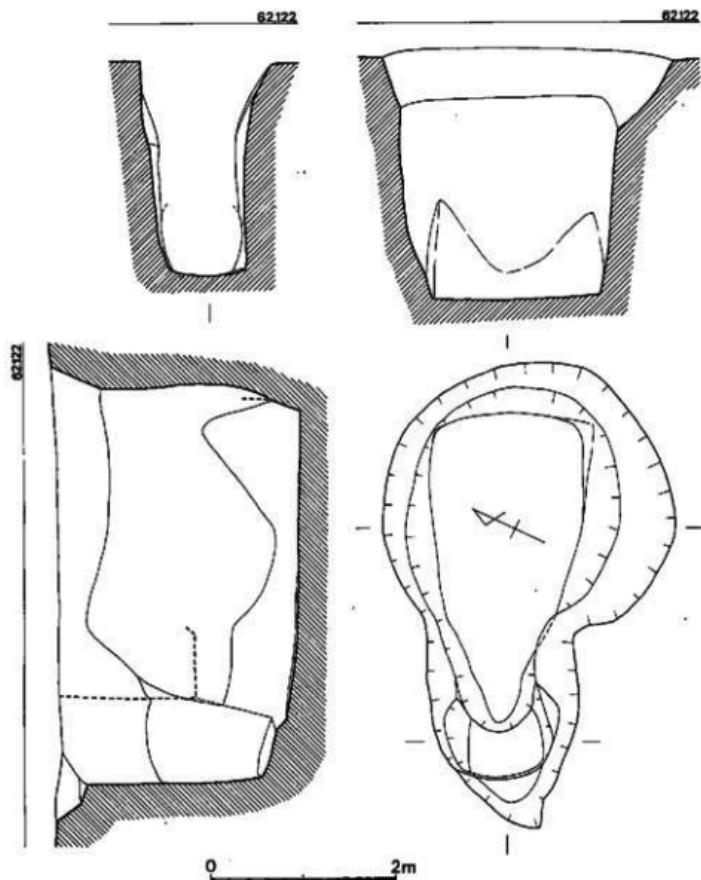
遺物は、土師器・青磁の小片と指環が発見された。

土師器は环の底部小片で、底部には板目がある。

青磁(第21図)は、碗の口縁部小片である。濁緑色を呈す釉でありよくないが、胎土は灰



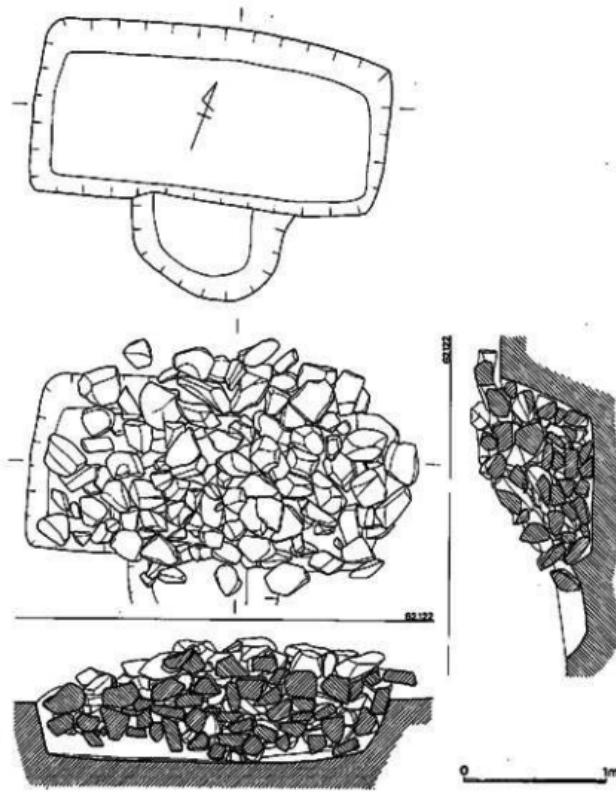
第18図 造構配図 (1/300)



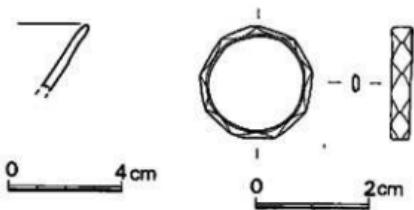
第19図 地下式横穴実測図 (1/60)

色を呈し、よく精製したものである。

指環（第21図）は、墳底より検出された。内径18.5mm、外径20mm、厚さ15mmを測る。外面に9個の菱形文を打ち出しており、環は9角形をなす。質の悪い金製品で、やや白味の色調である。表面に小さな気泡痕が多くみられる。



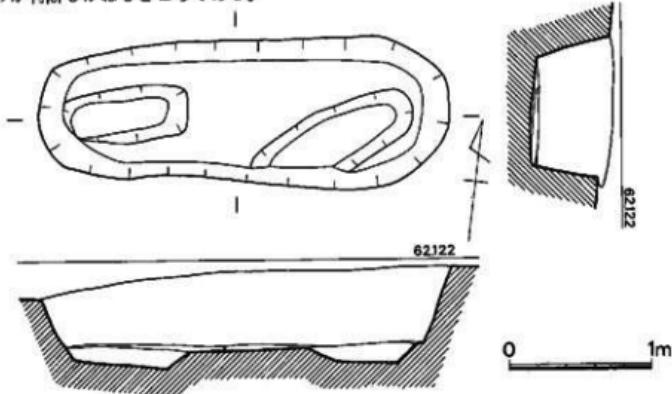
第20図 置石土壙墓実測図 (1/40)



第21図 青磁・指環実測図 (1/2・1/1)

(3) 土壙 (第22図、図版19-2)

隅丸長方形をなすもので、長辺290cm、短辺70~78cm、深さ55cmを測る。壙底の2ヶ所に小坡があるが、東側の坡は木根跡の可能性が強く、当遺構には関係のないものと思われる。西側の坡は軸線上に掘られたもので、長さ90cm、幅40cm、深さ13cmを測る。この小坡がどのような意図で掘られたかは不詳である。また、遺構には副葬品などの遺物が全くなく、墓としてよいものか判断しかねるところである。



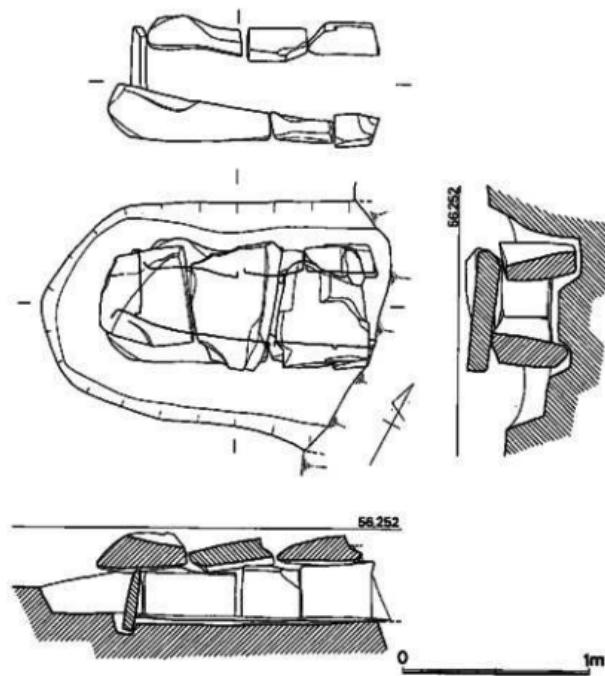
第22図 土 壙 実 測 図 (1/40)

(4) 箱式石棺墓

箱式石棺墓は2基が確認された。当初1基が崖面に露呈して、その所在は解かっていたが、調査の結果、その南側にもう1基あることが解かった。発見順に1号・2号石棺墓とした。いずれも花崗岩バイラン土の地山に土壙に掘って納めている。

1号箱式石棺墓（第23図、図版21-1~22-1） 当棺は、東側を道路建設工事によって壙されている。棺は隅丸長方形の浅い土壙内に組まれたものである。土壙は、長さ185cm以上、幅約125cm、深さ約30cmを測る規模のものである。土壙の南辺は、2号石棺の土壙を切っていることから、1号棺は2号棺より新しいものである。石棺は花崗岩を使用しているが、棺材としては精選されたものではない。棺の両側にそれぞれ3個の石を配し、木口には板状の石を据えている。いずれも壙底に浅い掘り込みを設け、据えている。蓋石は、板状のものが3枚残っていた。棺体や石蓋との間隙には黄白色の粘土を充填し、目張りをしている。

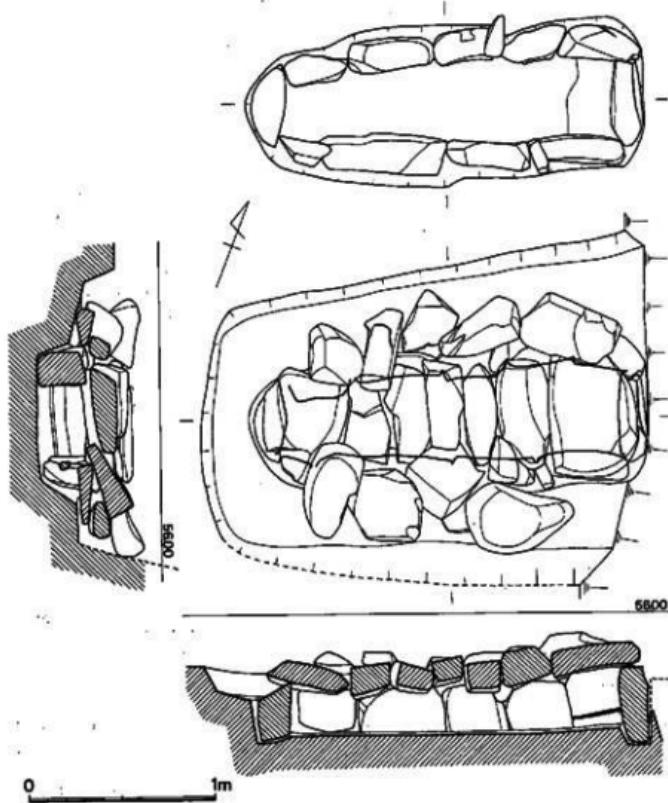
石棺の現存規模の内法は、長さ135cm以上、幅は西側木口部で30cm、東側は37cmを測る。石棺の遺存状態からして、蓋石は少なくとも遺存するような大きさの蓋石がもう1枚あったと考えられ、棺内法の長さは160cmほどであったと思われる。なお、棺内壁には朱が塗布されてい



第23図 第1号箱式石棺墓実測図 (1/30)

た。遺物は全く検出されず。

2号箱式石棺墓 (第24図、図版22) 1号棺に比べやや低いレベルにあり、1号棺の南に接して検出された。当棺も東側が削平を受けているが、土壇のみが壊れ、石棺にはおよんでいない。上部に大きな木根があり、棺の南側を充分に調査できなかったが、棺の内容を知るには支障のあるものではない。土壇は長方形状を呈し、東側が広くなっている。長さ232cm以上、幅は185~130cm、深さは40cmほどである。土壇は二重となり、石棺は内側の深さ20cmほどの不整形な掘り方に組まれている。石棺は、7個の蓋石がなされているが、両端が板状であるほかは、柱状のものを使用している。棺の両側には、4~5個の割り合ひ大きな石を並べ、南側中央の石は、蓋石の下に入り込んでおり、さらにその下にもう1枚の板石を置いている。この部分は側石に石材の関係から大きな隙間のあるところで、これを補足する意図をもって置かれたようで、これらの配石が、蓋石の配置と同時に作られたものと考えられる。蓋石間と両側配石間に黄白色の粘土で目張りをしている。



第24図 第2号箱式石棺墓実測図 (1/30)

棺体は、両側に4~5個の石を立て、木口には1石を配している。いずれも厚みのある石である。両木口のみが、墳底に小塙を掘り据えているが、側壁は墳底にそのまま据えている。棺の内法は、長さ179cm、幅30~55cmである。東側の木口部に床面より5cmほどの高さに、厚さ2cmで黄白色粘土を張っており、棺の幅などから、この部分が頭位と思われ、この粘土敷部は粘土枕と考えられる。

棺内および土壤内より遺物は全く検出されなかった。

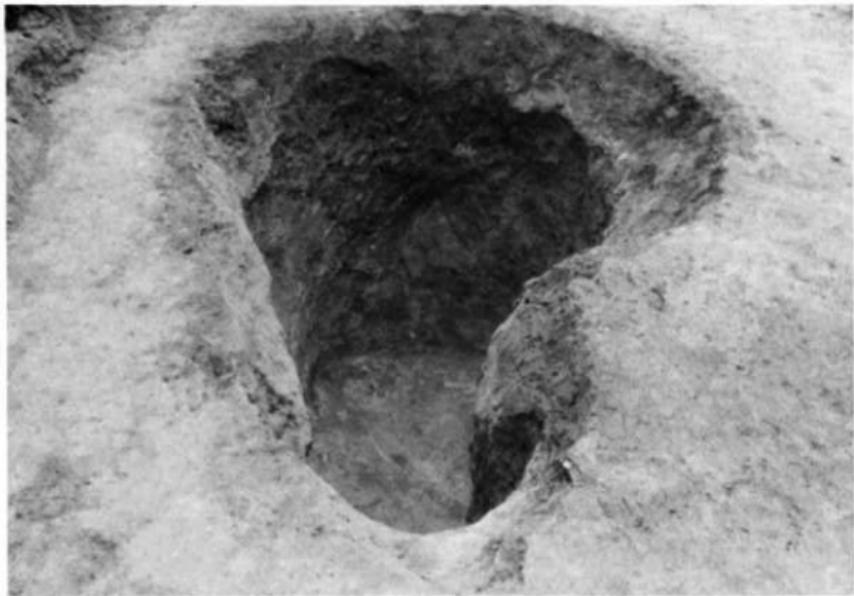
3. 小 結

当遺跡では、埋葬遺構の発見があったが、覆石土壙墓を除く他の遺構からは、なんら遺物の出土がなく時期の判定に困惑するところである。

覆石土壙墓は、積石墓の一種であると思われる。出土遺物からして中世代の遺構と考えられる。

地下式横穴、土壙は覆石土壙墓の時期からしてほぼ中世代に属するものと思われる。

箱式石棺は、2号棺のような配石をもつ石棺はあまり知られていないと思われるが、最近発掘された糸島郡志摩町稻葉古墳で同様な石棺が発見されている。当棺は、封土と周溝をもち、明らかに高塚古墳の主体部としてあり、出土遺物から古墳時代に属すことがわかっている。当遺跡の石棺もその構造・規模からして古墳時代に属するものと考えられる。



1 漢殿A 通路地下式横穴（西より）



2 地下式横穴（壁穴より玄室をのぞむ）



1 地下式横穴（玄室側より豊穴部をのぞむ）



2 地下式横穴豊穴部（上より）



1 覆石土壙墓（南より）



2 同 上（東より）



3 底面出土指輪



1 覆石土壤覆石除去後の土壤



2 土 壤



1 第1・2号石棺墓遺景（東より）



2 第1・2号石棺墓（北より）



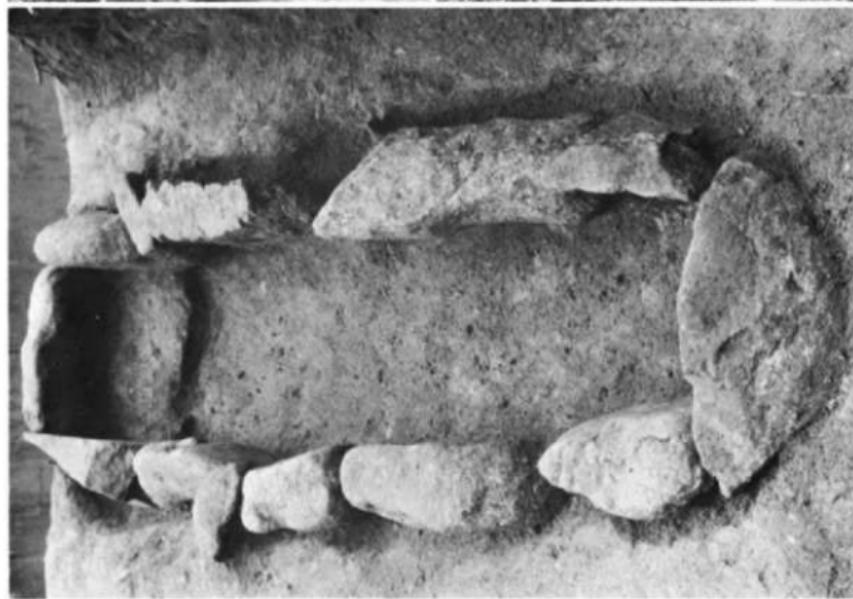
1 第1・2号石棺墓（西より）



2 第1号石棺墓（南より）



1 1号石棺蓋（北より）



2 2号石棺蓋（西より）



2号石棺墓 壁上・蓋石跡の各状態

III 各 遺 跡 の 調 査

4. 浮 殿 B 遺 跡

4. 浮殿B遺跡

1. はじめに

浮殿A遺跡の南に小谷を挟んで、短い丘陵の端部付近に所在する。丘陵端は水路の建設で削られ、丘陵上も開墾により削平されている。標高52mの丘陵の平坦部で、斜面にやや寄った位置で地下式横穴が確認された（第26図）。当丘陵は、厚さ20cmほどの表土層で覆われ、その下は堅い花崗岩層よりなっている。この表土層には、開墾時に削平されたと思われる遺構の遺物が若干散乱していた。縄文土器片や黒曜石片などである。調査は、予備調査（トレンチ掘り）と本調査（全面発掘）を実施したが、遺構は予備調査で確認し調査した地下式横穴のみである。

2. 遺構と遺物

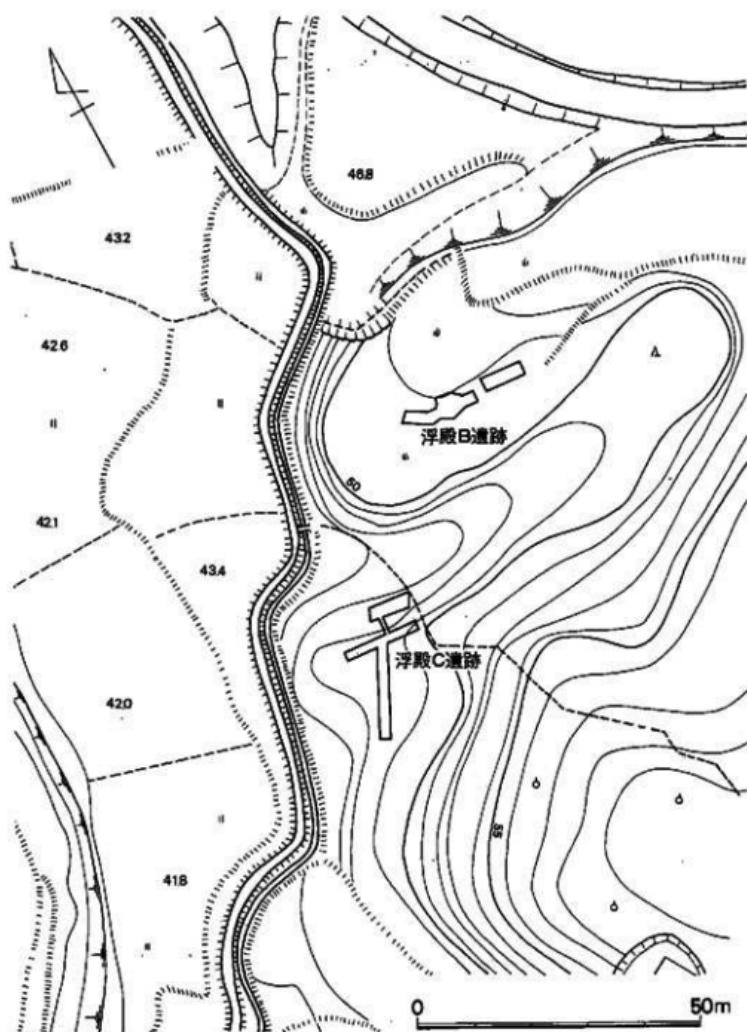
地下式横穴（第27図、図版24）

堅い花崗岩層に穿たれている。天井部は崩壊していたが、その他の崩れはあまりみられなかった。遺構は、深さ1.8mほどの竪穴を掘り、この下底部から横穴を掘っている。竪穴は若干の傾斜をもって掘られている。玄室は竪穴より45cmほど深く、横長方形を呈す平面形である。主軸長約1.6m、幅2.4mを測る。天井部の高さは1.5mほどと推定される。羨道部は側壁の遺存状態から40cm前後と考えられるが、本米の高さとその形状は不明である。閉鎖石等の遺存はなかった。当遺構に係る遺物の出土はなかったが、埋土中より縄文土器片を探集した。

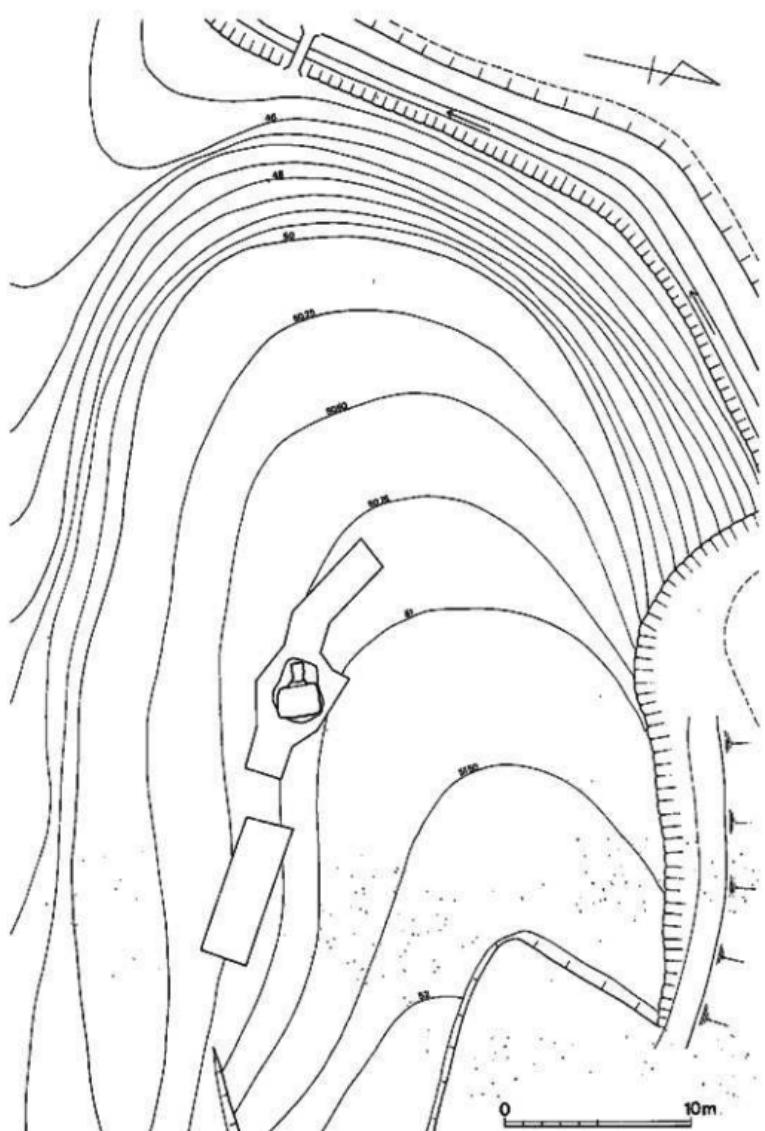
出土遺物（第28図）

遺物は地下式横穴内の崩壊土中に混入していた縄文土器である。孰れも粗製土器で、1は口縁片で内面に横位条痕が残る。粗石英粒、雲母片を多く含み、暗茶～黒色をなす。2は胴部片で、外面に横位の強い指ナデ痕を残す。粗石英、長石等多く含み、内面黒色、外面淡～暗褐色を呈する。3も外面に強い横位の指ナデを施し、内面黒色、外面暗茶褐色をなす。

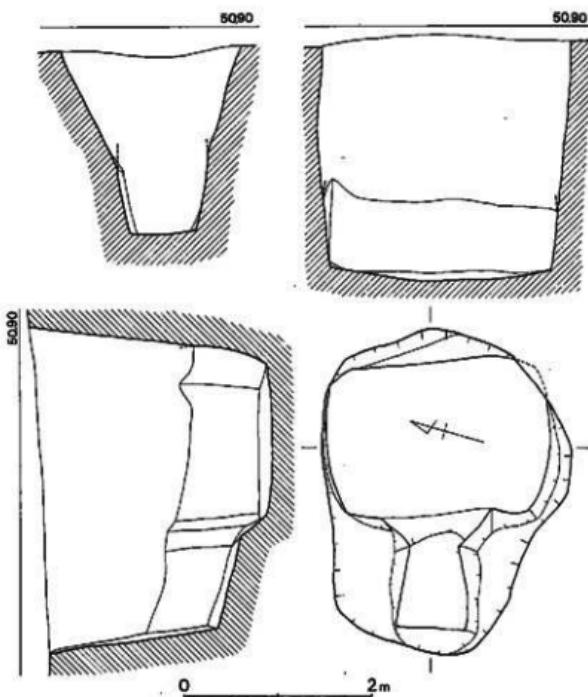
以上の他に、発掘時に『後・晩期の研磨された浅鉢形土器の口縁部』が出土したという。現物が所在不明で図示し得ないものの、上記した粗製土器も、後・晩期の所産であろうと考えるところである。



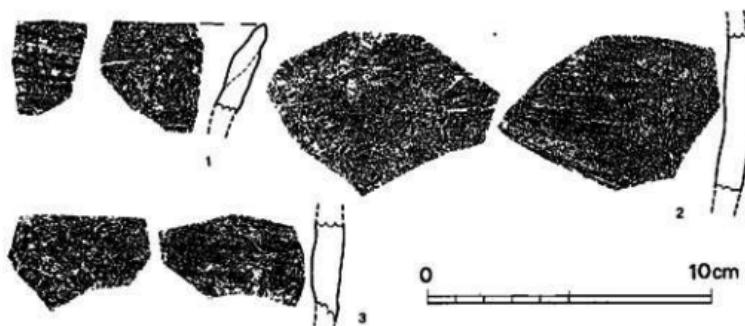
第 25 図 浮殿 B 遺跡周辺地形図 (1/1,000)



第26図 漢取B 途路地形図 (1/300)



第27図 地下式横穴実測図 (1/60)



第28図 横文土器実測図 (1/2)



1 漢殿B遺跡地下式横穴（西より）



2 地下式横穴（東より）

III 各 遺 跡 の 調 査

5. 浮 殿 C 遺 跡

5. 浮殿 C 遺跡

1. はじめに

約 500 m² の山麓先端部の畠地を借り上げたが、現状は笹に覆われていたため伐採し、全面発掘のため中央部に、南北方向に幅 1.7m、長さ 17m のトレンチを当初掘り下げるが、15cm の表土層下は黄褐色粘質地山層に至り、既に平坦に開墾されていたため、新たに東西方向の 2 本のトレンチを掘り下げるにとどめた。

2. 遺構と遺物

遺構（第30図）

中央部の南北方向のトレンチ内の 6 個の小ピットは平坦に削平された面から確認されたが、何らの遺物も出土せず、表土から縄文時代のサヌカイト製石錐 1 個が出土した。

上述のトレンチの北側に接続する東西方向のトレンチ内からは、同様に 5 個の浅い小ピットが検出され、南北方向の畠作時の溝内から、土師器片、土鍋片が数点出土した。

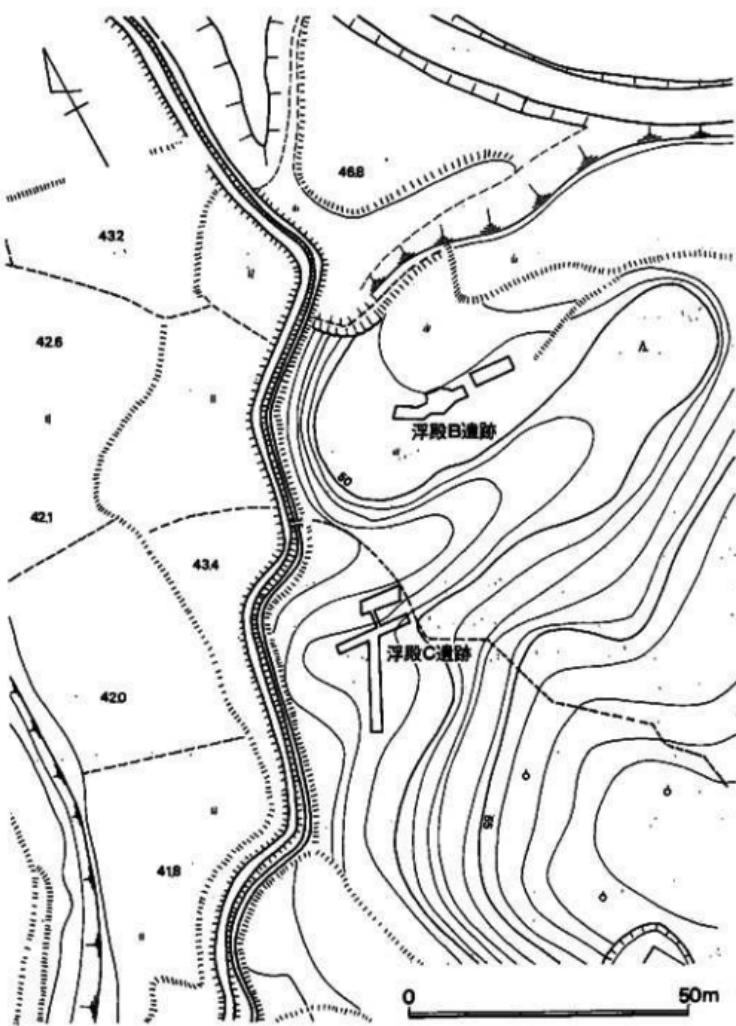
北側のトレンチの東隅で、幅 1m の、床面が圓い溝状遺構が検出され、土鍋 1 片が出土した。

遺物（第31図）

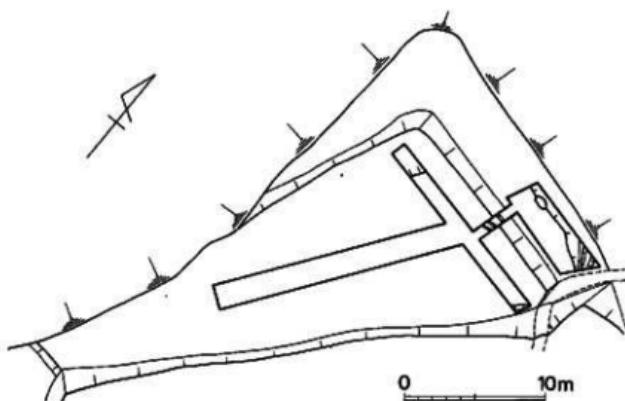
土鍋（第31図 2） 土師質で、口縁外面を肥厚させる。内外面横ナデ、胎土に粗砂かなり含み、淡褐色をなす。

褐釉壺（第31図 1） 底部片で、外面を削り、内面には強い回転ナデによる稜がみられる。釉は黄灰色を呈し、外面下端までは施さず、胎土に細砂粒多く含む。底部付近のみ焼きが悪く、黄赤色を呈し、他は灰色をなす。

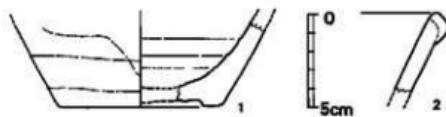
以上の遺物の他に、耕作土中より、「縄文期のサヌカイト製石錐 1 個出土」しているとのことであるが、現物所在不明のため、図示し得なかった。



第29図 浮橋C遺跡周辺地形図 (1/1,000)



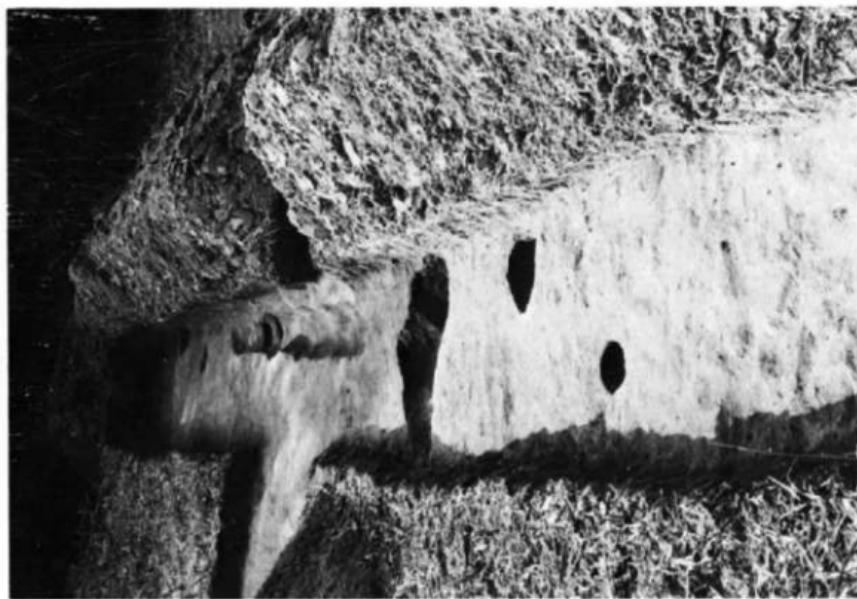
第30図 調査区実測図(1/400)



第31図 出土造物実測図(1/3)

3. 小 結

西側の水田との比高差約3mで、東側には山麓がせまり、北側は急傾斜して5m下に谷川水が西流する狭い平坦部であるが、戦後の開拓によって著しい削平を受けて、造構はほとんど消滅していた。中世の土鍋片が出土しているので何らかの造構は存在していたものと考えられる。北側の溝状造構は、床面が固く踏みしめられた様な状態で、東側の山への登攀小道に接しており、中世以降の小道であったことが考えられる。



1 洋版C透鏡レンチ内面検出状況



2 レンチ内段落ち部



1 トレンチ内遺構状況



2 トレンチ内溝

III 各 遺 跡 の 調 査

6. 浮 殿 D 遺 跡

6. 浮殿 D 遺跡

1. はじめに

西側山麓で、水田との比高差1mの舌状に広がった畠地を借り上げたが、野菜が植えられていたために、中央の北半部と山からの傾斜面に近い東側の一部を発掘した。

2. 遺構と遺物

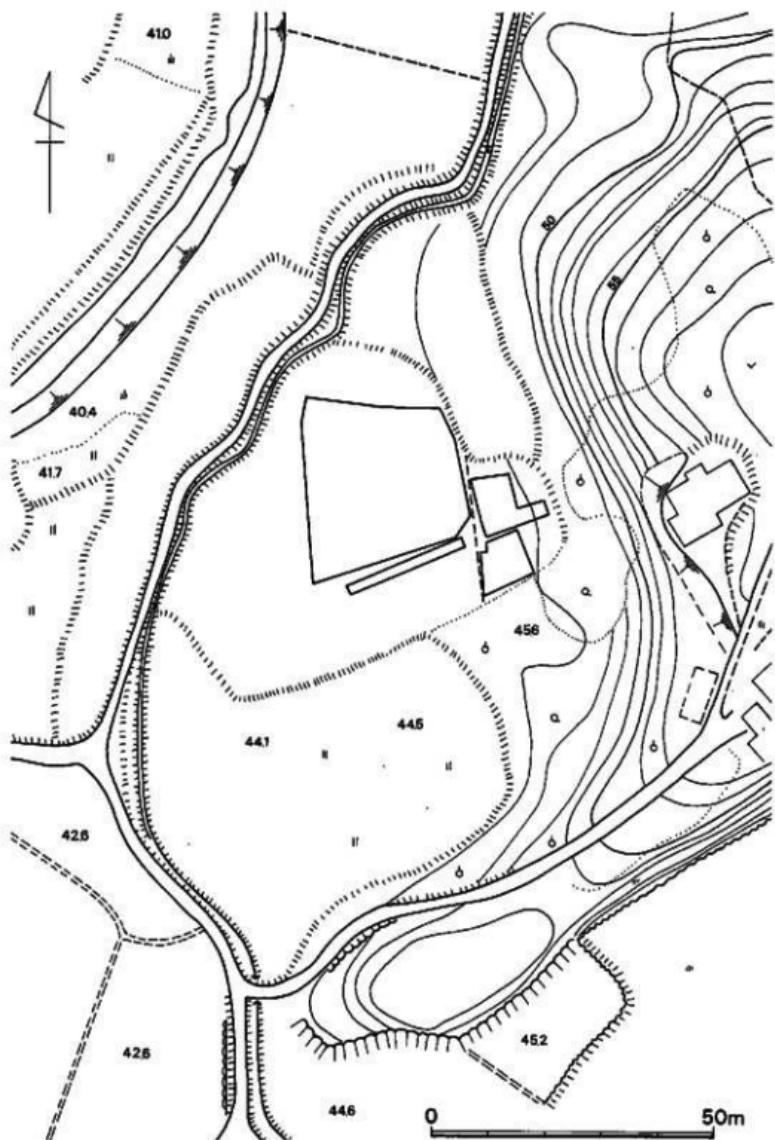
(1) 遺構(付図1)

第1トレンチでは、中央部に東西方向に幅2m×長さ22mで設定した。上から30cmまでの耕作土から更に20cmの間は、暗褐色砂質の遺物包含層で多くの土師器・須恵器片と共に少量の弥生土器片が混在して出土した。この包含層を除去すると、表土から50cm下で暗褐色粘質土に至り、根石が床面で検出された柱穴や溝状遺構等が多く出土したためトレンチの北側を中心区として発掘した。

中央区では、西側で方形の第3土壤が、中央で掘立柱建物が1棟検出され、建物を切って同じ方向で発掘区外にのびる幅30cmで深さ10cmの溝1が検出された。溝1は遺物ではなく新しいものと思われる。南東部隅で幅76cm・深さ30cmの床面が平らな溝2が検出された。多數の柱穴様ピットの中には7号ピットからは小皿が2枚重なった状態で出土したが、他のピットからは土師器・須恵器・弥生土器の小片が出土したのみで、建物等の遺構の確認には至らなかった。第3土壤周辺では西側に向って傾斜が認められ、丹塗高杯等の弥生中期の土器片の出土が包含層中から多く認められた。

東側では中央区のトレンチを延長し、幅40cm深さ10cmの南北方向の溝3が検出されたため、その北側と南側に発掘区を拡張した。この溝3は両拡張区にも連続したが、遺物の出土はなかった。北側拡張区の溝3の西側は中央区に向って傾斜する。南側の拡張区では柱穴様小ピットが多く検出されたが、建物等の確認には至らなかった。溝3の南端部で、この溝に切られて土壤1が、その西側で土壤2が検出されている。

掘立柱建物(第34図) 柱穴は径20cm、深さ40cm前後である。1間の心心間の距離の平均は2.13mを測り、主軸方向S65°Eで、2×3軒の規模の掘立柱建物である。東側には半間幅の



第32図 浮殿D 造路周辺地形図 (1/1,000)

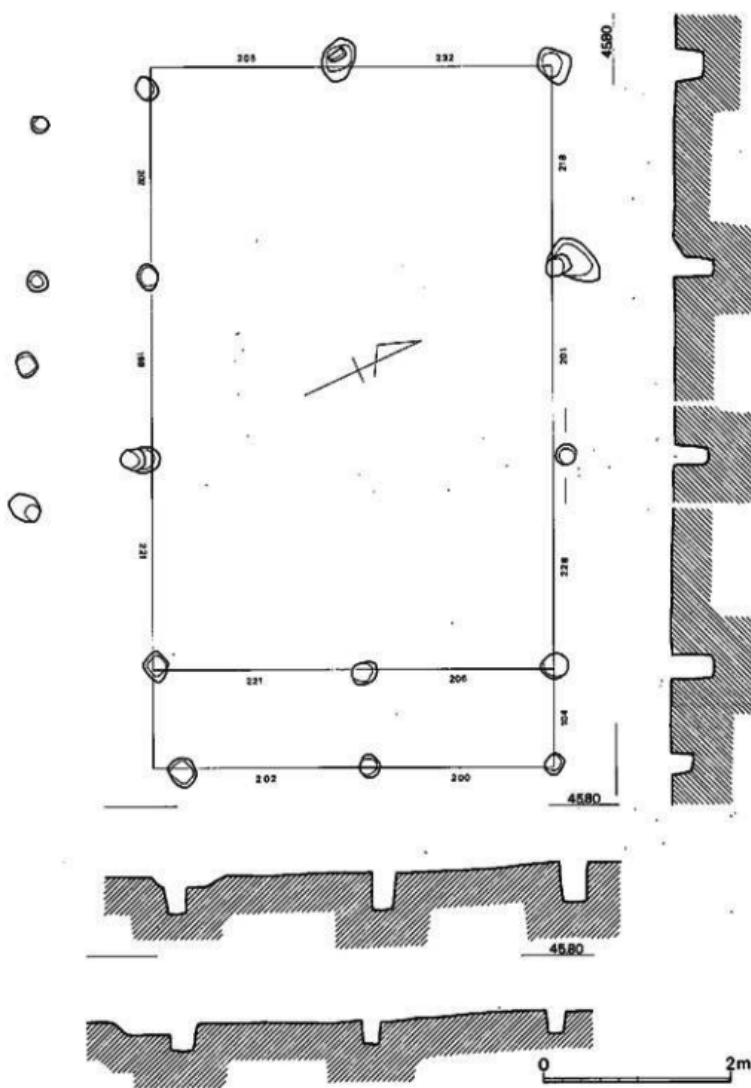


第33図 浮殿D造跡地形図 (1/500)

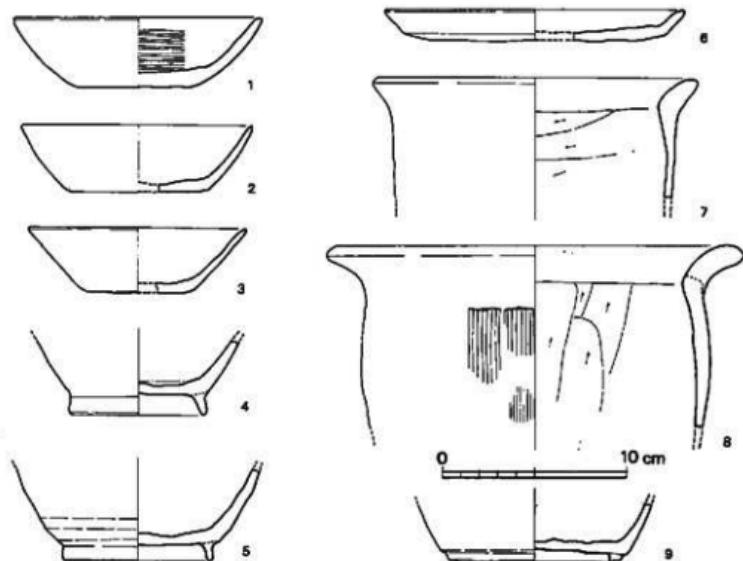
底を設す。柱穴内からは平安時代の遺物が出土している。

土壙1は、 $0.9 \times 1\text{ m}$ の隅丸方形で深さ約 0.8 m の規模である。壙内からは中層から下層にかけて、土師器では完形の杯をはじめ壺片が若干の須恵器片と共に出土した。

土壙2は、壙内からの土師器片が若干出土したのみであるが、掘り方近くで須恵器の高台付



第34図 指立柱建物実測図 (1/60)



第35図 第1号土壙出土土器実測図 (1/3)

杯が出土した。

土壙3は、 $1.05 \times 1.15\text{m}$ の隅丸方形を呈し、深さ30cmの規模である。埋土は暗褐色粘質土で第36図に示した甕や杯が一括して出土した。

(2) 遺物

第1号土壙出土土器 (第35図)

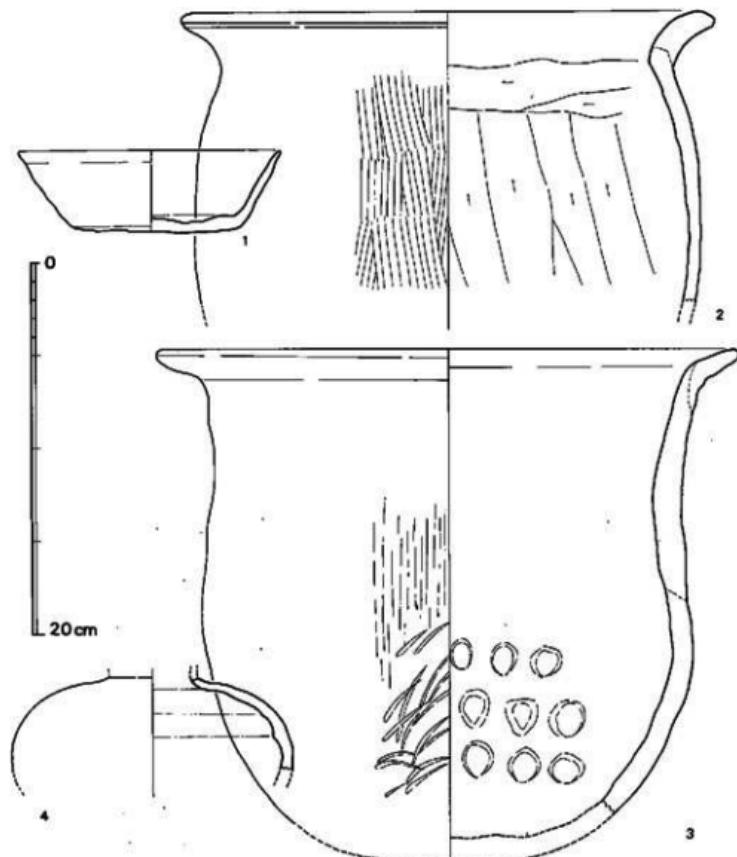
土器

杯 (1~3) 1は完形品で、底部ヘラ切り後ナガ調整を行ない、内面は横位のヘラ磨きを施す。口径13.4cm、器高3.7cm、底径6.1cmを測り、胎土精良、明黄茶色をなす。2は、全体に著しく磨滅し、胎土精良で、復元口径12.4cm、器高3.6cm、底径7.5cmを測る。3も全体に磨滅して、小片であるため、口底径に問題がある。2同様底部はヘラ切離しによるものであろう。

高台付碗 (4~5) 4は、体部が高台付根より直線的に開く類で、全体に磨滅しており、粗砂多く含み、明茶色をなす。5は、体部外面下半をヘラ削りしており、胎土精良で全体にかなり磨滅する。

皿 (6) 復元口径16.2cm、器高1.7cmで、胎土精良、明茶色をなす。

甕 (7~8) 7は、小型で張らない胴部につくる類で、内面横方向に削り、粗砂かなり

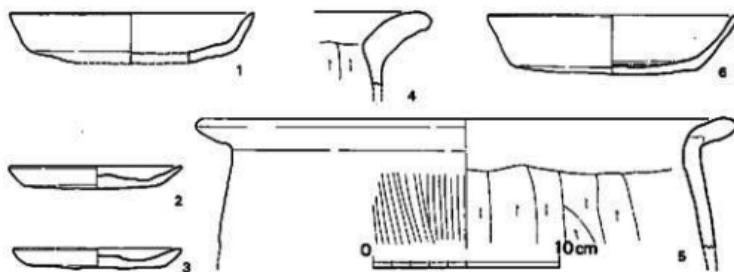


第36図 第3号土被出土土器実測図(1/3)

含み、外面に強い二次焼成を受ける。8は、口縁が強く反転して、僅かに張る胴部となり、内面縫のヘラ削り上げ、外面は粗い継ハケを施す。

須恵器

杯(9) 内端で接地する短かい高台を付け、体部はやや直線的に立ち上がるものである。
胎土に細砂若干含み、焼きはやや甘く、灰色をなす。



第37図 その他の遺構出土土器実測図 (1/3)

第3号土壤出土土器 (36図)

土師器

杯 (1) 口径14.0cm, 器高4.3cm, 底径9.0cm, 底部はヘラ切離し後ナデつける。

甌 (2・3) 2はやや胴が張り, 反転外反する口縁につくる。内面ヘラ削り, 外面やや太く粗雑な縦ハケを施す。3はやや下ぶくらみの胴の上半から開き始め, 口縁で更に屈折して聞く類である。内面は削らず丁寧なナデ, 外面は板状工具縁で削り上げるような擦痕がみられる。下半にはヘラによる粗い擦痕が残る。外面頸部以下には煤付着する。

須恵器

短頸甌 (4) 内外面回転ナデで, 内面には稜を残す。粗砂僅かに含み, 焼きやや甘く外面淡青灰色, 内面暗灰褐色をなす。

その他の遺構出土土器 (37図)

須恵器皿 (1) 4とともに3区P.2出土品である。口径13.2cmで, 体部内外面回転ナデ, 焼きは良いが, 底部のみ生焼け氣味である。

土師器小皿 (2・3) それも3区P.7出土品で, 口径9.3・9.1cm, 器高1.1・1.2cm, 底径7.3・7.5cmを測る同工同種品である。底部はヘラ切り離し後, スノコ痕を残す。胎土稍良, 焼成良く淡褐色をなす。

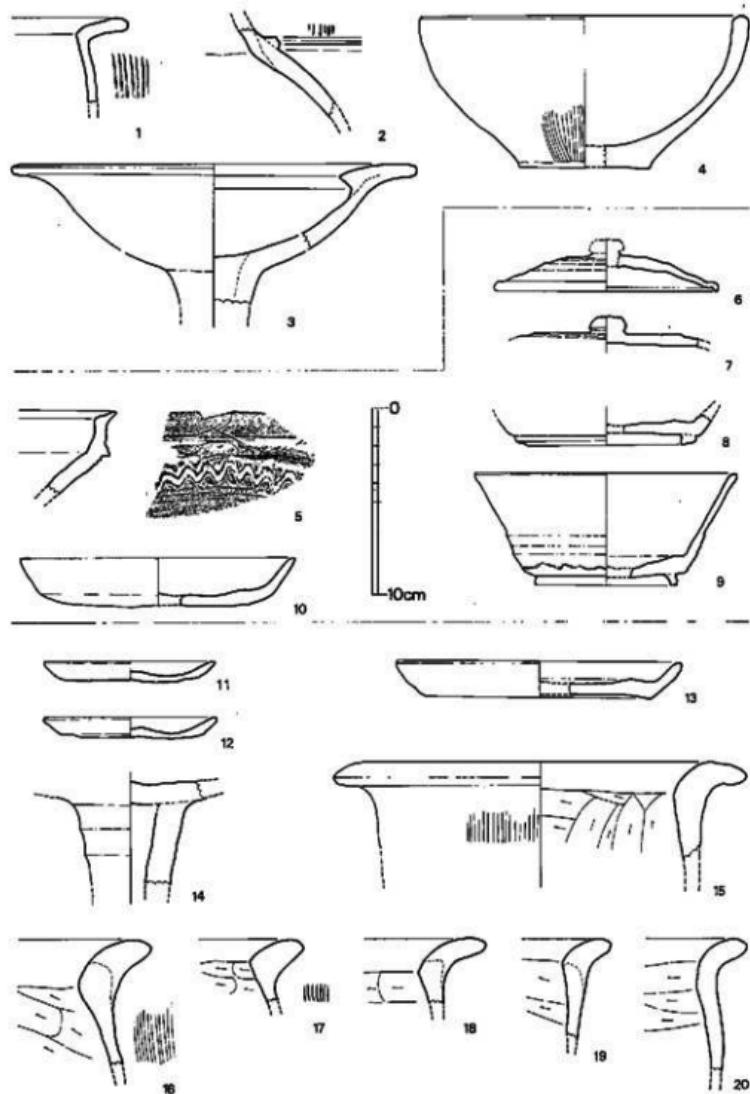
土師器甌 (4・5) 4は3区P.2出土, 内面ヘラ削り上げ, 粗砂多く含み, 茶~暗黄色をなす。5は掘立柱建物のNo.1柱穴出土品で, 内面削り上げ, 外面粗い縦ハケを施す。

土師器杯 (6) 中央区直線溝出土品で, 底部糸切り離し, 口径13.4cm, 器高3.2cm, 底径10.0cmを測る。石英粒かなり含み, 淡褐色をなす。

包含層出土の遺物 (第38~40図)

遺跡の各地点の第2層から各時代・各種の遺物が出土した。うち, 弥生時代中期土器は西端の用水路寄りの近辺に集中して出土した。

弥生土器 (1~4)



第38図 包含層出土土器実測図 (1/3)

甕 (1) 口縁を直角気味に付けるもので、外面粗い縦ハケ、内面はナデる。粗石英かなり含み暗褐色をなし、外面には煤が付着する。

甕 (2) 頸部と胴部の境に口唇状凸帯を付け、外面横ヘラ磨き丹塗りを施す。頸部には縦ヘラ暗文がみられる。

高杯 (3) 鋤先状口縁となるもので、全体に極めて磨滅著しいが、全面丹塗りと考えられ、胎土精良である。

鉢 (4) 着下半のみの如き形状をなし、部分的にしか残らないが内面丹塗りを行ない、外面下半にはわりと粗い縦ハケを施す。

須恵器 (5~10)

杯蓋 (6・7) 鈴形の攝みを付けるもので、天井外面ヘラ削り、口縁部は丸味を帯びた鳥嘴状となる。

高台付杯 (8・9) 8は内端で接

地する短かい高台を付ける。焼きやや甘く暗灰色をなす。9は細身の高台を付け、やや直線的に開く体部の深い器形となる。胎土精良で焼きやや甘く、淡灰色をなす。

皿 (10) 底部ヘラ切り後ナゲしており、口径14.7cm、器高2.6cmのやや深いタイプである。

甕 (5) 外面の凸帯下に櫛描波状文を施し、内外面回転ナゲ、内面灰かぶり、外面灰黒色をなす。須恵器のうち、他の奈良末前後のものと異なり、この1点のみ古墳時代の所産である。

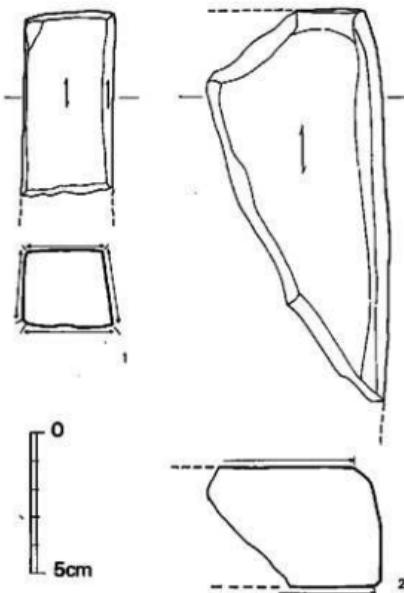
土師器 (11~20)

小皿 (11・12) 口径9.1~9.2cm、器高1.1cm、底径7.2~7.7cmの同工であり、底部はヘラ切りでスノコ状圧痕が残る。胎土精良で、焼き良く淡褐色をなす。

皿 (13) 口径15.3cm、器高2.0cmで全体に厚手である。器表磨滅し、胎土精良で白褐色をなす。

高杯 (14) 長脚の類で、広い皿状の杯部につくる類であろう。胎土精良、淡茶色をなす。

甕 (15~20) 口縁の形態、胴の張り方で各種ある。孰れも内面ヘラ削りを行ない、外面には粗い縦ハケを施すものが多い。20は頸部内面で棱をなさず、丸く外反するタイプである。外



第39図 稲石実測図 (1/2)

面に煤付着するものが多い。

縄文土器（第40図）

1は、内外面にアナダラ属貝殻による斜め条痕が著しく、薄手で、胎土に粗石英粒かなり含み、外面茶色、内面暗褐色をなす。2は、外面のみに粗い横位条痕を残し、胎土に粗石英粒多く含み、外面暗黄褐色、内面暗～黒褐色をなす。

1は前期的な条痕土器とみられるが、2は粗雑であり、後・晩期の粗製土器となるものかと考えられる。

砾石（第39図）

1・2ともに砂岩製の粗砾である。1は小型で四面とも使用しており、2は大型で上下面のみ使用する。



第40図 縄文土器実測図(1/2)

3. 小 結

遺跡の南側には50cm下に谷水田が作られており、弥生時代中期の大きめの土器破片が中央区の西側の包含層で出土したことから、この舌状台地に住居等の遺構が存在したことは充分に考えられる。また包含層内からは中央区で多くの奈良末～平安時代初頭の土師器・須恵器片が、中世の磁器片と共に出土をみている。縄文土器片も表採されているので、確認された遺構は少なかつたが、順次多くの遺構が営まれ、擾乱を受けてきた複合遺跡であると言えよう。



1 漢殿D遺跡発掘前全景（東より）



2 中央区全景（東より）



1 北区全景（南より）



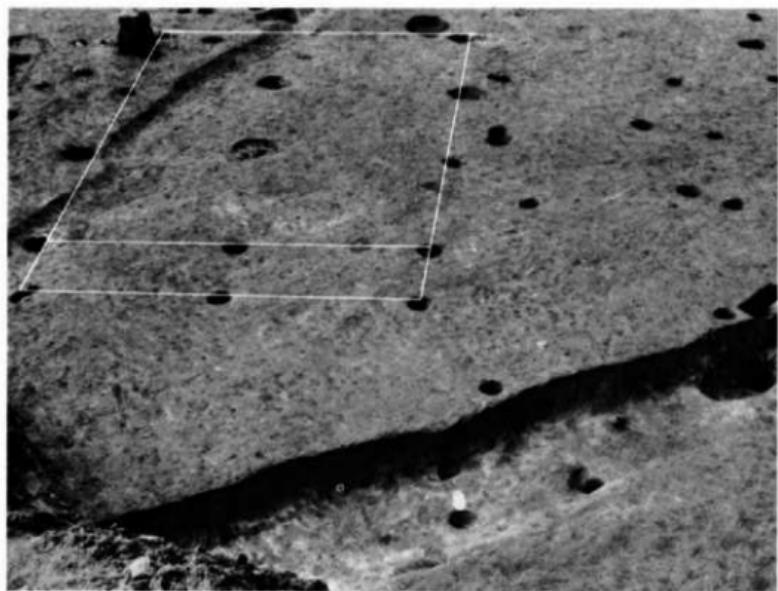
2 第1トレンチ（表面より）



1 北区遺構（北より）



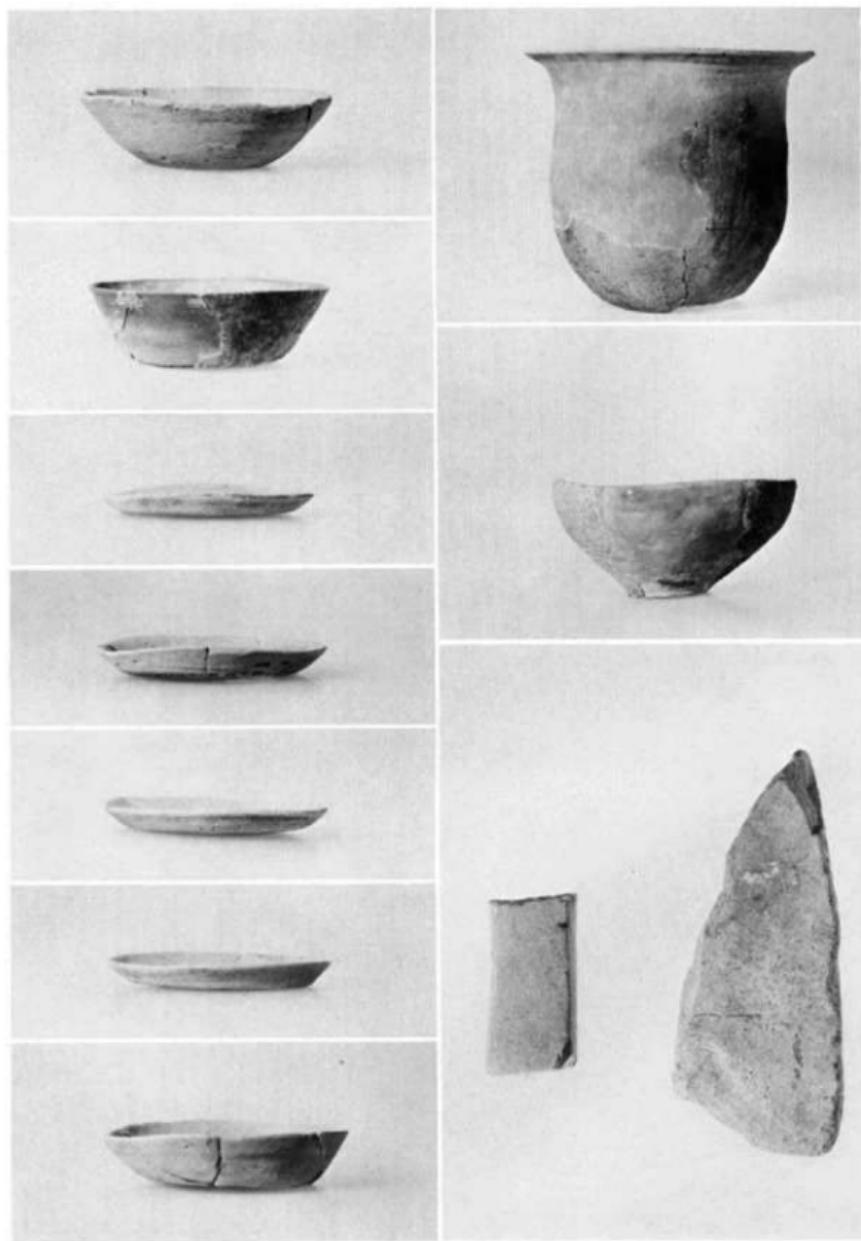
2 北区西南隅遺構（南より）



1 振立柱建物



2 1号土壤土器出土状態



浮殿D遺跡出土遺物

III 各 遺 跡 の 調 査

7. 大 島 遺 跡

7. 大島遺跡

1. はじめに

大島遺跡は、山家川南岸に展開する低台地上に所在する。台地は東から西へゆるやかな傾斜をもち最高部で標高42m前後で、広い範囲で展開し、筑紫野市と朝倉郡夜須町城にまたがる。当遺跡は、この台地のほぼ中央部の北側縁に位置し、台地の先端部付近に第14地点の八ヶ坪遺跡が所在する。

当遺跡は、標高38m前後の高さにあり、低地との比高差は4mほどである。遺跡は台地の縁に所在することから、水田整地の為に一部が削平されている。遺構は表土下20~50cmの深さにあり、西に低くなっている。

遺構は、調査区の東半部に住居跡・貯蔵穴等が集中し、西半部に溝等が遺存する。2号住居跡の北東に谷状の落ち込みがあり、北側に深く傾斜をもち、恐らく台地の縁であるため、土砂崩れの跡と考えられ、堆積土から見てもそのように判断された。また、当遺跡の地山は砂質土層からなり、貯蔵穴などでは湧水があった。

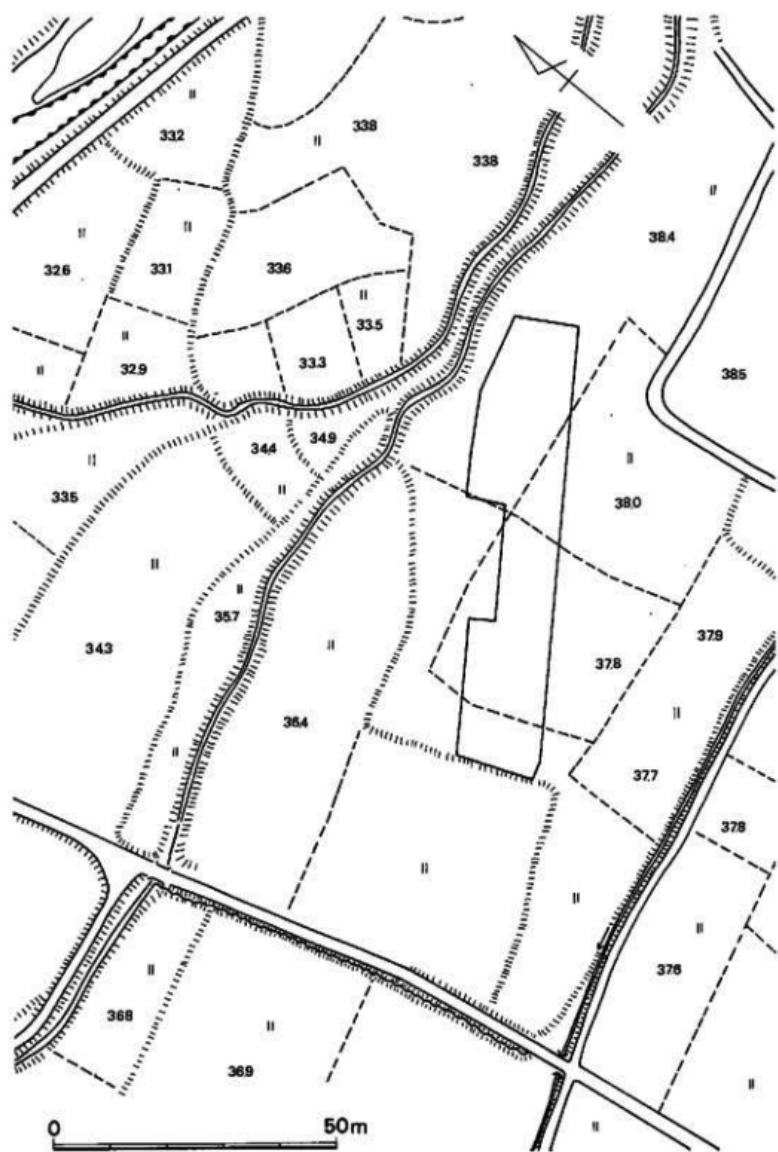
2. 遺構

遺構は、住居跡4、貯蔵穴49、土壙14、竪穴2、溝1である。

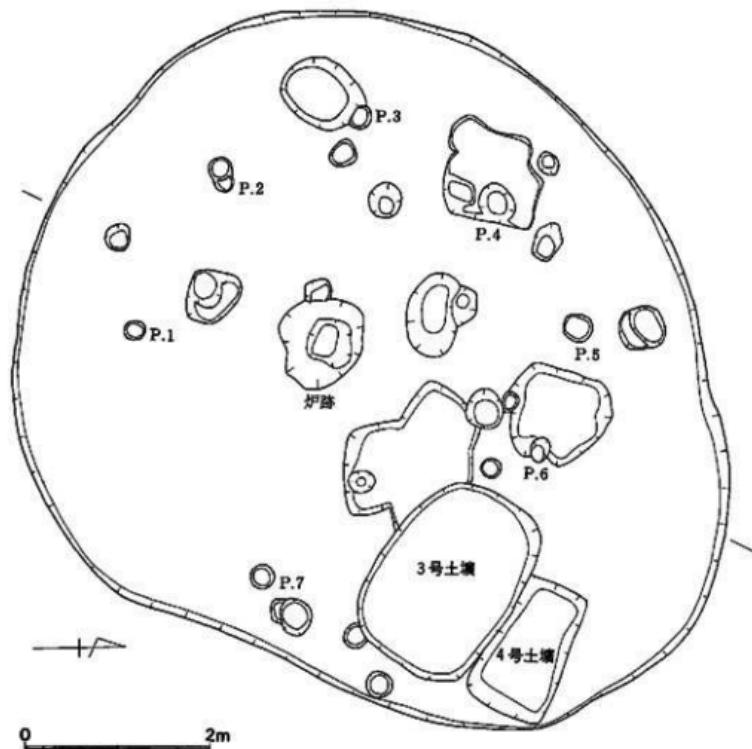
(1) 住居跡

1号住居跡（第42図、図版33-1） 不正円形を呈する住居跡である。畠地であるため削平を受けた遺構は浅く残っていた。3・4号土壙と重複し、埋土と地山の差が不明瞭で明確でなく、若干の土質の相違をもとに一部発掘した。これによると、長径8.3m、短径7.1mを測るが、周壁より約1m内側の円状に柱穴と考えられる小ピット（P1~P7）があり、これからすると、直径7.1m前後の規模の円形を呈していたのではないかと推定され、これを基に北東部に若干の張り出しを加えたプランを意図したものと思われ、その点については確証を得ない。

住居跡は、ほぼ中央に深さ30cmほどの不正形プランの炉跡があり、柱穴と考えられる小ピットは7つが確認された。10~20cmと柱穴としては非常に浅いもので、柱穴としてなしうるかは疑問のあるところであるが、周壁より約1m内側の円上にはほぼ位置し、柱間が1.6m前と一致することから柱穴として考慮した。恐らく9本柱の住居跡ではないかと考えられる。



第41図 大島退路周辺地形図 (1/1,000)



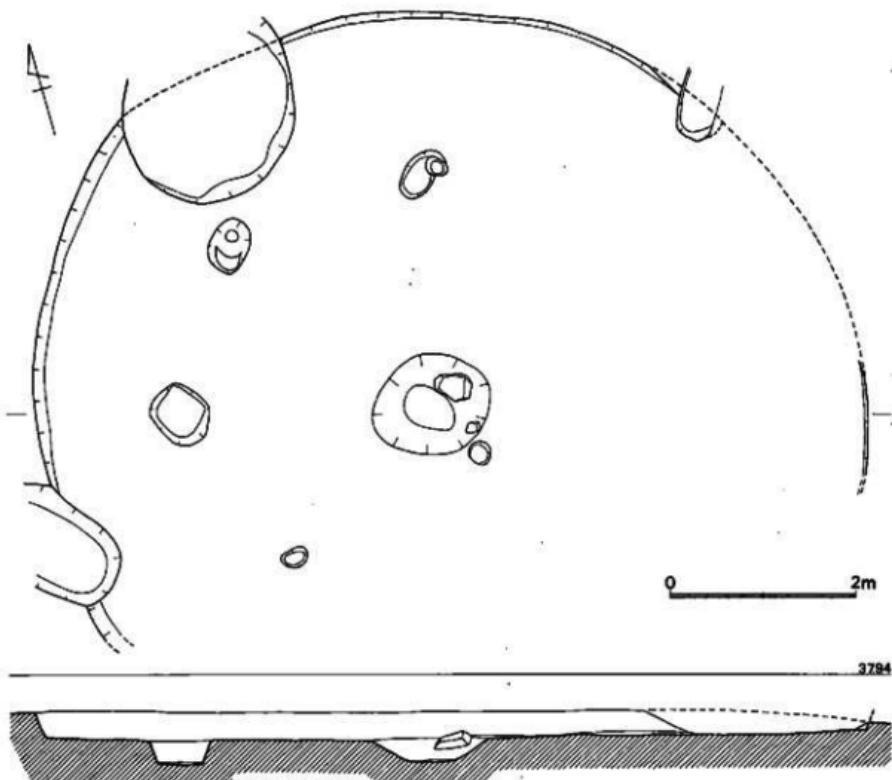
3794



第42図 第1号住居跡実測図 (1/60)

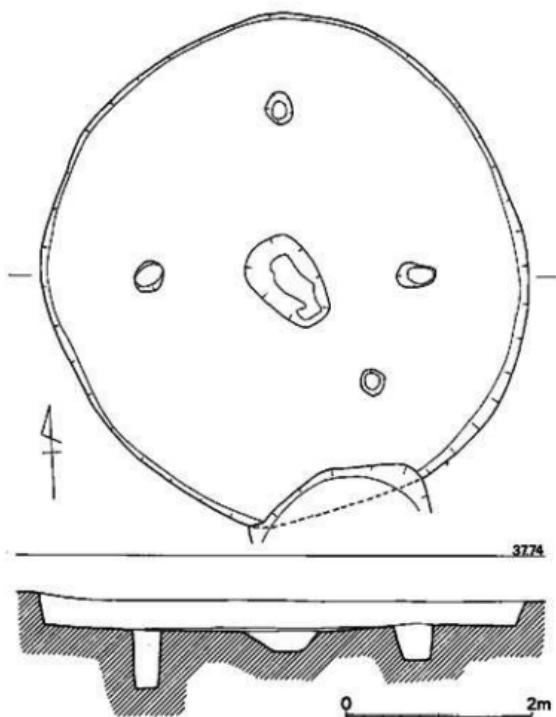
3・4号土壤との前後関係は、出土した土器に時期差はなく確認し得なかった。1号竪穴、11号土壤よりは新しい。

出土遺物は土器(1~7)がある。弥生時代前期に属す。



第43図 第2号住居跡実測図 (1/60)

2号住居跡（第43図、図版33—2） 造構は調査区外に広がっており完掘し得なかったが、径約9mの円形住居跡と考えられる。貯藏穴と重複し、土砂崩壊により、その全容を知り得ない。ほぼ中央に円形を呈する深さ20cmほどの壠がある。これは灰・炭などが埋土に認められ炉跡と考えられる。壠内上部に角礫2個があり、1個は若干焼けている。柱穴と考えられるピットは3個が確認されたが、住居としては不充分な数である。円形住居跡としては、その規模は大きいものであり、全容を知り得なかったのは残念である。



第44図 第3号住居跡実測図 (1/60)

4号貯蔵穴・2号土壇より古いが、1～3号貯蔵穴との前後関係はつかめなかった。

出土遺物は、弥生前期の土器（8～29）と土製紡錘車（27）が出土。

3号住居跡（第44図、図版34-1） 小規模の円形住居跡で、径約5.4mを測る。深さも40cm前後あり、わりあい遺存度の良い遺構である。ほぼ中央に長方形状を呈する炉跡がある。柱穴は4本と考えるが、東側の2柱穴の位置に疑問の残るところである。柱穴の深さは30～60cmあり、他の住居跡のものに比べると深い。

重複する遺構との前後関係は、5・6・41・43号貯蔵穴より新しく、4・7号貯蔵穴より古い。出土遺物は、土器（30～36）、黒曜石製鏃（7）がある。弥生時代前期に属す。

4号住居跡（第45図、図版34-2） 2号住居跡の北に隣接する。2号住居跡との前後関係は不明である。発掘時には、44・45号貯蔵穴の遺存することが、確認されず、円形プランを

量する住居跡として掘さくを初め、発掘作業終了頃に2基の貯蔵穴の遺存することが解り、これら2基との前後関係はつかめ得なかった。また、住居跡の西側をも作業工程からして完掘できなかつたが、恐らく円形プランを呈する住居跡と考えられる。

43号貯蔵穴より新しく、10・18号貯蔵穴より古い。出土遺物は、土器(37~40)、土製品(22)がある。弥生時代前期に属す。

(2) 貯蔵穴 (第46~52図、図版35~39)

貯蔵穴は、調査区の東側に集中して検出され、その広がりはさらに東に延びるものと推定される。49基を確認し、47基を発掘調査した。

1号貯蔵穴 (1) 円形プランを呈す。2号住居跡と重複するため浅く遺存するが、断面は袋状を呈するものである。遺物は土器(41~43)が出土。弥生時代前期のものである。

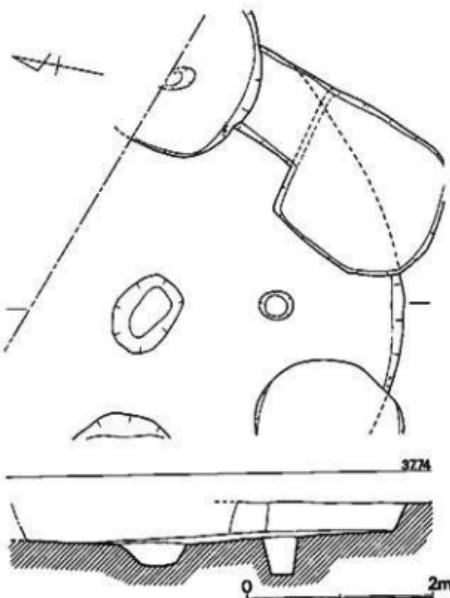
2号貯蔵穴 (2) 円形プランを呈す。断面は袋状をなし、底中央がやや深くなっている。3号貯蔵穴と重複するが、これより古いものと考えられる。弥生時代前期の土器(44~48)が出土している。

3号貯蔵穴 (3) 円形プランを呈す。上部が崩壊しているが、断面は袋状をなす。遺物は土器の小片が多いが、弥生時代中期のものが少量含まれており、2号住居跡や2号貯蔵穴より新しいものと考えられる。

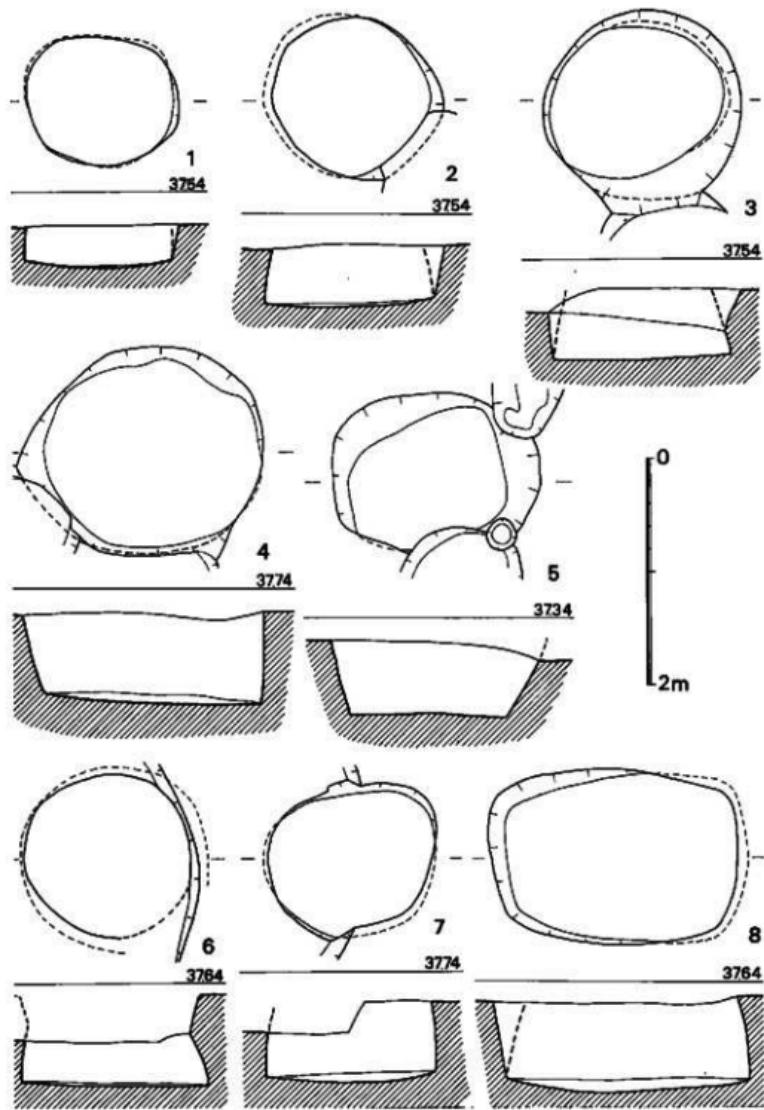
4号貯蔵穴 (4) 円形プランのやや大型の貯蔵穴である。2・3号住居跡より新しい。弥生時代前期の土器(49~51)が出土。

5号貯蔵穴 (5) 晴丸長方形を呈す。3号住居跡より古いものである。上部が崩壊しているので、断面が袋状を呈すか否かは不詳である。遺物の出土はないが、3号住居跡との関連から弥生時代前期のものであろう。

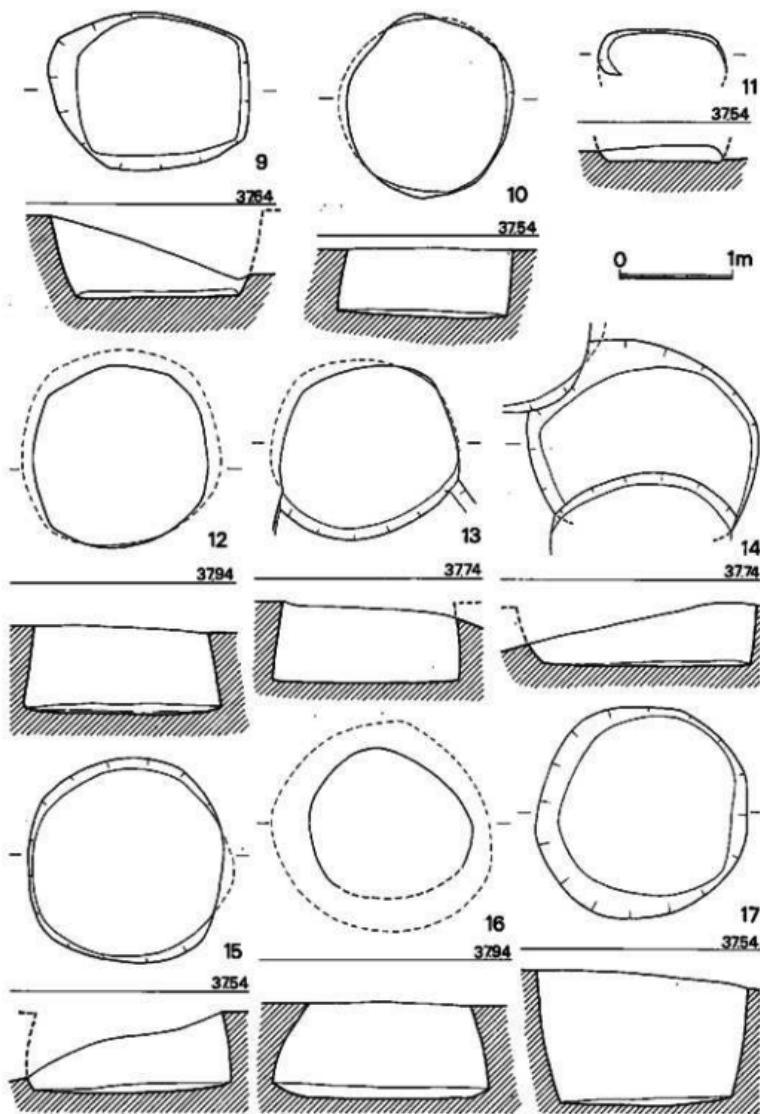
6号貯蔵穴 (6) 3号住居跡内で検出された。基準杭を設置しており完掘されていない



第45図 第4号住居跡実測図 (1/60)

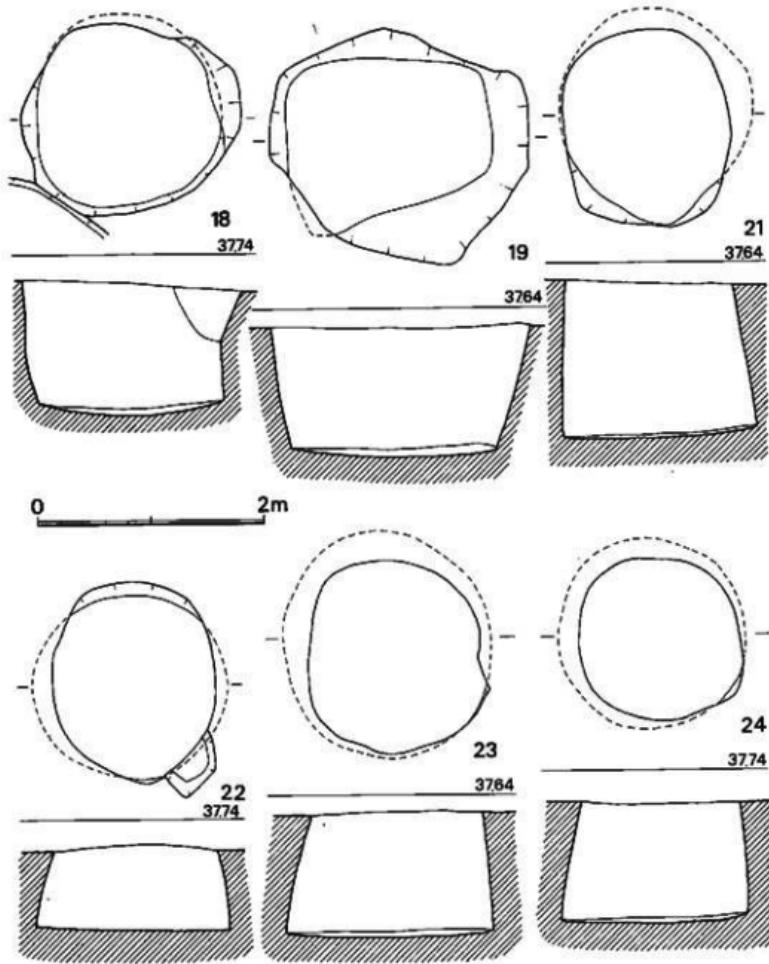


第 46 図 肝 藏 穴 実 測 図 1 (1/50)



第 47 図 肝 痈 穴 実 測 圖 2 (1/50)

- が、円形を呈するものと思われる。断面は袋状を呈す。弥生時代前期に属し、磨石(48)が出土。
- 7号貯蔵穴(7) 3号住居跡と重複し損壊しているが、円形プランを呈するものであろう。断面は袋状を呈し、底中央がやや深くなっている。弥生時代前期に属す壺形土器の肩部と土製紡錘車(29)が出土、3号住居跡より古い。
- 8号貯蔵穴(8) 圓丸長方形のプランを呈す。西側壁が崩落しているが、断面は袋状をなすものと思われる。弥生時代前期の土器小片が出土。
- 9号貯蔵穴(9) 圓丸長方形のプランを呈す。地山崩壊により東側が損壊している。床面は平坦である。弥生前期に属す土器(52~53)が出土。
- 10号貯蔵穴(10) 3号住居跡に隣接して発見された。円形プランを呈す。断面は袋状をなすものと思われる。弥生時代前期の土器(54~56)のほか石匙(21)が出土。
- 11号貯蔵穴(11) 地山崩壊により、ほとんど原状を留めない。遺物の出土はない。
- 12号貯蔵穴(12) 円形プランを呈し、断面は袋状をなす。遺存状態の良好なものである。弥生時代前期の土器(57~64)が出土。
- 13号貯蔵穴(13) 14号貯蔵穴と重複し、新しいものである。円形プランを呈し、断面は袋状をなす。弥生時代前期の土器小片が出土。
- 14号貯蔵穴(14) 不整円形のプランを呈す。平面規模に比べ、深さが浅い。13・15号貯蔵穴より古い。弥生時代前期の土器(65)が出土。
- 15号貯蔵穴(15) 円形プランを呈す。14号と同じく地山崩壊により上部の両側が崩壊している。これも平面規模に比べ浅いものである。弥生時代前期に属すと考えられる土器の小片が若干出土。
- 16号貯蔵穴(16) 調査区外に若干広がり、上部を完掘していないが、円形プランを呈するものであろう。遺存状態の良好なもので、断面の袋状を呈す状態がよく解る。弥生時代前期の土器(66~69)が出土。
- 17号貯蔵穴(17) 円形プランを呈す。粗い砂質土が地山となっており、深く掘られているが、壁の崩落が著しく、原状は袋状をなす断面形と思われる。弥生時代前期の土器(69)が出土。
- 18号貯蔵穴(18) 3号住居跡に接して発見された。円形プランを呈す。上部が崩壊しているが、断面は袋状をなすものであろう。床面は割り合い深いものである。3号住居跡より古く、42・43号貯蔵穴より新しい。弥生時代前期の土器の小片が若干出土している。
- 19号貯蔵穴(19) 砂質土の地山であるため遺構上部の崩壊が著しい。本来は長方形プランを呈していたものであろう。床面は台形状プランを呈す。床面は深い。弥生時代前期の土器(71~81)が出土。
- 20号貯蔵穴(20) 21・39号貯蔵穴と重複し若干崩壊しているが、方形プランを呈するものであろう。床面の両側に長方形状の浅い落ち込みがある。弥生時代前期の土器(82~83)が出土。



第48図 貯藏穴実測図3 (1/50)

21号貯藏穴 (21) 不整円形を呈すプランである。造存状態の良好なもので、断面は袋状をなし、深さは最大のものである。弥生時代前期の土器(87・88・91・92・98)が出土。

22号貯藏穴 (22) 円形プランを呈す。造存状態良好なもので、断面は袋状をなす。弥生

時代前期の土器（93・96・97）と黒曜石製石鎌（6）が出土。37号貯蔵穴より新しい。

23号貯蔵穴（23） 造構上部が崩壊しているが円形プランを呈すもので、断面は袋状をなす。床面は平坦で、わりあい深い。弥生時代前期の土器（84）が出土。

24号貯蔵穴（24） 円形プランを呈す遺存良好なものである。断面は袋状をなす。弥生時代前期の土器（85・89・94・95）と大型石斧（43）が出土。

25号貯蔵穴（25） 造構の上部が崩壊しているが、円形プランを呈すものである。断面は袋状をなすものと思われる。弥生時代前期の土器（86・90）が出土。

26号貯蔵穴（26） 円形プランを呈す。床面のやや浅いものである。弥生時代前期の土器小片が若干出土している。

27号貯蔵穴（27） 造構上部が崩壊している。円形プランを呈すもので、床面中央がやや深くなっている。弥生時代中期の土器（99・102～108）と土製軽轎車（28）が出土。

28号貯蔵穴（28） 造構上部が崩壊しているが、長円形プランを呈すもので、断面は袋状をなすものであろう。弥生時代前期の土器（100・101）が出土。

29号貯蔵穴（29） 30号貯蔵穴と重複し損壊するが、方形プランを呈すものと思われる。断面は袋状をなし、床面中央が深くなっている。弥生時代前期の土器（109～111）と片刃石斧（33）と石斧（44）が出土。

30号貯蔵穴（30） 円形プランを呈す。造構上部を若干損壊するが、断面は袋状をなすものであろう。弥生時代中期の土器（112～133）と石鎌（1）、石庵丁（35）、砾石（52）が出土。29号貯蔵穴より新しい。

31号貯蔵穴（31） 北側が調査区外に広がり完掘していないが、円形プランを呈すものであろう。断面は袋状をなす。弥生時代前期の土器（134）と石鎌（10）が出土。

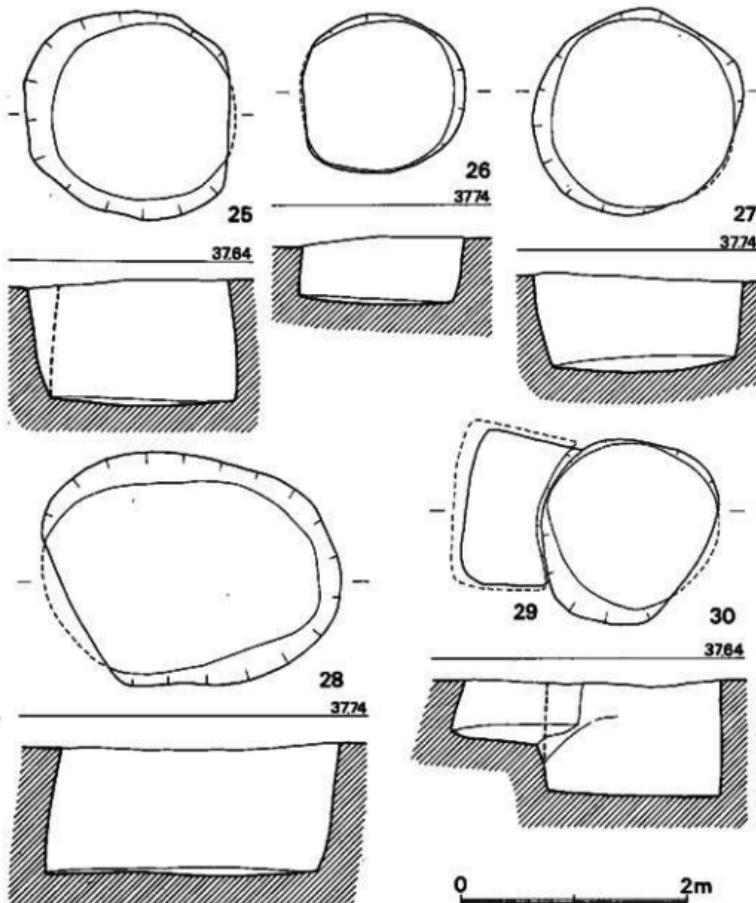
32号貯蔵穴（32） 長方形プランを呈す小型のものである。土壤かとも思われたが、断面が袋状をなすところから貯蔵穴とした。33号・34号・37号貯蔵穴も同様なものである。弥生時代前期の土器（135～137）と石庵丁（36）が出土。

33号貯蔵穴（33） 小型の長方形プランを呈す。號の一部が袋状をなす。弥生時代前期の土器小片が出土。

34号貯蔵穴（34） 長方形プランを呈す小型のものである。床面中央がやや深くなっている。弥生時代前期の土器（138～146）が出土。

35号貯蔵穴（35） 円形プランを呈す遺存状態良好なもので、断面はフラスコ状をなす。弥生時代前期の土器（147～151）が出土。

36号貯蔵穴（36） 46号貯蔵穴と重複し、一部損壊するが、円形プランを呈すものである。遺存状態はよく、断面は袋状を呈す。弥生時代前期の土器（152～153）と石鎌（9・13）が出土。

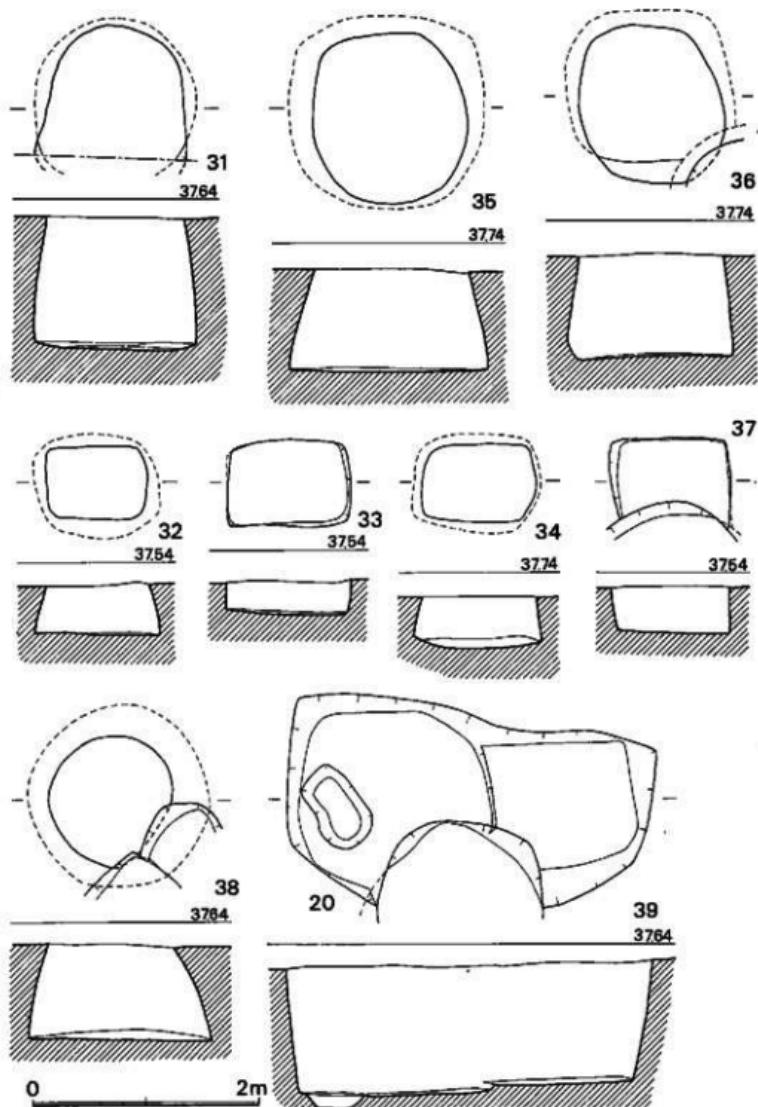


第49図 貯蔵穴実測図4 (1/50)

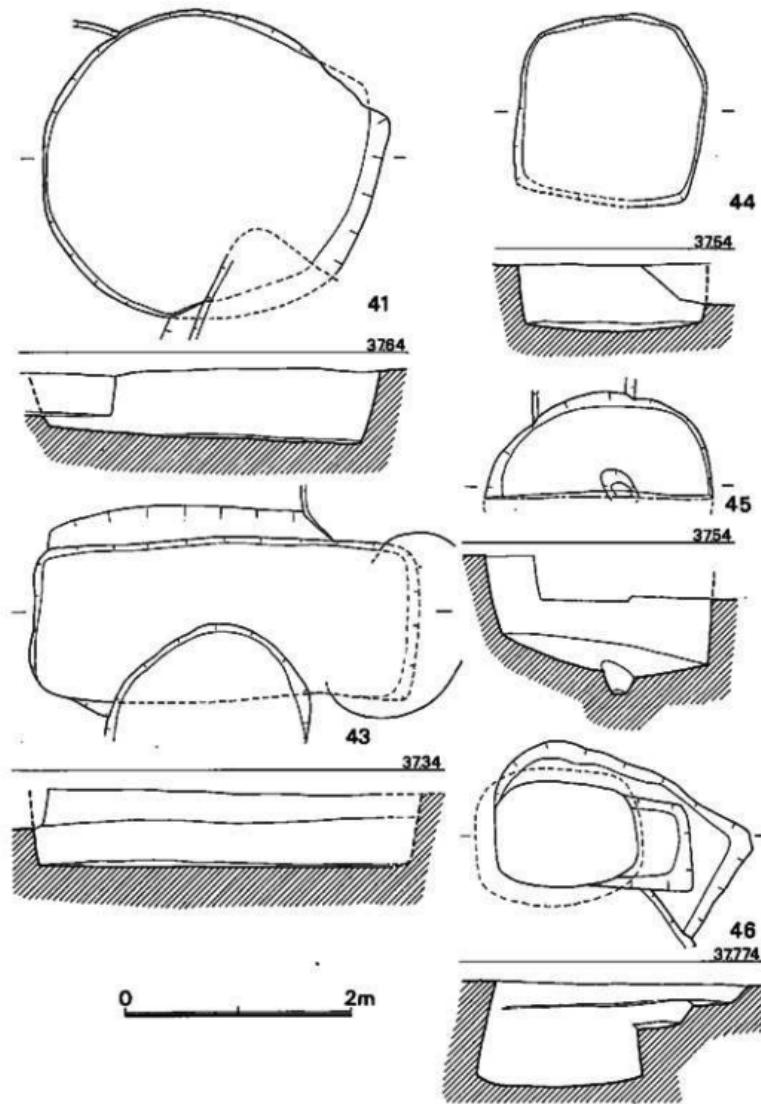
37号貯蔵穴(37) 22号貯蔵穴と12号土壇が重複し、損壊が著しい。方形あるいは長方形を呈すプランと思われる。弥生時代前期の土器小片が出土。

38号貯蔵穴(38) 47号貯蔵穴より古く、これにより一部が損壊する。円形プランを呈す。断面はフ拉斯コ状を呈す。弥生時代前期の土器(154~164)が出土。

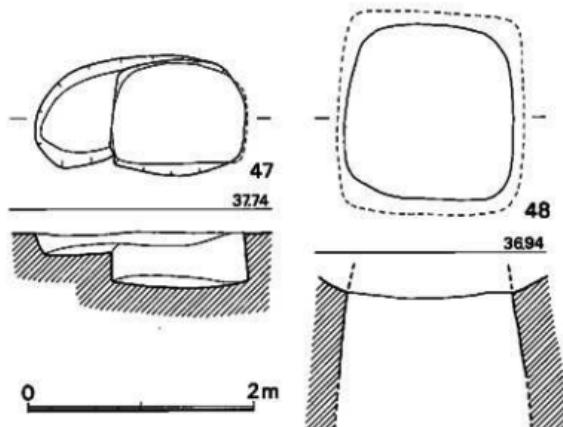
39号貯蔵穴(39) 20・21号貯蔵穴より古い。両者により損壊著しいが、長方形プランを



第50圖 貯藏穴実測図 5 (1/50)



第51図 計量穴実測図6 (1/50)



第 52 図 貯 藏 穴 実 検 図 7 (1/50)

呈するものであろう。弥生時代前期の土器(165~167)が出土。

40号貯藏穴(40) 3号住居跡、39号・40号貯藏穴と重複し損壊が著しい。円形プランを呈するものと思われるが、その規模については不詳である。弥生時代前期の土器(168)が出土。

41号貯藏穴(44) 円形プランを呈し、最大のものである。平面形に比べ床面は浅い。3号住居跡と39号・41号貯藏穴より古い。弥生時代前期の土器小片と片刃石斧(34)が出土。

42号貯藏穴 未掘の貯藏穴である。38・41号貯藏穴により損壊が著しい。

43号貯藏穴(43) 長方形プランを呈す長大なものである。西側辺が明確に把握できなかったが、長辺は340cm前後と考えられる。平面的な規模に比べ非常に深い床面である。3号・4号住居跡や10号・18号貯藏穴より古い。弥生時代前期の土器(169~171)が出土。

44号貯藏穴(44) 方形プランを呈す。4号住居跡と重複するが、前後関係は解からなかつた。弥生時代前期の土器(172~178)と石匙(15)と砥石(51)が出土。

45号貯藏穴(45) 4号住居跡の調査時に確認された。前後関係は不詳である。完掘できなかつたが、円形プランを呈すものであろう。床面は摺鉢状を呈し、ほぼ中央に小ピットがある。弥生時代前期の土器(179~180)が出土。

46号貯藏穴(46) 長方形の浅い壌内に掘られたもので、南側上部に方形の浅い掘り込みをもつ。長方形プランを呈し、断面は袋状をなす。弥生時代中期の土器(181~190)と石庵丁(18・19)が出土。

47号貯藏穴(47) 46号貯藏穴と同種のもので、北側に半円形の深い掘り込みをもつ。断

面は袋状を呈す。弥生時代前期の土器（191～196）と石庵丁（16・17）が出土。38号貯蔵穴より新しい。

48号貯蔵穴（48）溝底の検出時に確認された。隅丸方形プランを呈す。砂質土の地山であるため、溝水という条件が重なり壁の崩落がはなはだしいため完掘できなかった。深さは130cm以上あると思われ、最も深いものである。弥生時代前期の土器（197～203）が出土。溝より古い。

49号貯蔵穴（49）13～15号貯蔵穴と重複し、損壊が著しい。円形プランを呈すものと考えられるが、その規模は把握困難であった。

貯蔵穴は49基が発見され、47基を発掘した。別に区分した土壌14基が貯蔵の用をなすとすればその数は60基を越えることになる。また、調査区外にも遺跡は広がることから基數はもっと増えるものと思われる。

49基の貯蔵穴を概観すると次のようなことがいえる。

①、平面形が円形を呈するものが28基あり、不整円形などを加えると32基になる。円形プランが大半を占める。

②、32・33・34号のように、長方形プランを呈す小型のものがある。いずれも前期に属す。この種の貯蔵穴の発見例はなく、むしろ土壌とした10・13号に類似したものが、春日市門田遺跡で小豎穴としてとりあげられている（註1）。

③、46・47号のように、一方に浅い壇をもつ、いわゆる二段掘りの貯蔵穴がある。貯蔵穴本体は何ら他のものと変わりなく、付帯施設をもつところに特徴がある。

④、貯蔵穴は前期に属するのが主体で、中期のものもあるが、規模・構造にあまり変化はみられない。

⑤、当遺跡の貯蔵穴は、立地的条件かとも考えられるが、周辺の丘陵上に所在する貯蔵穴群に比べ、深さが浅い。遺構検出時の遺構面の掘りすぎを考慮しても、90cm以上の深さを呈すものは17基で、3分の1弱という割である。全体的に見て大型は少ない。

⑥、大型のものは、41・43号貯蔵穴がある。41号のような円形で大型のものはあまり類例がない。宗像市長尾遺跡で、前期に属する同規模のものがある（註2）。43号の大型で長方形のものは、小郡市北内畑遺跡（註3）や横隈山遺跡（註4）で発見されている。

⑦、時期的には、27・30・46号が弥生中期前葉に属し、他は前期後半に属するものである。

註1 「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」第3集 福岡県教育委員会 1977

「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」第7集 福岡県教育委員会 1978

註2 宗像市教育委員会が、昭和55年12月から56年1月に発掘調査し、筆者が担当し実見す。

註3 「北内畑遺跡」 小郡市文化財調査報告 第7集 小郡市教育委員会 1981

註4 「横隈山遺跡」 小郡市教育委員会 1974

第2表 貯蔵穴一覧表

単位 cm

号	平面形	口 迎 径	底 迎 径	深さ	出土 遺 物		時期	摘 要
					土 器	石 器 土 製 品		
1	円 形	134 × 114	130 × 116	(38)	⑪～⑬		前期	
2	円 形	152 × 142	150 × 144	(56)	⑪～⑬		♦	
3	円 形	172 × (170)	158 × 138	(64)			♦	2号住居跡・2号貯藏穴より新(?)
4	円 形	(214) × 183	192 × 162	78	⑭～⑮		♦	3号住居跡より新
5	隅丸長方形	185 × —	140 × —	65			♦	3号住居跡より古
6	円 形	147 × 145	167 × 164	80		⑯	♦	3号住居跡より古
7	不整円形	146 × 128	154 × 132	70		⑰	♦	3号住居跡より古
8	隅丸長方形	218 × 158	214 × 147	78			♦	
9	隅丸長方形	176 × 140	145 × 123	72	⑳～㉑	㉒	♦	
10	円 形	147 × 158	148 × 154	62	㉓～㉔		♦	4号住居跡より新
11	不詳	(104) × —	—	(14)			♦	
12	円 形	154 × 160	176 × 174	80	㉕～㉖		♦	
13	円 形	154 × 150	165 × 150	72			♦	14号貯藏穴より古
14	不整円形	204 × —	186 × —	56	㉗		♦	13・15号貯藏穴より古 48号貯藏穴より新
15	円 形	172 × 182	178 × 166	70			♦	14号貯藏穴より新
16	円 形	144 × 134	194 × 186	85	㉘～㉙		♦	
17	円 形	188 × 187	154 × 158	120	㉚		♦	
18	円 形	174 × 168	164 × 170	122			♦	42・43号貯藏穴より新
19	長 方 形	(230) × 184	(198) × 138	115	㉛～㉜		♦	
20	方 形	(182) × (186)	168 × 160	104	㉖㉗		♦	21・39号貯藏穴より古
21	不整円形	174 × 146	190 × 171	142	㉘㉙㉚㉛㉜㉝		♦	20・39号貯藏穴より新
22	円 形	178 × 143	170 × 172	76	㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉝	㉖	♦	37号貯藏穴より新
23	円 形	150 × 173	184 × 200	110	㉖		♦	
24	円 形	140 × 143	166 × 170	110	㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉝	㉖	♦	
25	円 形	180 × 182	162 × 153	112	㉖㉗		♦	
26	円 形	143 × 140	138 × 133	60			♦	
27	円 形	182 × 181	162 × 164	88	㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉝	㉖	中期	
28	長円形	247 × 204	243 × 165	116	㉖㉗		前期	
29	方 形	128 × —	138 × —	60	㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉝	㉖㉗	♦	30号貯藏穴より古
30	円 形	164 × 154	150 × 150	104	㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉝	㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉝	中期	29号貯藏穴より新
31	円 形	— × 120	— × 142	116	㉖	㉖	前期	

32	長方形	90 × 64	110 × 92	48	⑩~⑫	⑬	前期	
33	長方形	110 × 76	106 × 74	30			◆	
34	長方形	102 × 113	70 × 88	46	⑪~⑭		◆	
35	円形	136 × 150	172 × 170	90	⑩~⑫		◆	
36	円形	138 × 125	132 × 146	92	⑩~⑫	⑨ ⑬	◆	46号貯藏穴より古
37	長方形	— × 106	— × 100	42			◆	22号貯藏穴・12号土壙より古
38	円形	108 × 162	120 × 162	84	⑩~⑫		◆	47号貯藏穴より古
39	長方形	— × 156	— × 112	108	⑩~⑫		◆	20・21号貯藏穴より古
40	円形	106 × —	96 × —	61	⑩		◆	3号住居跡、39・41号貯藏穴より古
41	円形	306 × —	282 × 260	64		⑩	◆	40・42号貯藏穴より新 3号住居跡より古
42	円形(?)	—	—				未 摂	
43	長方形	(340) × 152	(324) × 134	70	⑩~⑫		前期	3・4号住居跡、10・18号貯藏穴より古
44	方形	170 × 164	160 × 155	58	⑩~⑫	⑪ ⑫	◆	4号住居跡より新(?)
45	円形	198 × —	183 × —	108	⑩ ⑫		◆	4号住居跡より新(?)
46	長方形	190 × 92	146 × 120	92	⑩~⑫		中期	36号貯藏穴、11号土壙より新
47	長方形	186 × 103	129 × 88	48	⑩~⑫	⑪ ⑬	前期	38号貯藏穴より新
48	隅丸長方形	152 × 150	(178) × (164)	(130)	⑩~⑫		◆	溝より古
49	円形(?)	—	—	(20)			未 摂	

(出土遺物の○数字は挿図番号に一致。時期は弥生時代である。)

(3) 土壙 (第53・54図、図版40)

土壙は14基が確認された。これらのいくつかは、小型の貯藏穴に類似するが、構造的に見てやや異なる点から区別した。一覧表を付すので参照されたい。

1号土壙 (1) 隅丸長方形のプランを呈す。壇内南側に一段を有し、北側に小ピットがある。壇内より弥生時代前期の土器小片が出土。

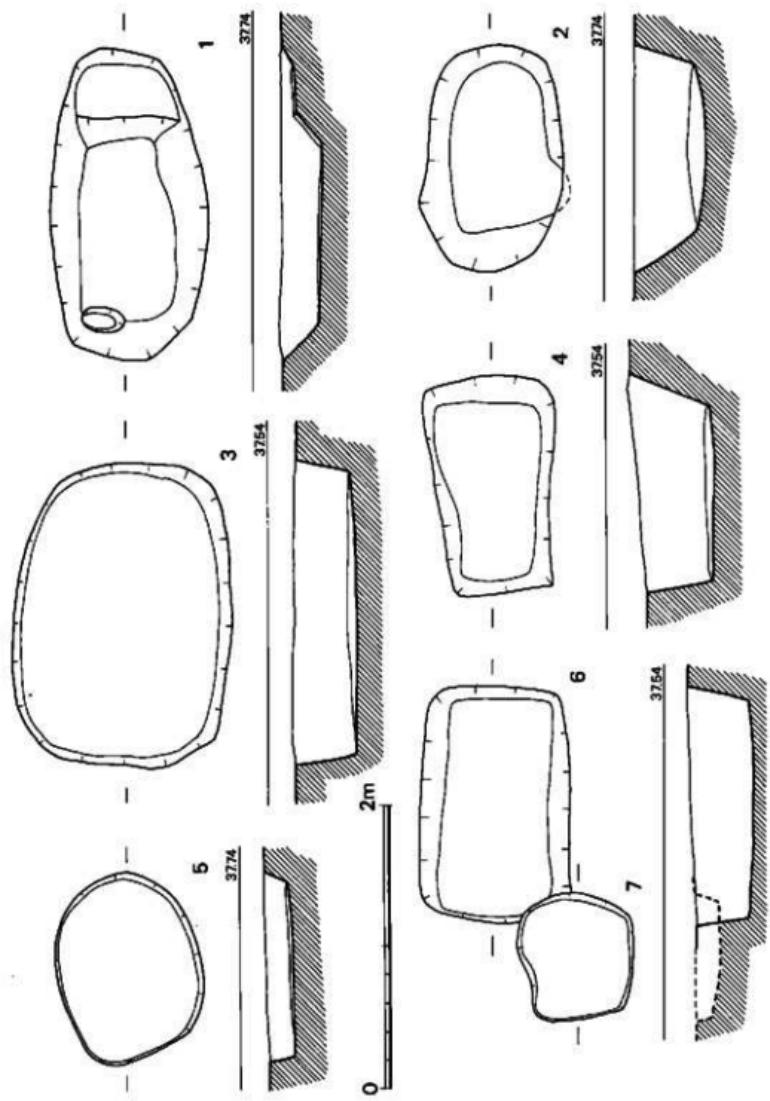
2号土壙 (2) 隅丸長方形のプランを呈す。壇底は中央部分がやや深くなっている。2号住居跡より新しい。壇内より弥生時代中期前半の土器(204~206)が出土している。

3号土壙 (3) 1号住居跡の調査時に確認されたものである。土壙の中で最大規模を測る。隅丸長方形のプランを呈す。壇内より弥生時代前期の變形土器(207)が出土している。

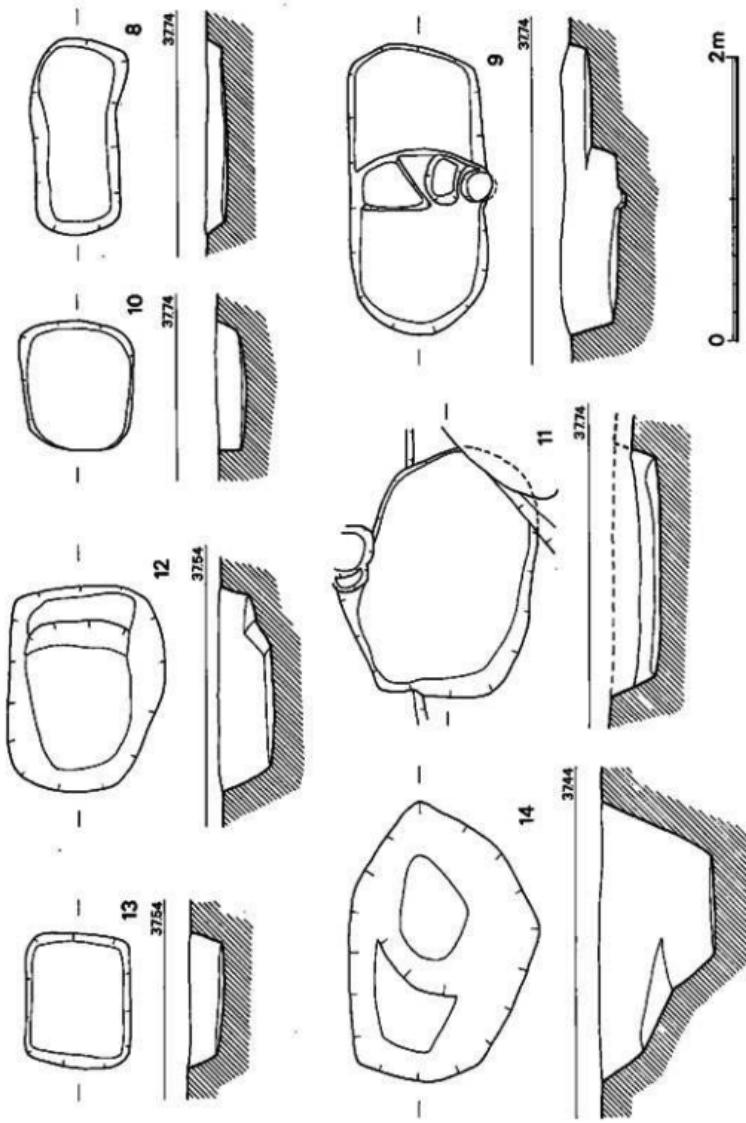
4号土壙 (4) 1号住居跡内で3号土壙に接して確認された。變形をなす平面形である。

3号土壙より古い。壇内より弥生時代前期の土器(208~212)が出土している。

5号土壙 (5) 不整円形の浅いものである。壇内より弥生時代前期の土器(213~214)が出土。



第53図 土 壤 実 測 図 1 (1/40)



第 54 図 土 壤 実 検 図 2 (1/40)

第3表 土 壤 一 覧 表

単位 cm

号	平面形	規 模			出土 造 物		時 期	摘要
		長 迂	短 迂	深 き	土 器	石 器 上製品		
1	隅丸長方形	218	112	28	⑪~⑫		前期	
2	隅丸長方形	160	96	51	⑬		中期	
3	隅丸長方形	212	152	45	⑪~⑫		前期	4号土壙より新
4	捷 形	154 (70)	90	58	⑪ ⑫		々	3号土壙より古
5	不 整 円 形	134	102	20	⑯		々	
6	長 方 形	170	106	47		⑯	々	7号土壙より古
7	不 整 方 形	88	82	17				6号土壙より新
8	不 整 長 方 形	86	62	15				
9	隅丸長方形	230	94	40	⑪~⑫ ⑯		前期	
10	隅丸長方形	90	80	20				
11	隅丸長方形	176	115	34	⑪~⑫ ⑯ ⑰ ⑱		前期	1号住居跡、46号貯藏穴より古
12	隅丸長方形	146	110	40	⑪~⑫ ⑯ ⑰		々	37号貯藏穴より新
13	長 方 形	84	74	25				
14	不 整 形	196	133	80				

(出土遺物の○数字は挿図の番号に一致。時期は弥生時代である。)

6号土壙 (6) 長方形プランを呈す。7号土壙より古い。壇内より215の浅鉢形土器が出土。打製石匙 (16) が出土している。

7号土壙 (7) 不整方形を呈す平面形である。最も小規模なもので、石庵丁片 (37・38) が出土。

8号土壙 (8) 不整長方形プランを呈す。壇底は浅く、出土遺物はない。

9号土壙 (9) 隅丸長方形プランを呈す。壇底は2段となり、底ほぼ中央に円形等の小ピットがある。発掘当初は、47号貯藏穴と同様なものと思われたが、発掘後にやや異なることが解り土壙として取り扱った。壇内より弥生時代前期の土器 (216~219) と打製石匙 (17) が出土している。

10号土壙 (10) 隅丸方形プランを呈す。7号土壙に類似する。壇底浅く、遺物の出土はない。

11号土壙 (11) 隅丸長方形のプランをなすものと思われる。1号住居跡と46号貯藏穴が重複し、かなり損壊している。両者より古いもので、壇内より弥生時代前期の土器 (220~223) が出土している。

12号土壙 (12) 隅丸長方形のプランを呈す。2段掘りの壇底となっている。弥生時代前

期の土器小片（224～228）と手捏ね土器（23）と黒曜石ブレイド（14）が出土。

13号土壙（13） 10号土壙に類似する小規模なものである。遺物の出土はない。

14号土壙（14） 不整形プランを呈す。壙底は2段である。他と比べプランにまとまりのないもので異なるものかとも思われる。遺物の出土はない。

土壙は14基が確認された。小型の貯蔵穴とその規模・平面形が類似するが、壁の立ちあがりに相異があるので土壙にしたものがある（10・13号）。平面形からみると隅丸長方形を呈するものが多く、14号を除けば形状的には整った形を呈す。又、9号のように二段掘りで、46・47号貯蔵穴と構造的に類似するものがあるが、14基の土壙をみると、貯蔵穴との間には、床面の深さに大きな相違がみられる。

しかしながら、これらのいくつかは貯蔵穴群の中に施けられ、さらに重複するものもあり、その用途は判定しかねているところであるが、貯蔵穴と同様の機能をはたしていたことも考えられる。

2号土壙が中期の中葉頃に属すほかは、いずれも前期後半に属するものである。

（4） 穫穴

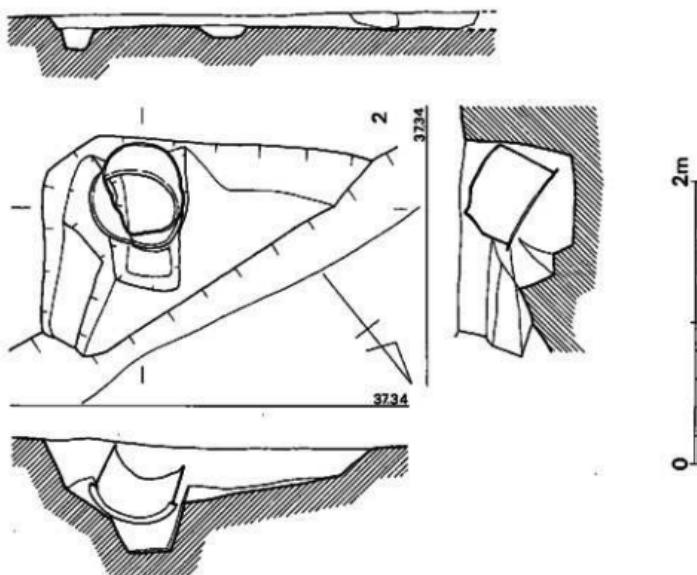
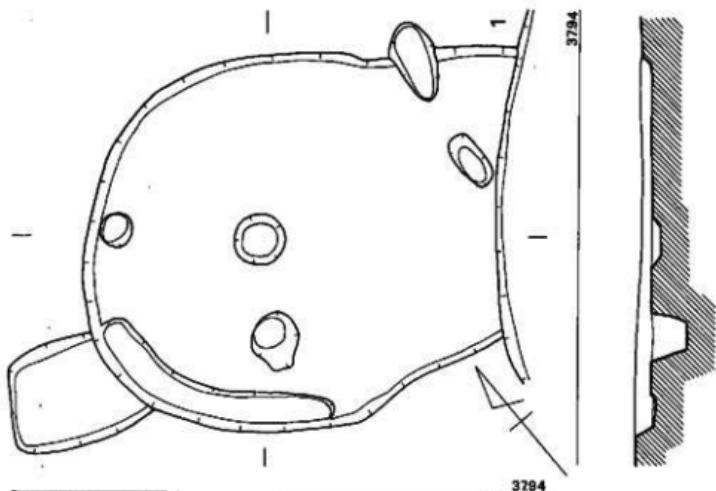
2基の竪穴が検出された。意図不明な遺構である。

1号竪穴（第55図1、図版41-1） 遺構の東側が1号住居跡により削平されている。浅い遺構で幅2.65m、長さ2.9m以上の規模のものである。床面に小ピット南側の壁沿いには浅い溝状の施設がある。遺物は打製石點（4）が出土。土器小片から弥生時代前期に属す。

2号竪穴（第55図2、図版41-2） 溝と重複して検出された。遺構検出作業の段階では、両遺構の埋土が真黒色土で、ほとんど区別がつかず、この竪穴の埋土も溝の一部と考えていた。溝の法面検出時に当遺構の遺存することが解かった。

竪穴は方形プランを呈するものと考えられ、その一角に大型壺を伏せている。その下には長さ1m、幅0.5mの長方形プランを呈す壙を掘っている。壺（229）は南側に傾き口縁が壙内に落ち込んでいるが、本来は壙上面に伏せておられたものであろうか。壺の下胴部は、同一個体と思われる部分（230）が、溝埋土の上層から出土している。残念ながら、土器片の不足からこれらが一つの壺として復原できなかったが、同一個体とするならば、壺の傾きからして、下胴部が溝側にあることから、自然に崩壊したことは解せないことであって、意図的に下胴部を欠き、竪穴内に別途に置いたとする事が考えられ。また、溝の構築によって壙されるというような出土状態ではない。このような状況から、2号竪穴は溝より新しいものと考えられる。

また、当遺構の南東側の近接する位置に小さなピットがあり、ピット内に大型壺片がびっしり詰った状態で発見されている。このような周辺状況をふまえても、当遺構の性格については明確に判断し得ず、大型壺が、同時期の壺棺墓に使用される壺と同じであることから、埋葬遺構かとも考えられるが、熟考の余地が十分ある。遺物は手捏ね土器（24）と土錐（25）がある。



第 55 図 空 洞 実 測 図 (1/40)

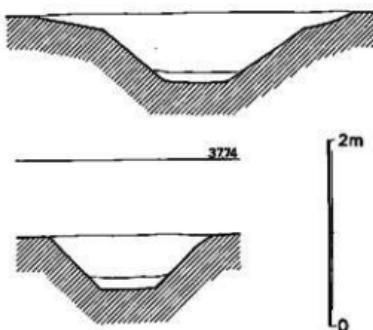
(5) 溝 (付図2, 第56図, 図版41-3)

3724

調査区の西半部において検出された。西端は削平により、東側は調査区外に延びるに全体的にどのように展開するものか不明である。溝は約53mの長さを発掘した。幅は東側が広くなっている。幅は最も広いところで約4.5m, 最小部で約2mである。深さは0.6~0.8mであって、西側に低くなっている。溝の中ほどの南側に重複して不整な掘り込みが検出されたが、これは枝状に分れる小溝の一部と考えられ、調査区外に延びているものと思われる。

溝は、ほぼ東西に台地の縁に沿って構築されている。その北側には住居跡や貯蔵穴群が遺存するが、その南側の造構の有無や内容が不明であり、溝の性格を判断するには、やや論提の薄いところであるが、調査区西半部の溝南側において造構の全くない点から、この溝が、台地の縁に所在する住居跡、貯蔵穴群を防禦あるいは区域を示すものであろうと推察される。

溝内は、薄い砂層が下に堆積し、あるていどの水の流れはあったと考えられる。これを下層とし、その上層に厚く真黒色土が堆積していたが、細かく分層できるものではなく、遺物はこの上下2層に分けて取り上げた。下層に弥生時代前期の土器(233~268)が、上層からは弥生時代中期の土器(269~367)の土器が出土している。その他石製品や土製品がある。



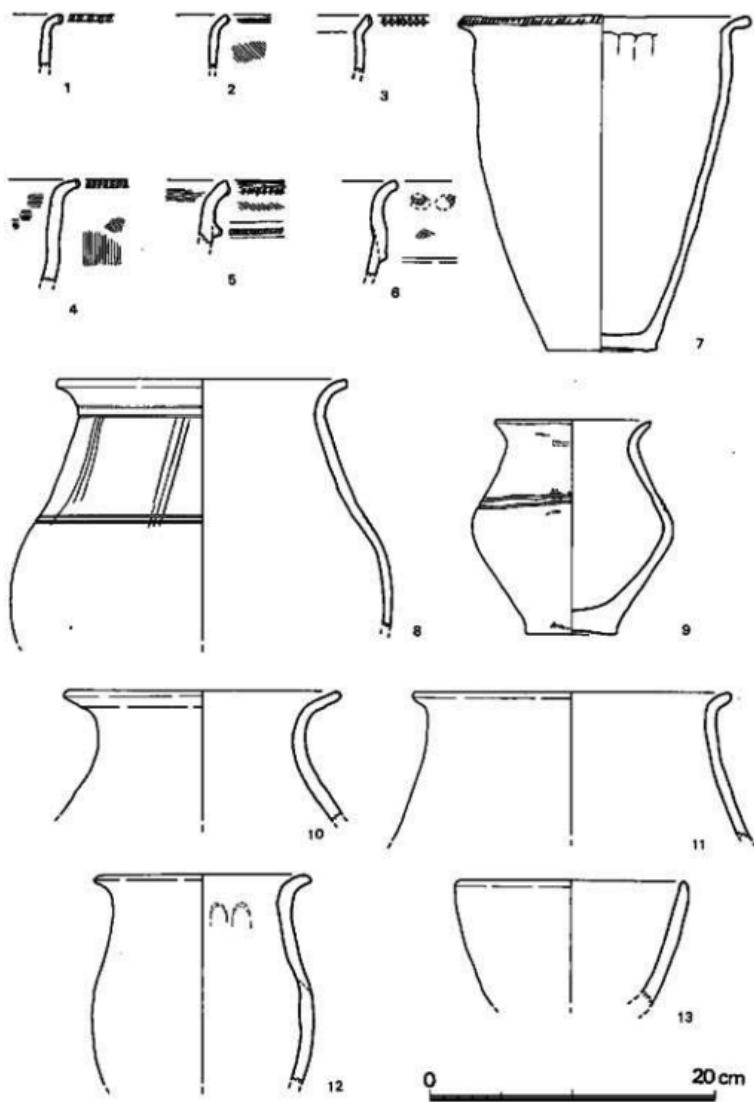
第56図 溝断面図 (1/60)

3. 遺 物

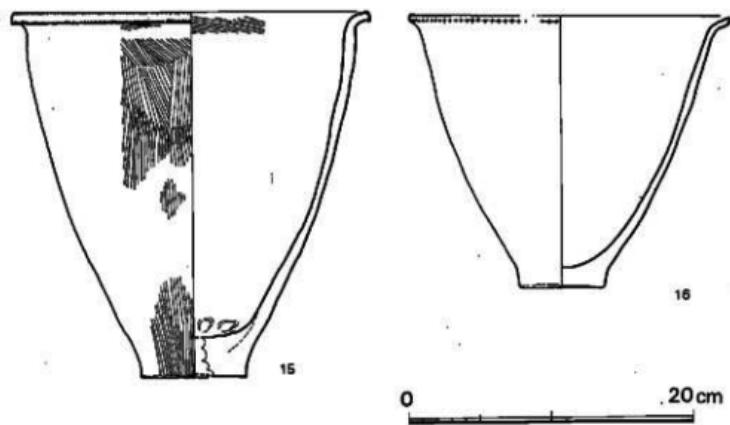
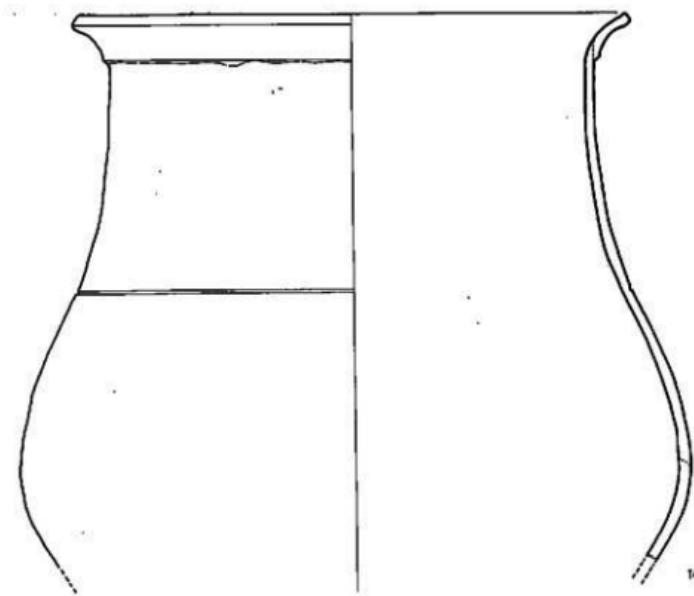
(1) 住居跡出土土器 (第57~60図)

住居跡は4軒が発掘され、大型の2号住居跡から多量の土器の発見があったが、他住居跡の土器は小片で量的に少ない。したがって、2号住居跡出土土器を中心に検討をなすことになる。壺は、如意形口縁をなすものである。11は外反する口縁は短かく、古相を呈するものである。14は口縁下の粘土接合部が肥厚し、段となって残る。整形はヘラミガキになるもので、9のように刷毛目をヘラミガキによって消しているものもある。底部は38のように明瞭で、一見円板貼付け状をなす古式の相を示すものがある。

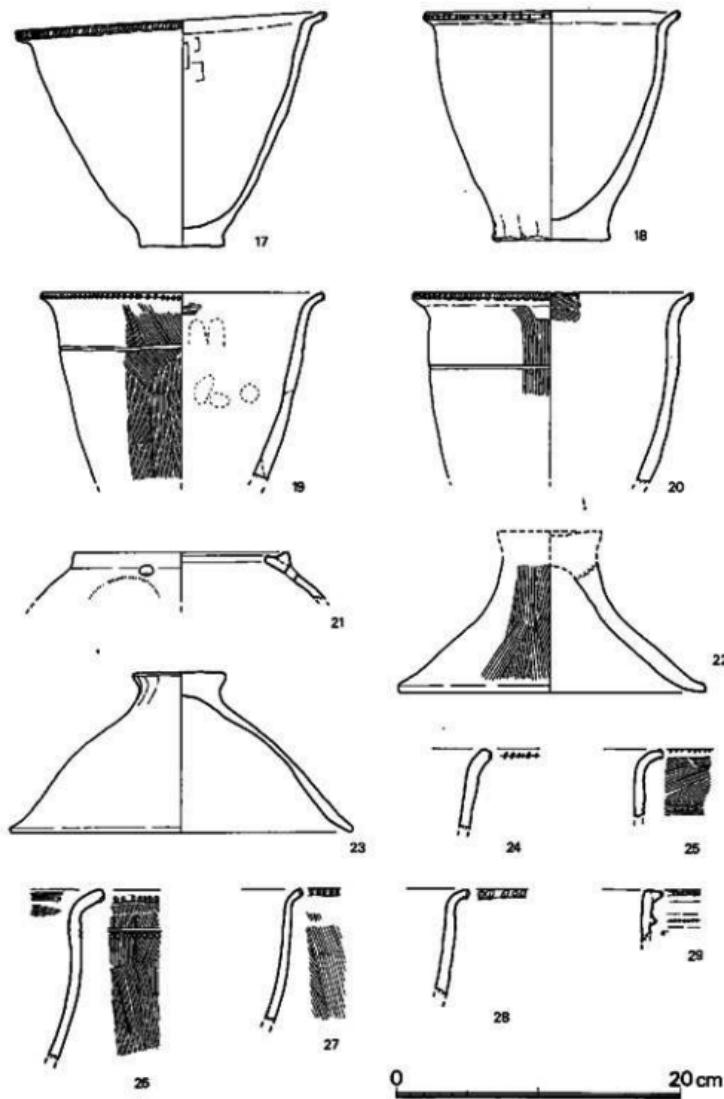
壺は如意形口縁をなすものが多い。中でも3のように口縁下内面に縫をなす特徴あるものが



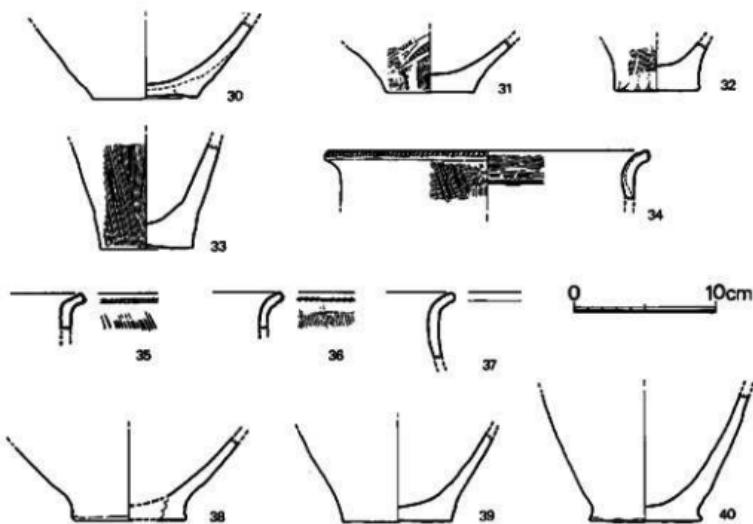
第 57 圖 第 1・2 号住居跡出土土器実測図 (1/4)



第 58 図 第 2 号住居跡出土土器実測図 (1/4)



第 59 図 第 2 号住居跡出土土器実測図 (1/4)



第 60 図 第 3・4 号住居跡出土土器実測図 (1/4)

あり、24のように軽く外反し、直口縁に近い形状のものもある。このほか凝口縁に粘土帯を貼付け口縁部をつくるものがある(29)。いずれも口唇部と突帯に刻目を施すが、箒によるものと刷毛目工具の端部使用のもの(19・26)がある。体部の整形は、大半が刷毛目を施すが、ナデによるもの(24・28)と板状工具による擦過の観察されるものがある。後者は、16・17・18の型で、口径の大きさに比べ胴部のやや短いタイプにみられる整形である。この板状工具の擦過痕は、あるいは刷毛目工具の一端を器面に軽くあて、削ったという状態であって、一つの整形法として追求すべき点である。

文様的には口唇部の刻目のほかに、胴部に沈線をめぐらし、沈線下に刺突文を施すものもある(25・26)。

無頸壺(21)は他に例がなく、溝出土の中期のものがある。凝口縁に断面三角形の突帯を貼付けて口縁部をつくり、口縁下に孔を穿つ。整形は内外面とも横ヘラミガキで、中期のものは、形状や整形に相違を見る。又、貝殻腹縁による弧文を施すが、貝殻利用の文様を施すのはこの土器だけである。

蓋は厚手のもの(22)と薄手のもの(23)がある。前者は刷毛目整形によるもので、後者は内外面ともヘラミガキ整形で、形状と共に製法に相違がみられる。使用方法あるいは対象が異なることが起因しているのであろうか。

以上、住居跡出土の土器について概観したが、所謂板付II式に属するもので、中でも古式に位置するものであろう。

(2) 貯蔵穴出土土器 (第61~73図)

前期の土器

器種的には、壺・甕・蓋が出土しており、甕が圧倒的に多い。

壺は如意形口縁なす。完形品が少なく、その全容は把握しがたい。いずれも内外面をヘラミガキ整形を施し、口縁下あるいは肩部に沈線をめぐらすものもあり、54の小型壺は、計6条の沈線を各部にめぐらし飾りたてている。又、文様的には、肩部に弧文や斜格子文等を範により描くが、斜格子文(147・155)は稀な例であって、土壇から同一個体と思われる様なものが2点(214・216)出土している。底部はその立上りが明瞭であるが、56のように中期的な様相をみせるものもある。

無頸甕は2点の出土している(75・202)。やや異なる形状を見せるが、いずれもヘラミガキ整形をなし、202は筆描きの弧文を施す。

甕は、口縁部が如意形を呈すもの、粘土帯を貼付け口縁部をつくるものがある。又、前者には口唇部の薄くなるものや厚くなるものがある。後者は、貼付け粘土帯の断面が、三角形のものと円形状のものとに分けられるが、円形状のものは1点のみ(159)である。43・44・177などは古式の様相を呈すものである。如意形口縁を示すもので、口縁下の粘土接合部が肥厚するものや口縁下内面に棱を有すものもある。

口唇部あるいは突唇に刻目を施すのが通例であって、そうでないものも若干ある。刻目は範によるものであるが、中には刷毛目工具によるものと考えられるものがあり(83・85)。刻目自体には、細小なものや細長いものと太いものなど種々ある。

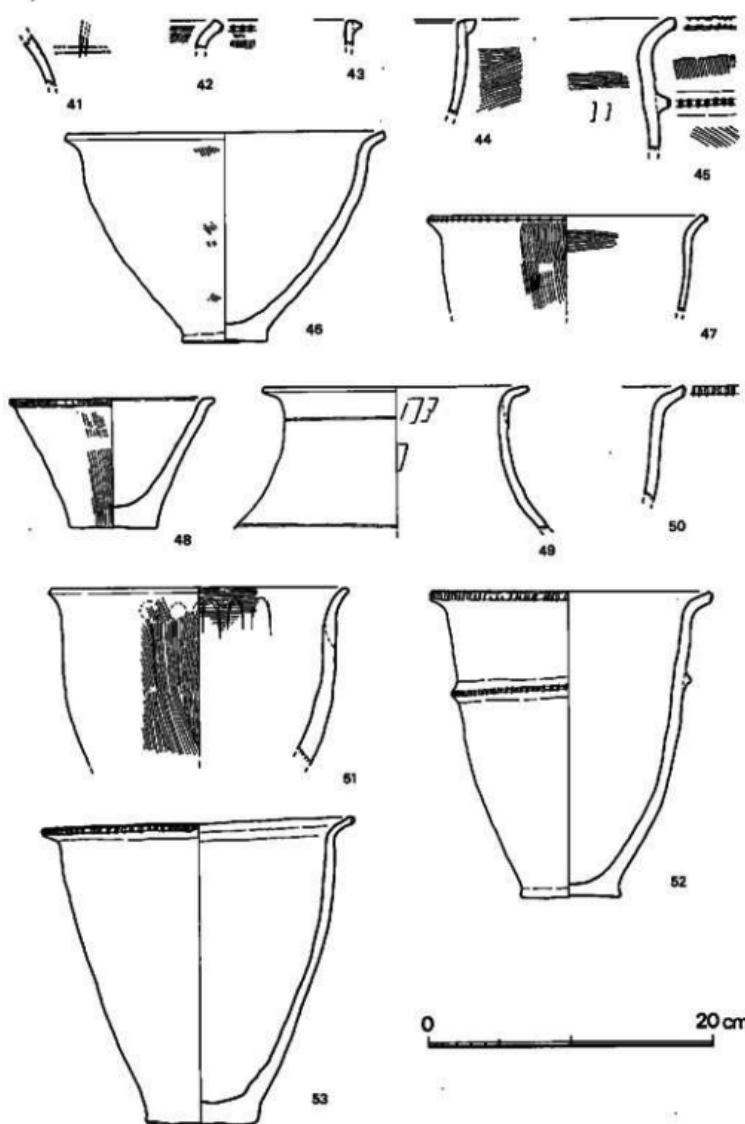
体部の整形は刷毛目によるものが多いが、板状工具による擦過痕が見られるもの(52・110・140・141・157・169~171)や丁寧なナデによるものもある(53・111・176)。また、口縁下内面に刷毛目を施すものがあり、胴部内面に刷毛目を施すものは極めて少ない(110・111)。

68の甕はやや特異な形状を呈すものである。

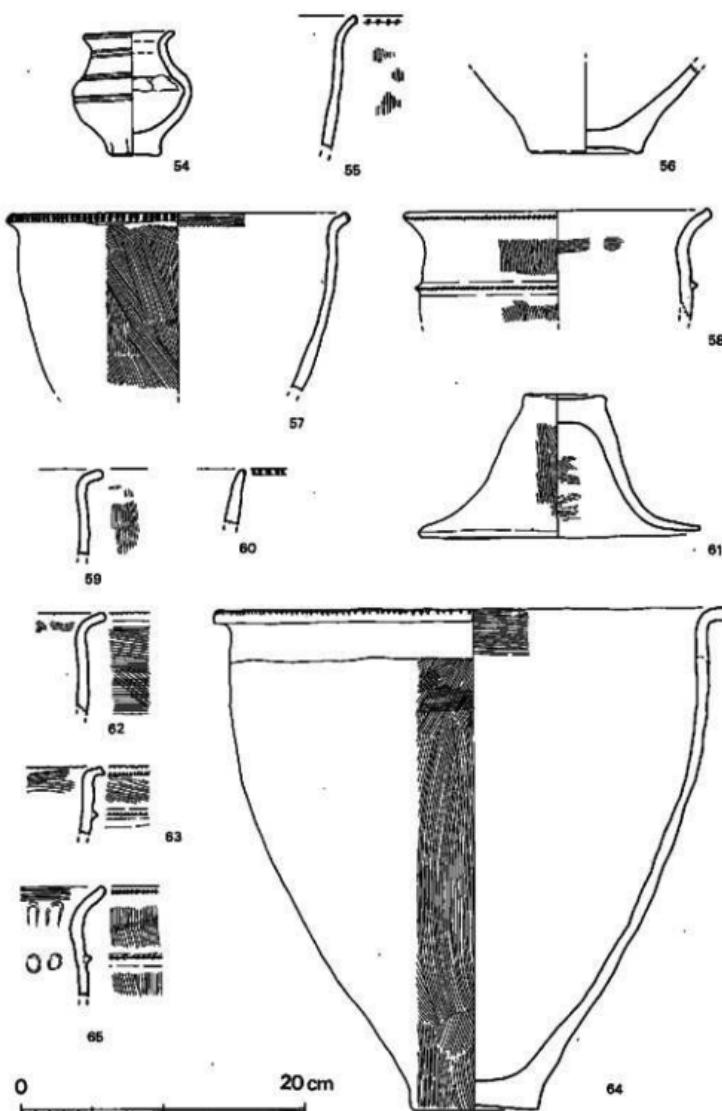
鉢は46・48・177がある。48は蓋形土器の可能性が強い土器である。46・177は如意形口縁をなし、いずれもヘラミガキ整形である。前者は刷毛目を消している。48は体部が直線的で、整形も刷毛目で明らかに前二者とは異なる。又は46と共に、形態的に異なり蓋としてあつかうのが妥当であろう。

蓋は48・61・98・150の4例がある。48・61は天井部が大きく平坦である。150の天井部はやや高くなり掘み状をなす。98は小片であるが、内外面ともヘラミガキ整形を施すもので、他とはやや形態の異なるものであろう。

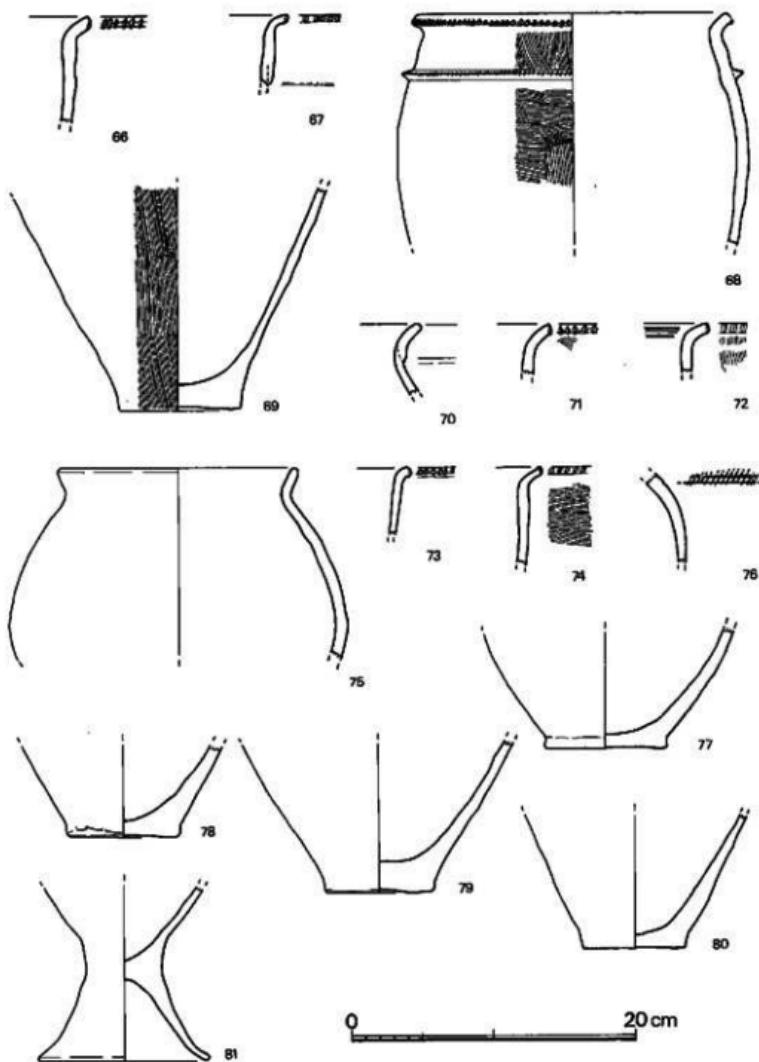
中期の土器



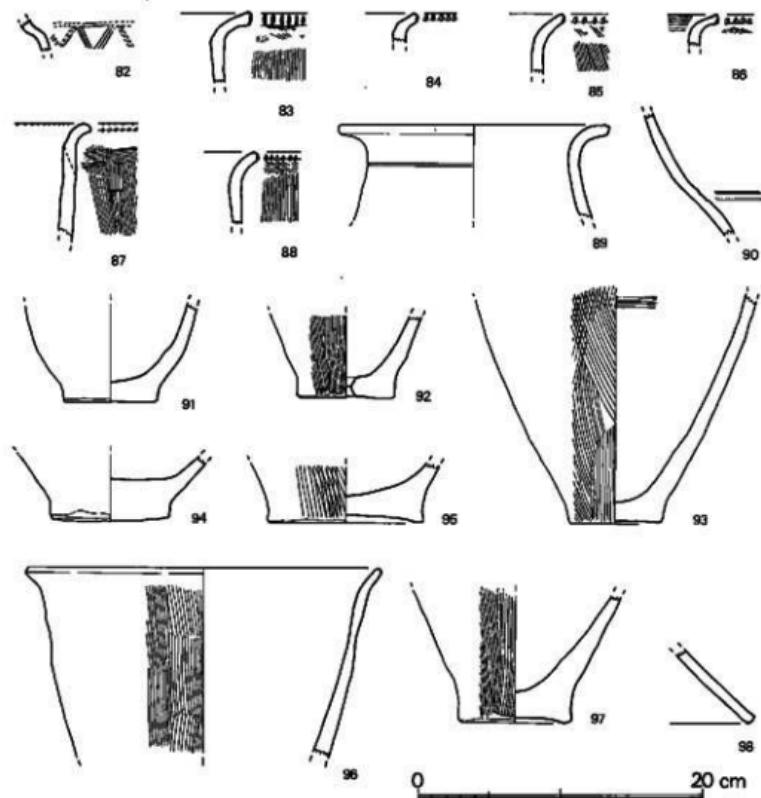
第 61 図 第1・2・4・9号貯藏穴出土土器実測図 (1/4)



第62圖 第10・12号窯遺穴出土土器実測図 (1/4)



第 63 圖 第 16・17・19 號貯藏穴出土土器実測図 (1/4)



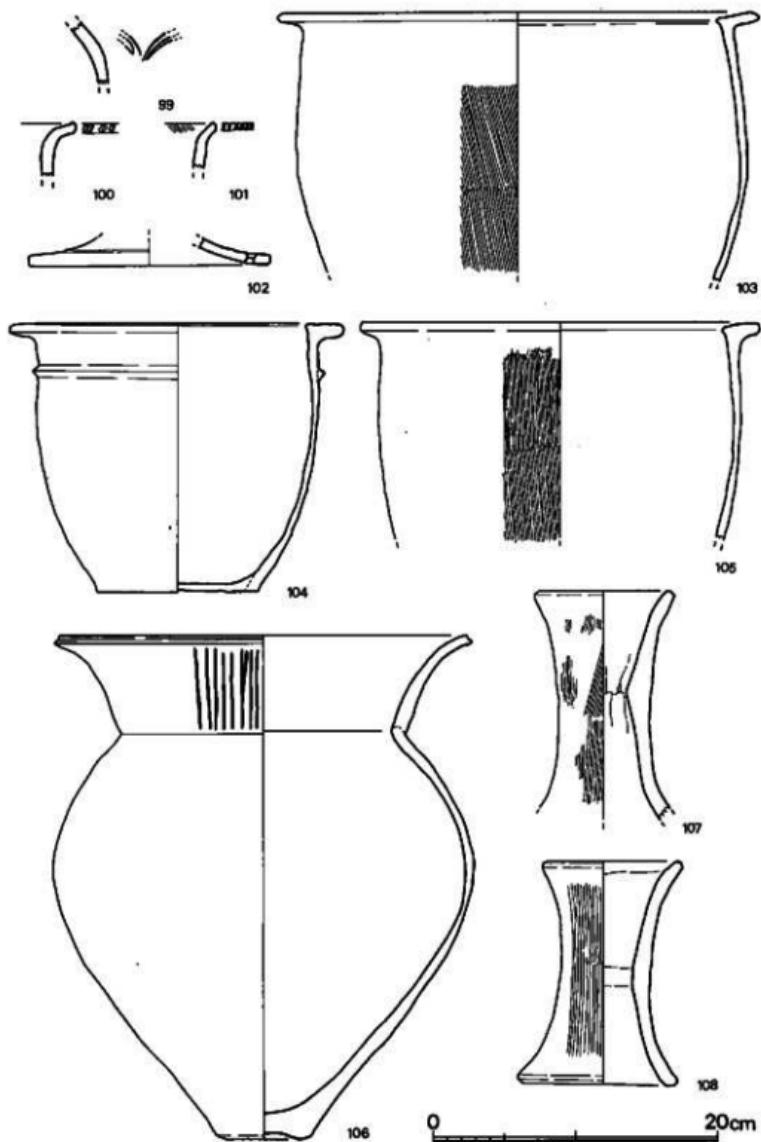
第 64 図 第20~25号貯藏穴出土土器実測図 (1/4)

器種は壺・甕・鉢・蓋・器台があり、甕が非常に多い。27・30・46号貯藏穴から出土。

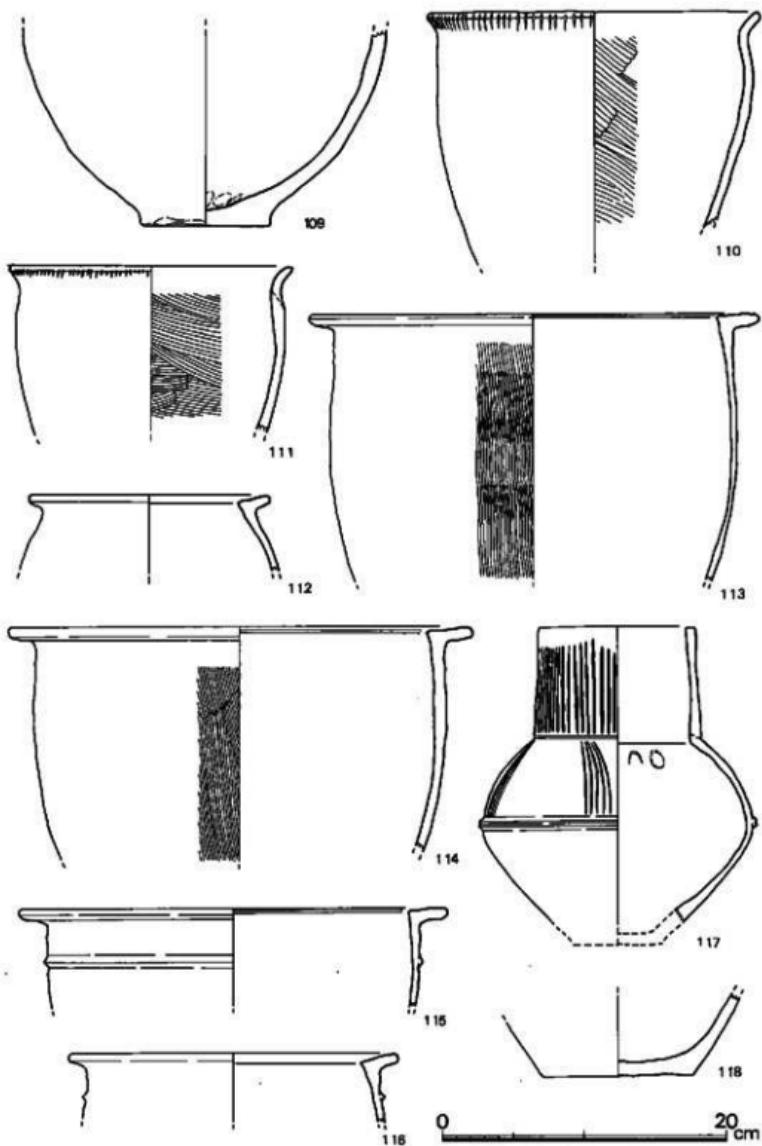
壺は106・117・189の3点ある。大きさや形状に差異があるものの、器面の調整はミガキとナデを施し、丁寧な仕上げである。106・117は頸部に範描きの暗文を施している。溝出土の土器と比較して、両者とも同時期の所産になるものであろう。117は肩部に範描の細い条線を施し、これも溝出土の壺形土器に共通するところである。

189は鉢形口縁をなし、溝出土の土器に多くみられる土器である。

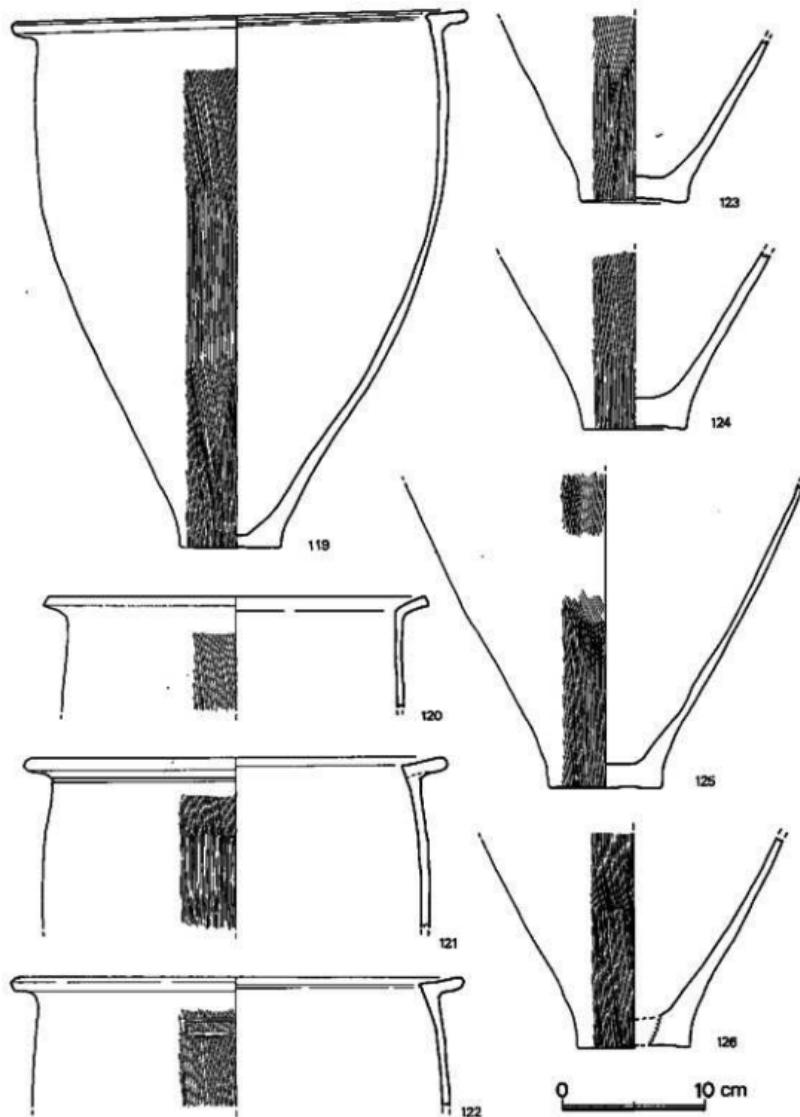
無頸壺(112)は、内傾する平坦口縁をなすもので、内側に明瞭な稜がつく。溝出土のもののように口縁部に孔はない。



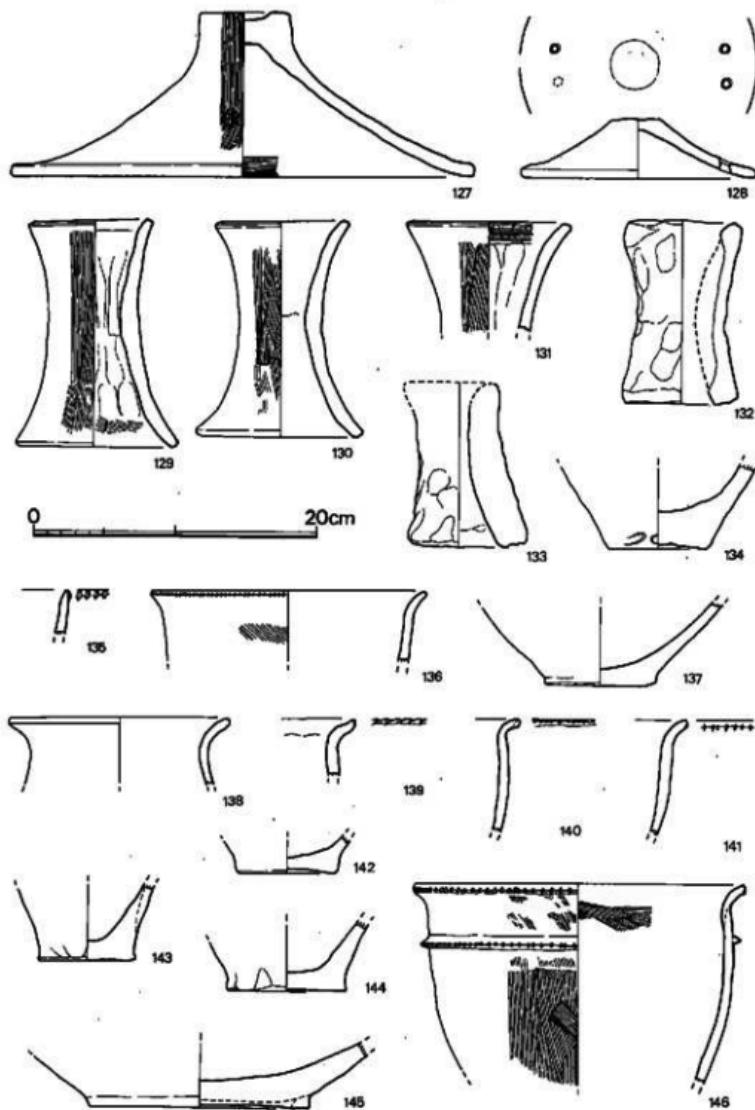
第 65 図 第27・28号貯藏穴出土土器実測図 (1/4)



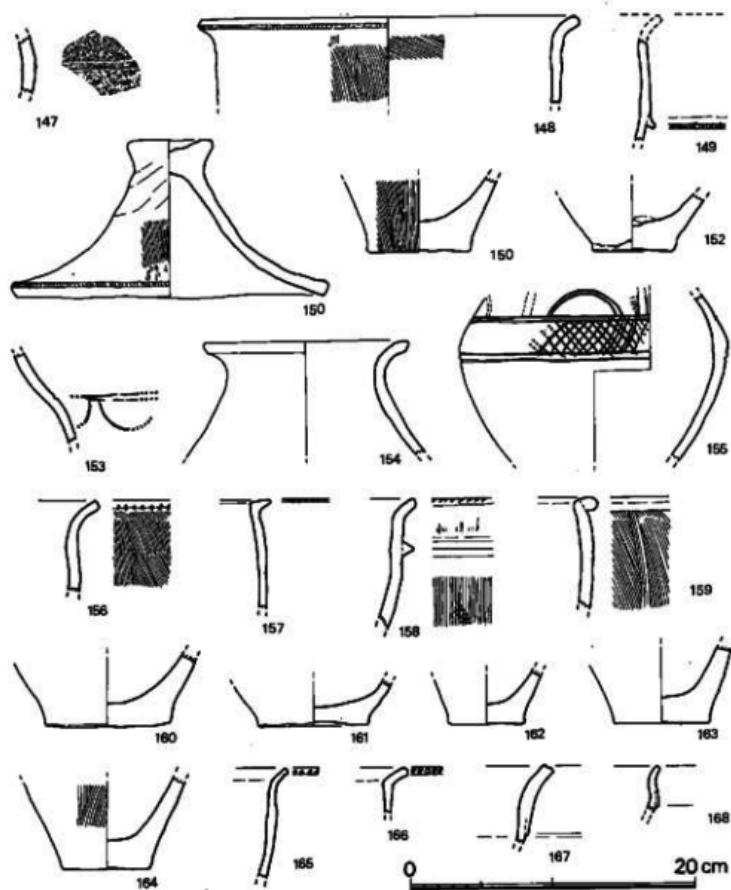
第 66 圖 第29・30号貯藏室出土土器実測図 (1/4)



第 67 図 第30号貯藏穴出土土器実測図 (1/4)



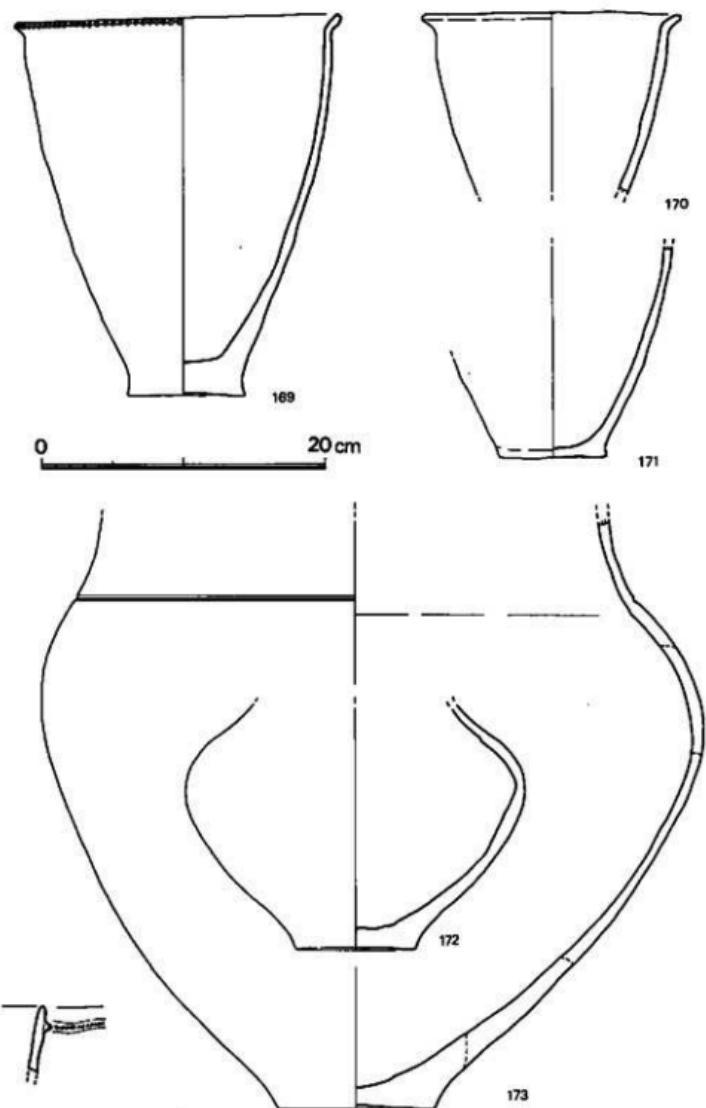
第 68 圖 第30~32・34号貯藏穴出土土器実測図 (1/4)



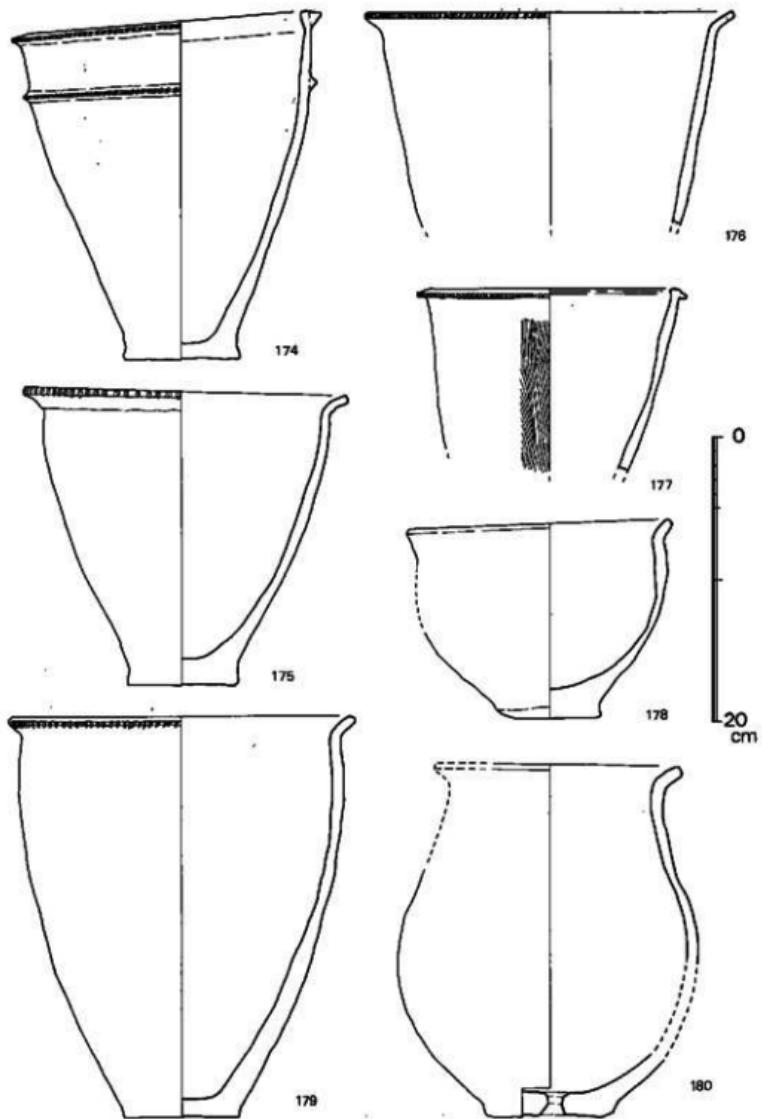
第69図 第35・36・38~40号貯藏穴出土土器実測図 (1/4)

壺は逆L字状口縁をなすものが主体である。口縁平坦面が内傾するものとそうでないものがあり、前者には口縁下に突帯をめぐらすものがある。120の口縁は如意形口縁に近似するもので、口縁下内面に稜を有し、他とはやや異なるものであり、逆L字口縁より古いタイプのものであろう。全体に胴の張りはなく細身の形状をなし、底部は薄く平底である。胴部外面は刷毛目整形をなすのが通常である。

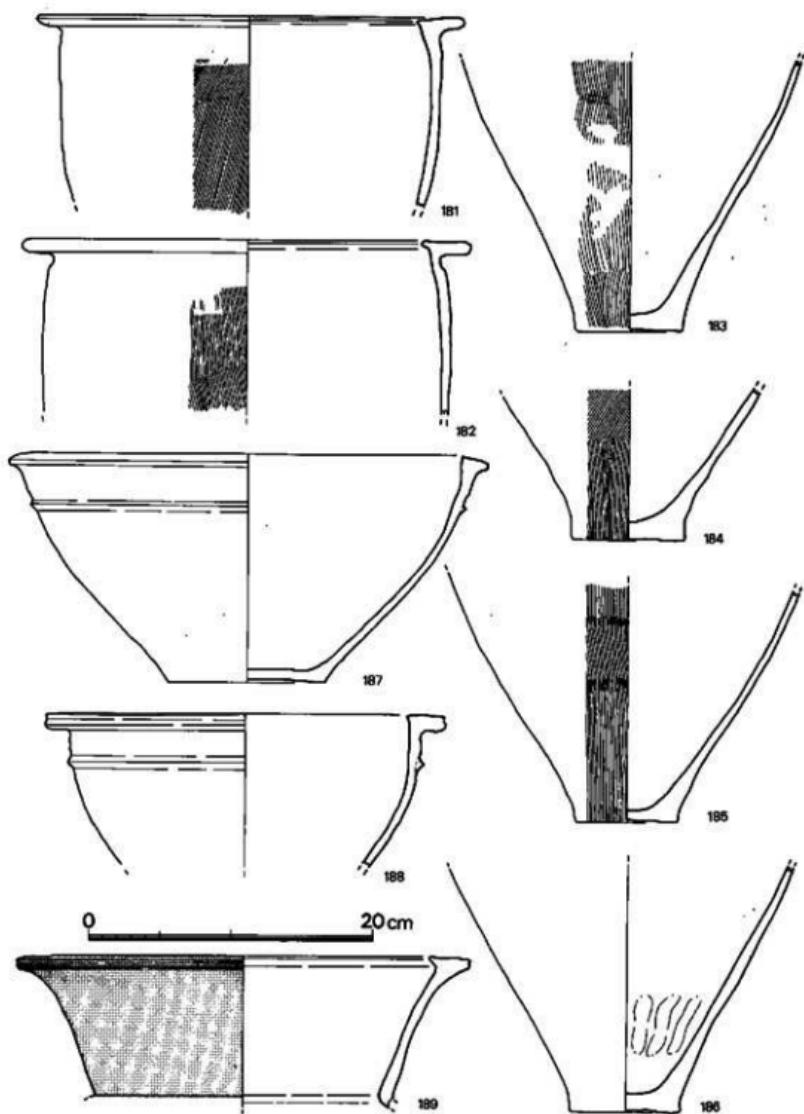
104は壺の中でも短胴のもので、118はこの種の壺の底部であろう。前者は板状工具の擦過



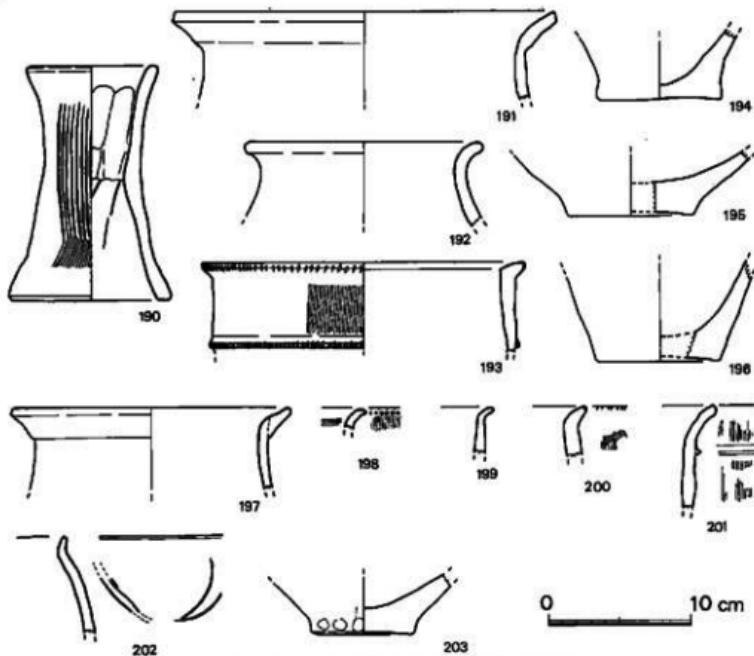
第 70 図 第43・44号貯藏穴出土土器実測図 (1/4)



第 71 圖 第44·45號貯藏穴出土土器實測圖 (1/4)



第72圖 第46号貯藏穴出土土器実測図 (1/4)



第 73 図 第46~48号貯蔵穴出土土器実測図 (1/4)

痕が整形痕としてみられ、後者はハラミガキ整形で、いわゆる変とは異なる整形を施している。

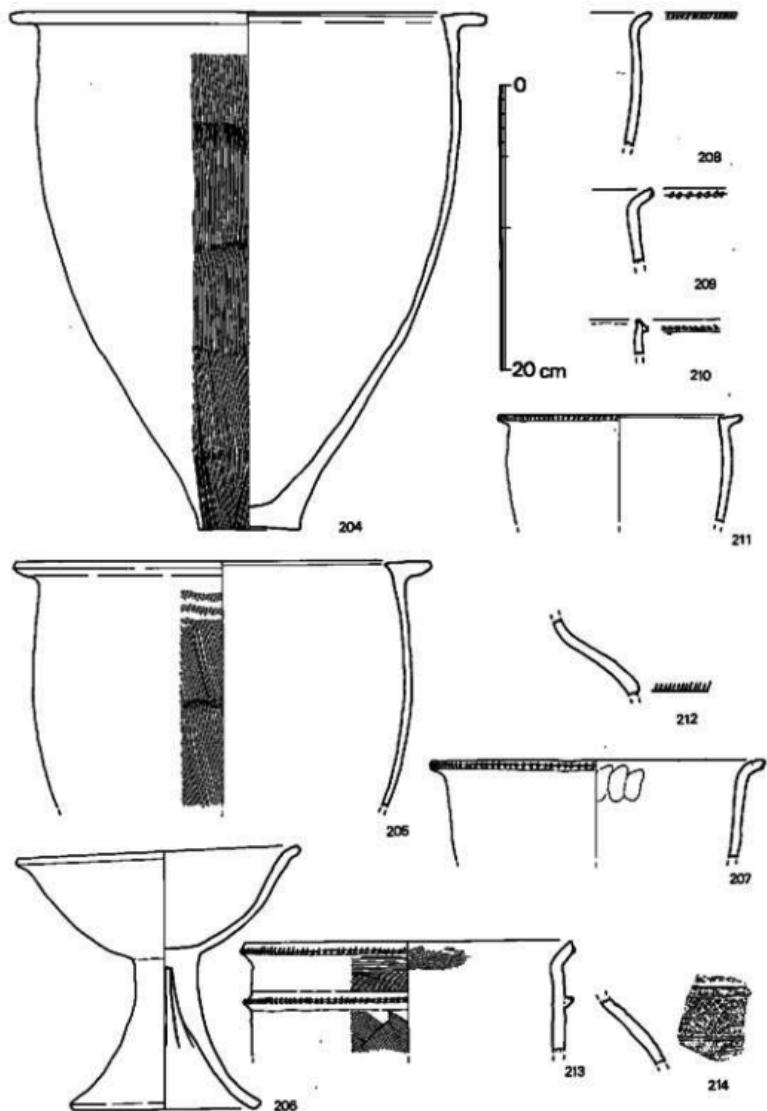
鉢は187・188の2例がある。口縁部に相違を見るが、両者とも口縁下に突帯をめぐらし、体部の整形はナデによるものである。

蓋は小型のもの(102・128)と大型のもの(127)がある。前者は孔を穿つもので、102はハラミガキ整形である。無頸蓋の蓋になるものであろう。127は天井部の形状が前期のものとはやや異なる。

器台は、薄手と厚手の2種がある。薄手のものは、外面に刷毛目を施し作りが丁寧である。厚手のものは、粗いハラケズリ後にナデ整形を施す。全体に作りは雑である。同時期のものである。

以上、貯蔵穴出土の土器を前期・中期に分けて概観した。詳しくは觀察表に記すところであるが、前期の土器の中には古い様相を残すものもあり、いわゆる板付Ⅱ式の中でも古い時期のものであろう。

中期の土器については、前半期に位置し中葉に近い時期のものである。



第 74 図 第 2 ~ 5 号土壙出土土器実測図 (1/4)

(3) 土壌出土の土器 (第74~76図)

土壌から出土の土器は量的に少ないが、前期・中期に分けることができる。

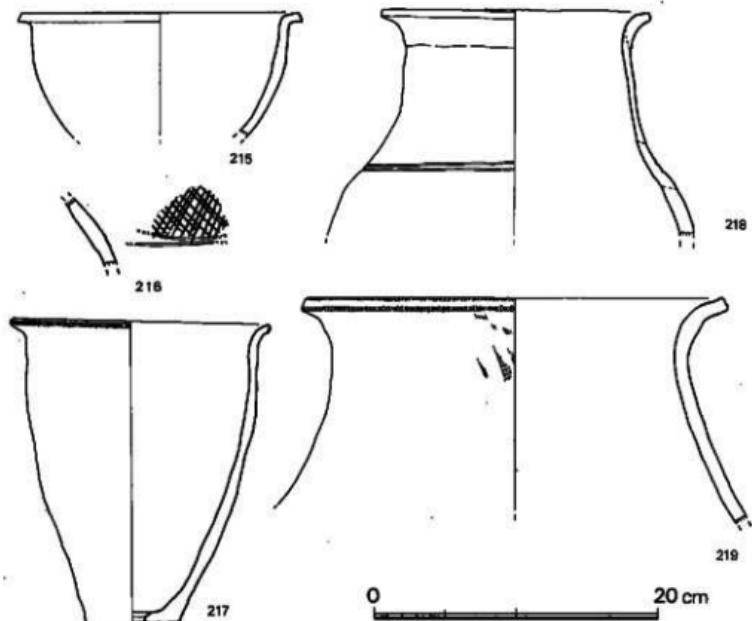
前期の土器

壺は如意形口縁をなす。223は口縁部が肥厚し、218は口縁下に粘土接合部が肥厚し段となつて残る。219は口唇部に細い刻目を施すものである。いずれもヘラミガキ整形である。214・215は肩部に筆描きの斜格子文を施す。底部 (227・228) は、中央部がやや上げ底氣味である。

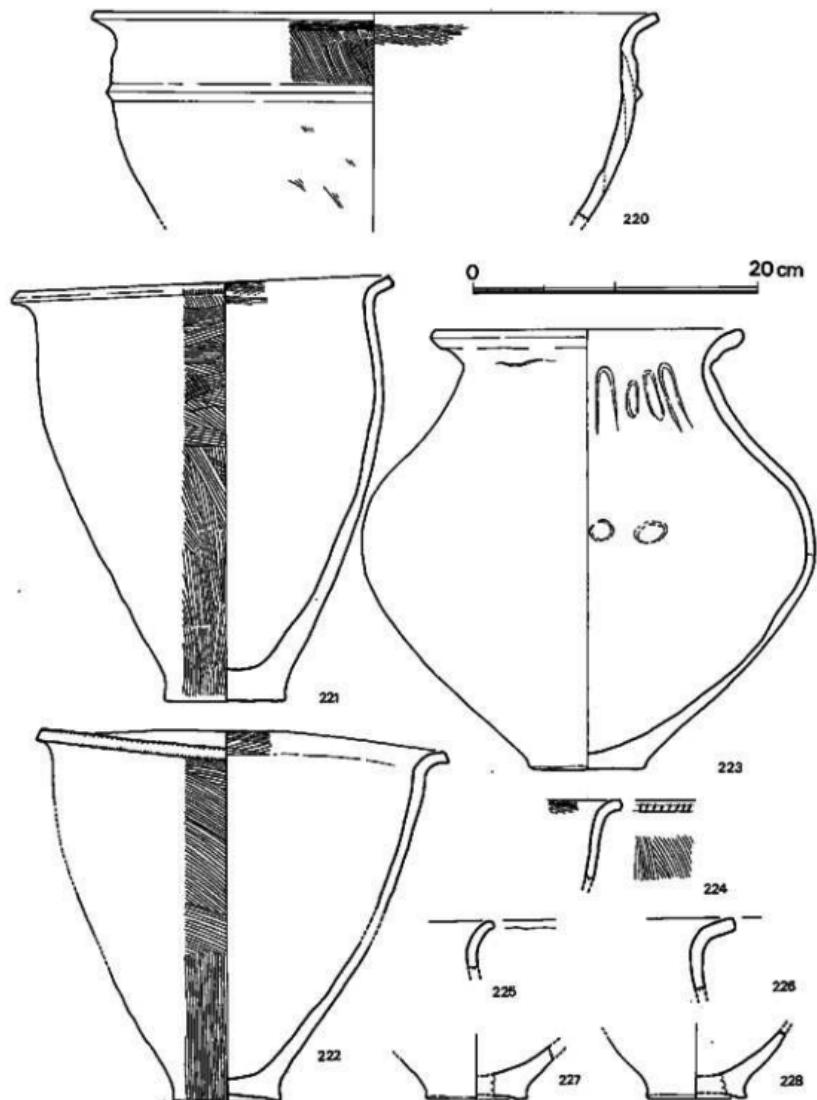
壺は、如意形口縁をなすもの (207~209・213・217・221・222・224)、平坦口縁をなすもの (211) と粘土帯を貼付けたもの (210) に分けることができる。いずれも口唇部に刻目を施す。210 は古式の様相を呈すものである。

胴部の整形は、外面に刷毛目か、板状工具による軽いケズリをなすものがあり、221・222は内面を板状工具による軽いケズリ整形でその痕跡がみられる。

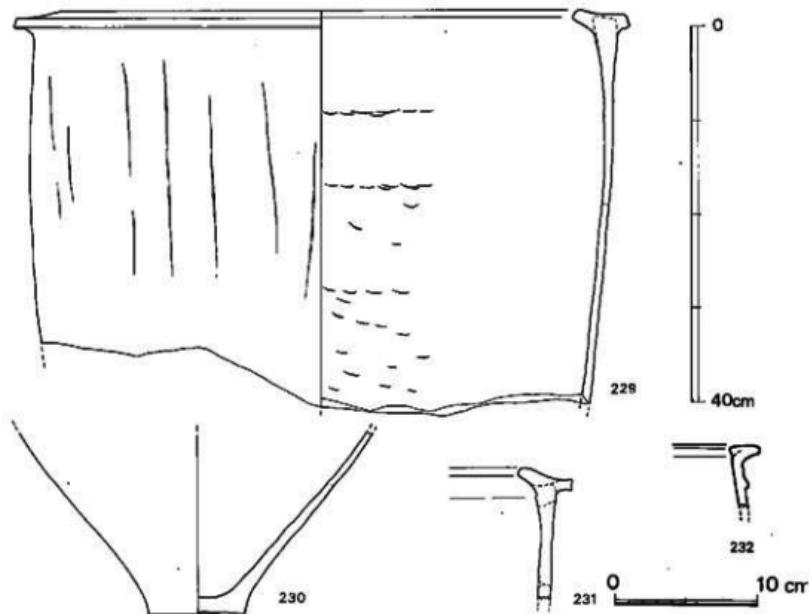
鉢は 215・220 がある。220 は如意形口縁をなし、体部の器壁に比して薄くなっている。胴上部に断面三角形の突帯をめぐらす。



第 75 図 第 6・9 号土壌出土土器実測図 (1/4)



第 76 図 第11・12号土塙出土土器実測図 (1/4)



第77図 第2号窯穴、溝出土土器実測図（1/6・1/4）。

中期の土器

壺は平坦口縁をなし、205の口縁部は厚く短い。内側にやや突出する。いずれも肩部には細い刷毛目を施すもので、全体に細身の胴部となっている。

高壺(206)は、折部口縁が軽く外反するもので、平坦口縁をなすものではなく、全体に深みのある壺部で、脚は短いものである。器面の調整はヘラミガキによるものである。

以上、前・中期の土器は、貯蔵穴や溝出土の土器群と時期的な差はない。前期の土器は、板付II式に属し、中期のものはその前半に置かれるものであろう。中期の高壺(206)は、小都市花崗造跡出土例に類似するもので、中期前半の変形土器を伴っていた。

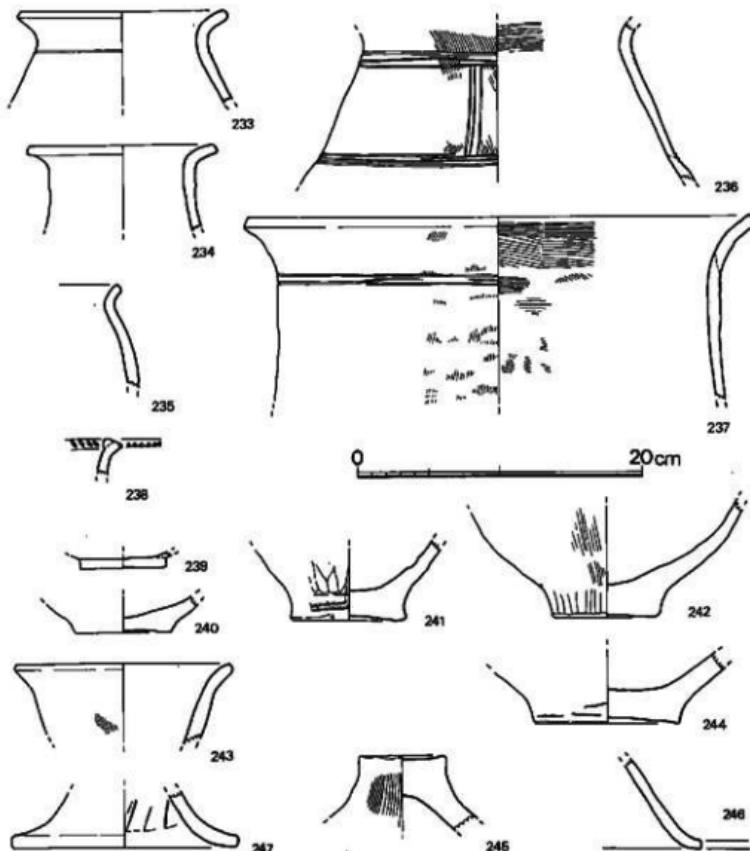
(4) 溝出土土器

台地先端を区切る如く掘削される大溝は、更に連続する造跡全体の調査に及ばないために、その性格は今ひとつ明確にならない。溝最下層には、厚さ10cm程度の酸化鉄で固まりかけた砂層がみられ、その中には弥生前期の造物が含まれていた。これらは、全て小片で、周辺の同時期造構（住居跡・貯蔵穴・土壤）の造物片が溝掘削当初の流水により砂層に混入したものと

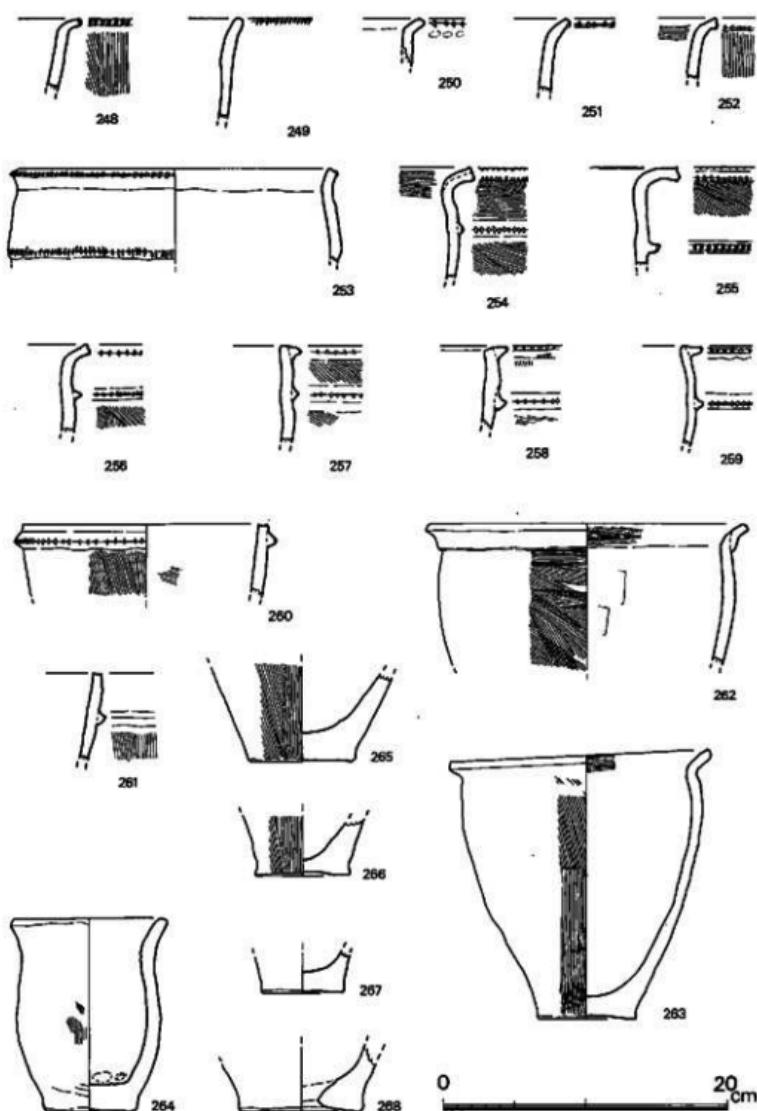
考えられる。上・中層は溝埋没中途に大量に投棄せられた中期前半土器が多量にみられる。これらのことから、溝掘削の時期は、弥生中期前半の中でもより古式の段階であったと考えられる。

溝下層出土土器（第78・79図）

壺は、如意形口縁のもの（248～256）、亀の甲タイプのもの（257～259）などがある。刻目を口唇部全面に施す板付I式に近いもの（248）もあり、胴上位外面に段をつくり、刻目を施すもの（253）等もある。口縁下やや下がって三角凸帯を付けるもの（260・261）は、東九州の下



第78図 溝下層出土土器実測図1 (1/4)



第 79 図 池下層出土土器実測図 2 (1/4)

域式の影響が考えられる。口縁外面下端を肥厚させ段をつくる、壺様の技法をみせる類（262）もみられる。

壺は、円盤貼付の精製小壺（239）等の古いもの、壺棺にも使用され得る大型のもの（236・237）などがある。235 は内外面ヘラ磨きを行ない壺的調整をみせる。238 は内側へ肥厚させた口縁の内外両端に刻目を施す特殊なもので前期末に近い。

蓋は、貯蔵穴出土品等と同類で、脚部と思われるもの（247）もあるが全形は明確でない。

以上の溝下層出土土器の他に石鐵等の石器類もみられるが、これらは後で記す。既述した如く、溝下層の遺物は混入品であり、前期の板付Ⅰ式に近いものから、板付Ⅱ式を中心とした後半期のものまで幅がみられる。

溝上層出土土器（第80～89図）

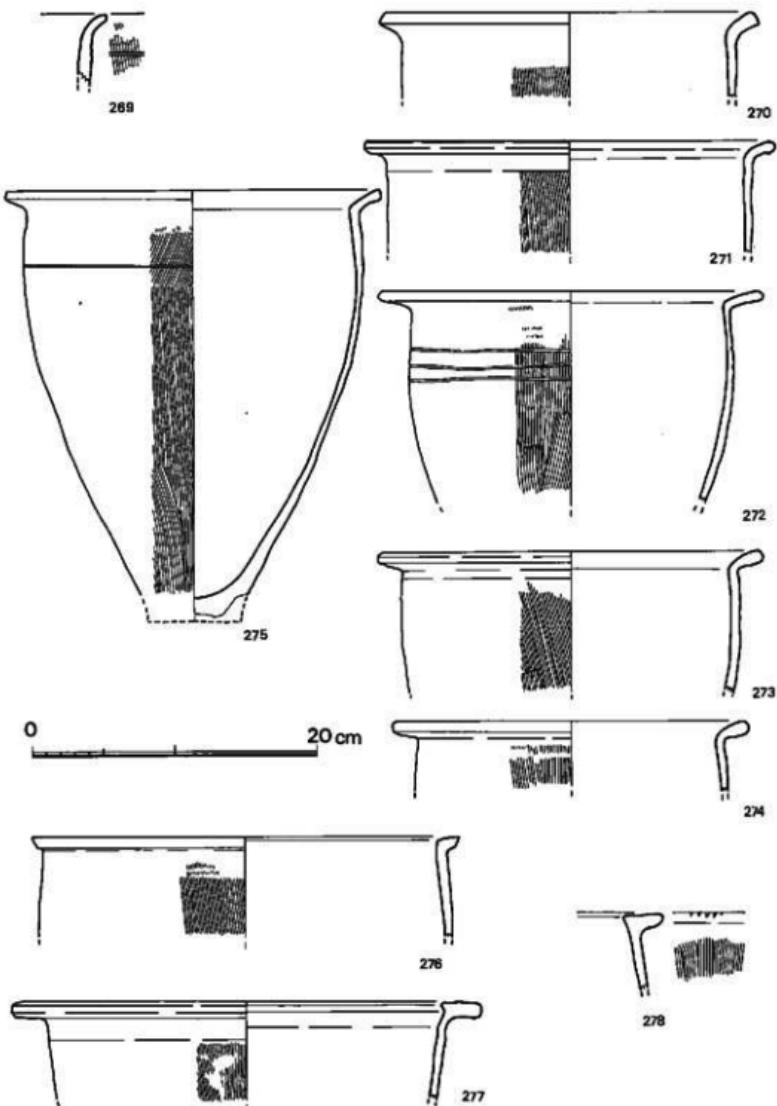
壺は、大きく 3 類に分けられる。如意形口縁の系統を残す中期前半の初頭に近いもの（270～275）、逆し字口縁で内端の突出が少なく上面幅もより狭く中期前葉の様相をみせるもの（276～292）、口縁内端の突出がやや強くなり、胴が張ってきて、凸帯を付けるものが多く、口唇状凸帯を付けるものも現われる中期中葉により近くなるもの（293～297）等である。後者 2 つの類は厳密に分け難いものも多い。

269 は如意形口縁の中前期初頭のもの、272・275 は沈線を残すものである。276 は口縁端をヘラ切りした特殊なもので、形態的には二丈町曲り田遺跡で夜臼式と共に伴するものの系譜を引くものである。逆し字口縁のものも、278 のように部分的に刻目を施すもの、沈線を巡らすもの（279）のようにより古い様相を残す類もみられる。また、304 のような胴の張るものもある。底部は充実して大きく上げ底となるものは無いが、306・307 のような前期的な上げ底状のものもみられる。

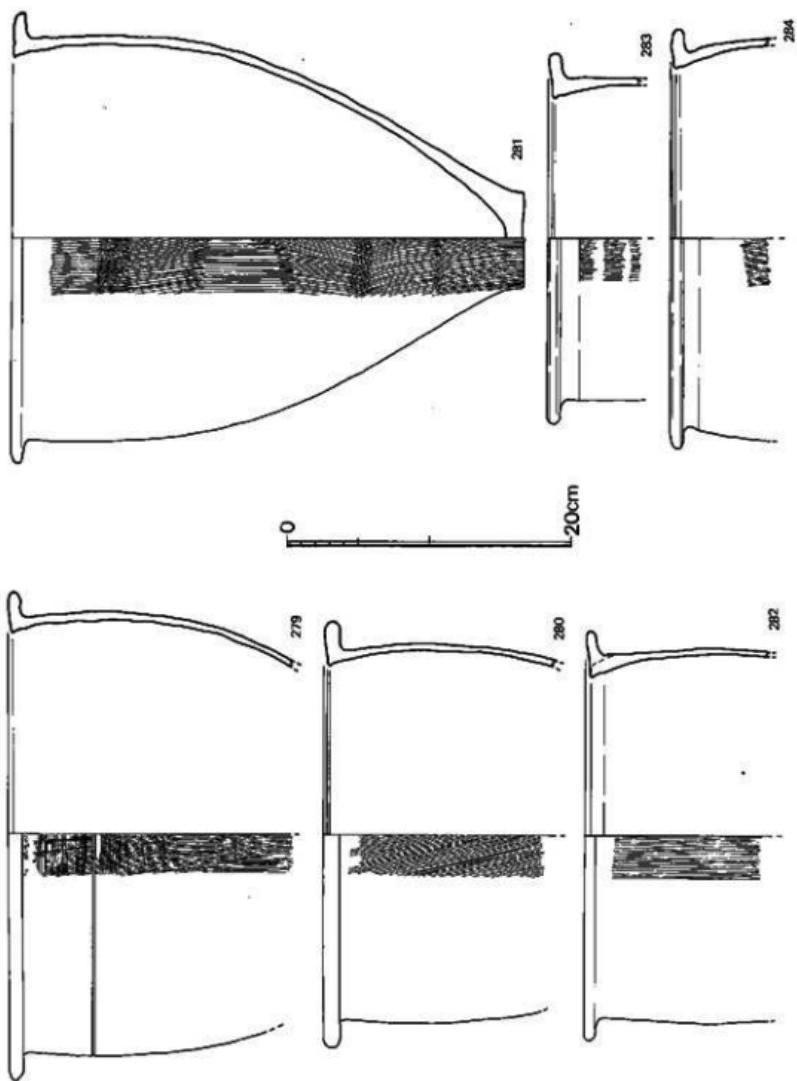
広い底の樽形をなす壺（298～300）は、内外面ヘラ磨きするものが多く用途も異なると考える。調整からみて 301～303 もこの類であろう。口縁形態から、298→299→301→302・303 の変化が考えられる。

大型の壺口縁（309～311）は逆し字口縁のものと胴の張るものがみられ、中期前葉のもので、2 号竪穴の例などからも、近隣に壺棺墓地の存在が推定されるところである。

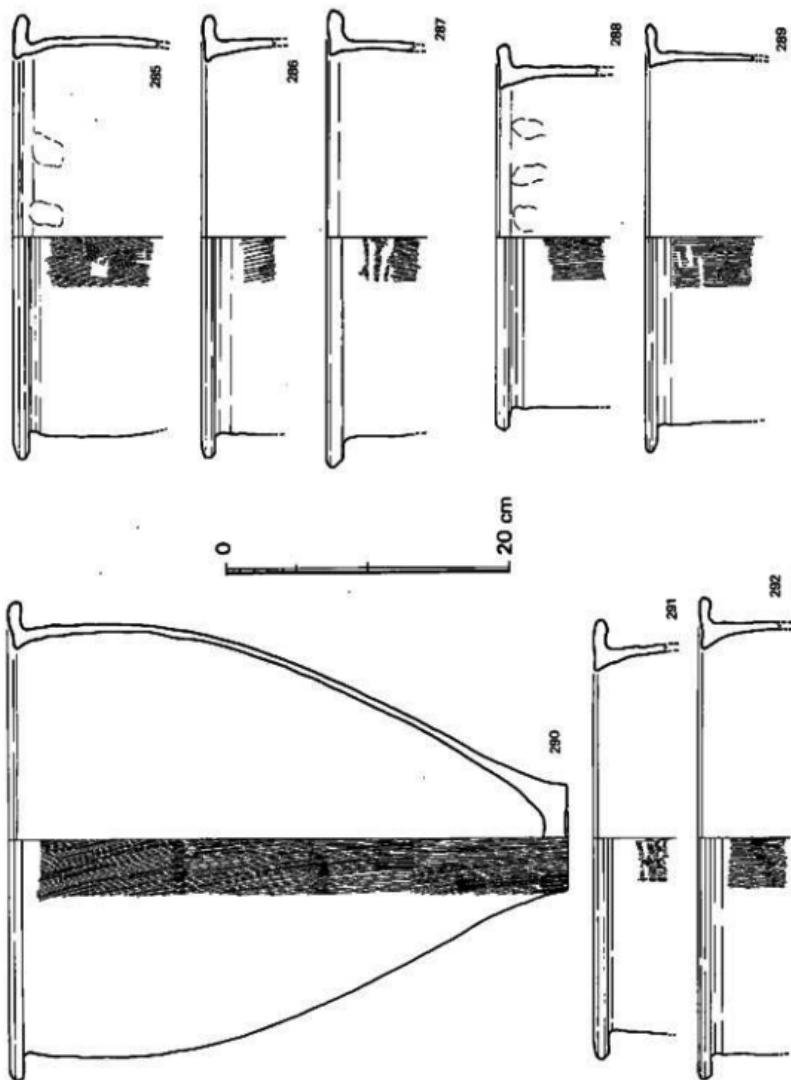
壺は 313 のような口縁肥厚して中期初頭の様相に近いもの他は、大別して鋤先状口縁となるものと、それをつくらずラッパ状の開口壺となるものがある。前者は頸部に暗文を施すものは 317 のみでこれも難に施すものであり、また黒塗りするもの（316・319）もみられ、後者の丹塗りと好対称を示す。鋤先口縁とならない開口壺は、323 のようなまばらな暗文で口縁端が曲がるより古相を示すものから、325 の類、更に間隔を置いて束状に暗文を施すもの（326・327・331）、全面に暗文を施すもの（334・335）などもみられる。332 のような口唇状凸帯を付け胴上半に縱沈線を施す特徴は、30 号貯蔵穴で特殊な直口壺にもみられ、共伴する壺類をみ



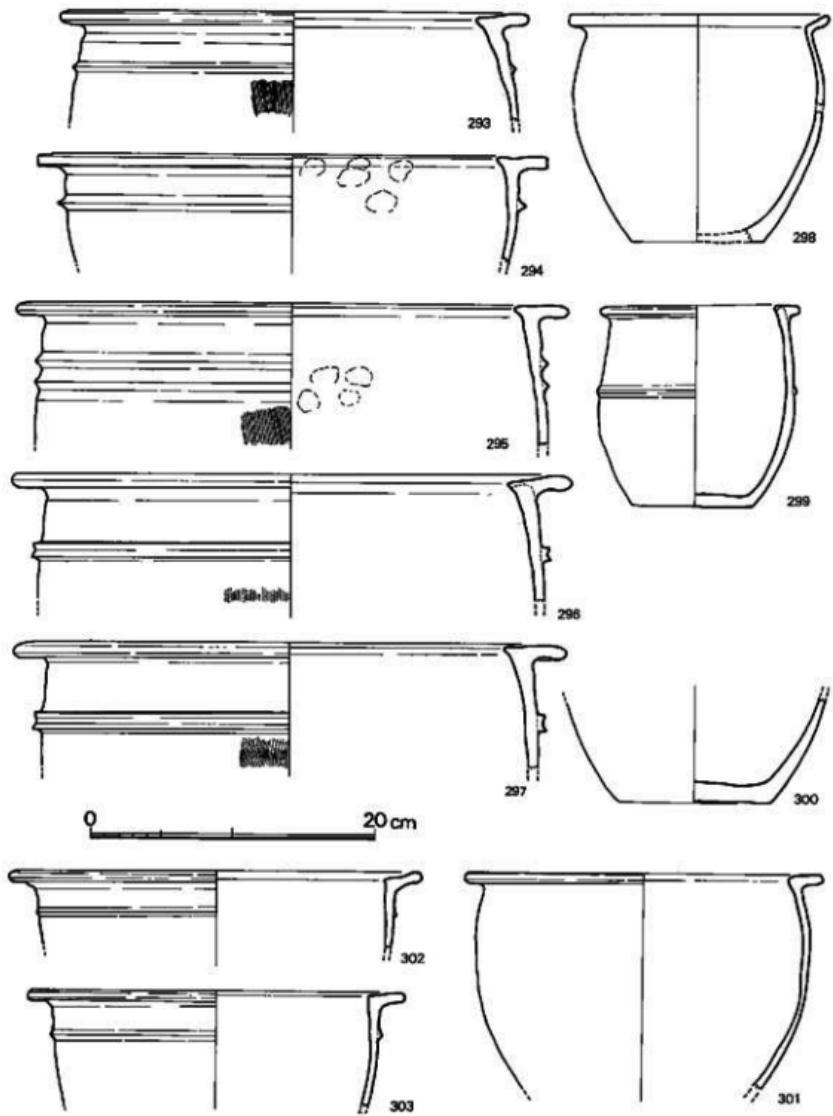
第 80 図 溝上層出土土器実測図 1 (1/4)



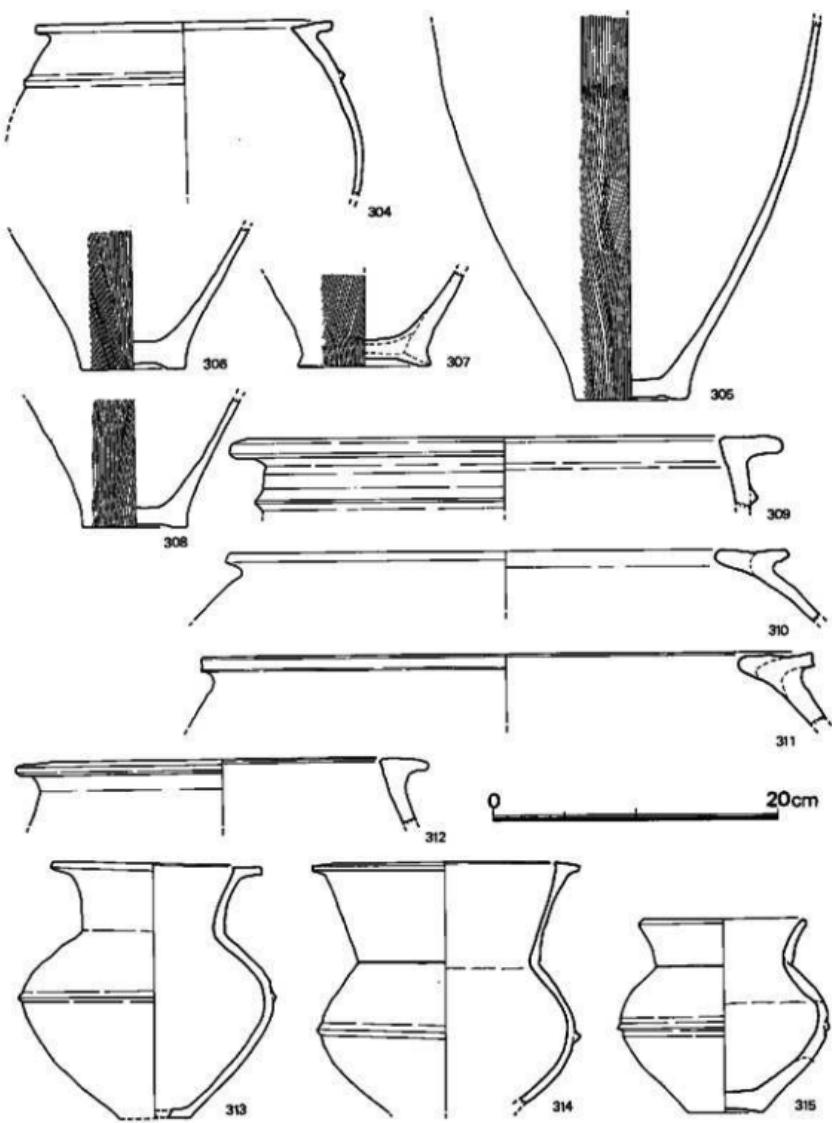
第 81 圖 溝上層出土土器實測圖 2 (1/4)



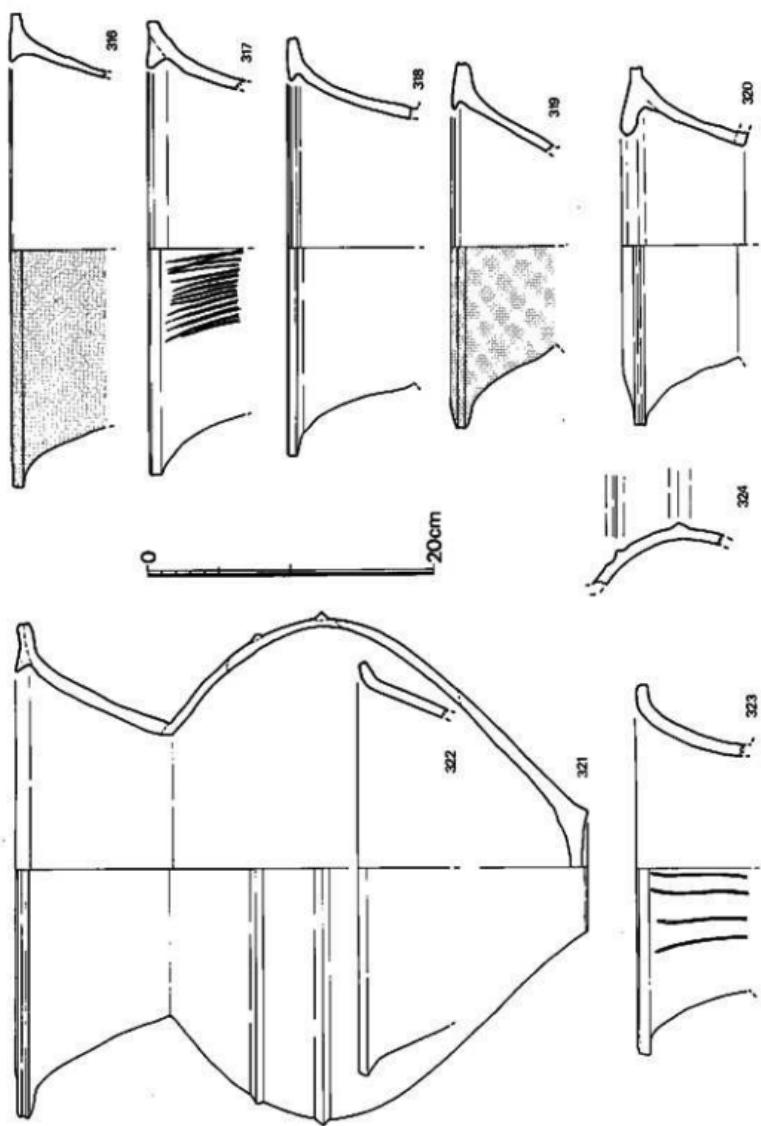
第 82 図 海上層出土土器実測図 3 (1/4)



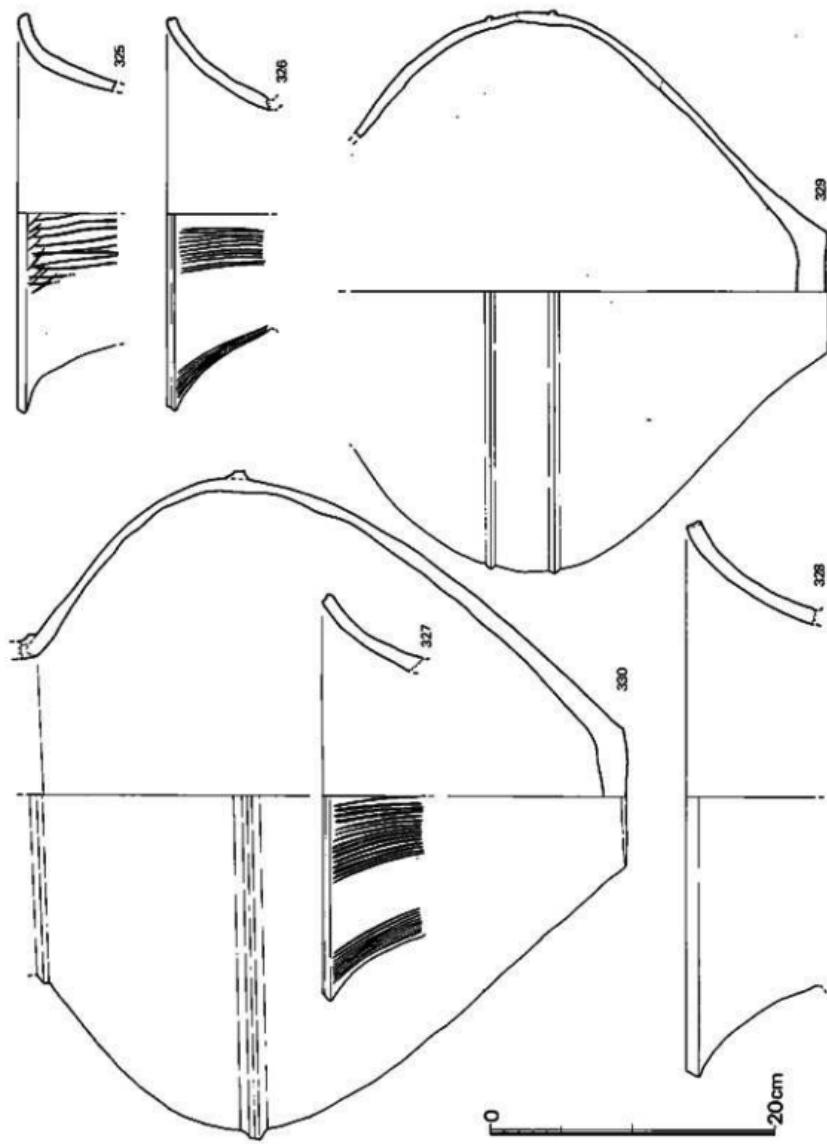
第 83 図 溝上層出土土器実測図 4 (1/4)



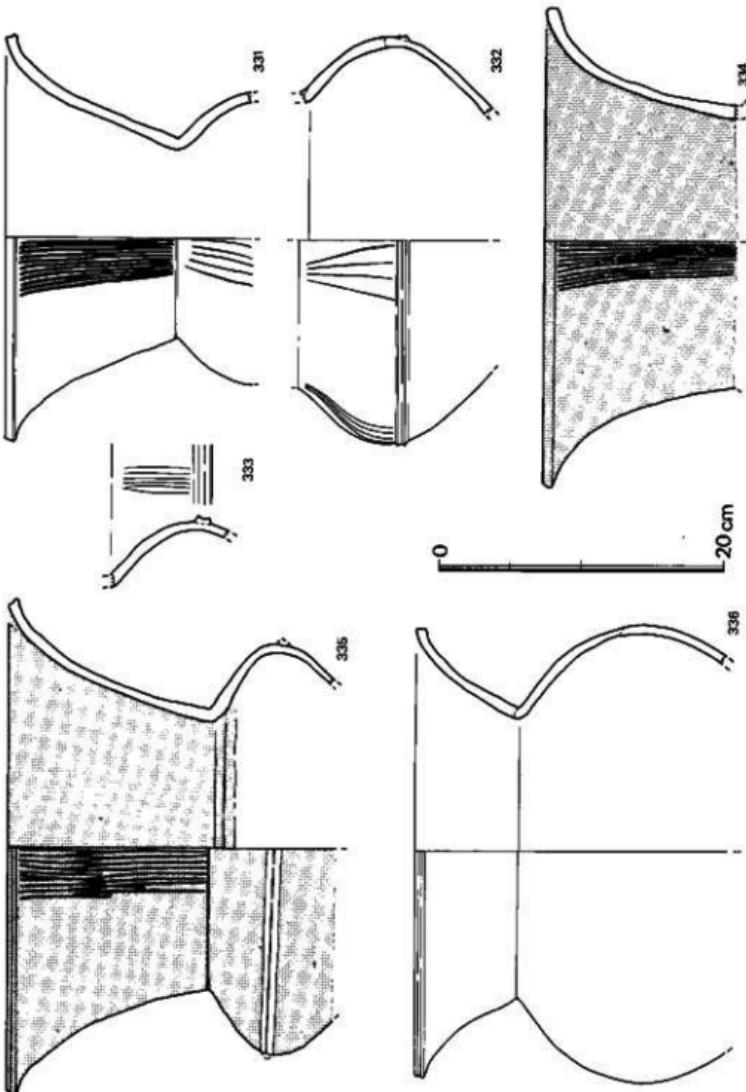
第 84 図 溝上層出土土器実測図 5 (1/4)



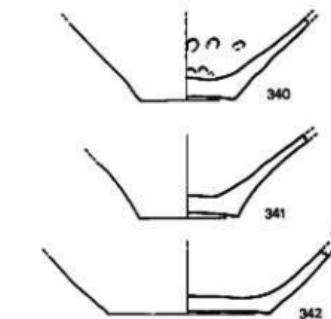
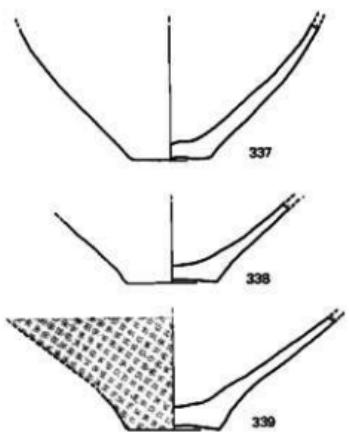
第85圖 溝上層出土土器実測図 6 (1/4)



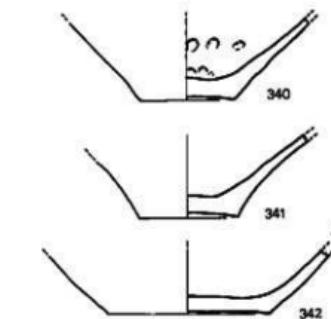
第 86 図 濱上層出土土器実測図 7 (1/4)



第 87 図 濱上層出土土剖面圖 8 (1/4)

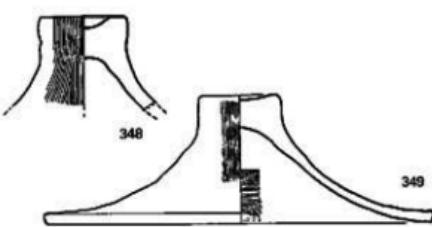
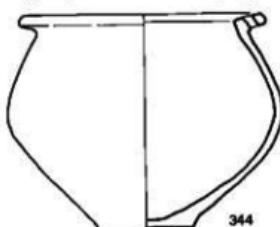
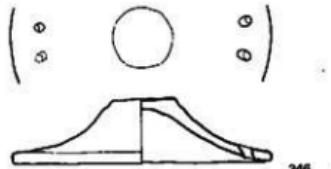
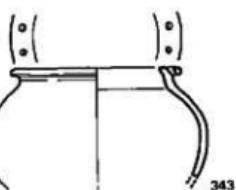


338



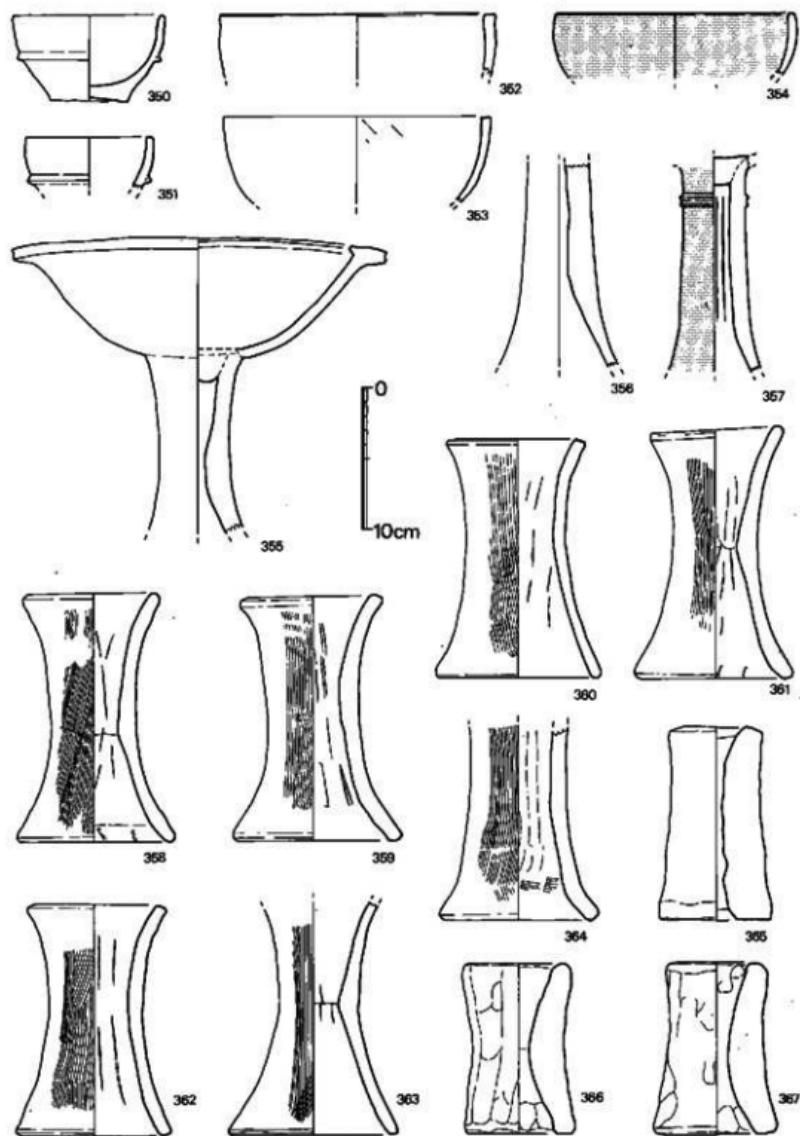
342

0 20cm



349

第 88 図 满上層出土土器実測図 9 (1/4)



第 89 図 溝上君出土土器実測図 10 (1/4)

ると、逆し字口縁で中期前葉のものであり、332・333 もこの時期のものであろう。335 はやや扁平の肩に高く大きく開く丹塗りの類で、新しい様相を示し、中期中葉に近いものかと考えられる。

無頸壺は 3 種あり、形態的には 343 から 344、345 へと変化がみられるが、時期的には中期前葉の幅に収まるものであろう。この器種の蓋は 346・347 で浅い形態となる。

蓋は 2 個体あり、348 のように頂部が強く凹状となる中期初頭の傾向を残すものもみられる。

鉢は、小型で体部中途に三角凸帯を付けるタイプ（350・351）や、やや大型でボール状となるもの（352・353）がある。354 は丹塗り脚付となる可能性が強い。

高杯は数が少なく、脚上位に口唇状凸帯を付けるもの（357）、脚との接合に「へそ挿入法」を行ない、厚く短かい鋸先状口縁につくるもの（355）などがあり、僅かな差はあるがいずれも中期前葉の範囲に収められるであろう。

器台は精製・薄手で鼓状となるもの（358～364）と、厚手の手捏ね状の小型品とがある。支脚とする考え方もあるが、ここでは、両類とともに明瞭に強い火熱を受けたものはみられない。両類が単に時期の違いとも断言し得ず、何らかの用途の違いを改めて考えなければなるまい。

以上の溝上層出土土器は弥生中期前半の範囲に含められ、そのうちの多くが前葉のものであり、その他の僅かが中期初頭と、中期中葉に近い部分のものである。稿を改めてこの期の細分を考えてみたいところである。

第4表 弥生期土器観察表

(単位 cm)

番号	出土遺構	器種	法 直	時 期	特 徴	備 考
1	1号住居跡	甕	口径 高さ 底径	前 期	外反する口縁の口唇部に篦による幅広の刻目を施す。ナデによる整形を施す。粗砂粒を多く含むが、焼成良好である。暗茶色を呈す。	
2	1号住居跡	甕	口径 高さ 底径	前 期	外反する口縁の口唇部に篦による刻目を施す。胴部には刷毛目を施す。胎土に粗砂粒を含む。口縁部内面まで焼付着。	
3	1号住居跡	甕	口径 高さ 底径	前 期	外反する口縁の口唇部に篦による刻目を施す。頸内面に明瞭な棱線が入る。胎土に粗砂粒を含む。内外面ともに丁寧なヘラミガキである。	
4	1号住居跡	甕	口径 高さ 底径	前 期	外反する口縁の口唇部に篦による刻目を施す。胴部の内面に横位の、外面に縱位の刷毛目を施す。胎土に粗砂粒を含む。外面に焼付着。	
5	1号住居跡	甕	口径 高さ 底径	前 期	軽く外反する口縁部で、口唇部下端と口縁部下突部に篦による刻目を施す。口縁部内面は横位の刷毛目整形。口唇部には横位の刷毛目整形で、口縁部下は刷毛目をナデ消している。	
6	1号住居跡	甕	口径 高さ 底径	前 期	外反する口縁部である。口縁部下の胴部最大径があり、ここに粘土接合による段が残る。口縁部外面に指圧痕らしい凹部がみられ、ここに刷毛目が残る。外面は刷毛目をナデ消している。	
7	1号住居跡	甕	口径 20 高さ 23.6 底径 7.8	前 期	大きく外反する口縁の口唇部に篦による細い刻目を施す。口縁部内面に指先によるナデ上げ痕が残る。内外面とも板状工具による擦過痕が残る。	
8	2号住居跡	壺	口径 23 高さ 底径	前 期	頸部の上下にそれぞれ2条の沈線を焼き、その間に3条の縦位の沈線文を7ヶ所に施す。外面は斜位のヘラミガキ整形。内面は器面剥落。胎土に粗砂粒多く器面に浮き出ている。焼成わるい。	
9	2号住居跡	壺	口径 10.9 高さ 15.1 底径 6.4	前 期	小形の壺で、肩部に2条の焼引き沈線を施す。頸部から肩部に刷毛目が残る。口縁部の内外面とも丁寧な横ヘラミガキ。下胴部は複数の横ヘラミガキ。胎土に粗い砂粒を含む。	
10	2号住居跡	壺	口径 18.8 高さ 底径	前 期	頸部から大きく外反する口縁部である。内外面とも粗い横ヘラミガキである。胎土に粗い砂粒を含む。	

(単位 cm)

番号	出土遺構	器種	法量	時期	特徴	備考
11	2号住居跡	壺	口径 22.3 高さ 底径	前期	軽く外反する口縁部は短い。内外面とも横ヘラミガキである。胎土に粗い砂粒多い。	
12	2号住居跡	壺	口径 15.4 高さ 底径	前期	小型の胴部に張りのない壺形土器である。器壁が厚く、胎土に粗い砂粒が多い。口縁部の内面は横ナデ。体部の外面は器面剥落し、内面は横位のヘラミガキである。	
13	2号住居跡	鉢	口径 15.5 高さ 底径	前期	小型の鉢形土器か。直口縁である。口唇部は横ナデ。体部外面は横位のヘラミガキで、内面は斜位の粗いヘラミガキである。	
14	2号住居跡	壺	口径 38.6 高さ 底径	前期	大型品である。口縁下外面に粘土接着部が数をなし残る。肩部に施描き沈線を施す。頭部外面と胴上部は横ヘラミガキ、下胴部はやや斜めのヘラミガキ。胎土に粗砂粒含むも焼成良好。	
15	2号住居跡	甕	口径 25.0 高さ 25.8 底径 7.6	前期	口唇部の上下に細い窓による刻目を施す。口唇部内面および外面に粗い刷毛目を施すが、頭部外面は刷毛目をナデ消す。胎土は粗砂粒含むが、焼成良好。外面に煤付着。	
16	2号住居跡	甕	口径 22.6 高さ 19.2 底径 6.1	前期	口唇部下端に細い窓による刻目あり。口縁部内外面とも横ナデ。体部は内外とも板状工具による擦過痕あり。底部の立ち上り部はナデ上げ。胎土に粗い砂粒含み焼成ややあまい。胴上部に煤付着。	
17	2号住居跡	甕	口径 21.8 高さ 16.5 底径 5.1	前期	口唇部に太い刻目を施す。胴上部内面に板状工具によるケズリ痕が残る。体部はケズリの後にナデしている。胎土に粗砂粒が多い。焼成ややあまい。下胴部を除く外面には煤付着。	
18	2号住居跡	甕	口径 17.6 高さ 16.1 底径 8.4	前期	口唇部にやや細な刻目を施す。若干器壁の厚いものである。内外面ともにナデによる整形である。	
19	2号住居跡	甕	口径 19.8 高さ 底径	前期	口唇部に窓による刻目を施す。口頭部内面のほか外面は刷毛目整形である。口頭部内外面とも刷毛目をナデ消すが一部残る。胴上部に施描き沈線をめぐらす。胎土に粗い砂粒を多く含むが焼成良好。	
20	2号住居跡	甕	口径 19.4 高さ 底径	前期	口唇部に窓による刻目を施す。口頭部内面に横位の、体部に縦位の刷毛目を施す。刷毛目整形後に沈線をめぐらす。胴下部は器面剥落。	

(単位 cm)

番号	出土遺構	器種	法量	時期	特徴	備考
21	2号住居跡	無頸壺	口径 15.1 高さ 底径	前期	蓋受け部を持つ無頸壺である。受溝下に小孔あるが小片であるためその数は不明。内外面とも横ヘラミガキ。肩部に貝殻腹縁による弧文を施す。胎土は粗砂粒かなり含むが焼成良好。	
22	2号住居跡	壺	口径 21.7 高さ (11.1) 底径 (7.4)	前期	天井部を欠する。器壁は厚く、胎土に粗砂粒多い。外面は継位の刷毛目、内面は横ヘラミガキ。口縁部外面は刷毛目をナデ消している。	
23	2号住居跡	壺	口径 24.3 高さ 11.3 底径 6.5	前期	やや丸味のある壺である。器壁は薄く丁寧なつくりである。身受け部は内外面とも横ナデ、他は内外面とも細い横ヘラミガキである。胎土に粗砂粒を若干含む。二次加熱を受けもろい。	
24	2号住居跡	壺	口径 高さ 底径	前期	口唇部に範による刻い刻目を施す。口縁部内外から外面は横ナデ仕上げ。胎土に粗砂粒多い。外面に煤付着。	
25	2号住居跡	壺	口径 高さ 底径	前期	大きく外反する口縁部上端に、刷毛目工具縁利用の刻目を施す。外面は斜位の刷毛目整形後に沈線をめぐらし、その下に範によるものか刺突文を施す。胎土に粗砂粒多い。	
26	2号住居跡	壺	口径 高さ 底径	前期	口唇部に刷毛目工具縁利用の刻目を施す。口縁部内面に横位の、外面は継位の細い刷毛目を施す。後に沈線をめぐらし、その下に範による刺突文を入れている。胎土に粗砂粒多い。外面に煤付着。	
27	2号住居跡	壺	口径 高さ 底径	前期	口唇部に範による刻目を施す。外面に斜位の刷毛目を施す。口唇部内外面とも横ナデ。胎土に粗い砂粒多い。外面に煤付着。	
28	2号住居跡	壺	口径 高さ 底径	前期	口唇部に範による太くて、やや強な刻目を施す。口縁部内面は横ナデ、他の内外面とも丁寧なナデ仕上げ。胎土に粗砂粒多い。外面に煤付着。	
29	2号住居跡	壺	口径 高さ 底径	前期	直口の鏡口縁に断面三角形の粘土帯を貼り付け口縁部とする。口縁部と粘土帯に範による細い刻目を施す。内面は横ヘラミガキ。外面はナデによる仕上げ。胎土には粗砂粒若干含む。外面に煤付着。	
30	3号住居跡	壺	口径 高さ 底径 7.4	前期	壺底部である。外面ヘラミガキ、内面は丁寧なナデ仕上げである。胎土は粗砂粒が多いが、焼成良好。	

(単位 cm)

番号	出土遺構	器種	法量	時期	特徴	備考
31	3号住居跡	壺	口径 高さ 底径 6.1	前期	壺の底部である。外面は細い刷毛目整形後にヘラミガキか。胎土に粗砂粒多い。焼成ややあまい。	
32	3号住居跡	壺	口径 高さ 底径 6.2	前期	壺の底部である。内面はナデ、外面は細い刷毛目整形後にナデ消すも、刷毛目が残る。	
33	3号住居跡	壺	口径 高さ 底径 6.5	前期	壺の底部である。内面はナデ、外面は細い刷毛目整形である。胎土に粗砂粒多い。	
34	3号住居跡	壺	口径 22.8 高さ 底径	前期	口唇部に細い範による刻目を施す。口頭部の内面に横位の、外面に縱位の刷毛目を施す。口唇部は横ナデ、胎土は粗砂粒が多く、焼成あまい。	
35	3号住居跡	壺	口径 高さ 底径	前期	口唇部下端に範による極細の刻目を施す。内外面とも横ナデ仕上げ、外面は細い刷毛目整形が先行する。胎土は粗砂粒多い。	
36	3号住居跡	壺	口径 高さ 底径	前期	口唇部下端にやや輪な範による刻目を施す。口縁部は内外面とも横ナデ。体部内面は横ヘラミガキ。外面は縱位の刷毛目整形である。胎土は粗砂粒が多いが、焼成良好。	
37	4号住居跡	壺	口径 高さ 底径	前期	壺の口縁部である。口縁部内面と外面は横ヘラミガキ。頸部内面はナデ仕上げである。胎土に粗砂粒を含み、焼成あまい。	
38	4号住居跡	壺	口径 高さ 底径 8.2	前期	壺の底部である。外面はヘラミガキ、内面は丁寧なナデ仕上げである。胎土に粗砂粒を含み、焼成ややあまい。	
39	4号住居跡	壺	口径 高さ 底径 7.8	前期	壺の底部である。二次加熱により器面剥落がみられる。外面は丁寧なナデ仕上げ。胎土に粗砂粒多い。焼成良。	
40	4号住居跡	壺	口径 高さ 底径 8.0	前期	壺の底部である。二次加熱により内面の器面剥落。外面は板状工具による擦過痕が観られる。	

(単位 cm)

番号	出土遺構	器量	法量	時期	特徴	備考
4 1	1号貯藏穴	壺	口径 高さ 底径	前期	壺の肩部である。2条の筆描き沈線を施し、頭部には縦位に3条の平行沈線文を施す。外面はヘラミガキ整形である。胎土に粗砂粒を若干含む。	
4 2	1号貯藏穴	甕	口径 高さ 底径	前期	口唇部下端に篦による刻目を施す。内面は横位の、外面は縦位の刷毛目整形である。口唇部は横ナデで、刷毛目をナデ消す。	
4 3	1号貯藏穴	甕	口径 高さ 底径	前期	断面三角形の粘土帯を貼り付けた口縁で、先端はやや下り気味である。小片で器面が剥落しているため調査法は不明。	
4 4	2号貯藏穴	甕	口径 高さ 底径	前期	断面三角形状の粘土帯を貼り、やや平坦な口縁部をつくる。口縁部は横ナデ、体部内面は難なナデ、外面は横位の刷毛目仕上げである。粗砂粒を含むが焼成良好で、特異な器形である。	
4 5	2号貯藏穴	鉢	口径 高さ 底径	前期	口唇部の上下に篦による刻目を施す。口縁部の内外面は横ナデ。内面はくびれ部に横位の刷毛目。体部外面には刷毛目整形後に突帶を貼り付け、刻目を施す。粗砂粒を多く含む。外面煤付着。	
4 6	2号貯藏穴	甕	口径 22.3 高さ 14.8 底径 6.0	前期	外反する口縁部は横ナデ整形。体部内面は横ヘラミガキ、外面は刷毛目を消すように横ヘラミガキ整形である。胎土に粗砂粒を含むが焼成良好。	
4 7	2号貯藏穴	甕	口径 19.8 高さ 底径	前期	口唇部に篦による刻目を施す。口縁部内面は横ナデ、その下位は横位の刷毛目整形、外面は縦位の刷毛目整形である。胎土は粗砂粒多し。	
4 8	2号貯藏穴	鉢	口径 14.4 高さ 9.1 底径 6.2	前期	蓋の可能性大なる土器である。口縁部に極細の刻目を施す。外面は縦位の粗い刷毛目整形で、内面は上部をナデ上げ整形で、その下位は板状工具の擦過痕がみられる。胎土に粗砂粒を含むが、焼成ややあまい。	蓋か
4 9	4号貯藏穴	甕	口径 18.5 高さ 底径	前期	頭部の上下に篦による沈線を施す。口縁部は横ナデ。頭部の外面は細い横ヘラミガキ整形、内面は板状工具の擦過痕がみられ、工具の圧痕（幅19mm）が残る。胎土は粗砂粒を含むが、焼成良好。	
5 0	4号貯藏穴	甕	口径 高さ 底径	前期	口唇部に篦による刻目を施す。口縁部は内外面とも横ナデ、体部は斜位のナデ仕上げである。内面には指圧痕がみられる。	

(単位 cm)

番号	出土遺構	器量	法量	時期	特徴	備考
51	4号貯蔵穴	甕	口径 21.1 高さ 底径	前期	体部からゆるやかに外反する口縁である。口縁部内外面に指圧痕がみられる。口縁部内面は横位の刷毛目を、体部外面は縦位の刷毛目整形である。胎土に粗砂粒多いが焼成良好。	
52	9号貯蔵穴	甕	口径 20.0 高さ 21.7 底径 7.1	前期	口唇部と肩部突唇に細くて鋭な刻目を施す。口縁部は内外面とも横ナデ整形である。体部は内面が縦位の、外面は縦位の板状工具による擦過痕がみられる。胎土に粗砂粒を含むも焼成良好。外面の安帶上部に焼付帯。	
53	9号貯蔵穴	甕	口径 22.0 高さ 21.6 底径 7.9	前期	口唇部に窓による刻目を施す。口縁部は内外面とも横ナデ整形。体部も内外ともナデ整形であるが、内面にケズリ工具の圧痕が残る。	
54	10号貯蔵穴	壺	口径 6.0 高さ 8.7 底径 3.7	前期	頸部・肩部・腹部に2条の窓描き沈線を施す。内外面ともナデによる仕上げで、肩部内面に指圧痕がみられる。胎土は砂粒を含む。焼成良好。	
55	10号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径	前期	口唇部に窓による刻目を施す。口縁部内外面は横ナデ、体部外面は縦位の刷毛目整形。二次加熱により器面剥落著しい。胎土に粗砂粒が多い。	
56	10号貯蔵穴	壺	口径 高さ 底径 8.0	前期	壺の底部である。外面は横ナデ整形、内面は器面剥落。胎土に粗砂粒を含む。	
57	12号貯蔵穴	甕	口径 24.2 高さ 底径	前期	口唇部に刷毛目工具による太い刻目を施す。口縁部内面は、斜・横位の刷毛目整形。体部は斜・縦位の刷毛目整形である。胎土に粗砂粒多い。	
58	12号貯蔵穴	甕	口径 21.6 高さ 底径	前期	口唇部と肩部突唇に窓による刻目を施す。口縁部は内外とも横ナデ。頸部内面に横位の刷毛目を施し、若干ナデ消す。外面は縦位の刷毛目整形後に突唇を貼り付ける。胎土に粗砂粒多い。	
59	12号貯蔵穴	壺	口径 高さ 底径	前期	口縁部は横ナデ。体部は縦位の刷毛目整形で、口縁部下はナデ消されている。胎土に粗砂粒多い。	
60	12号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径	前期	直口縁で口唇部に窓による刻目を施す。内外面とも横ナデ整形である。胎土に粗砂粒が多い。外面に焼付帯。	

(単位 cm)

番号	出土遺構	器種	法量	時期	特徴	備考
61	12号貯藏穴	蓋	口径 19.8 高さ 10.1 底径 5.8	前期	体部の内面は横位の、外面は縦位の刷毛目整形であるが、その上・下端はナデ消されている。	
62	12号貯藏穴	蓋	口径 高さ 底径	前期	口唇部上端に極細の刻目を施す。体部外面に縦位の刷毛目整形を施し、口縁部内外面に横ナデを施し、刷毛目の一部をナデ消す。胎土に粗砂粒多い。	
63	12号貯藏穴	蓋	口径 高さ 底径	前期	口唇部の上下に極細の刻目を施す。口縁部内面と体部外面に横位の粗い刷毛目を施す。刷毛目整形後に突帯を貼る。突帯にも細い刻目を入れる。胎土に粗砂粒多い。	
64	12号貯藏穴	蓋	口径 36.2 高さ 35.3 底径 9.0	前期	口縁部下 3 cm 強のところまで体部をつくり刷毛目整形後に口標部をつくっている。刷毛目は貼り付けた粘土下に統いている。口縁部内面に横位の刷毛目を、口縁部に刻目を施す。体部内面は板状工具の擦過痕。	
65	14号貯藏穴	蓋	口径 高さ 底径	前期	口唇部と突帯による刻目を施す。口縁部内面に横位の刷毛目整形を、体部外面に縦位の刷毛目整形を施す。内面に指圧痕あり。口縁部内面下部は横ヘラミガキ。突帯は刷毛目整形後に貼り付け。	
66	16号貯藏穴	蓋	口径 高さ 底径	前期	口唇部に太い竪による刻目を施す。口縁下部に粘土接合部が段となって残る。内外面とも横ナデ整形。胎土に粗い砂粒が多い。外面に煤付着。	
67	16号貯藏穴	蓋	口径 高さ 底径	前期	口唇部に竪による太い刻目を施す。口縁下部に粘土接合部が段となって残る。内外面とも横ナデ整形。胎土に粗い砂粒が多い。外面に煤付着。	
68	16号貯藏穴	蓋	口径 22.8 高さ 底径	前期	口唇部と頬部突起に竪による刻目を施す。体部外面は縦・横位の刷毛目整形、内面は丁寧なナデ整形。やや頬部の張る形状を呈す。胎土に粗い砂粒をかなり含む。	
69	16号貯藏穴	蓋	口径 高さ 底径 8.6	前期	蓋の下側部である。外面は縦位の刷毛目整形。内面は板状工具の擦過痕が見られる。	
70	17号貯藏穴	蓋	口径 高さ 底径	前期	蓋の口縁部である。頬部に粘土接合部による段が残る。内外面とも横ヘラミガキ整形である。胎土に粗砂粒を若干含む。	

(単位: cm)

番号	出土遺構	器種	法量	時期	特徴	備考
71	19号貯藏穴	壺	口径 高さ 底径	前期	口唇部に窓による太い刻目を施す。内外面とも横ナデ。外面には刷毛目が残る。胎土に粗砂粒が多い。	
72	19号貯藏穴	壺	口径 高さ 底径	前期	口唇部に窓による太い刻目を施す。口縁部内面は横位の刷毛目を施す。外面は縦位の刷毛目を施す。口唇部には横ナデを施す。胎土は粗砂粒多し。	
73	19号貯藏穴	壺	口径 高さ 底径	前期	口唇部に窓によるやや細な刻目を施す。口縁部の内外面は横ナデ。外面は煤付着。胎土に粗砂粒を含む。	
74	19号貯藏穴	壺	口径 高さ 底径	前期	口唇部に窓による太い刻目を施す。体部外表面は横位の刷毛目整形である。口唇部下は刷毛目をナデ消す。	
75	19号貯藏穴	壺	口径 16.6 高さ 底径	前期	球形の腹部となる壺であろう。やや特異な形状である。口縁部は横ナデ。体部は内面が横位の、外面が縦位のヘラミガキである。胎土に粗砂粒が多いが焼成良好。	
76	19号貯藏穴	壺	口径 高さ 底径	前期	壺の肩上部と思われる。肩部に2条の細い沈線をめぐらし、その上部に斜行文を施す。いずれも窓による施文である。内面はナデ、外面は縦位のヘラミガキである。胎土は粗砂粒が多い。	
77	19号貯藏穴	壺	口径 高さ 底径 8.6	前期	壺の底部である。外面は細い横ヘラミガキ、内面はやや細なヘラミガキを施す。胎土は砂粒多い。焼成良好。	
78	19号貯藏穴	壺	口径 高さ 底径 8.0	前期	壺の底部である。外面は縦位の、内面は横位のナデ整形である。胎土は粗砂粒や雲母片多く含む。体部下端に刷毛目工具の圧痕があり、体部は刷毛目整形後にナデ消しているものと思われる。外面に煤付着。	
79	19号貯藏穴	壺	口径 高さ 底径 7.8	前期	壺の底部である。体部外面は板状工具による擦過痕かと思われ、内面はナデ仕上げ。胎土に粗砂粒含む。外面に煤付着。	
80	19号貯藏穴	壺	口径 高さ 底径 7.3	前期	壺の底部である。二次加熱による器面剥落が著しく、整形法不明。胎土に粗砂粒含む。	

(単位 cm)

番号	出土地點	器種	法量	時期	特徴	備考
81	19号貯藏穴	脚付壺(?)	口径 高さ 底径 12.2 (脚部径)	前期	腹が鉢につく脚部であろう。内外面とも器面の剥落が著しいが、外面はヘラミガキか。胎土は粗砂粒多いが、焼成良。	
82	20号貯藏穴	壺	口径 高さ 底径	前期	壺の胴上部片である。肩部に2条の沈線をめぐらし、下部に3条の沈線で縦筋状文を描く。恐らくその下にも1~2条の沈線をめぐらすものであろう。外面は横ヘラミガキ、内面はナデ整形である。	
83	20号貯藏穴	壺	口径 高さ 底径	前期	口唇部に刷毛目工具縁による太い刻目を施す。口唇部の内外面は横ナデ整形、体部外面は継位の刷毛目を施す。胎土に粗砂粒多い。	
84	23号貯藏穴	壺	口径 高さ 底径	前期	口唇部に窓による太い刻目を施す。内外面とも横ナデ仕上げ。胎土に粗砂粒多い。外面に煤付着。	
85	23号貯藏穴	壺	口径 高さ 底径	前期	口唇部に窓による刻目を施す。体部にやや斜位の刷毛目整形。口縁部は内外面とも横ナデ仕上げ。外面上部は刷毛目をナデ消す。胎土に粗砂粒多い。外面に煤付着。	
86	25号貯藏穴	壺	口径 高さ 底径	前期	口唇部に窓による刻目を施す。口縁部内面に横位の刷毛目を施す。口唇部から外面は横ナデ、頸部は刷毛目が残る。胎土は粗砂粒多し。外面に煤付着。	
87	21号貯藏穴	壺	口径 高さ 底径	前期	口唇部の上下に細い刻目を施す。口縁部内外面と体部内面は横ナデ。体部外面は継位の刷毛目整形。頸部下は横位である。胎土に粗砂粒多い。	
88	21号貯藏穴	壺	口径 高さ 底径	前期	口唇部に窓による刻目を施す。口縁部内外面は横ナデ。外面は斜位の刷毛目をナデ消している。体部は継位の刷毛目を施す。胎土に粗砂粒多い。外面に煤付着。	
89	24号貯藏穴	壺	口径 19.2 高さ 底径	前期	頭上部に1条の窓描き沈線をめぐらす。外面とも横ヘラミガキ。胎土中の粗砂粒はわずかである。焼成ややあまい。	
90	25号貯藏穴	壺	口径 高さ 底径	前期	壺の頭部から肩部の破片である。肩部に2条の窓描き沈線をめぐらす。内外面とも横ヘラミガキ。頭部内面は横ナデ整形である。胎土はかなりの粗砂粒を含む。	

(単位 cm)

番号	出土遺構	器種	法量	時期	特徴	備考
91	21号貯藏穴	壺	口径 高さ 底径 6.6	前期	壺の底部か。内外面とも横ヘラミガキである。粗砂粒若干含む。焼成ややあまい。	
92	21号貯藏穴	甕	口径 高さ 底径 6.9	前期	外面は縦位の刷毛目整形。底部の穿孔は焼成後に施す。蓋に利用か。	
93	22号貯藏穴	甕	口径 高さ 底径 6.7	前期	外面は粗い刷毛目を施す。刷毛目工具の幅は約3cmを測る。内面は上部に横位の刷毛目が一部にみられるものの、下部は板状工具の擦過痕がみられ、底部はナデ整形である。	
94	24分貯藏穴	壺	口径 高さ 底径 8.5	前期	壺の底部である。外面は横ナデ整形である。内面に炭化物付着。胎土に粗砂粒多い。	
95	24号貯藏穴	甕	口径 高さ 底径 11.0	前期	外面は縦位の粗い刷毛目を施す。胎土に粗い砂粒が多い。	
96	22号貯藏穴	甕	口径 25.1 高さ 底径	前期	口縁部内外面とも横ナデ。体部外面は縦位の粗い刷毛目を施す。内面は刷毛目工具痕が残る縦な横ナデ整形である。口唇部には刻目はない。胎土に粗砂粒が多い。焼成ややあまい。	
97	22号貯藏穴	甕	口径 高さ 底径 8.1	前期	外面は縦位の刷毛目整形。二次加熱により全体に赤変する。胎土に粗砂粒が多い。	
98	21号貯藏穴	壺	口径 高さ 底径	前期	壺の小片である。内外面とも横ヘラミガキを施す。胎土に砂粒多い。	
99	27号貯藏穴	壺	口径 高さ 底径	前期	壺肩部で、複数の弧文を施してある。内外面とも横ヘラミガキである。胎土に粗砂粒多い。焼成ややあまい。	
100	28号貯藏穴	甕	口径 高さ 底径	前期	口唇部に竪による太い刻目を施す。内面横ナデ、外面は器面剥落。胎土は粗い砂粒多い。焼成やや不良。	

(単位 cm)

番号	出土遺構	器種	法景	時期	特徴	備考
101	28号貯藏穴	甕	口径 高さ 底径	前期	軽く外反する口縁の口唇部に細い竪による刻目がある。口唇部内面は斜位の刷毛目を施す。器面剥落が著しい。胎土に粗砂粒多い。	
102	27号貯藏穴	蓋	口径 16.8 高さ 底径	中期	体部下位に壓押えによる沈線状の凹みがめぐり、これより上部はヘラミガキ。下部と内面は横ナデ整形である。身受け部に、焼成前の穿孔がある。孔の数は他の例から2ヶ所に2個あるものと思われる。	
103	27号貯藏穴	甕	口径 34.0 高さ 底径	中期	やや内傾する平坦口縁をなす。口縁部と胴上部は横ナデ、肩部外面は斜位の刷毛目、内面はナデ整形である。胎土は細砂粒多い。焼成良好。	
104	27号貯藏穴	甕	口径 23.6 高さ 18.7 底径 11.4	中期	短胴で底径の大きい形狀を呈す。平坦口縁で、胴上部に断面三角形突唇をめぐらす。口縁と胴上部は横ナデ。体部内面は丁寧なナデであるが、外面は板状工具の擦過痕がみられる。内底面はヘラによる整形。	
105	27号貯藏穴	甕	口径 28.1 高さ 底径	中期	やや内傾の平坦口縁をなす。口頭部は横ナデ。胴部外面は斜位の細い刷毛目、内面はナデによる整形である。胎土は細砂粒を含む。焼成良好。	
106	27号貯藏穴	蓋	口径 29.6 高さ 35.5 底径 6.8	中期	口唇部に壓押えによる凹みあり。頭部全面に竪による継位の暗文を施す。口頭部は内外面とも横ヘラミガキ。胴部もヘラミガキと思われるが、器面剥落が著しい。下脚部は継位のヘラミガキである。	
107	27号貯藏穴	器台	口径 9.8 高さ 底径	中期	体部外面は継位の細い刷毛目を施し、一部をナデ消す。端部は横ナデ整形である。内面に上下方向から竪状工具による押圧痕がみられる。胎土に粗砂粒含む。焼成良好。	
108	27号貯藏穴	器台	口径 9.8 高さ 15.6 底径 11.2	中期	外面にやや粗い継位の刷毛目を施す。上下端は横ナデで、刷毛目をナデ消す。内面はナデ整形である。胎土に粗砂粒を含む。焼成良好。	
109	29号貯藏穴	蓋	口径 高さ 底径 9.2	前期	球形状を呈す蓋の下脚部である。内外面とも横ヘラ磨きである。内底面に指圧痕あり。胎土に粗砂粒含む。焼成良好。	
110	29号貯藏穴	甕	口径 23.4 高さ 底径	前期	口唇部から頭にかけて、細長の刻目を施す。口頭部の内外面とも横ナデ、胴部外面は板状工具の擦過痕がみられ、内面には斜位の粗い刷毛目(幅 2.1 cm)を施す。胎土に粗砂粒を含む。	

(単位 cm)

番号	出土遺構	器種	法量	時期	特徴	備考
111	29号貯蔵穴	壺	口径 20.0 高さ 底径	前期	口縁部に細くて雑な刻目を施す。口縁部内外面とも横ナデ。胴部外面は丁寧なナデ、内面は横・斜位の粗い刷毛目整形である。胎土に粗砂粒多い。	
112	30号貯蔵穴	壺	口径 16.8 高さ 底径	中期	内傾する平坦口縁をなす。口縁部は横ナデ。胴部外面はヘラケズリ。外面は器面剥落。胎土に砂粒含む。焼成あまい。	
113	30号貯蔵穴	壺	口径 31.6 高さ 底径	中期	平坦口縁部である。口縁部は横ナデ。胴部外面は縦位の刷毛目、内面はナデ仕上げである。胎土は細砂粒多い。焼成良好。	
114	30号貯蔵穴	壺	口径 32.8 高さ 底径	中期	平坦口縁部である。口縁部は横ナデ。胴部は外面が斜位の刷毛目整形。内面は板状工具による擦過痕がみられる。胎土は粗砂粒が多い。焼成良好。	
115	30号貯蔵穴	壺	口径 30.2 高さ 底径	中期	平坦口縁部をなす。胴上部に断面三角形突唇をめぐらす。内外面とも横ナデ。胎土は砂粒が多く、焼成ややあまい。	
116	30号貯蔵穴	壺	口径 23.3 高さ 底径	中期	内傾する平坦口縁部で、胴上部に断面三角形突唇をめぐらす。内外面とも横ナデ。胎土は砂粒を含む。焼成良好。	
117	30号貯蔵穴	壺	口径 11.0 高さ 底径	中期	直口壺である。口縁部と胴部外面は横ナデ。胴部内面と胴部外面は横ヘラミガキ。胴部内面はナデ整形。胴部には見による縦位の暗文を施す。胴上部に一ヶ所4条の沈線を6ヶ所に施す。	
118	30号貯蔵穴	壺	口径 高さ 底径 10.6	中期	短胴の壺の底部と思われる。外面は縦位の、内面は横位のヘラミガキ。内底部は横ナデ。胎土は粗砂粒多い。焼成ややあまい。	
119	30号貯蔵穴	壺	口径 32.1 高さ 37.6 底径 7.2	中期	平坦口縁部をなす。口縁部は横ナデ。胴部外面は縦位の細い刷毛目、内面はナデによる整形である。	
120	30号貯蔵穴	壺	口径 27.1 高さ 底径	中期	く字状に外反する口縁部で胴部内面にやや後がつく。口縁部は横ナデ。胴部外面は斜位の刷毛目で、内面はナデ整形。胎土に粗い砂粒が多く、焼成あまい。	

(単位 cm)

番号	出土遺構	器種	法量	時期	特徴	備考
121	30号貯蔵穴	甕	口径 29.8 高さ 底径	中期	内傾する平坦口縁部である。口縁部は横ナデ、胴部外面は縱位の細い刷毛目整形。内面は板状工具による擦過痕がみえる。胎土は砂粒を含む。焼成堅微である。	
122	30号貯蔵穴	甕	口径 31.8 高さ 底径	中期	内傾する平坦口縁部である。口縁部は横ナデ、胴部外面は縱位の刷毛目、内面はナデ整形である。胎土は細砂粒が多く、焼成ややあまい。	
123	30号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径 7.6	中期	甕の底部。外面は縱位の刷毛目整形、内面は剥落。胎土は粗い砂粒が多いが、焼成堅微。	
124	30号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径 7.4	中期	甕の底部。外面は縱位の刷毛目整形、内面は器面剥落。胎土に砂粒が多い。焼成良。	
125	30号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径 8.0	中期	甕の底部。外面は横および斜位の刷毛目整形、内面はナデによる整形か。胎土に砂粒が多い。焼成良。	
126	30号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径 8.0	中期	甕の底部。外面は縱位の細い刷毛目整形。内面は器面剥落。胎土に砂粒多い。焼成良。	
127	30号貯蔵穴	蓋	口径 32.6 高さ 11.6 底径 6.4	中期	外面上部は縱位の、下部は斜位の細い刷毛目を施す。受け部外面は横ナデ、内面は横位の刷毛目。体部内面はナデ仕上げ。胎土に砂粒を含む。焼成ややあまい。	
128	30号貯蔵穴	蓋	口径 16.4 高さ 4.2 底径 3.7	中期	器面剥落し整形痕不詳。対称する位置に計4個の孔がある。焼成前の穿孔。胎土に粗い砂粒多い。焼成不良。	
129	30号貯蔵穴	器台	口径 8.8 高さ 15.9 底径 11.4	中期	外面は縱位の刷毛目整形、後に上下端部は横ナデ。内面にナデツケによる指先圧痕が残る。胎土に粗砂粒を含む。焼成良好。	
130	30号貯蔵穴	器台	口径 9.6 高さ 15.2 底径 11.8	中期	外面は縱位の刷毛目整形。後に上下端部を横ナデしている。内面はナデ上げている。胎土に粗い砂粒を含むが、焼成良好。	

(単位 cm)

番号	出土遺構	器種	法 量	時 期	特 徴	備 考
131	30号貯蔵穴	器 台	口径 11.6 高さ 底径	中 期	外面は縦位の細い刷毛目整形、その後上端部は横ナデ。口縁内面は横位の細い刷毛目を施す。内面にはナデ上げ圧痕がみられる。胎土に粗砂粒を含むが、焼成良好。	
132	30号貯蔵穴	器 台	口径 8.1 高さ 12.9 底径 8.1	中 期	器壁の厚いもので、器面は粗いヘラケズリ後にナデ仕上げである。凹凸が著しい。内面はナデ整形であろうが、接合部より粘土がはがれている。胎土は粗砂粒が多い。焼成ややあまい。	
133	30号貯蔵穴	器 台	口径 (6.4) 高さ (11.6) 底径 8.2	中 期	器壁の厚い器である。体部外面は粗いヘラケズリ後にナデ仕上げ。内面上部はヘラ状工具によるナデつけ、下部はナデ。胎土に粗砂粒を含む。焼成ややあまい。	
134	31号貯蔵穴	壺	口径 高さ 6.9 底径	前 期	壺の底部。外面はナデか、器面剥落が著しい。内面には炭化物付着。胎土は粗砂粒を多く含む。焼成良。	
135	32号貯蔵穴	壺	口径 高さ 底径	前 期	若干外反し、直口縁に近似する。口唇部外側に窓による太い刻目を施す。内外面とも横ナデ。外面に煤付着。粗砂粒を若干含む。焼成良。	
136	32号貯蔵穴	壺	口径 19.5 高さ 底径	前 期	口唇部に窓による細い刻目を施す。口唇部外側から胴部内面にかけて横ナデ。胴部外面は斜位の刷毛目を施す。胎土に粗砂粒が多い。焼成良。外面に煤付着。	
137	32号貯蔵穴	壺	口径 高さ 7.8 底径	前 期	壺の底部である。外面は横ヘラミガキ。内面は粗い横あるいは斜位のヘラミガキである。胎土に粗砂粒多い。焼成良。	
138	34号貯蔵穴	壺	口径 15.6 高さ 底径	前 期	内外面とも細い横ヘラミガキ。胎土に砂粒を含む。焼成良好。	
139	34号貯蔵穴	壺	口径 高さ 底径	前 期	口唇部に窓による刻目を施す。内外面とも横ナデ。外面に煤付着。胎土は砂粒を含む。焼成良好。	
140	34号貯蔵穴	壺	口径 高さ 底径	前 期	口唇部に細い窓による刻目を施す。口縁部の内外面は横ナデ。胴部外面は板状工具の擦過痕。内面は丁寧なナデ。胎土は砂粒が多い。焼成ややあまい。	

(単位 cm)

番号	出土遺構	器種	法量	時期	特徴	備考
141	34号貯藏穴	壺	口径 高さ 底径	前期	口唇部に窓による細い難な刻目を施す。口縁部の内外面とも横ナデ。胴部は外面とも板状工具による擦過痕。胎部は粗い砂粒が多い。焼成ややあまい。	
142	34号貯藏穴	壺	口径 高さ 底径 6.9	前期	窓の底部。外面は板状工具による擦過痕。内面は横ナデ。胎土に粗い砂粒を含む。焼成良。	
143	34号貯藏穴	壺	口径 高さ 底径 7.2	前期	窓の底部である。外面は横ヘラミガキ。内面はナデ。胎土に粗い砂粒を含む。焼成良好。	
144	34号貯藏穴	壺	口径 高さ 底径 8.5	前期	窓の底部である。外面は丁寧なナデ。内面は剥落。胎土に粗い砂粒を含む。焼成良。	
145	34号貯藏穴	壺	口径 高さ 底径 15.6	前期	大型窓の底部である。胴・底部とも内外面横ヘラミガキ。胎土に粗い砂粒を含む。	
146	34号貯藏穴	壺	口径 23.4 高さ 底径	前期	口唇部と胴部突帯に窓による刻目を施す。口縁部から胴上部は斜位の細い刷毛目の上ナデ消す。下胴部は垂直の細い刷毛目。内面口縁下に斜位の刷毛目、それより下はナデ。胎土に粗砂粒多い。焼成良。	
147	35号貯藏穴	壺	口径 高さ 底径	前期	窓の胴部である。窓括きの2条の沈線をめぐらし、その上部に窓括きの斜格子文を施す。内外面ともヘラミガキ。胎土に粗砂粒を含むが、焼成良好。	
148	35号貯藏穴	壺	口径 27.0 高さ 底径	前期	口唇部に窓による線状の刻目を施す。口縁部は内外面横ナデ。胴部外面は斜位の粗い刷毛目整形、内面は口縁下に斜位の粗い刷毛目その他はナデ。胎土に粗砂粒を含む。焼成良。	
149	35号貯藏穴	壺	口径 高さ 底径	前期	胴部に垂下する突帯を有し、刻目を施す。内外面とも板状工具の擦過痕がみられる。胎土に粗砂粒を含む。焼成良。	
150	35号貯藏穴	壺	口径 22.4 高さ 11.1 底径 5.6	前期	口縁部に窓による極細の刻目を施す。外面は刷毛目整形後に上下をヘラミガキにより消す。内面ヘラミガキ。胎土に粗砂粒を含むが焼成良。	

(単位 cm)

番号	出土遺構	器種	法量	時期	特徴	備考
151	35号貯藏穴	壺	口径 高さ 底径 7.4	前期	壺の底部。外面は縦・斜位の刷毛目。内面はナデ整形。底外面はヘラケズリ。胎土に粗砂粒を含む。焼成良好。	
152	36号貯藏穴	壺	口径 高さ 底径 5.8	前期	壺の底部。外面はナデ整形。内面は器面剥落。底部内面に指圧痕あり。胎土に粗砂粒を含む。焼成ややあまい。	
153	36号貯藏穴	壺	口径 高さ 底径	前期	壺の肩部である。肩部に1条の範描き沈線をめぐらす。その下に窪による板文を施す。内外面器面剥落。胎土に粗砂粒を若干含む。焼成ややあまい。	
154	38号貯藏穴	壺	口径 14.5 高さ 底径	前期	内外面とも横ヘラミガキ。胎土は粗砂粒を含む。焼成良好。	
155	38号貯藏穴	壺	口径 高さ 底径	前期	小片からの復原品。頸部と胴部に各2条の沈線をめぐらし、この間を斜格子文でうめる。また頸部に複線弧文を描き、この間に縦位の平行文を描き、その左右に条線を施す。内外面横ヘラミガキ。焼成良好。	
156	38号貯藏穴	壺	口径 高さ 底径	前期	口唇部下辺に窪による細い刻目を施す。外面は斜・縦位の刷毛目、内面はナデ整形。外面に焼付着。胎土に粗砂粒を含む。成良。	
157	38号貯藏穴	壺	口径 高さ 底径	前期	内傾する平坦な口縁は短い。口唇部に細い刻目を施す。口縁部の内外面は横ナデ、胴部は内外面とも板状工具の擦過痕がみられる。胎土に粗砂粒を含む。焼成良。	
158	38号貯藏穴	壺	口径 高さ 底径	前期	口唇部に窪によるやや細い刻目を施す。外面は縦位の刷毛目の後に突帯を貼りつける。突帯のやや下位より内面にかけては横ナデ。胎土に粗砂粒を含む。焼成良。	
159	38号貯藏穴	壺	口径 高さ 底径	前期	内傾する脛口縁をつくり、刷毛目整形後に粘土帯を貼り口縁部をつくっている。口縁部は横ナデ、内面は板状工具による擦過痕がみられる。	
160	38号貯藏穴	壺	口径 高さ 底径 8.8	前期	壺の底部である。外面は横ヘラミガキ。内面はナデ整形である。胎土に粗砂粒を含む。焼成良好。	

(単位 cm)

番号	出土遺構	器種	法量	時期	特徴	備考
161	38号貯藏穴	壺	口径 高さ 底径 7.8	前期	壺の底部。外面は瓶底のヘラミガキ、内面はナデ、外底部はヘラケズリ後にナデ整形である。胎土に粗砂粒を含む。焼成良。	
162	38号貯藏穴	壺	口径 高さ 底径 5.5	前期	壺の底部。外面は刷毛目後にヘラミガキ。刷毛目若干残る。内面もヘラミガキ。外底面はヘラケズリ。胎土に粗砂粒を含む。焼成良。	
163	38号貯藏穴	壺	口径 高さ 底径 6.8	前期	壺の底部。外面は板状工具による擦過痕がみえ、下端は横ナデ。内面はナデ整形である。胎土に粗砂粒を含む。	
164	38号貯藏穴	壺	口径 高さ 底径 6.2	前期	壺の底部。外面は斜位の刷毛目、下方は横ナデ、内面はナデか、器面剥落。胎土に粗砂粒が非常に多い。焼成良。	
165	39号貯藏穴	壺	口径 高さ 底径	前期	口唇部に範によるやや細い刻目を施す。口縁部は内外面とも横ナデ。内面は斜位のナデ。外面は器面剥落。胎土に粗砂粒多い。焼成良。外面に煤付着。	
166	39号貯藏穴	壺	口径 高さ 底径	前期	く字状に外反する口縁の口唇部に範による太い刻目を施す。くびれに棱を有す。外面は斜位の刷毛目、口縁部は内外面とも横ナデ整形。胎土に粗砂粒多し。焼成良。	
167	39号貯藏穴	壺	口径 高さ 底径	前期	器縁の厚い口縁部である。粘土接合部が段となって残る。内外面とも丁寧な横ヘラミガキ。胎土に粗砂粒が多い。焼成良。跡状をなす形か。口唇部に刻目はない。	
168	39号貯藏穴	壺	口径 高さ 底径	前期	粘土接合部が段となって残る。内外面とも横ヘラミガキ。口唇部に刻目はない。粗砂粒を若干含む。焼成良。	
169	43号貯藏穴	壺	口径 23.0 高さ 27.0 底径 8.3	前期	口唇部に範による刻目を施す。口縁部は内外面とも横ナデ。胴部は内外面とも板状工具による擦過痕が残る。外底部付近はナデ上げ。胎土に粗砂粒を含む。焼成良。外面に煤付着。	
170	43号貯藏穴	壺	口径 18.2 高さ 底径	前期	口縁部は内外面とも横ナデ。胴部外面は板状工具の擦過痕、内面はナデ整形か。胎土に粗砂粒を若干含む。焼成ややあまい。外面上部に煤付着。	

(単位 cm)

番号	出土造構	器種	法量	時期	特徴	備考
171	43号貯藏穴	壺	口径 高さ 底径 7.7	前期	外面は板状工具による擦過痕が残る。内面は器面剥落。胎土は粗砂粒を含む。焼成良。	
172	44号貯藏穴	壺	口径 高さ 底径 8.6	前期	やや肩部の張る形状を呈す。全体に強い二次加熱を受け器面剥落。調整不明。	
173	44号貯藏穴	壺	口径 高さ 底径 11.1	前期	大型の壺である。肩部に1条の範描き沈線をめぐらす。肩から肩上位は内外面とも横ヘラミガキ。肩下位の外面は縦ヘラミガキ。下端は横ヘラミガキ。胎土に粗い砂粒が多い。二次加熱を受けている。	
174	44号貯藏穴	壺	口径 22.0 高さ 24.4 底径 8.2	前期	口唇部と胴部突帯に竪による刻目を施す。口縁部は断面三角形の粘土帶を貼り付けたもの。胴部外面は板状工具による擦過痕が残る。胎土は粗砂粒を含む。焼成良。外面下半に煤付着。	
175	44号貯藏穴	壺	口径 22.9 高さ 21.4 底径 7.8	前期	口唇部に竪による刻目を施す。口縁部下に粘土接合部が段になって残る。口縁部内外面とも横ナデ。胴部外面は板状工具による擦過痕が残る。内外面の器面剥落がみられる。胎土に粗砂粒を含む。焼成良。	
176	44号貯藏穴	壺	口径 26.0 高さ 底径	前期	口唇部に竪による刻目を施す。口縁部は内外面とも横ナデ。胴部は内外面とも丁寧なナデ整形。内面は凹凸部が多い。胎土に粗砂粒が多い。二次加熱を受けている。	
177	44号貯藏穴	壺	口径 19.0 高さ 底径	前期	直口の瓶口縁に粘土帶を貼り付け、外傾の口縁をなす。口唇部に竪による刻目を施す。口縁部は横ナデ。胴部の外面は概ねの刷毛目、内面はヘラケズリ整形。胎土に粗砂粒を含む。二次加熱を受けている。	
178	44号貯藏穴	鉢	口径 18.8 高さ 14.0 底径 7.4	前期	胴部の内面がヘラミガキであるほかは、全て丁寧な横ヘラミガキ。二次加熱により器面の剥落が苦しい。胎土に粗砂粒を含む。	
179	45号貯藏穴	壺	口径 24.4 高さ 28.2 底径 8.0	前期	口唇部下端に竪による刻目を施す。口縁部の内外面は横ナデ。他は器面の剥落著しく調整不良。胎土に粗砂粒を含む。二次加熱を受け、外面中ほどに煤付着。	
180	45号貯藏穴	壺	口径 (17.6) 高さ 24.6 底径 9.1	前期	口縁部内面から外面は横ヘラミガキである。頸部から胴部の内面は器面剥落。底部に小孔あり。焼成後に外側から穿つ。胎土は粗砂粒を含む。焼成ややあまい。	

(単位 cm)

番号	出土遺構	器種	法量	時期	特徴	備考
181	46号貯藏穴	壺	口径 30.2 高さ 底径	中期	平坦口縁部をなす。肩部外面は斜位の細い刷毛目、内面はナデ整形。口縁部は横ナデ。胎土は砂粒多い。焼成良好。	
182	46号貯藏穴	壺	口径 31.7 高さ 底径	中期	平坦口縁部をなす。口縁部は横ナデ。肩部外面は斜位の刷毛目、内面はナデ整形。胎土は粗砂粒多い。焼成良好。	
183	46号貯藏穴	壺	口径 高さ 底径 7.6	中期	外面は粗い斜・底位の刷毛目、部分的にナデ消す。内面はナデか。胎土に粗砂粒が多い。焼成良好。外部に煤付着。	
184	46号貯藏穴	壺	口径 高さ 底径 8.0	中期	外面は粗い斜・底位の刷毛目を施す。内面は器面剥落。胎土に粗砂粒を含む。焼成良好。	
185	46号貯藏穴	壺	口径 高さ 底径 7.2	中期	外面は粗位の粗い刷毛目、内面はナデ整形。胎土に粗砂粒を含む。焼成良好。	
186	46号貯藏穴	壺	口径 高さ 底径 7.9	中期	外面は器面剥落。内面はナデ整形で、下半に指ナデ圧痕が残る。胎土に粗砂粒を含む。二次加熱を受けている。	
187	46号貯藏穴	鉢	口径 33.9 高さ 16.0 底径 11.1	中期	外傾する口縁部で、肩上位に断面三角形の突唇をめぐらす。二次加熱を受け器面剥落が著しく、下肩部内面はナデ整形。胎土は粗い砂粒が多い。	
188	46号貯藏穴	鉢	口径 28.3 高さ 底径	中期	平坦口縁で肩上位に断面三角形の突唇をめぐらす。口縁部外面と突唇下位まで横ナデ。肩部の内外面とも板状工具による擦過後にナデ整形か。胎土は粗い砂粒多し。焼成やあまい。	
189	46号貯藏穴	壺	口径 32.0 高さ 底径	中期	平坦口縁をなす。内外面とも横ナデ整形。口縁平坦部および外面は黒塗り。胎土に砂粒が多い。焼成良好。	口縁平坦部から外面は黒塗り。
190	46号貯藏穴	器台	口径 9.2 高さ 16.5 底径 11.4	中期	外面は斜位の粗い刷毛目を施し、その下位には細い斜位の刷毛目を施す。器上下端は横ナデで刷毛目を一部ナデ消す。内面は両側よりナデ上げ。胎土に粗い砂粒を含む。焼成良。	

(単位 cm)

番号	出土遺構	器種	法 直	時 期	特 徴	備 考
191	47号貯藏穴	壺	口径 27.2 高さ 底径	前 期	焼成あまく器面剥落がみられる。口縁部内面は横ヘラミガキ。頸部内面にはケズリ痕が残る。胎土は砂粒が多い。	
192	47号貯藏穴	壺	口径 16.8 高さ 底径	前 期	内外面は横ヘラミガキ。頸部内面はナデ整形か、器面剥落。胎土は粗砂粒を含む。焼成良。	
193	47号貯藏穴	壺	口径 22.8 高さ 底径	前 期	口唇部と胴部安部に窓による刻目を施す。口縁部は内外面とも横ナデ。胴部外面は窓位の刷毛目、内面は丁寧なナデ整形である。胎土は粗砂粒が多い。焼成良。	
194	47号貯藏穴	壺	口径 高さ 底径 8.8	前 期	壺の底部。外面は窓位のヘラミガキ、下端は横ナデ整形。内面は板状工具の擦過痕がみられる。胎土は粗砂粒が多い。焼成良好。	
195	47号貯藏穴	壺	口径 高さ 底径 9.2	前 期	壺の底部。器面が剥落し、調整不明。胎土は粗い砂粒が多い。焼成不良。	
196	47号貯藏穴	壺	口径 高さ 底径 8.8	前 期	壺の底部。外面は丁寧なナデ。外底部は横ヘラミガキ。胎土は粗い砂粒を含む。焼成良好。	
197	48号貯藏穴	壺	口径 19.7 高さ 底径	前 期	口縁下に粘土接合部が段状になり残る。内外面とも横ヘラミガキ。胎土に粗い砂粒を若干含む。焼成良。	
198	48号貯藏穴	壺	口径 高さ 底径	前 期	口唇部の上下に窓による細い刻目を施す。外面に窓位の、内面に横位の刷毛目を施す。胎土に粗砂粒が多い。焼成良。	
199	48号貯藏穴	壺	口径 高さ 底径	前 期	口唇部に刻目はない。器面剥落し調整不明。胎土に粗砂粒が多い。	
200	48号貯藏穴	壺	口径 高さ 底径	前 期	口唇部に細い小さな刻目を施す。口縁部は内外面とも横ナデ。外面は細い刷毛目整形。胎土に粗砂粒が多い。	

(単位 cm)

番号	出土遺構	器種	法量	時期	特徴	備考
201	48号貯藏穴	壺	口径 高さ 底径	前期	口唇部に刻目はない。外面に縦條の刷毛目 整形後に突帯を貼り付ける。刷毛目の上から ナデ。口縁部内面は横ナデ整形。胎土に粗砂 粒が多い。焼成良。	
202	48号貯藏穴	壺	口径 高さ 底径	前期	無頸壺片である。肩部に直描き沈線による 複雑な複線弦文を描く。口縁部内外面とも横 ナデ、肩部内外面とも横ヘラミガキ。胎土は粗 砂粒が多い。焼成良。	
203	48号貯藏穴	壺	口径 高さ 底径 7.2	前期	壺の底部。底部に指圧痕が残る。器面剥落 し調整不明。胎土は粗砂粒多い。焼成ややあ まい。	
204	2号土壙	壺	口径 33.5 高さ 36.3 底径 7.2	中期	平坦口縁をなす。口縁部は内外面とも横ナ デ。肩部外表面は縦條の刷毛目(幅約2.5cm)、内 面は板状工具の擦過後にナデ整形。胎土は砂 粒が多く、粗砂粒若干含む。焼成良。	
205	2号土壙	壺	口径 29.5 高さ 底径	中期	平坦口縁をなす。口縁部内外面は横ナデ。 肩部は斜位の刷毛目、内面は削りの後にナデ 整形。胎土は粗砂粒を含む。焼成堅穢。	
206	2号土壙	高壺	口径 20.0 高さ 18.5 底径 13.6	中期	軽く外反する壺部口縁である。口縁と脚端 は横ナデ。器面剥落がみられるが、壺部内外 面は横ヘラミガキ。脚部外表面は縦條のヘラミ ガキ。同部内面はナデ整形で、扁状工具の圧 痕がみられる。胎土は粗砂多い。	
207	3号土壙	壺	口径 23.5 高さ 底径	前期	口唇部に窓による刻目を施す。口縁部は内 外面横ナデ。肩部は内外面とも板状工具によ る擦過痕がみられる。口縁下内面に指圧痕あ り。胎土は砂粒多い。焼成ややあまい。	
208	4号土壙	壺	口径 高さ 底径	前期	「T」唇部に細い窓による刻目を施す。口縁部 の内外面に横ナデ。肩部外表面は板状工具の擦 過痕がみられる。内面はナデか。胎土は粗砂 粒が多い。焼成ややあまい。外面に煤付着。	
209	4号土壙	壺	口径 高さ 底径	前期	口唇部に窓による太い刻目を施す。内外面 とも横ナデ整形。胎土は粗砂粒が多い。焼成 良好。外面に煤付着。	
210	4号土壙	壺	口径 高さ 底径	前期	口縁に粘土帶を貼り付け、口唇部が垂下 気味に口縁部をつくる。口唇部に刻目を施す。 内外面とも横ナデ。胎土に粗砂粒を含む。 焼成良好。	

(単位 cm)

番号	出土構構	器種	法量	時期	特徴	備考
211	4号土壙	壺	口径 17.2 高さ 底径	前期	やや内傾する平坦口縁部をなす。口唇部には蓋による小さな刻目を施す。口縁部は横ナデ。胴部の内外面には板状工具の擦過痕がみえる。胎土は粗砂粒を含む。焼成良好。外面に煤付着。	
212	4号土壙	壺	口径 高さ 底径	前期	壺の肩部片である。粘土接合部が段として残り蓋で強く押えている。段部に細い刻目を施す。内外面ともヘラミガキ。胎土は粗砂粒を含むが、焼成良好。	
213	5号土壙	壺	口径 23.7 高さ 底径	前期	口唇部下端と突堤による刻目を施す。口縁部内面に横位の粗い刷毛目、胴部内面は丁寧なナデ、外面は横・斜位の刷毛目（幅約2.7cm）整形に突堤を付ける。胎土は粗砂粒多い。焼成良好。外面に煤付着。	
214	5号土壙	壺	口径 高さ 底径	前期	壺肩部片である。上位に1条、下位に2条の沈線をめぐらし、この間に斜格子文を施す。いずれも範描き。内外面ともヘラミガキ。胎土は砂粒が多い。焼成堅緻。	
215	6号土壙	鉢	口径 20.1 高さ 底径	前期	口縁部は内外面横ナデ、胴部は内外面横ヘラミガキ整形である。胎土は粗砂粒を含むが、焼成堅緻。	
216	9号土壙	壺	口径 高さ 底径	前期	壺の肩部片である。下位に2条の範描き沈線をめぐらし、その上部に範描きの斜格子文を施す。外面は横ヘラミガキ、内面は横ナデ整形。胎土は粗砂粒を若干含む。焼成良好。	
217	9号土壙	壺	口径 18.3 高さ 21.7 底径 6.8	前期	口唇部に蓋による刻目を施す。口縁部内外面は横ナデ、胴部の内外面は板状工具による擦過痕が見える。胎土に粗砂粒が非常に多い。焼成やや不良。外面上部に煤付着。底部の孔は焼成後に外側より穿つ。	
218	9号土壙	壺	口径 19.0 高さ 底径	前期	口縁下外面に粘土接合部の段が残る。肩部に2条の範描き沈線を施す。口縁部と胴部内面は横ナデ、他は横ヘラミガキ整形である。胎土は粗砂粒が多い。二次加熱をうける。	
219	9号土壙	壺	口径 30.0 高さ 底径	前期	口唇部の上下端に細くて雜な窪による刻目を施す。口縁部は横ナデ、他は横ヘラミガキ整形である。外面は刷毛目をカキ消すも残る。胎土は粗砂粒を含む。焼成良好。	
220	11号土壙	鉢	口径 40.0 高さ 底径	前期	大型の鉢。口縁部の刷毛目は上部をナデ消す。外面は口縁下より横位・斜位の刷毛目整形で、突堤より下は横ヘラミガキで刷毛目を消す。胴部内面はヘラケズリ。胎土は粗砂粒が多いが、焼成良好。	

(単位 cm)

番号	出土遺構	器種	法量	時期	特徴	備考
221	11号 土壙	壺	口径 27.1 高さ 29.9 底径 8.6	前期	口縁部の上端に細小の、下端に太い刻目を施す。口縁部内面は横・斜位の刷毛目、外面は上半を横・斜位の、下半を縱位の粗い刷毛目整形である。胴部内面はナデ整形か。胎土は粗砂粒多い。焼成良好。煤付着。	
222	11号 土壙	壺	口径 29.1 高さ 26.2 底径 7.5	前期	口縁部の上下端に小さい刻目を施す。口縁部内面は斜位の粗い刷毛目で、外面は全体に粗い刷毛目整形で、内面は板状工具による擦過痕がみられる。胎土に粗砂粒を含む。焼成良。	
223	11号 土壙	壺	口径 12.0 高さ 30.9 底径 8.1	前期	やや肉厚の口縁部である。口縁部内面から外面は全て横ヘラミガキである。内面の頭部には指圧痕がみられる。胎土に粗砂粒が多い。焼成良。	
224	12号 土壙	壺	口径 高さ 底径	前期	口縁部に細い窓による刻目を施す。口縁内面に横位の刷毛目を施し、上部をナデ消す。外面は斜位の粗い刷毛目整形。胎土は粗砂粒が多い。焼成良。	
225	12号 土壙	壺	口径 高さ 底径	前期	壺の口縁部片である。内外面とも横ヘラミガキ。胎土は砂粒が多い。焼成ややあまい。	
226	12号 土壙	壺	口径 高さ 底径	前期	壺の口縁部片である。口縁部外側が横ナデであるほかは横ヘラミガキ。胎土は粗い砂粒を含む。焼成ややあまい。	
227	12号 土壙	壺	口径 高さ 底径 7.1	前期	壺の底部である。内外面とも丁寧なナデ。外面に煤付着。胎土は粗砂粒を含む。焼成良好。	
228	12号 土壙	壺	口径 高さ 底径 7.0	前期	壺の底部である。内外面とも丁寧なナデ。胎土は粗砂粒が多い。焼成良好。	
229	2号 空穴	壺	口径 66.0 高さ 底径	中期	口縁部は横ナデ。胴部外面は縦ナデ整形で、上面部に窓による縦位の細い刷毛線をいくつも施し、下半部には叩き（幅1.5~2.0cm）が残る。胴部内面は横・斜位のナデ整形で、刷毛目を消す。工具端部の圧痕が残る。	外面黒塗り
230	溝	壺	口径 高さ 底径 11.5	中期	229と同一個体でその底部と思われる。内外面とも縦位のナデ整形。胎土は粗砂粒多い。焼成良。	

(単位 cm)

番号	出土造構	器種	法量	時期	特徴	備考
231	2号竪穴	壺	口径 高さ 底径	中期	大型壺の口縁部である。内外面とも横ナデ整形。粘土接合部には指先の強い圧痕が連続する。胎土に粗砂粒が多い。焼成良。	
232	2号竪穴	壺	口径 高さ 底径	中期	外反する口縁の内側に粘土を貼り、内傾気味の平坦口縁部をつくる。器面剥落し、調整不明。胎土に粗砂粒が多い。	
233	溝下層	壺	口径 14.9 高さ 底径	前期	頸部に範描き沈線をめぐらす。頸部外面は横ヘラミガキ。他は器面剥落し調整不明。内面には指圧痕が残る。胎土に粗砂粒を若干含む。焼成良。	
234	溝下層	壺	口径 13.5 高さ 底径	前期	口頭部外表面が楕位であるほかは横位で、いずれも細かいヘラミガキ整形である。胎土は粗砂粒が多い。焼成良好。	
235	溝下層	無頸壺	口径 高さ 底径	前期	無頸壺の口縁部か。内外面とも横ヘラミガキを施す。胎土に粗砂粒が多い。焼成良。	
236	溝下層	壺	口径 高さ 底径	前期	頸部の上下に各3条の範描き沈線をめぐらし、その間に楕位の3条の沈線をおおむね4ヶ所に施す。口縁部内側に横位の刷毛目。外面の刷毛目は沈線間をナデ消す。胎土は粗砂粒多い。焼成良好。	
237	溝下層	壺	口径 35.9 高さ 底径	前期	大型品である。頸部に2条の範描き沈線を施す。口縁部内面に横位の刷毛目を施す。頸部外面は刷毛目整形の後に横ヘラミガキ。胎土に粗砂粒が多い。焼成良。	
238	溝下層	壺	口径 高さ 底径	前期	壺の口縁部か。口唇部内側に刷毛目工具縁部使用の刻目を、外側に壓による刻目を施す。胎土は粗い砂粒が多い。焼成良。	
239	溝下層	壺	口径 高さ 底径 6.1	前期	壺の底部で、円板状をなす。外面はヘラケズリ後に丁寧なナデ、内面はナデ整形。胎土は粗砂粒多い。焼成良好。	
240	溝下層	壺	口径 高さ 底径 6.8	前期	壺の底部である。外面はヘラミガキか。内面は丁寧なナデ整形。胎土に粗砂粒を含む。焼成良。	

(単位 cm)

番号	出土遺構	器種	法量	時期	特徴	備考
241	溝下層	壺	口径 高さ 底径 8.1	前期	壺の底部である。外面は細い刷毛目をナデ消す。内面はナデ整形。胎土に粗砂粒を含む。焼成良。	
242	溝下層	壺	口径 高さ 底径 7.7	前期	壺の底部である。外面は斜位の粗い刷毛目、下端は縦位のヘラミガキ。内面はヨコヘラミガキ。胎土に粗い砂粒を含む。焼成良。	
243	溝下層	鉢	口径 15.3 高さ 底径	前期	器壁の厚いものである。内面は丁寧なナデ整形。外面は器面の刺落が著しいが、刷毛目が觀察される。胎土は粗砂粒を多く含む。焼成良。	
244	溝下層	壺	口径 高さ 底径 11.2	前期	壺の底部である。外面は丁寧なナデである。刷毛目工具端部の圧痕がみられ、恐らく刷毛目をナデ消しているものと思われる。内面器面刺落。胎土に粗砂粒多し。焼成良。	
245	溝下層	壺	口径 高さ 底径 6.2	前期	壺の天井部である。外面は縦位の粗い刷毛目、内面は丁寧なナデ整形である。胎土は粗い砂粒が多い。焼成良。	
246	溝下層	壺	口径 高さ 底径	前期	壺の小片である。受け部内面から外面全体は横ナデ。内面は横ヘラミガキ。胎土は砂粒が多い。焼成良好。	
247	溝下層	脚	口径 高さ 底径 16.0	前期	器壁の厚い脚部片か。外面はヘラミガキ、内面下位はナデ整形形。同上位はヘラケズリ痕が残る。胎土は粗砂粒が多い。焼成級である。	
248	溝下層	甕	口径 高さ 底径	前期	口唇部に窓による刻目を施す。外面は斜・縦位の刷毛目、内面は横ナデによる整形。胎土に粗砂粒が多い。焼成良。	
249	溝下層	甕	口径 高さ 底径	前期	口唇部に窓による細小な刻目を施す。口縁部内面は横ナデ。体部外面は板状工具の擦過痕がみられ、内面は丁寧なナデ整形。胎土に砂粒が多い。焼成良。	
250	溝下層	甕	口径 高さ 底径	前期	口唇部下端に窓による刻目を施す。器面刺落が著しい。胎土に粗砂粒が多い。焼成良。	

(単位 cm)

番号	出土遺構	器種	法量	時期	特徴	備考
251	溝下層	甕	口径 高さ 底径	前期	口唇部に施による刻目を施す。内外面とも丁寧なナデ整形。胎土は粗砂粒を含む。焼成良。	
252	溝下層	甕	口径 高さ 底径	前期	口唇部下端に施による刻目を施す。口縁内面下位は横位の、外面は縱位の刷毛目整形である。胎土は粗砂粒多い。焼成良好。	
253	溝下層	甕	口径 23.2 高さ 底径	前期	口唇部と胴上半の段部にやや難な施による刻目を施す。内外面ともナデ整形。胎土に細砂粒多し。焼成良。	
254	溝下層	甕	口径 高さ 底径	前期	口唇部の上下端と胴部突帯に施による刻目を施す。口縁内面に横位の、外面は横・斜位の刷毛目整形を施す。後に突帯を貼り付ける。胎土は粗い砂粒多い。焼成良。外面に煤付着。	
255	溝下層	甕	口径 高さ 底径	前期	口唇部の上下端と胴部突帯に施による刻目を施す。口縁下外面に斜位の細い刷毛目を施し、他面は横ナデ整形である。胎土は粗い砂粒が多い。焼成ややあまい。	
256	溝下層	甕	口径 高さ 底径	前期	口唇部下端と胴部突帯に施による刻目を施す。口縁部の内外面は横ナデ。突帯下は斜位の刷毛目整形である。胎土は粗砂粒が多い。焼成良。	
257	溝下層	甕	口径 高さ 底径	前期	断面三角形状の粘土帯を貼り付けた口縁部である。口唇部と胴部突帯に施による刻目を施す。内面はナデ、外面は斜位の刷毛目整形。胎土は粗砂粒多い。焼成良好。外面に煤付着。	
258	溝下層	甕	口径 高さ 底径	前期	断面三角形状の粘土帯を貼り付けた口縁部でやや内傾する。口唇部と胴部突帯に施による刻目を施す。口縁下に刷毛目が残るがナデ消している。突帯下は横位の刷毛目整形。胎土は粗砂粒多い。焼成良。煤付着。	
259	溝下層	甕	口径 高さ 底径	前期	内傾する体部に断面三角形状の粘土帯を貼り付け口縁部をつくる。口唇部と胴部突帯に施による刻目を施す。内外面とも丁寧なナデ整形である。胎土に粗い砂粒が多い。焼成良。外面に煤付着。	
260	溝下層	甕	口径 17.4 高さ 底径	前期	直口縁の下方に断面三角形の突帯を貼り付け、施による刻目を施す。突帯部および内面は丁寧なナデ。内面は一部横位の刷毛目が残る。外面の突帯下方は縱位の粗い刷毛目整形。胎土は粗砂粒多い。外面煤付着。	

(単位 cm)

番号	出土遺構	器種	法量	時期	特徴	備考
261	溝下層	甕	口径 高さ 底径	前期	直口縁をなす。胴上位に断面三角形の突帯をめぐらす。突帯より上部および内面は横ナデ、突帯より下は縦位のやや粗い刷毛目整形を施す。胎土は粗砂粒含む。焼成良。外面煤付着。	
262	溝下層	甕	口径 22.7 高さ 底径	前期	体部を刷毛目整形した後に粘土を接合し口縁部を造る。接合部が段となって残る。口縁部内面と胴部外面は横位の刷毛目整形。胴部内面には刷毛目工具痕あり、ナデか。胎土は粗砂粒多い。焼成良。外面煤付着。	
263	溝下層	甕	口径 18.4 高さ 18.9 底径 7.0	前期	口縁部内面に横位の、胴部外面に縦位の刷毛目を施す。口頭部外面は横ナデで、刷毛目をナゲ消す。胴部内面はナデ整形。胎土は粗砂粒が多い。焼成ややあまい。口縁下外面に煤付着。	
264	溝下層	甕	口径 10.3 高さ 13.5 底径 6.7	前期	全体に厚手の手捏ね状の土器である。内外面とも丁寧なナデで、外面は刷毛目を消す。胎土は粗砂粒が多い。焼成ややあまい。	
265	溝下層	甕	口径 高さ 底径 7.7	前期	甕の底部である。外面は縦位の刷毛目整形。内面はナデか。胎土は粗砂粒が多い。焼成ややあまい。	
266	溝下層	甕	口径 高さ 底径 6.7	前期	甕の底部である。外面は縦位の粗い刷毛目整形。内面はナデか。胎土は粗砂粒多い。焼成良。	
267	溝下層	甕	口径 高さ 底径 5.8	前期	甕の底部である。内外面ともナデ整形。胎土は粗砂粒が多い。焼成良。	
268	溝下層	甕	口径 高さ 底径 8.8	前期	甕の底部である。外面は丁寧なナデ整形。底部の孔は焼成後に穿つ。胎土に粗砂粒多し。焼成良。	
269	溝上層	甕	口径 高さ 底径	中期	口縁下に範描きの沈線をめぐらす。外面は斜位の刷毛目整形で、口縁下をナゲ消す。口縁内面は横ナデ。胎土に粗砂粒を若干含む。焼成良。	
270	溝上層	甕	口径 25.6 高さ 底径	中期	口縁部の内外面は横ナデ。胴部の外面は横位の刷毛目、内面はナデ整形。胎土に砂粒を含む。焼成良好。外面に煤付着。	

(単位 cm)

番号	出土遺構	器種	法量	時期	特徴	備考
271	溝上層	甕	口径 28.3 高さ 底径	中期	口縁部の内外面は横ナデ。胴部の外面は継位の刷毛目、内面はナデによる整形。口縁下に後がつく。胎土は砂粒多し。焼成良。	
272	溝上層	甕	口径 27.0 高さ 底径	中期	口縁部の内外面とも横ナデ。胴部外面は継位の刷毛目整形後に3条の籠焼き沈線をめぐらす。口縁下の刷毛目はナデ消す。胎土は細砂粒多し。焼成良好。	
273	溝上層	甕	口径 27.2 高さ 底径	中期	口縁部の内外面とも横ナデ。胴部外面は斜位の細い刷毛目整形。内面には刷毛目工具線の圧痕残るが、ナデ整形である。胎土は粗砂粒を多く含む。焼成良。	
274	溝上層	甕	口径 26.1 高さ 底径	中期	口縁部の内外面とも横ナデ。胴部外面は継位の刷毛目を施す。内面はナデか。胎土は粗砂粒が多い。焼成良。	
275	溝上層	甕	口径 26.5 高さ 底径	中期	口縁の内外面とも横ナデ。胴部外面は、斜・継位の刷毛目(工具線約 2.3 cm)を施す。籠焼き沈線は刷毛目整形後に施す。内面はナデ整形。胎土は砂粒が多い。	
276	溝上層	甕	口径 30.2 高さ 底径	中期	やや内傾する平坦口縁で、口唇部籠ケゼリ整形でシャープである。胴部外面は継位の細い刷毛目である。他は横ナデ整形。胎土は粗砂粒を僅か含む。焼成良。外面に煤付着。	
277	溝上層	甕	口径 33.0 高さ 底径	中期	平坦口縁である。同部内外面は横ナデ整形。胴部外面は継位の刷毛目整形である。短刷の菱形土器か。胎土は細砂粒が多い。焼成良好。	
278	溝上層	甕	口径 高さ 底径	中期	内傾する平坦口縁をなす。口唇部上端に部分的にはあるが小さい刻目を施す。口縁部は横ナデ、胴部外面は継位の刷毛目整形である。	
279	溝上層	甕	口径 34.5 高さ 底径	中期	やや内傾する平坦口縁である。口縁部内外面とも横ナデ。胴部外面は継位の細い刷毛目整形。後に籠による沈線をめぐらす。上部の刷毛目はナデ消すも残る。胎土は細砂粒が多い。焼成良好。	
280	溝上層	甕	口径 30.1 高さ 底径	中期	やや内傾する平坦口縁である。口縁部は横ナデ。胴部外面は斜位の細い刷毛目、内面はナデによる整形。胎土は砂粒を含む。焼成良好。	

(単位 cm)

番号	出土遺構	器種	法量	時期	特徴	備考
281	溝上層	甕	口径 31.7 高さ 36.1 底径 6.9	中期	平坦口縁をなす。平坦部の中ほどに粘土接着部を窪で強く押えた跡が凹部となってめぐる。肩部外面は輻位の刷毛目を数段に分け施す。胎土は砂粒が多い。焼成良好。	
282	溝上層	甕	口径 29.0 高さ 底径	中期	内傾する平坦口縁である。肩部外面は輻位の丁寧な刷毛目、内面はナデ整形である。胎土は粗砂粒を若干含む。焼成良好。	
283	溝上層	甕	口径 26.0 高さ 底径	中期	平坦口縁をなす。口縁部は横ナデ。肩部外面の輻位の細い刷毛目はナデ消されている。胎土は砂粒が多い。焼成良好。	
284	溝上層	甕	口径 29.3 高さ 底径	中期	平坦口縁をなす。口縁部は横ナデ。肩部外面は輻位の細い刷毛目を施す。その上部はナデ消されている。胎土に細砂粒が多い。焼成良好。	
285	溝上層	甕	口径 31.1 高さ 底径	中期	やや外傾する平坦口縁をなす。口縁部は横ナデ。肩部外面は斜位の細い刷毛目で、部分的にナデ消す。内面は口縁下に指圧痕が残り、ナデ整形。胎土は細砂粒が多い。焼成良好。	
286	溝上層	甕	口径 31.0 高さ 底径	中期	平坦口縁をなす。口縁部はナデ。肩部外面は斜位の細い刷毛目を施す。内面はナデ整形。胎土は細砂粒が多い。焼成良好。	
287	溝上層	甕	口径 32.0 高さ 底径	中期	平坦口縁をなす。口縁部は横ナデ。肩部外面に輻位の細い刷毛目を施し、その上部をナデ消す。内面はナデ整形。胎土は細砂粒が多い。焼成良好。	
288	溝上層	甕	口径 26.3 高さ 底径	中期	平坦口縁をなす。口縁部は横ナデ。肩部外面は輻位の細い刷毛目を施し、その上部をナデ消す。内面は口縁下に指圧痕が残り横ナデ整形。	
289	溝上層	甕	口径 30.0 高さ 底径	中期	平坦口縁をなす。口縁部は横ナデ。肩部外面は輻位の刷毛目、内面はナデ整形である。胎土は細砂粒が多い。焼成良好。	
290	溝上層	甕	口径 33.9 高さ 39.5 底径 7.6	中期	内傾する口縁をなす。口縁部は横ナデ、肩部は外面を輻位の細い刷毛目、内面はナデ整形である。胎土は粗い砂粒を含む。焼成良好。	

(単位 cm)

番号	出土遺構	器種	法量	時期	特徴	備考
291	溝上層	甕	口径 31.1 高さ 底径	中期	口縁部は横ナデ。胴部外面は、縦位の刷毛目で、その上部をナデ消す。内面はナデ整形である。胎土は細砂粒が多い。焼成良。	
292	溝上層	甕	口径 34.0 高さ 底径	中期	口縁部は横ナデ。胴部外面は縦位の刷毛目、内面はナデ整形である。胎土に細砂粒が多い。焼成良。	
293	溝上層	甕	口径 33.1 高さ 底径	中期	胴部の張る土器である。胴上部に断面三角形の突帯を貼りつける。突帯下に斜位の刷毛目整形を施すほかは全面ナデによる整形。胎土は細砂粒が多い。焼成良。	
294	溝上層	甕	口径 36.0 高さ 底径	中期	平坦口縁をなす。胴部の形状から鉢形をなす器形かとも思われる。全面横ナデによる整形である。内面に指圧痕が残る。胎土は細砂粒が多い。焼成良。	
295	溝上層	甕	口径 39.0 高さ 底径	中期	胴部に2条の断面三角形の貼付け突帯をめぐらす。突帯下部が斜位の刷毛目であるほかは横ナデ整形である。突帯部内面は指圧痕が残る。胎土は細砂粒を含むが、焼成良好。	
296	溝上層	甕	口径 39.6 高さ 底径	中期	やや胴部の張る器形を呈す。胴上部に断面M字形の貼付け突帯をめぐらす。突帯の下部に縦位の刷毛目を施し、他は横ナデ整形である。胎土は粗砂粒が多い。焼成良。	
297	溝上層	甕	口径 39.0 高さ 底径	中期	胴部上位に断面M字形の貼付け突帯をめぐらす。突帯下位は縦位の刷毛目を施し、他は横ナデ整形である。胎土は細砂粒が多い。焼成良。	
298	溝上層	甕	口径 18.3 高さ (16.0) 底径 9.2	中期	小型の甕で、底径の大きいものである。口縁部は横ナデ、胴部は内外面とも横ヘラミガキ整形である。胎土は砂粒を含む。焼成やや不良。	
299	溝上層	甕	口径 14.1 高さ 14.1 底径 8.6	中期	小型の甕で、胴部は橢形をなす。胴中央部に断面三角形の貼付け突帯をめぐらす。胴上部の内外面はヘラミガキ、下胴部は器面剥落。胎土は細砂粒を含む。焼成良。	
300	溝上層	甕	口径 高さ 底径 10.6	中期	短胴型の甕部であろう。外面は縦位のヘラケズリ後にナデ、内面は丁寧なナデ整形である。胎土は砂粒が多い。焼成良好。	

(単位 cm)

番号	出土遺構	器種	法量	時期	特徴	備考
301	海上層	甕	口径 25.0 高さ 底径	中期	やや脇が張り、短胴気味の型である。口縁部は横ナデ。胴部外面はケズリ後にナデ、内面は横ヘラミガキ整形。胎土は砂粒が多い。焼成あまり。	
302	溝上層	甕	口径 29.1 高さ 底径	中期	口縁下に断面三角形の低い貼付け突唇をめぐらす。口縁部と突唇部まで横ナデ。胴部の内外面はヘラミガキである。胎土は細砂粒が多い。焼成良好。	
303	溝上層	甕	口径 26.6 高さ 底径	中期	口縁下に断面三角形の貼付け突唇をめぐらす。口縁部から突唇部は横ナデ。内面と外面下半はヘラミガキ整形である。胎土は砂粒が多い。焼成良。	
304	海上層	甕	口径 20.9 高さ 底径	中期	脇が大きく張る型である。胴上部に断面三角形の貼付け突唇をめぐらす。口縁部と胴上部外面は横ナデ。胴下半と内面はナデ整形。胎土に粗砂粒を含む。焼成良好。	
305	溝上層	甕	口径 高さ 底径 7.8	中期	外面は継位の細い刷毛目、内面はナデによる整形。胎土は砂粒が多い。焼成良。	
306	溝上層	甕	口径 高さ 底径 7.2	中期	外面は継位の細い刷毛目整形。内面は器面剥落。胎土は粗砂粒が多い。焼成良好。	
307	溝上層	甕	口径 高さ 底径 9.4	中期	外面は斜位の刷毛目、内面は丁寧なナデ整形である。胎土は粗砂粒が多い。焼成良好。前期に属するものとも考えられる形状を呈す。	
308	溝上層	甕	口径 高さ 底径 7.4	中期	外面は継位の刷毛目整形。内面は器面剥落。胎土は粗砂粒が多い。焼成ややあまり。	
309	溝上層	甕	口径 38.9 高さ 底径	中期	器壁が厚くやや大型の型である。口縁下に断面三角形の貼付け突唇をめぐらす。整形は横ナデで、外面は刷毛目をナデ消している。胎土は砂粒が多い。焼成ややあまり。	
310	溝上層	甕	口径 39.2 高さ 底径	中期	胴部が大きく張り出す器形のもの。口縁部内外面と胴部外面は横ナデ、胴部内面は継ナデによる整形。胎土は粗砂粒が多い。焼成ややあまり。	

(単位 cm)

番号	出土遺構	器種	法量	時期	特徴	備考
311	溝上層	壺	口径 43.1 高さ 底径	中期	口縁部の内外面および胴部外面は横ナデ、胴部内面は横ヘラケズリ。胎土は砂粒が多い。焼成良好。	
312	溝上層	壺	口径 29.0 高さ 底径	中期	器壁の厚い土器である。口縁部は横ナデ、胴部外面とも横ヘラミガキ。胎土は細砂粒が多い。焼成良好。	
313	溝上層	壺	口径 14.6 高さ 18.0 底径 5.0	中期	平坦口縁をなす。胴部に断面三角形の貼付け突帯をめぐらす。口縁部と胴内面を横ナデ。頭部外面は輥位の、内面と胴外面は横位のヘラミガキ整形。胎土は砂粒が多い。焼成ややあまい。	
314	溝上層	壺	口径 18.8 高さ 底径	中期	やや外傾する短い平坦口縁部をつくる。頭部に輥状工具による押圧沈線がある。胴部には断面三角形の貼付け突帯をめぐらす。内外面とも横ナデ整形で、胴部内面下方はケズリ痕が残る。胎土は砂粒が多い。	
315	溝上層	壺	口径 11.3 高さ 13.6 底径 5.3	中期	直口縁の壺である。胴部に断面三角形の貼付け突帯をめぐらす。突帶下の胴部外面が横ヘラミガキであるほかは接ナデ整形である。胎土は粗砂粒を含む。焼成良。	
316	溝上層	壺	口径 32.9 高さ 底径	中期	平坦口縁をなす。全面横ナデによる整形。口縁平坦部から外面は黒塗りである。胎土は細砂粒が多い。焼成良好。	黒塗り
317	溝上層	壺	口径 31.6 高さ 底径	中期	平坦部の中ほどがやや凹む口縁部である。内外面ともナデ整形である。頭部外面には輥による暗文を全面に施す。胎土は砂粒を含む。焼成良好。	
318	溝上層	壺	口径 29.1 高さ 底径	中期	平坦口縁をつくる。全面横ナデによる整形である。胎土は細砂粒が多い。焼成良。	
319	溝上層	壺	口径 25.4 高さ 底径	中期	外傾する平坦口縁部をつくる。内外面とも横ナデ整形。口縁平坦部から頭部外面は黒塗りである。胎土は砂粒が多い。焼成ややあまい。	黒塗り
320	溝上層	壺	口径 24.9 高さ 底径	中期	平坦部が内側に伸びる口縁部である。口縁部と頭上部内外面は横ナデ、頭下部内面は輥ナデ整形である。胎土は粗砂粒が多い。焼成良。	

(単位 cm)

番号	出土場所	器種	法量	時期	特徴	備考
321	溝上層	壺	口径 34.6 高さ 40.0 底径 8.5	中期	平底をなす口縁は特徴あるもので、内傾の張り出しが高くなっている。全体に器面の剥落が著しいが、頸部および胴上部外面は横ナデ整形。外面は黒塗りか、部分的にみられる。胎土は粗砂粒多し。焼成良好。	
322	溝上層	壺	口径 28.4 高さ 底径	中期	軽く外反する口縁部である。口縁部および頸部内面は横ナデ。頸部外面はヘラミガキ整形か。胎土は砂粒が多い。焼成良好。	
323	溝上層	壺	口径 25.8 高さ 底径	中期	大きく外反する口縁部である。頸部内面は横ヘラミガキ、口縁部から頸部外面は横ナデ整形である。頸部には粗い瓦による暗文を全面に施す。胎土は細砂粒を含む。焼成良好。	
324	溝上層	壺	口径 高さ 底径	中期	壺の剥離部である。2条の断面三角形の貼付け突唇がある。外面は横ヘラミガキ、突唇部は横ナデ整形である。胎土に粗砂粒若干含む。焼成ややあまい。	
325	溝上層	壺	口径 27.4 高さ 底径	中期	口頭部の内面は横ヘラミガキ、外面は横ナデ整形。頭部には粗く雜な直描き暗文を施す。暗文は小片であるが、全面に施すものであろう。胎土は細砂粒が多い。焼成良好。	
326	溝上層	壺	口径 27.1 高さ 底径	中期	口頭部の内面は横ヘラミガキ、外面は横ナデ整形。頭部には11条前後を1単位とし5ヶ所ほどに直描き暗文を施す。胎土は砂粒が多い。焼成良好。	
327	溝上層	壺	口径 27.7 高さ 底径	中期	口頭部の内面は横ヘラミガキ、外面は横ナデ整形である。頭部には15条前後とする直描き暗文を6ヶ所に施す。胎土は細砂粒が多い。焼成良好。	
328	溝上層	壺	口径 38.3 高さ 底径	中期	口頭部の上部内外面とも横ナデ。下部内外面ともナデ整形である。胎土は砂粒多い。焼成堅緻。	
329	溝上層	壺	口径 高さ 底径 8.4	中期	頭部に2条の断面三角形の貼付け突唇をめぐらす。器面の剥落が著しい。外面はヘラミガキ整形か。胎土は粗砂粒が多い。焼成あまい。	
330	溝上層	壺	口径 高さ 底径 9.8	中期	頭部に断面三角形の、胴部にM字形の貼付け突唇をめぐらす。胴上部外面と頭部内面はやや粗い横ヘラミガキ。胴下部外面は横ヘラミガキ。頭部は打ち欠いたようである。胎土は粗砂粒多い。焼成ややあまい。	

(単位 cm)

番号	出土遺構	器種	法量	時期	特徴	備考
331	溝上層	壺	口径 28.1 高さ 底径	中期	頭部内面と肩部外面は横ヘラミガキ。頭部外側と肩部内面はナデ整形である。頭部には対による幅 2.5 mm の暗文を全面に施す。肩部には 5 条を 1 単位とする竪描き沈線を 4ヶ所に施す。胎土は粗砂粒が多い。	
332	溝上層	壺	口径 高さ 底径	中期	器面の調査が著しく調整不明。肩部に断面 M 字形の貼付け突帯をめぐらす。肩部に 4 条を 1 単位とする竪描き沈線を 6ヶ所に施す。胎土は粗砂粒が多い。焼成ややあまい。	
333	溝上層	壺	口径 高さ 底径	中期	壺の肩部である。断面 M 字形の貼付け突帯をめぐらす。肩部は横ヘラミガキ後に脱く細い 6 条の沈線を描く。胎土は粗砂粒を若干含む。焼成良。	
334	溝上層	壺	口径 33.2 高さ 底径	中期	内外面とも横ヘラミガキ。外面に対による細い暗文を全面に施す。内外面とも丹塗り。胎土は砂粒を含む。焼成ややあまい。	丹塗り
335	溝上層	壺	口径 34.2 高さ 底径	中期	頭部の内外面および肩部外面は横ヘラミガキ。頭部内面はナデ整形。頭部には対による暗文を全面に施す。内外面とも丹塗り。肩部の突帯は剥落。胎土は粗砂粒を含む。焼成ややあまい。	丹塗り
336	溝上層	壺	口径 31.5 高さ 底径	中期	内外面とも器面剥落し調整不明。胎土は粗砂粒が多い。焼成あまい。	
337	溝上層	壺	口径 高さ 底径 5.7	中期	壺の底部。外面はヘラミガキ整形か。内面はナデ整形。胎土は砂粒が多い。焼成ややあまい。	
338	溝上層	壺	口径 高さ 底径 6.4	中期	壺の底部。外面は概ねのヘラミガキ、内面はヘラケズリ整形。胎土は砂粒が多い。焼成堅微。	
339	溝上層	壺	口径 高さ 底径 6.3	中期	壺の底部。器面剥落が著しい。外面はヘラミガキ整形か、丹塗りである。胎土は粗砂粒を含む。焼成ややあまい。335 の底部か。	丹塗り
340	溝上層	壺	口径 高さ 底径 6.6	中期	壺の底部。外面は概ねのヘラミガキ、内面はナデ整形。内面には指先圧痕が残る。胎土は砂粒を含む。焼成良。	

(単位 cm)

番号	出土遺物	器種	法量	時期	特徴	備考
341	溝上層	壺	口径 高さ 底径 7.0	中期	蓋の底部。外面は縦位のヘラミガキ、内面は丁寧なナデ整形である。胎土は砂粒を含む。焼成良好。	
342	溝上層	壺	口径 高さ 底径 11.4	中期	蓋の底部。肩部および底部の外面は横ヘラミガキ、胴部外面は縦位のヘラミガキである。胎土は砂粒を含む。焼成良好。	
343	溝上層	無頭壺	口径 12.0 高さ 底径	中期	口縁の平坦部に、対称な位置に各2個の孔を穿つ。紐掛け用と思われる。孔は焼成前に上から穿つ。器面の剥落が著しく調整不明。胎土は粗砂粒が多い。焼成ややあまい。	
344	溝上層	無頭壺	口径 17.5 高さ 15.0 底径 6.8	中期	内傾する口縁の平坦部に、対称な位置に各2個の孔を穿つ。孔は焼成前に上から穿つ。内面はナデ整形。外面は器面剥落し調整不明。胎土は砂粒が非常に多い。焼成ややあまい。	
345	溝上層	無頭壺	口径 18.2 高さ 底径	中期	内傾する口縁の平坦部の対称的な位置に各2個の孔を穿つ。孔は焼成前に上から穿つ。器面剥落し調整不明。胎土は粗砂粒を若干含む。焼成ややあまい。	
346	溝上層	蓋	口径 18.0 高さ 4.7 底径 4.2	中期	対称的な位置に各2個の孔を焼成前に穿つ。343~345の土器群とセットになる土器か。内外面とも器面剥落し調整不明。胎土は粗い砂粒を含む。焼成不良。	
347	溝上層	蓋	口径 18.3 高さ 4.6 底径 3.6	中期	対称的な位置に各2個の孔を穿つ。孔は焼成前に上から穿つ。器面剥落が著しく調整不明。胎土は砂粒が多い。焼成あまい。	
348	溝上層	蓋	口径 高さ 底径 6.2	中期	蓋の天井部である。外面は縦位の刷毛目、内面はナデ整形である。胎土は砂粒を含む。焼成良好。	
349	溝上層	蓋	口径 27.2 高さ 9.0 底径 5.8	中期	外面は縦位の刷毛目を施し、下部はナデ消す。内面下部は横位の刷毛目整形である。胎土は粗砂粒を含む。焼成良好。	
350	溝上層	鉢	口径 10.4 高さ 6.1 底径 5.4	中期	小型の鉢である。内外面横ナデ整形。断面三角形の貼付け突唇をめぐらす。胎土は砂粒を含む。焼成堅密。	

(単位 cm)

番号	出土造構	器種	法量	時期	特徴	備考
351	溝上層	鉢	口径 9.0 高さ 底径	中期	小型の鉢である。内外面とも横ナデ整形である。断面三角形の貼付け突帯をめぐらす。胎土は細砂粒を若干含む。焼成良好。	
352	溝上層	浅鉢	口径 19.6 高さ 底径	中期	浅鉢か。内外面とも横ナデ整形。胎土に細砂粒を多く含む。焼成良。	
353	溝上層	浅鉢	口径 19.0 高さ 底径	中期	浅鉢か。口唇部は若干段がつく。内外面とも横ナデ整形である。胎土は細砂粒を含む。焼成良好。	
354	溝上層	浅鉢	口径 17.0 高さ 底径	中期	浅鉢か。内外面とも丁寧なナデの上、丹塗り。脚がつくものか。胎土は粗い砂粒を若干含む。焼成ややあまい。	
355	溝上層	高壺	口径 26.7 高さ 底径	中期	壺部のやや重つなもの。壺部内外面は横ヘラミガキ。脚部は縦状工具の圧痕あり。壺部と脚部の接合状態がよくわかる。胎土は粗砂粒が多い。焼成ややあまい。	
356	溝上層	高壺	口径 高さ 底径	中期	高壺の脚である。外面は縦位のヘラミガキ。内面は縦状工具の圧痕が残り、ナデによる整形。胎土は砂粒多し。焼成良好。	
357	溝上層	高壺	口径 高さ 底径	中期	高壺の脚である。上部に断面M字形の突帯をめぐらす。外面は縦位のヘラミガキ、内面は縦状工具の圧痕あり、ナデ整形である。壺底部はヘラミガキ。丹塗りである。胎土は砂粒が多い。焼成ややあまい。	
358	溝上層	器台	口径 9.6 高さ 17.6 底径 11.2	中期	外面は細い縦位の刷毛目整形で、上下端をナデ消す。内面はナデ整形。胎土は砂粒が多い。焼成良好。	
359	溝上層	器台	口径 10.4 高さ 17.2 底径 11.2	中期	外面は縦位の粗い刷毛目整形で、上下端はナデ消す。内面は板状工具によるケズリか、工具痕あり。胎土は砂粒が多い。焼成良好。	
360	溝上層	器台	口径 10.0 高さ 16.8 底径 11.2	中期	外面は縦位の粗い刷毛目整形で、上下端をナデ消す。内面は板状工具によるケズリか、工具痕あり。胎土は砂粒が多い。焼成良好。	

(単位 cm)

番号	出土遺構	器種	法量	時期	特徴	備考
361	溝上層	器台	口径 9.6 高さ 17.7 底径 10.7	中期	外面は縦位の刷毛目整形で、上下端はナデ消す。内面は板状工具によるケズリか、工具痕あり。胎土は砂粒が多い。焼成良好。	
362	溝上層	器台	口径 9.8 高さ 16.4 底径 10.5	中期	外面は縦位の粗い刷毛目整形で、上下端をナデ消す。内面は板状工具によるケズリか、工具痕あり。胎土は砂粒が多い。焼成良好。	
363	溝上層	器台	口径 高さ 底径 11.7	中期	外面は縦位の細い刷毛目整形で、上下端をナデ消す。内面は中央を起点にナデあげ整形である。胎土は砂粒が多い。焼成良好。	
364	溝上層	器台	口径 高さ 底径 10.4	中期	外面は縦位の粗い刷毛目整形で、下端はナデ消す。内部下方に刷毛目が施されているが、その上部は板状工具によるナデ整形。胎土は砂粒が多い。焼成良好。	
365	溝上層	器台	口径 6.4 高さ 13.6 底径 7.6	中期	外面は粗いヘラケズリ後に縦位のヘラミガキ、上下端と内面はナデ整形である。胎土は砂粒が多い。焼成良好。	
366	溝上層	器台	口径 7.0 高さ 12.0 底径 7.4	中期	外面は粗いヘラケズリの後にナデ整形。内面はナデあげ整形である。胎土は砂粒が多い。焼成良。	
367	溝上層	器台	口径 6.0 高さ 12.2 底径 8.4	中期	内外面ともナデ整形であるが、外面は前段階に粗いヘラケズリを施す。胎土は砂粒が多い。焼成良。	

(5) 土製品 (第92図22~32)

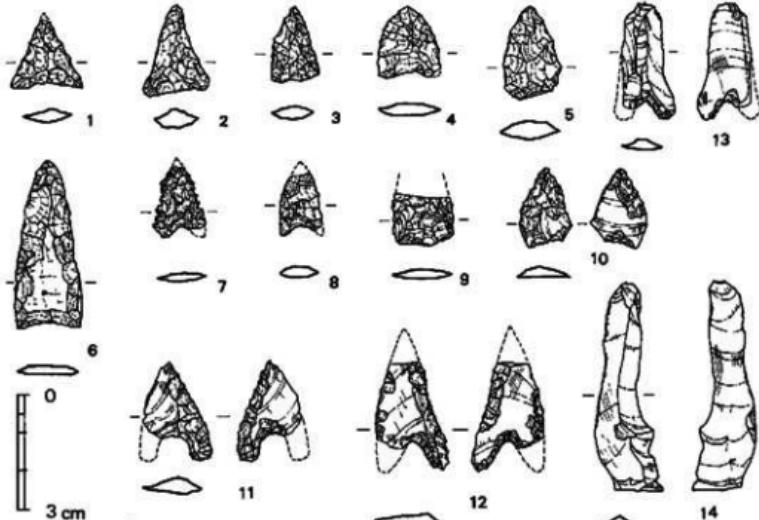
遺跡全体の各遺構出土の土製品を一括して記す。ミニチュアは、鉢或いは蓋かと思われるもの (22), 高环の模造品 (23), 高环或いは器台 (24) がみられ, 25も土製管玉の可能性がある。殊に24・25は2号竪穴の斐棺様遺構から出土したもので、既述の如く埋葬遺構とも判然としない特殊な類であり、打ち欠いた斐棺を不使用の事情のために投棄した際の祭祀的行為の所産であろうかとも想像される。26は唐古遺跡例の如く、頂部に撮状突起を有する前期蓋形土器であろう。

紡錘車は全て土製で、大小あるが、前期の所産であろう。夜臼式、板付I・II式を出土する今川遺跡における紡錘車は、平均45gで、本遺跡では10.6gの小型を除くと平均31.7gとなり径においても小さくなる傾向にある。

(6) 石器 (第90~93図)

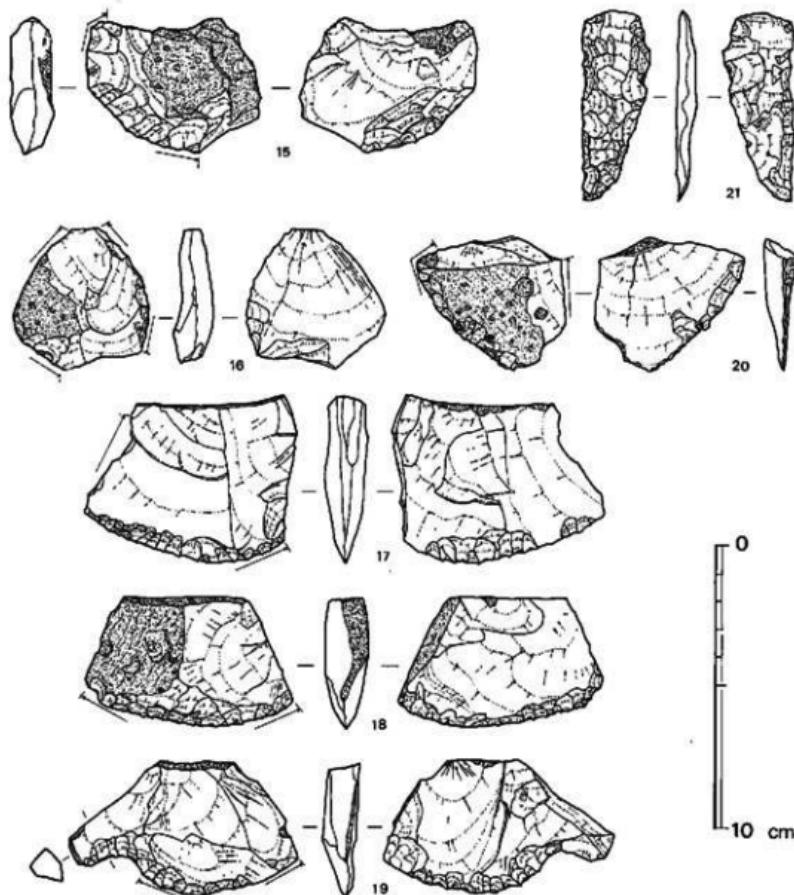
打製石鎌はサムカイト製と黒曜石製があり、三角形鎌の丁寧な調整のもの (1~5), 扁平長型のもの (6), 鋸齒状鎌 (7), 剝片鎌 (10~13) などがある。縄文後期土器の出土もあり、縄文期の鎌も7を始め幾らか数えられるようである。

サムカイト製の自然粗面を多く残し刃部のみ調整の難なスクレイパーもかなりみられ、北九州地方における弥生前期各遺跡の出土状況と同様である。19のようなつまみ状の突起部をもつものもあり、縦形に使用されたものであろう。

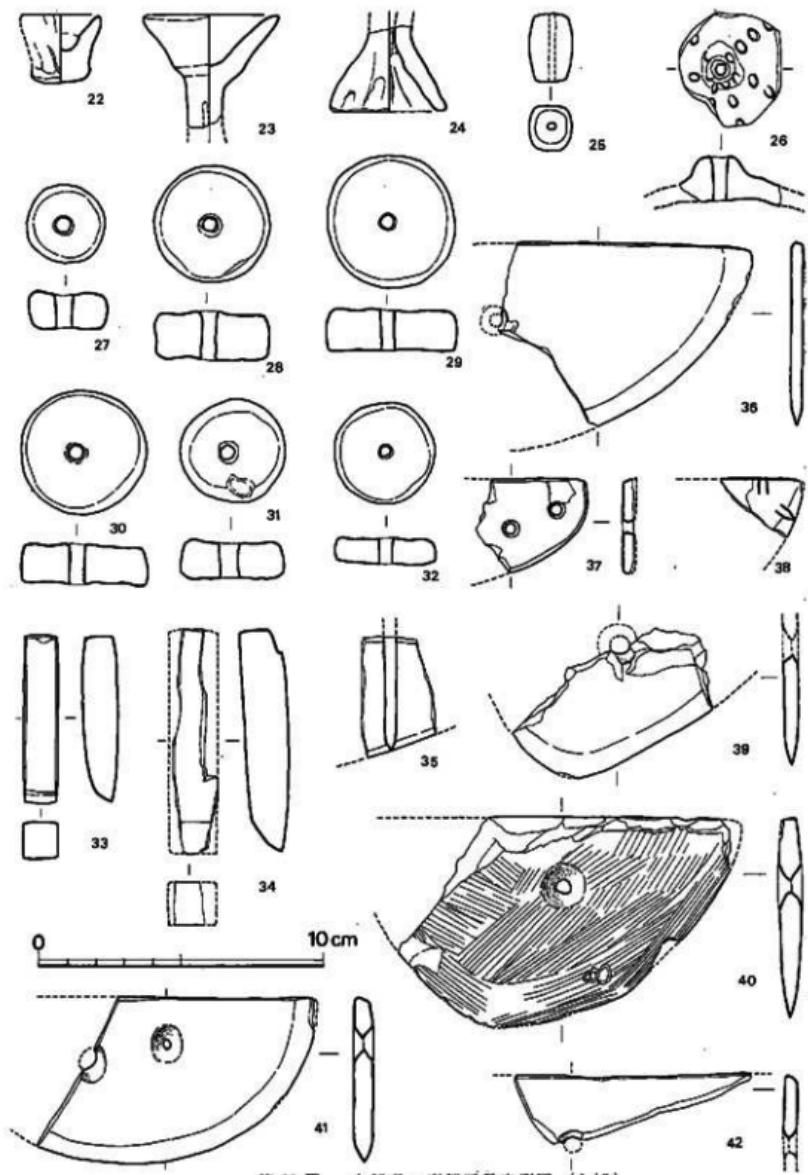


第90図 石 鎌 実 演 図 (2/3)

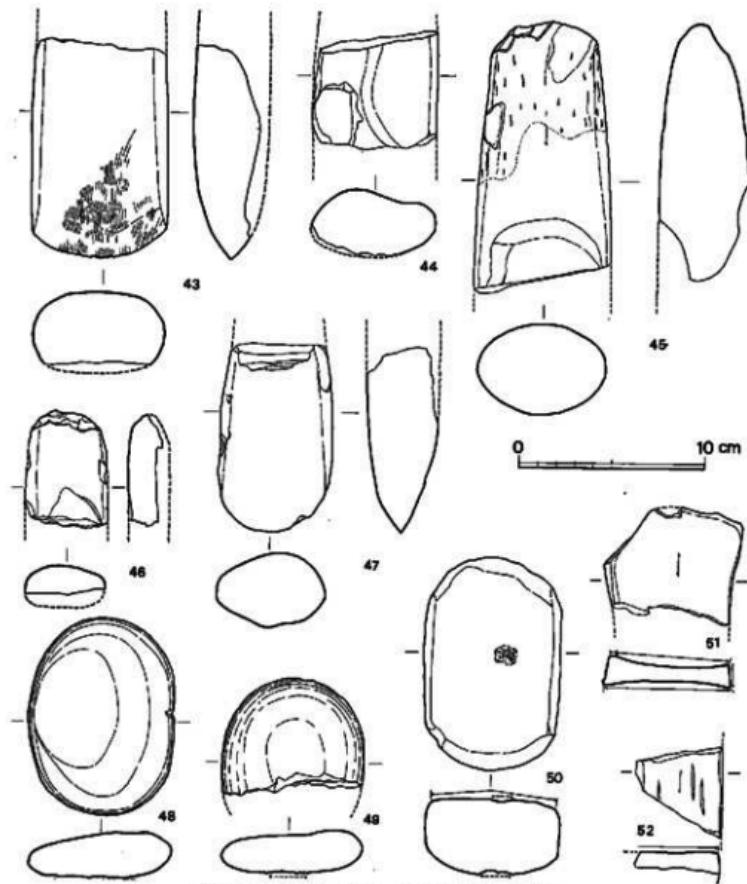
柱状片刃の石のみ状石器は、精製で2例ともに前期に伴うものである。石包丁は、8点出土したが、39・40の如く1孔で三角形氣味となるものがみられ、より古相を感じる。これらを出土した11号土壙は前期板付Ⅱ式の中でも胴の張らない古式の甕を伴っており、石包丁の時期も決まる。石包丁全体として前期のものであり、37も共伴遺物より前期後半の再加工したものである。



第91図 スクレイバー実測図 (1/2)



第92図 土製品・磨製石器実測図 (1/2)



第93図 石斧・磨石・砥石実測図 (1/3)

磨製石斧は、43・45の今山産玄武岩大型蛤刃のもので、43は前期貯蔵穴中出土で、45は溝上層出土であるが43と異なり表面風化しており、中期前半の土器群と伴なうとは断言出来ない。他の蛤刃石斧は伴なう土器より前期の所産と考えられ、47のように使用による剥落後研ぎ直して重つとなるものもみられる。

以上の石器類は、磨製石器を中心として殆んど弥生前期後半に属するものである。器種組成は扁平片刃石斧、抉入柱状石斧等がみられない他は北部九州弥生前期各遺跡の状況とほぼ同様

第5表 石器・土製品一覧表

(単位 cm, g)

番号	出土場所	器種	材質	法量			特徴
				長(高)	幅(径)	重量	
1	30号貯藏穴	打製石鎚	サスカイト	(1.8)	1.85	(0.8)	裏面をもわりと丁寧に調整
2	溝下層	*	*	2.4	1.75	1.8	裏面は幾らか粗く調整
3	*	*	*	1.95	1.25	0.7	*
4	表土中	*	*	1.85	1.6	0.9	裏面もわりと粗い調整
5	溝下層	*	*	2.4	1.5	1.8	* 葉部は米鋼盤 裏面は原刻離面を残す
6	22号貯藏穴	*	*	4.4	1.75	2.8	裏面も原刻離面を残す
7	3号住居跡	黒躍石	(1.8)	1.4	(0.5)	*	* 葉面も丁寧に調整 * 削削状となる
8	溝下層	*	*	(1.55)	(1.1)	(0.55)	裏面も同様やや粗い調整
9	36号貯藏穴	*	*	(1.3)	1.6	(0.7)	裏面はより粗い調整のまま
10	31号貯藏穴	*	*	2.05	1.4	0.55	剥片鎚
11	溝下層	*	*	2.6	(1.8)	(1.2)	*
12	溝上層	*	*	(2.8)	(1.9)	(1.2)	*
13	36号貯藏穴	*	*	2.9	(1.35)	(1.1)	未製品
14	12号土壙	石刀	*	5.4	1.5	2.4	片側縁に使用痕あり
15	44号貯藏穴	スクレイパー	サスカイト	4.7	6.1	48.0	自然粗面大きく残す
16	6号土壙	*	*	4.9	4.8	27.8	自然粗面幾らか残す
17	9号土壙	*	*	5.9	7.5	57.9	上面のみ自然粗面
18	1号豎穴	*	*	4.6	7.3	52.3	自然粗面大きく残す
19	溝上層	*	*	4.7	8.0	43.9	つまみ伏部を有する
20	溝下層	*	*	4.6	5.3	18.8	自然粗面大きく残す
21	10号貯藏穴	*	*	6.1	2.4	11.3	底長型
22	4号住居跡	ミニチュア	土製品	2.4	2.8	-	* 手塗ね、淡褐色 * 盤の模造品か
23	12号土壙	*	*	(3.9)	4.8	-	* 淡褐色 * 高脚の模造品か
24	2号豎穴	*	*	(3.0)	4.1	-	* 白褐色 * 器台・高脚の模造品か
25	*	土鍬	*	2.4	1.5	5.8	* 戻いは土製管玉か * 淡褐色
26	溝下層	蓋	土器	-	-	-	中心から六方へ放射状に竹管状刺突連点文施す
27	2号住居跡	紡錘車	土製	2.7	1.3	10.6	白褐～淡褐色
28	27号貯藏穴	*	*	4.0	1.7	31.7	孔が中心より片寄る
29	7号貯藏穴	*	*	4.6	1.5	41.0	*
30	溝下層	*	*	4.4	1.4	33.5	*
31	*	*	*	3.7	1.3	21.3	*

32	表 土 中	結 錫 車	土 製	3.5	0.9	13.6	孔が中心より片寄る
33	29号貯藏穴	石 のみ	粘 板 岩	5.9	1.2	19.6	
34	41号貯藏穴	*	珪質シルト岩	7.9	(1.6)		基部表面に段をつくる
35	30号貯藏穴	石 包 丁	頁 岩 質	(2.6)	(4.2)		
36	32号貯藏穴	*	安山岩質凝灰岩	(8.9)	(6.4)		風化著しい
37	47号貯藏穴	*	*	(3.7)	(3.3)		2孔あり。刃部無し
38	*	*	*	(2.9)	(2.1)		風化著しい
39	11号土塹	*	*	(7.2)	(5.5)		* 1孔の可能性あり * 40と同類か
40	*	*	小豆色、凝灰岩 ホルンフェルス	(11.5)	7.3		1孔 三角形状をなす
41	溝 上 層	*	安山岩質凝灰岩	(9.7)	5.8		風化著しい
42	溝 下 層	*	硬 黃 砂 岩	(8.3)	(2.4)		*
43	24号貯藏穴	太形蛤刃石斧	玄 武 岩	(11.7)	7.4		擦痕残る
44	29号貯藏穴	蛤 刀 石 斧	硬 黃 砂 岩	(6.4)	6.7		
45	溝 上 層	太形蛤刃石斧	玄 武 岩	(14.5)	7.4		基部は敲打面残す
46	溝 下 層	蛤 刀 石 斧	凝 灰 岩	(6.2)	4.4		風化著しい
47	48号貯藏穴	*	硬 黃 砂 岩	(10.0)	6.0		全体にやや歪つ
48	6号貯藏穴	磨 石	凝 灰 岩	10.5	7.8		
49	溝 上 層	*	玄 武 岩	(6.3)	7.6		裏面中央には敲打痕あり
50	*	*	凝 灰 岩	11.3	7.3		* 上面のみ磨面 * 裏面中央に敲打痕あり
51	44号貯藏穴	砾 石	砂 岩	(6.3)	7.3		* 中底 * 委曲とも極めて良く使用
52	30号貯藏穴	*	*	(5.0)	(4.5)		粗粒

である。当遺跡中の古式段階より更に一段階古い土器群と夜臼式土器群がみられる津屋崎町今川遺跡においては、有茎磨製石鏃、局部磨製石斧等の当遺跡にみられないものが多く出土し、反対に今川遺跡にみられないものでは石包丁、磨製蛤刃石斧が特徴的であり、両者の時期的な差が明確に示されている。これらは、今川期における狩猟・漁撈の優越性を示し、本遺跡における稻作普及後の状況をも示すものかとも考えられ、或いは石包丁の有無等は立地的な背景による違いも若干あるかとも考えられる。

(7) 繩文土器（第94~97図）

遺跡の北半部の住居跡・貯蔵穴等の集中している地域で、各遺構、包含層中に混入してかなりの量の繩文土器片が出土した。かなりの数の遺構の中にはばまんべんなく少量ずつ混入した状態で、繩文期の遺構としては検出されていない。弥生期の遺構により壊滅したものか、また周辺の路線外の部分に中心が在るのかとも推定される。以下各類毎に順を追って記述してゆく。

1～5は、北久根式の特徴をもつ、口縁部の装飾及び突起部分である。1は、鳥嘴の如く先端が尖り、上面に刺突文を施す異様な形態をとる口縁装飾である。側面の沈線の状況から、鐘ヶ崎式的な特徴がみられるが、山鹿貝塚X類(月崎上層Ⅰ)の系譜をひくものかと考えられる。2は北久根式に特徴的な肥厚した突起部分に直線的な短沈線を施すもので、3は突起頂部を凹状に盛ませたものである。4は口縁上に粘土紐を三つ組み状に組んで付けたもので、5は山形突起部で上端に斜めの短い押圧痕をみせる。6は突起部分のみがこぶ状となり他部口縁は肥厚しないと推定され、やや先行する1～4の概して北久根式の特徴をもつものと比べ、若干の退化形態と考えられる。

6～9は、口唇部に短かい斜めの押圧痕を施すもので、北久根式の退化した、山鹿貝塚X類に類するものである。6は外面に曲線沈線文がみられ、鐘ヶ崎式の系譜を残す。7の外面には粗い横位条痕を残す。9も内面に条痕を残す。孰れも頭部で屈折して聞く広口状の形態となるものである。

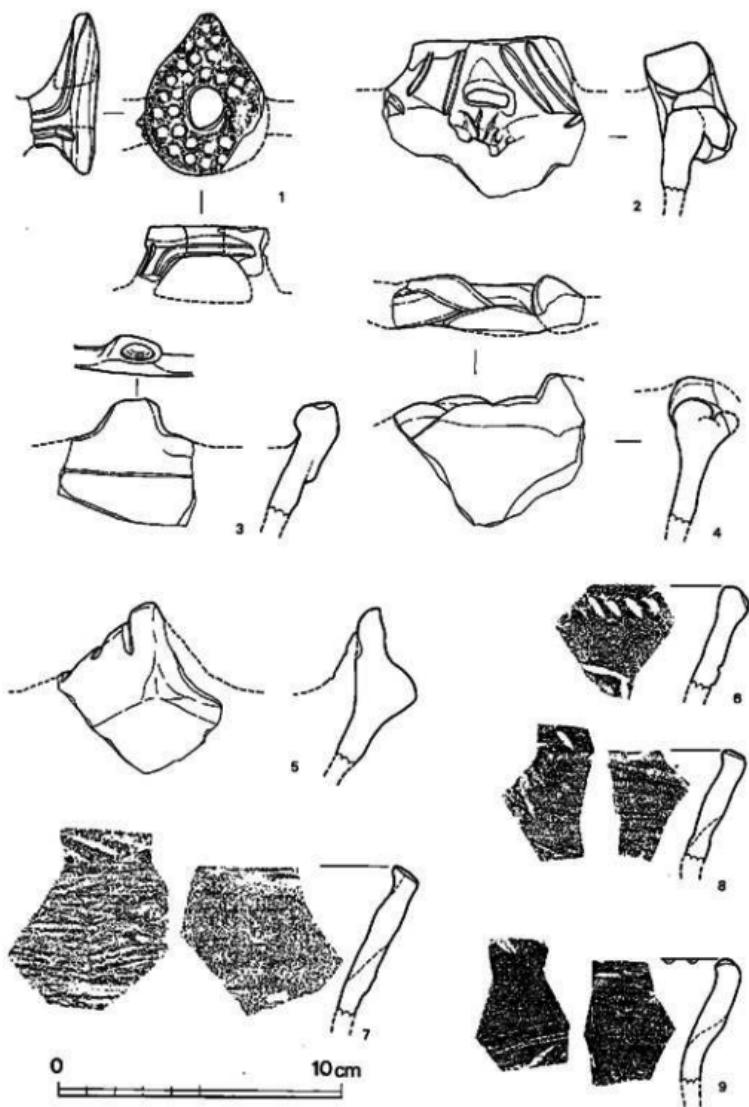
10～17は、磨消繩文系の鐘ヶ崎式の新期から西平式との中间的様相をみせるものである。10は口縁部が波状となり、その外端面に二条の沈線をめぐらし、その間に刺突状押圧痕を施す。上・下に繩文を、中位を磨消すものである。11は一条の沈線を施す。12は口縁の外面に二条の沈線を施し、その間には粗い目の繩文が残る。13はやや太めの沈線が三条みられる。13・14は沈線間に細かい繩文が施され、未だ鐘ヶ崎式のタイプを残す。16は曲線間に僅かに繩文を残すが、文様構成からみて、西平式にもなりきっていない。17は内面に横位条痕を残す。外面に沈線のみを施す。これらのグループは全体としての時期としては北久根式の新期から西平式直前にかけてのものと考えられよう。

18・19は、既述のグループに属さないもので刺突文を特徴とする。18は交叉する沈線間に竹管状の刺突文を施すものである。類例に乏しいが、宮崎県下弓田遺跡出土品に若干類似するものがある。19はやや肥厚させた口縁上端に竹管状の刺突連点文を深く施すものである。最初に記したグループの北久根式の退化した形態の一様かとも推定されるが、判然としない。

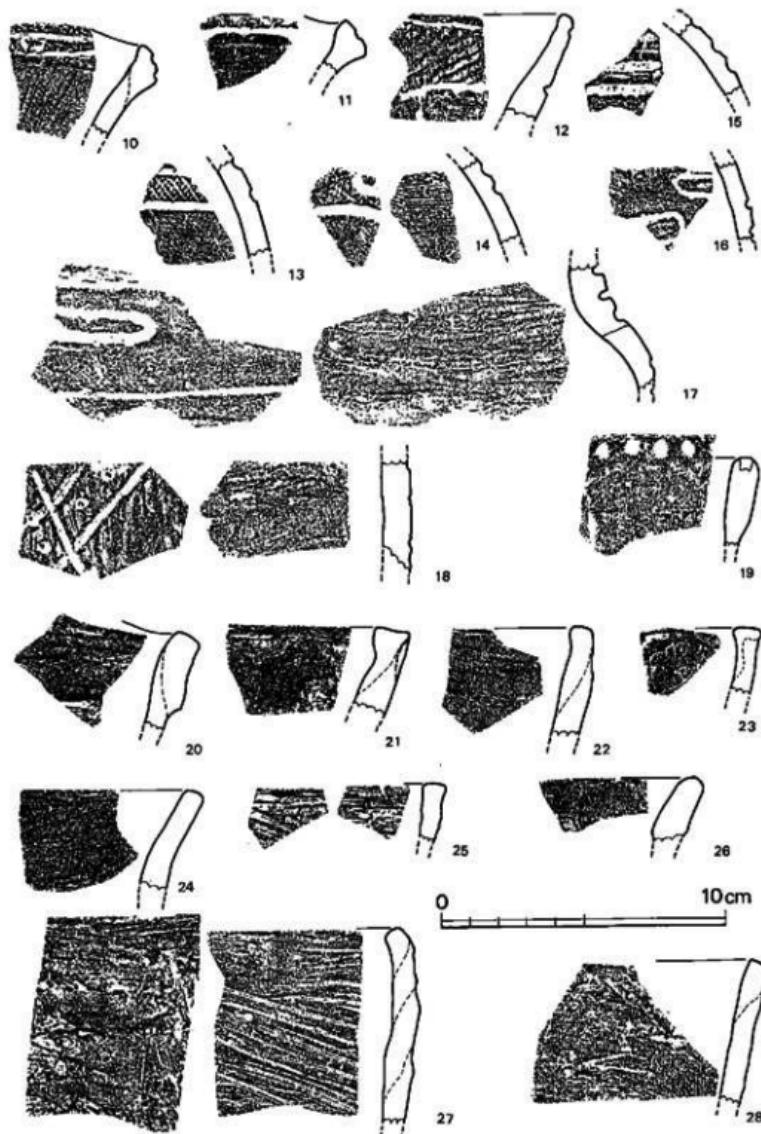
20～26は素文の口縁をまとめたが、前記グループに含まれるものや、粗製土器となるものもある。20は肥厚させた口縁が波状となるもので、山形口縁となる5のようなタイプの一部となる可能性もある。21は厚手で上面を平坦につくり、口縁直下外面に指押圧痕が認められるが、文様となるかどうかは不明である。25は内外面に条痕を施し、26と共に粗製土器となろう。

27～34は粗製土器口縁部である。口縁下は横位に条痕を施すものが多い。27・30・32のように口縁端部が僅かに内湾気味となるもの、28・31のように直線的に聞くものなどがある。29は口縁端を欠き明確ではないが、山形口縁となる可能性がある。

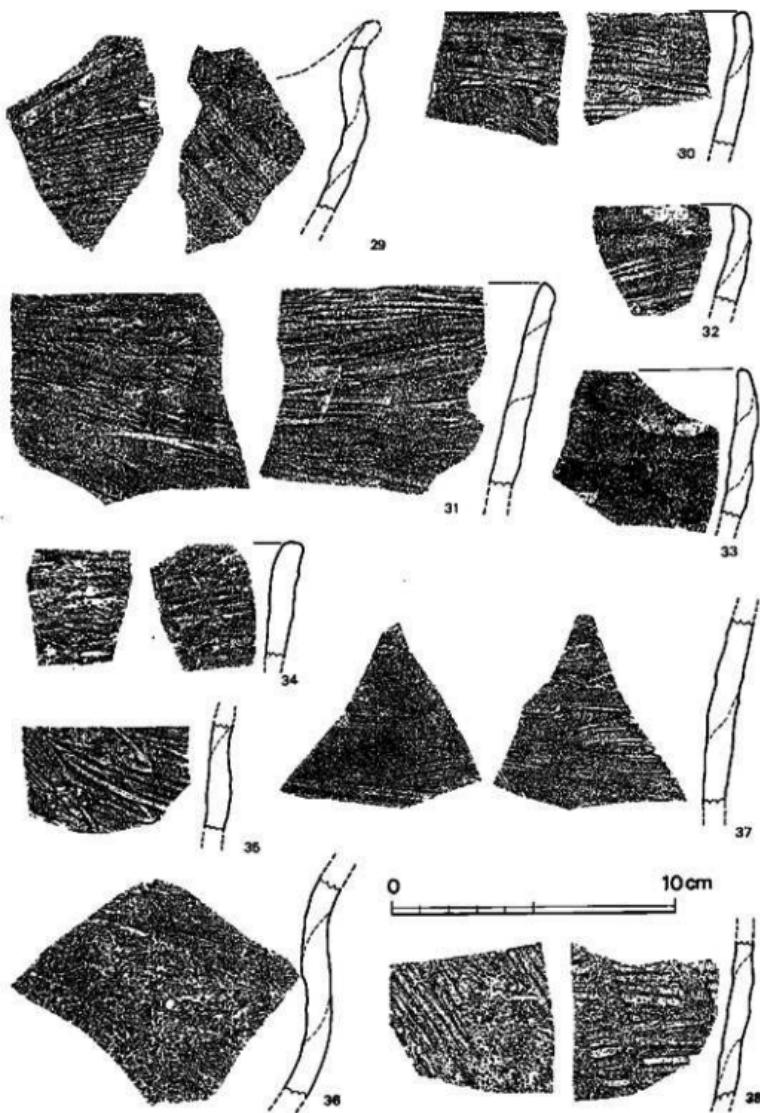
35～40は粗製土器調部片としたものである。36は丸く屈曲反転して聞くもので、39のように粗大な条痕を施すものもみられる。外面に煤が付着するものが多く、煮沸に使用されたことが



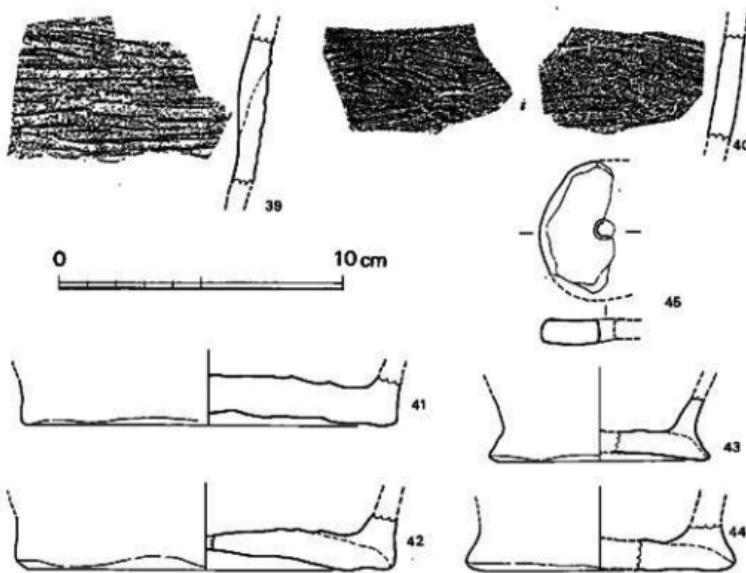
第94図 縄文土器実測図1 (1/2)



第95図 繩文土器実測図2 (1/2)



第96図 繩文土器実測図3 (1/2)



第97図 縄文土器実測図4 (1/2)

わかる。

41～44は底部片で、孰れも平底で、僅かに全体に上げ底となるものが多い。底外面は凹凸著しい指オサエナデ、全体に雑な作りのものが多い。

45は、土器片を再加工した有孔の円盤状品である。他の縄文土器片には全く認められなかった、胎土に滑石沫を含むもので、中期的な土器片を使用したものかと考えられる。弥生前期の時期に紡錘車として加工使用した可能性も考えられる。

以上の縄文土器群は、各グループ毎に若干のニュアンス的違いは認められるものの、総じて、縄文後期の中葉から後葉にかかる時期、即ち北久根式の後半から西平式に移行する過程までの時期の所産とされよう。ただ、各土器片が採集品同様の造構的まとまりの確認も出来ない出土状況であり、まだ当該期の稀少な資料として充分に検討する対称としてもあまりにも小片のみすぎる点は如何ともし難い。今後の周辺造構の確認の機会到来ありとすれば、それに期するところである。

4. 小 結

大島遺跡では、弥生時代前期から中期の造構の発見があった。その内容は住居跡・貯蔵穴・土壇・溝からなるが、主に貯蔵穴群が多くあった。当遺跡の調査や整理過程におけるまとめを記して結びとする。

① 造構の前後関係は次のとおりである。但し、住居跡は住、貯蔵穴は貯、土壇は土、豎穴は豎とする。



② 当遺跡では、貯蔵穴が造構の大半を占めるが、そのような遺跡の中で、貯蔵穴の数に比して住居跡の数が極めて少ない遺跡がよくある。貯蔵穴の量的な問題は、貯蔵穴の構造とつくられた地域の地質にもよるが、非常に壊れやすいもので、順次新しい貯蔵穴をつくっていたことにも起因していることも考えられる。

例えば、それらの数を対比してみると、1住居跡に対し數10基の貯蔵穴という場合があり、これが集落の中にあって住居のそばに貯蔵穴を設けるということはなかったと思われる。この考えは、当時の集落形態・立地や社会の状態などの起因する問題があり短絡的でありすぎ、熟考を要するところであるが、生活すべく集落とは別途地域に貯蔵穴を集中して設置し、横隈山遺跡のように、それらの周囲に環溝をめぐらしあわせて数軒の番小屋の用途をなす住居を置くという、いわば食糧の集中管理というシステムが当時としてはあったものと思われる。この点

については、さらに資料の充実が必要かと思われる。

③ 当遺跡の場合、遺跡の全域を発掘調査していないので即断しかねるが、住居跡4軒に対して49基の貯蔵穴があるわけで、その比は1対12である。これに土壙としたもののうちの一部が貯蔵の用をなしていたとすれば、その比はさらに大きくなるわけで、貯蔵穴が多いように思われる。

④ 貯蔵穴の平面形については、当遺跡の場合は円形プランを呈すものが多い。貯蔵穴の平面形は、住居跡と同じように方形から円形と変遷するのではないかという考え方がある。

住居跡は、前期板付Ⅰ式の頃は方形プランを呈し、板付Ⅱ式になると円形プランに変わり中期中葉頃まで続き、それ以後は方形プランに変るという経緯がみられる。

貯蔵穴については、確かに板付遺跡では方形あるいは長方形を呈すものが圧倒的に多い(註1)。大島跡周辺においては、やや時期的に遅れるが、方形・長方形と円形のいずれもみられ、遺跡によってはどちらかが多い。例えば筑紫野黒坂遺跡では方形・長方形が多く(註1),同市剣塚遺跡は円形で占められている(註2)。小都市北内畠遺跡(註3)や横隈山遺跡(註4)では方形・長方形が非常に多い。いずれも前期から中期前葉頃の遺跡であって、平面形の時間的変化はみられず、周辺遺跡のうち小郡地区の貯蔵穴に方形長方形プランを呈すものが多い。また、遠賀川流域の飯塚市立岩遺跡群の貯蔵穴は円形プランばかりで(註5),行橋市下稗田遺跡D地区(540基)では、ほとんど円形プランである(註6)。このように貯蔵穴の平面形は、時間的な変化はないと思われ、むしろ地域的な特徴があり、あわせて規模構造にも若干の地域差が表われるものではないだろうか。

⑤ 土器は、弥生時代前期後半から中期前半のものがあるが、厳密には中期初頭(所謂城ノ越式)の土器群の出土はなく、当遺跡での営みは一時中断したことになるが、恐らく広大な台地のいずれかにこの欠落した時期の生活が営まれていたものと考えられ、周辺地区での調査が望まれる。

⑥ 石器・土製品については、石礫が打製品ばかりで、磨製品が全く見られないことに注目される。石包丁は前期の特徴を示すが、39・40はこれまで発見された稀例の品であって、朝鮮半島出土のものに類似し注目すべき石器である。

紡錘車は土製品のみで、石製品は全くない。比較的小型で軽量なものばかりである。

以上、問題点は多々あると思われ、さらに今後の整理研究に待つべき点があると考えられる。浅学の身である由、先学諸兄の御叱責を乞うところである。

註1. 「野黒坂遺跡」『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第1集 福岡県教育委員会 1970

註2. 「剣塚遺跡」『九州総貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XXIV 福岡県教育委員会 1978

註3. 「北内畠遺跡」小都市文化財調査報告第7集 小都市教育委員会 1981

註4. 「横隈山遺跡」小都市教育委員会 1974

註5 筆者実見

- 「焼ノ正道跡」 行橋市教育委員会 1981
荒島隆人編「嘉穂地方史」先史編 1981
- 註6. 「下柳田造跡調査概報Ⅱ」 行橋市文化財調査報告 第10集 行橋市教育委員会 1981



1 大島遺跡東半全景（西より）



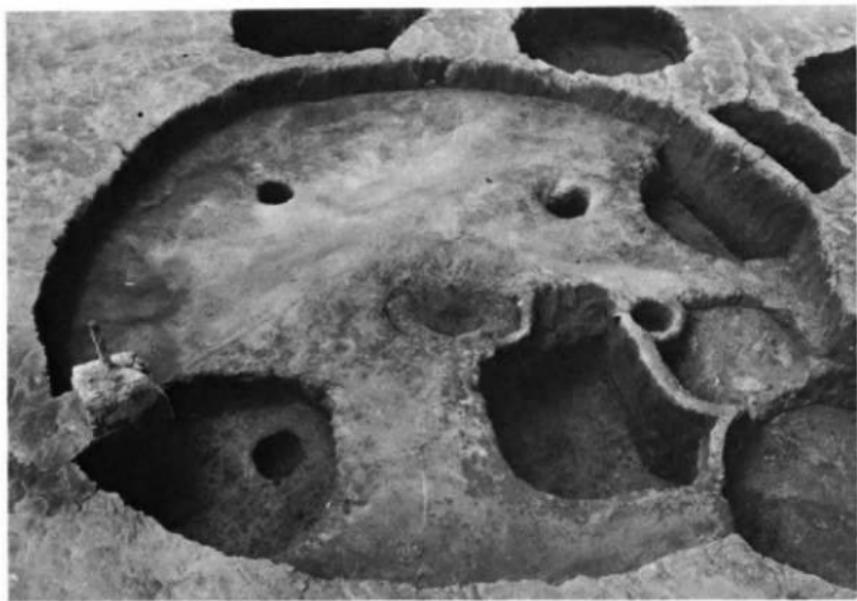
2 大島遺跡全景（東より）



1 第1号住居跡（西より）



2 第2号住居跡（北より）



1 第3号住居跡（南より）



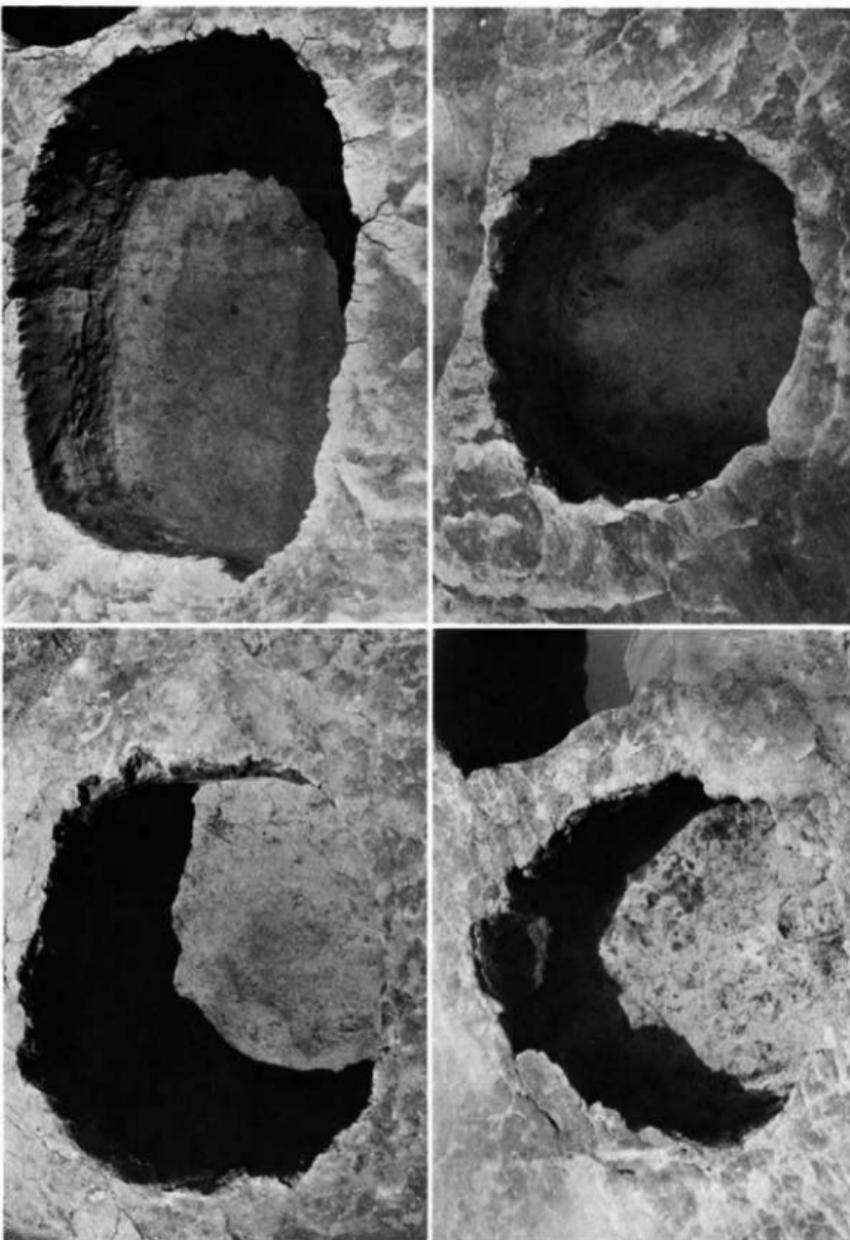
2 第4号住居跡（西より）



1 第19·21~24号贮藏穴



2 第26~31号贮藏穴



3 第12号前歯六

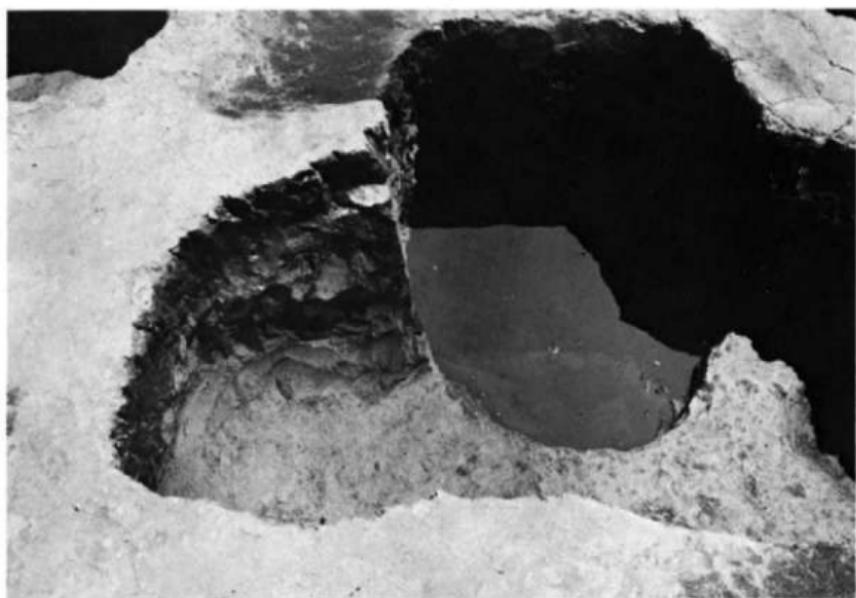
1 第8号前歯六

4 第22号前歯六

2 第10号前歯六

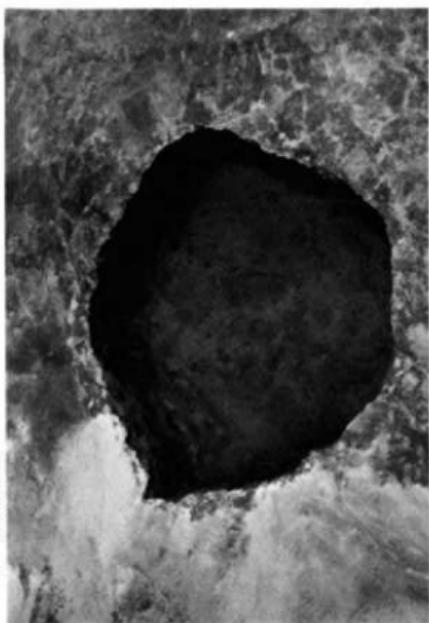


1 第12号土壤, 37・22号貯藏穴

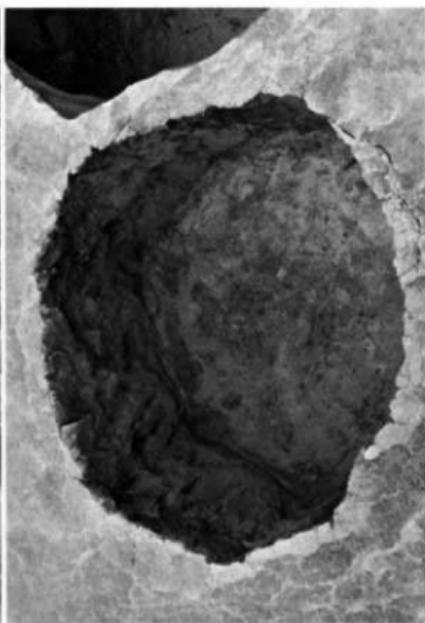


2 第39・21(中央) 另貯藏穴

1 第25月齢竪穴



2 第27月齢竪穴

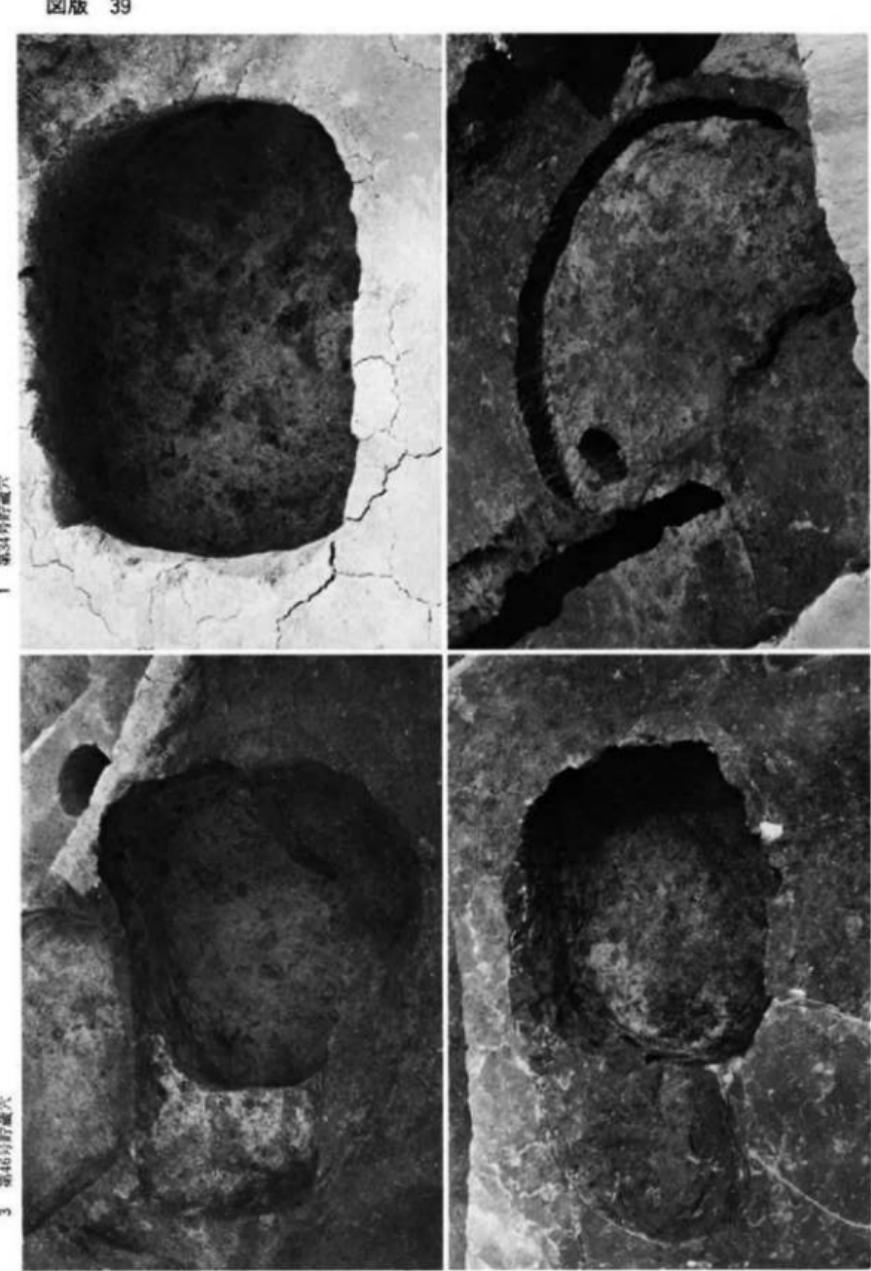


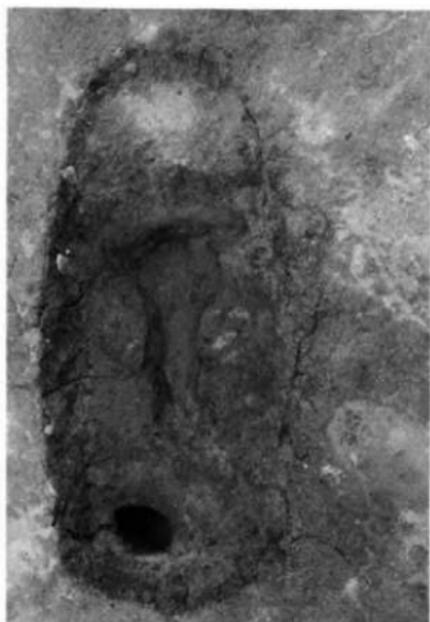
3 第32月齢竪穴



4 第33月齢竪穴







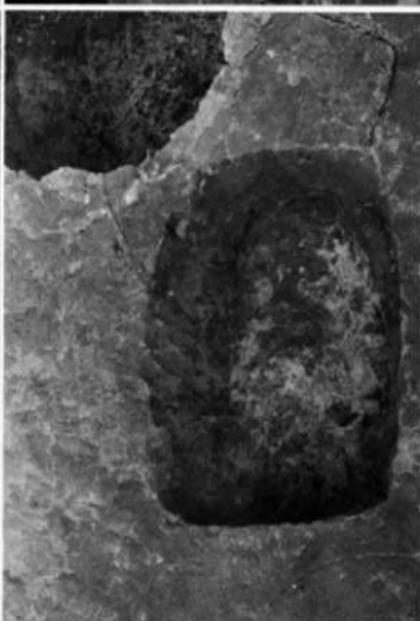
1 第1号土壤



2 第6・7号土壤



3 第9号土壤



4 第12号土壤

図版 41

1 1号鑿穴

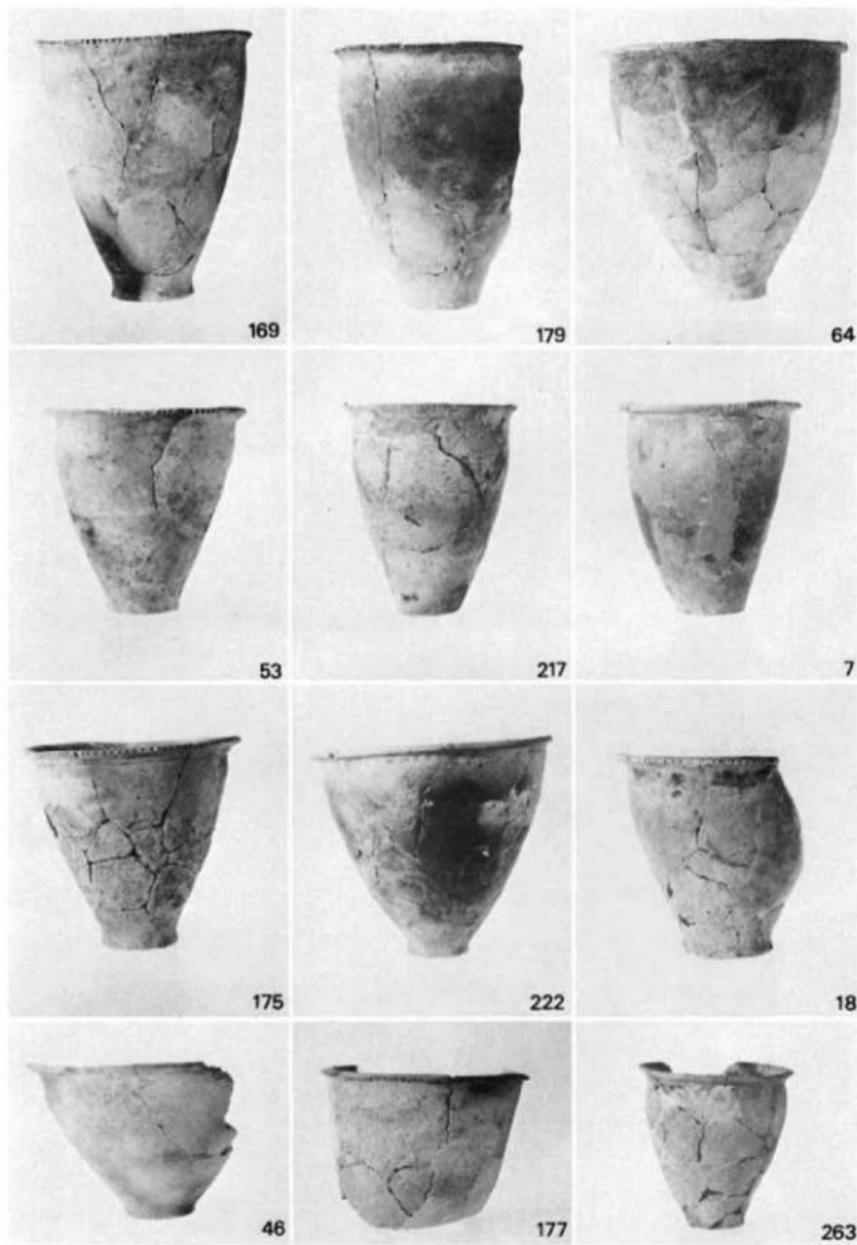


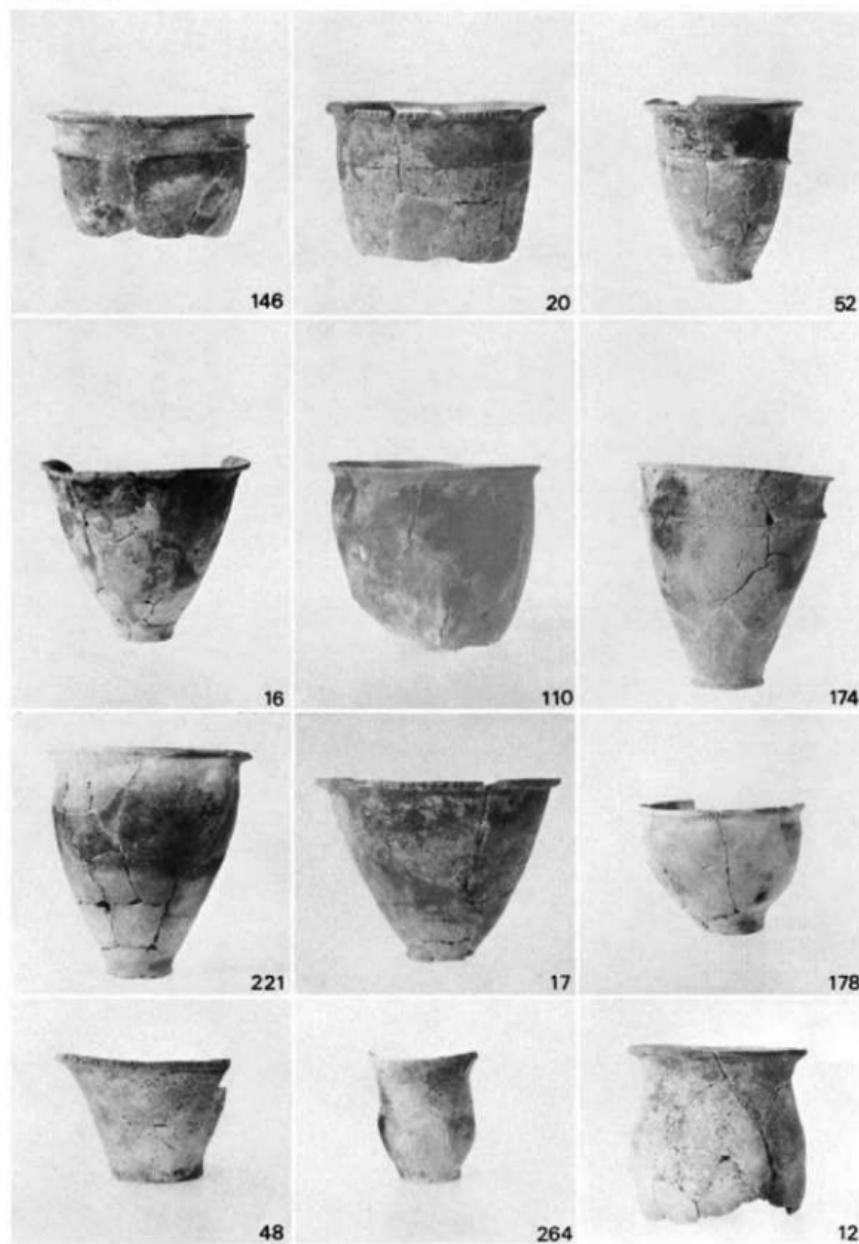
2 2号鑿穴

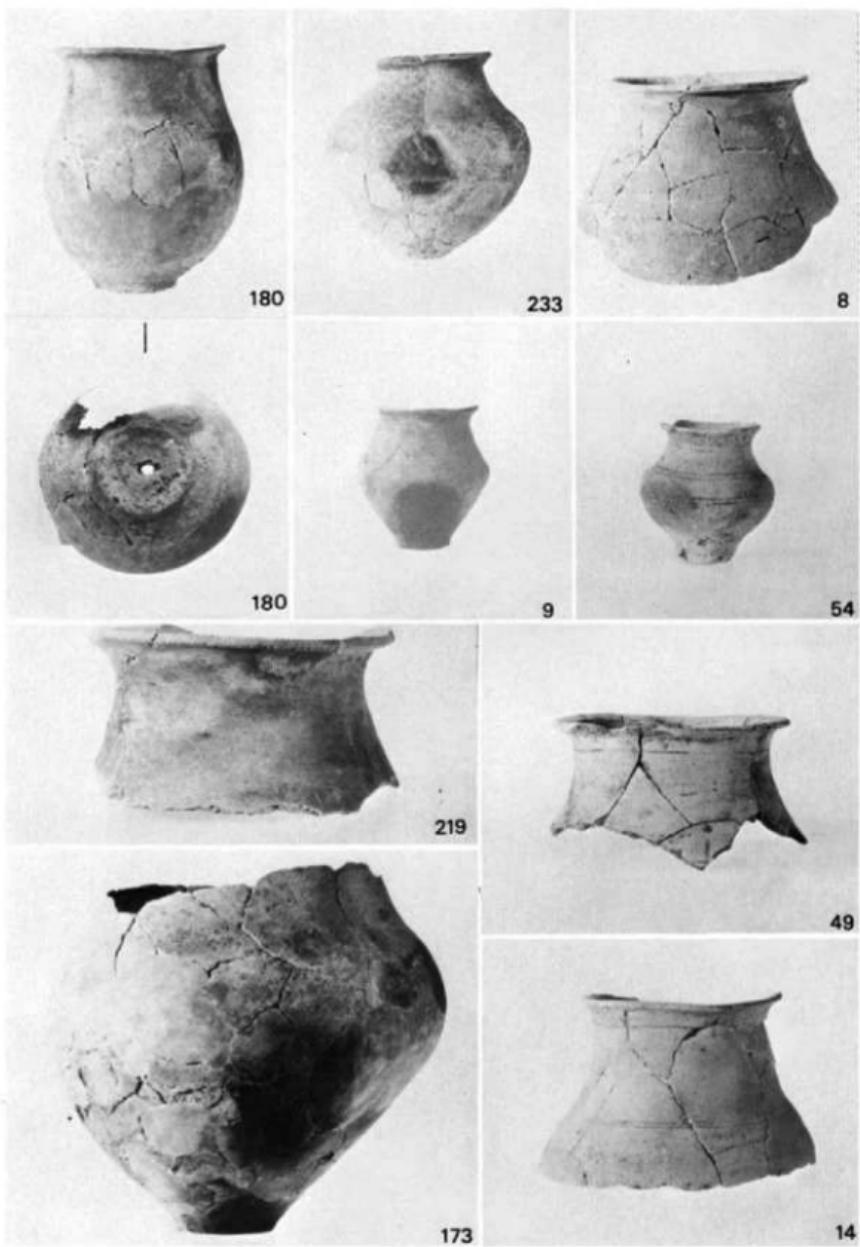


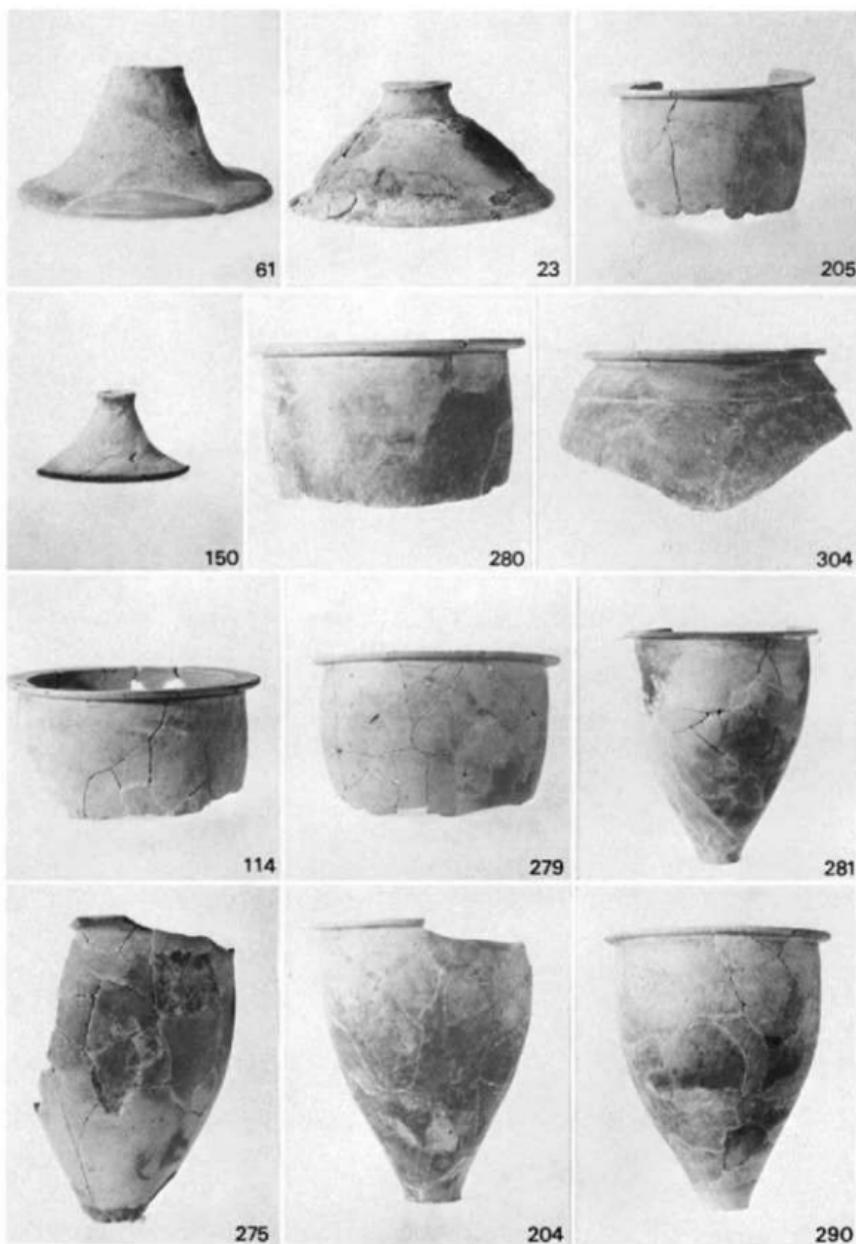
3 薄 (底上り)











新石器時代前期壺、中期壺



321



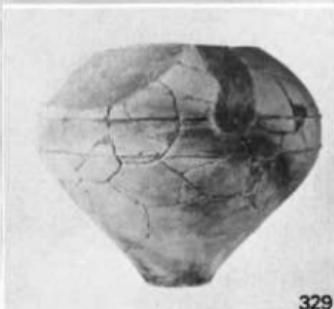
334



189



106



329



330



313



314



350



299



315



104



187



344



349



127



28



355



346



355



347



355



206

1

弥生時代中期器台



361



362



129



360



358



359



190



130



367



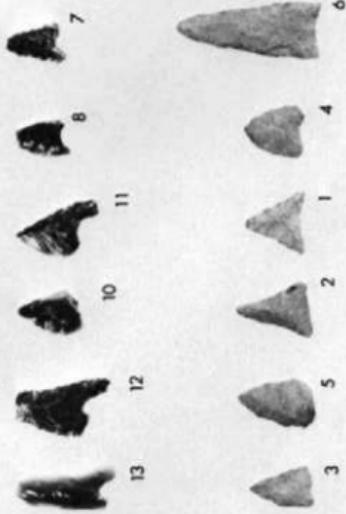
366



231

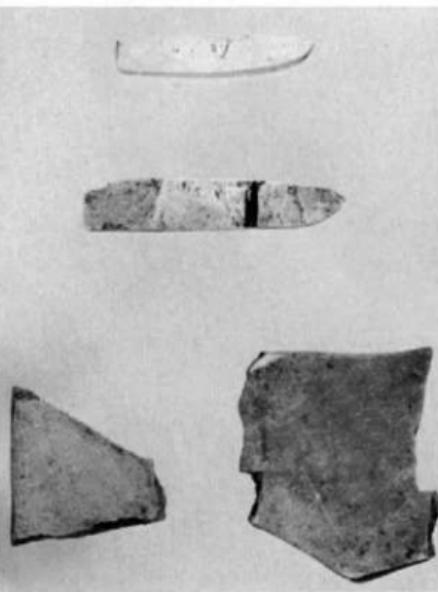


229

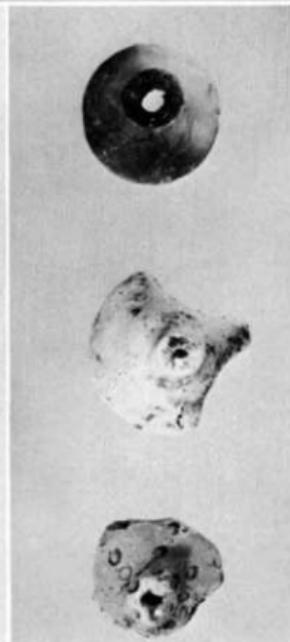


3 打製石器

1 スクレーブル

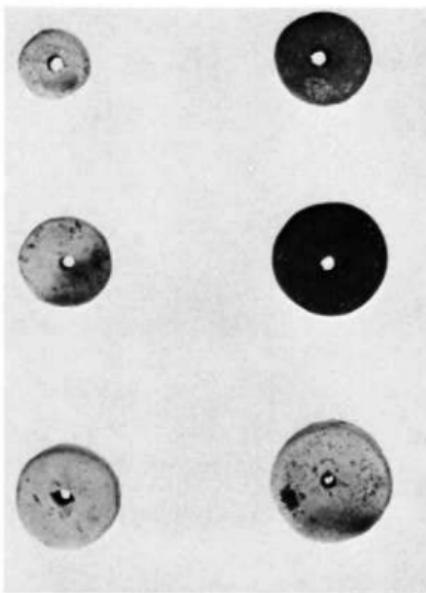


3 石器

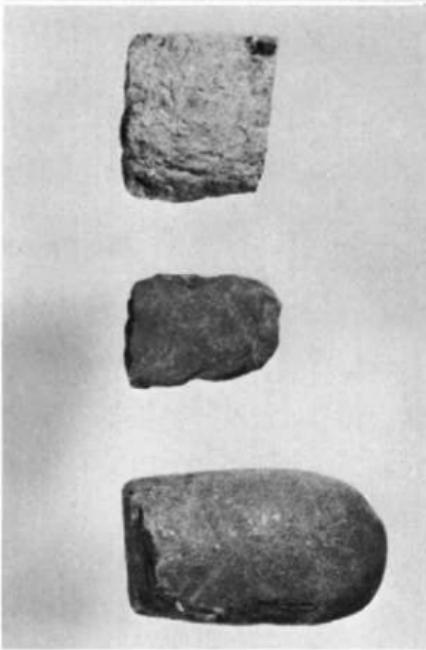


4 土器

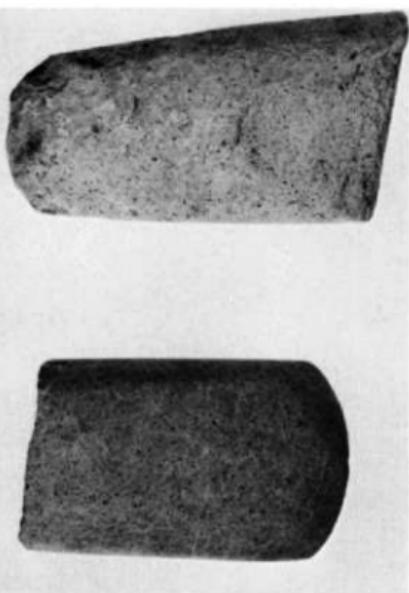
1 磨盤



3 磨盤石片

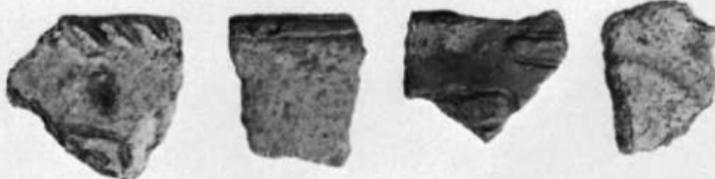
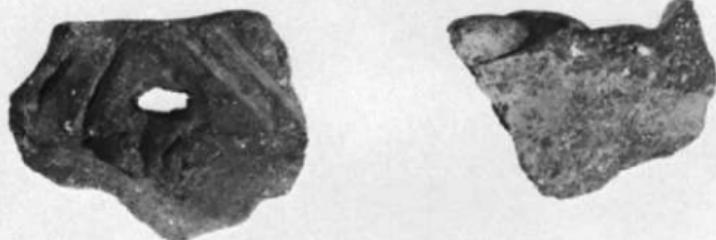


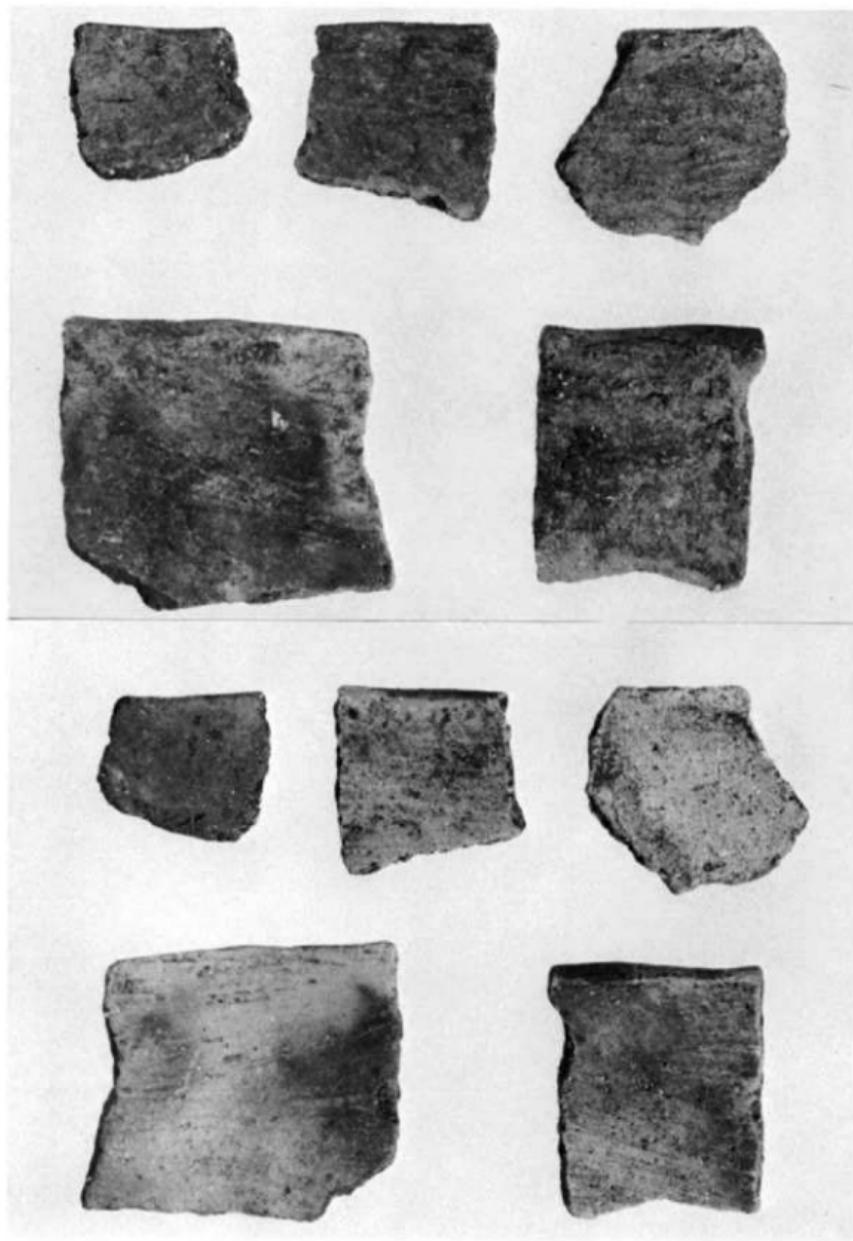
2 大型蛤刀石片



4 石







橫文土器（上：外面，下：內面）

III 各 遺 跡 の 調 査

8. 八 ケ 坪 遺 跡

8. 八ヶ坪遺跡

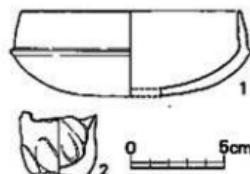
1. はじめに

国道386号線より北へ旧朝倉街道を越えて、筑紫野市との町境までの路線内を第14地点とした。用地内の各所に3×20mのトレンチを13本入れて、遺跡の範囲を確定する作業を行なった。その結果、旧朝倉街道より南側（夜須町中牟田・朝日）においては、遺物の若干の出土はみたが、確実な造構を伴なわず、北端の町境近くの部分のみを「八ヶ坪遺跡」として本調査することとした。発掘面積3,010m²、調査期間は例年になく希有なる雨続きにより昭和55年7月31日～10月27日に及ぶ。

第14地点各トレンチ出土遺物（第99図）

土師器椀（1） 須恵器杯身を模した外面黒色漆塗の土師器で、内弱存。Bトレンチ出土。胎土精良で淡茶褐色を呈する。

ミニチュア土器（2） Dトレンチ出土で、全体に指押圧痕残り、胎土精良で淡茶褐色を呈する。



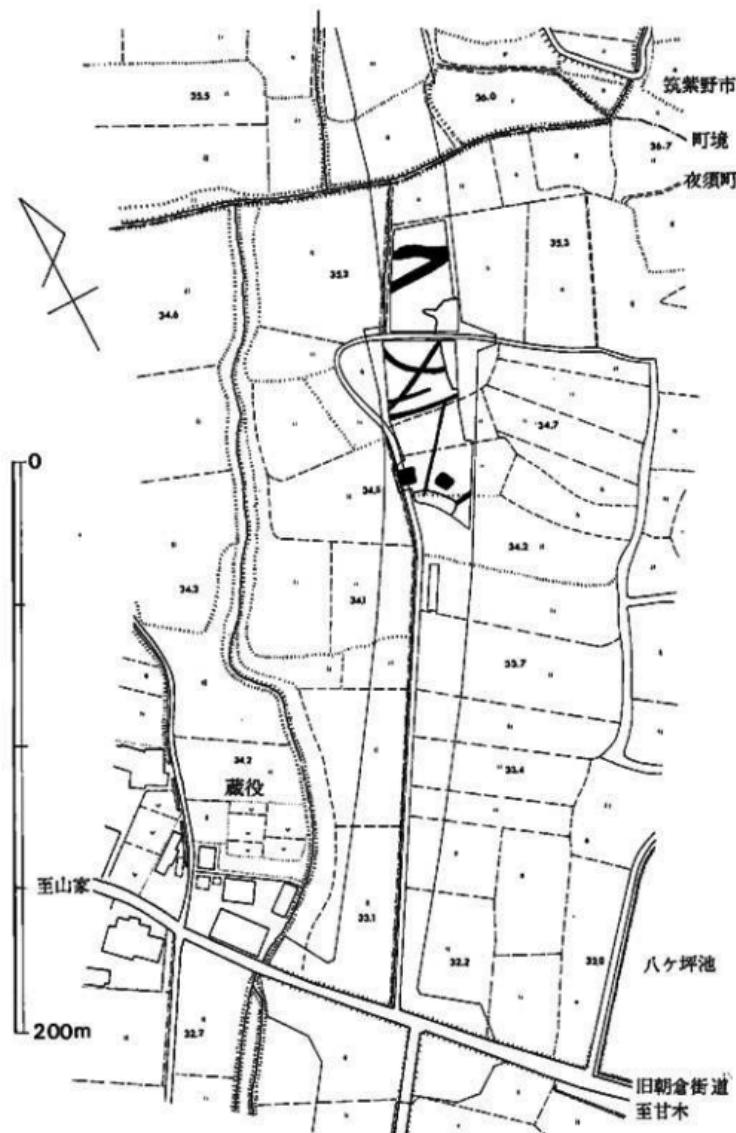
第99図
各トレンチ出土遺物実測図（1/3）

八ヶ坪遺跡は、朝倉郡夜須町大字中牟田字八ヶ坪に在り、筑後平野を南流する宝満川の支流山家川の左岸の段丘上に占地する。標高35m前後で南・西へ緩かに低く下がってゆく微高地である。小結に記す如く、条里制の名残りの字名で、当該時期の造構の検出も想定された。また往時本遺跡北西側の畑を下げした時、「ハチヤツボ」が出土したとのことである。

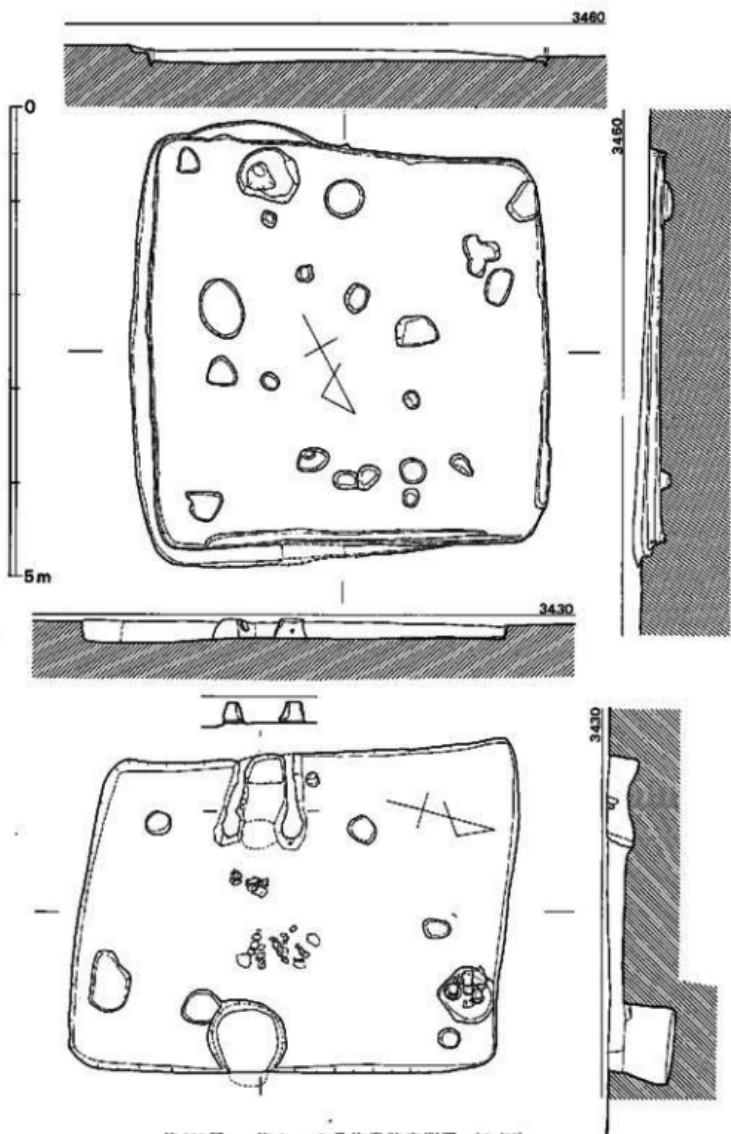
以下、造構毎に項を分けて詳述する。

2. 遺構と遺物

(1) 穹穴住居跡



第98図 八ヶ坪遺跡周辺地形図 (1/2,000)



第100圖 第1・2号住居跡実測図 (1/60)

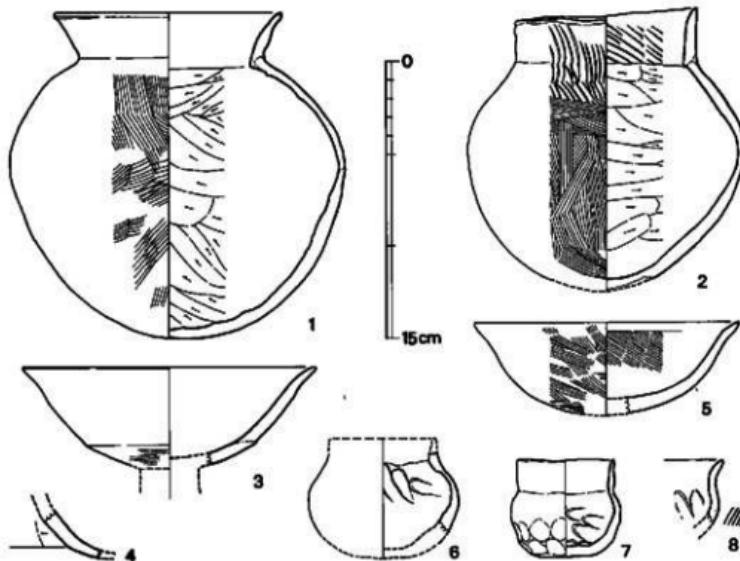
第1号住居跡（第100図上）

遺跡の西南寄りに方形堅穴住居跡が検出された。東辺がやや広く $4.6m \times 4.5m$ で床面積 $20.7m^2$ 、最深部で $30cm$ を測る。主柱穴は不明で、炉も明確ではないが、ただ東南隅寄りのピット中より土器片多くとともに炭化物多くがみられた。東辺及び、南辺と北辺東半分の壁沿いに、幅 $15\sim20cm$ の一段高い部分がみられ、壁際の物置き場所かとも考えられる。周壁溝は幅 $10\sim15cm$ のものが北辺と東辺にみられるのみである。更に壁際に密着して板材打ち込み痕が $2\sim5cm$ 幅でほぼ全周に認められる。（図版55—2）

土器（第101図）

壺（1） 最大径をやや上位につくる球状胴で、内面ヘラ削り、口縁内外横ナデ、胴外面上半は縦・斜めの細かいハケ、下半は雛なハケ後部分的にナデ消す。口唇外端部は部分的に突出し、口縁外側中位は中ぶくらみをみせる。胎土に粗砂かなり含み、焼成良好く淡茶色を呈する。火残存。口径 $12.3cm$ 、器高 $17.5cm$ 、胴部最大径 $18.0cm$ を測る。口縁外側と肩部以下に煤付着する。

直口壺（2） 口径 $9.7cm$ 、器高 $14.9cm$ 、胴最大径 $14.7cm$ で短く直立する口縁を付ける。胴内面横方向のヘラ削り、外面上半は極めて粗い縦ハケ、以下は粗い斜め・縦ハケ調整。胎土に粗砂幾らか含み、焼成良好く明茶～黄茶色で全体にやや歪つて粗いつくりである。胴下半全面



第101図 第1号住居跡出土土器器実測図（1/3）

に煤がこびりつき、壺同様煮沸容器として用いられている。

高杯（3・4） 熟れも小片であり、3は内外面横ナデ、杯部外面に横ハケ残る。復元口径15.8cmで胎土精良、焼成やや甘く橙色を呈する。4は脚内面に上半の削りによる棱線をつくる。胎土精製され、焼成良く茶褐色をなす。

椀（5） 口径14.2cm、器高5.0cmで、口縁内側に半周程の明瞭な稜をつくり、僅かに外反させる。外面は細かいハケを荒く施す。胎土精良、焼成良く外面黄茶褐色、内面明茶褐色を呈する。

ミニチュア土器（6～8） 熟れも指圧痕を残し、胎土精良で各々暗茶褐色・明茶色・淡黄褐色を呈する。8の外面下半には粗いハケをみる。

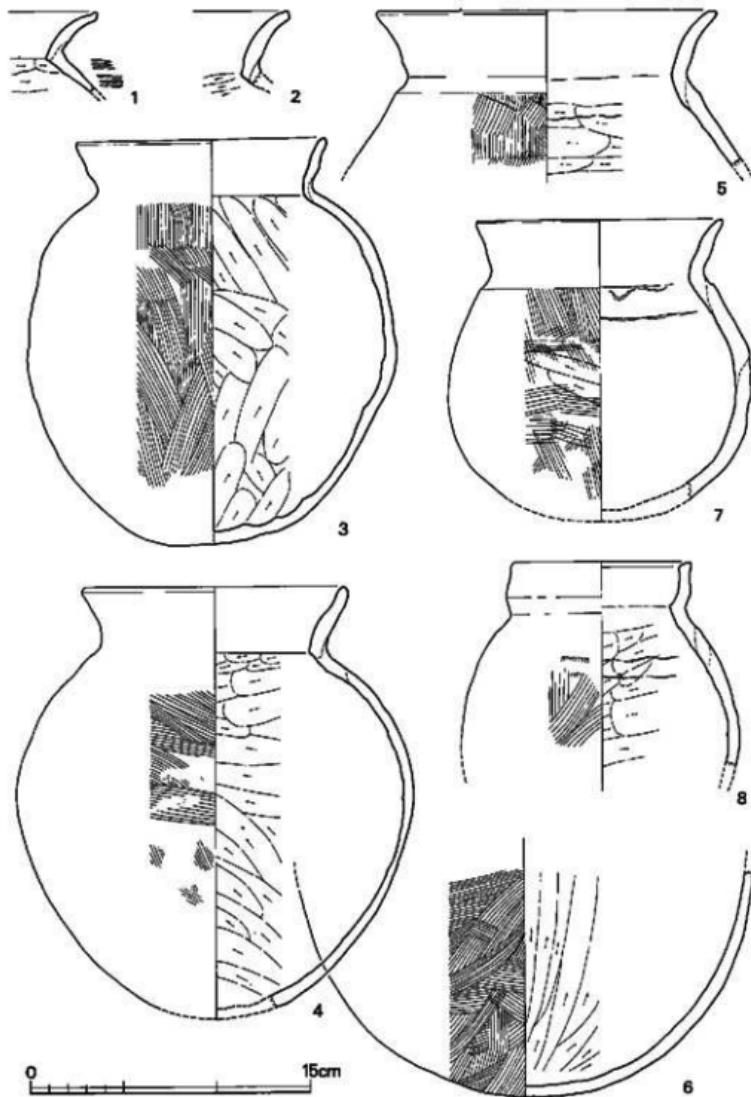
第2号住居跡（第100図下）

遺跡の南端近くに、 $3.4 \times 4.6\text{m}$ の長方形の、竈を付ける住居跡が検出された。平面形はやや平行四辺形気味に歪み、床面積 15.6m^2 、深さ20cmを測る。主柱穴は不明で、4柱の可能性もある。西壁のやや南側寄りに、黄褐色粘土による竈が付される。竈体の地山面との間に炭を含んだ灰黒色土層が薄くみられ、住居跡を幾らか使用して後、竈を付設したと考えられる。竈体中には變片を混入させ、焚口部は一段低くなり、そこの地山は赤変し、内側面も堅く黄・赤変する。最奥部も更に深く下がり、竈縁外の煙道状構造はつくらない。竈と対する東壁際に径0.75m、深さ0.65mの袋状の形態をとる竪穴が検出され、炭・灰が多く混入し、ミニチュア土器、須恵器小片が検出されている。貯藏用の竪穴であろう。

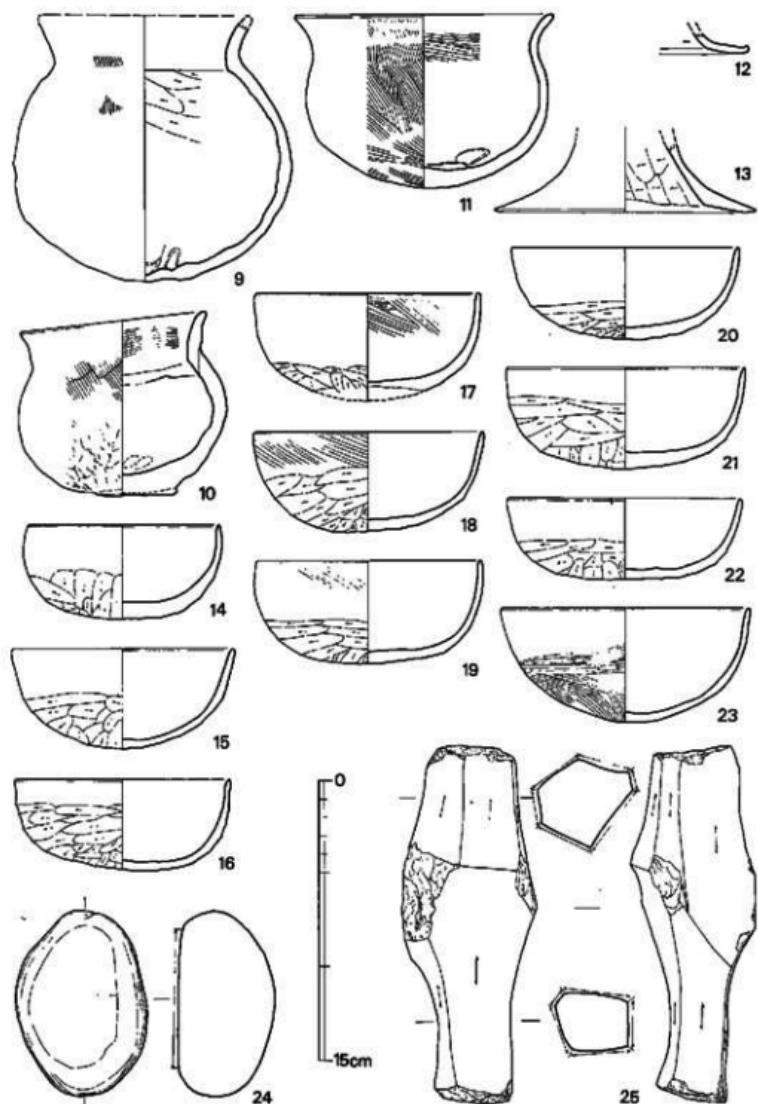
当住居跡は、覆土中に炭片多量に含み、焼失後に廃棄せられたと考えられ、残存遺物も多量ある。床面出土遺物は、竈前面の住居跡中央に壺を中心として椀等がみられ、北東隅近くの浅いピット中から椀6点と、壺2点が重ねられており注目される。竈北側際にも椀1点がみられた。覆土中からは床面より若干浮いて手鏡・手挽ね土製品・滑石製白玉類、變片・椀等が検出され、焼失後の住居跡廻棄儀礼的な祭祀行為の形跡かと考えられる。

土器（第102・103図）

壺（1～6） 1と2は覆土中出土で、他類と時期が全く異なり、1は庄内式系で4C代に上る。熟れも全体に精製で、内面ヘラ削り、1の胴部外面には細い横方向叩きが残る。3は床面出土で口縁中途が中ぶくらみし、端部は丸くおさめる。胴内面ヘラ削り上げ、外面は細いハケ調整を施す。肩中位に煤付着し、強い二次焼成による赤変部も多い。胎土に粗石英・雲母かなり含み、焼成良く、淡黄茶褐色を呈する。口径13.3cm、器高21.5cm、胴部最大径19.7cm。4も床面出土、口径14.2cm、復元器高23.0cm、胴最大径21.2cmの卵形容氣味の胴部につくる。胴内面ヘラ削り、外面上半～中位は細かい雜な横ハケ、以下はハケをナデ消す。胎土に粗石英粒多く含み、焼成やや良好、内面灰褐色、外表面淡褐～灰褐色を呈し、破片に割れて後も、二次的な熱を受けている。肩部以下には煤付着する。5は竈体内混入のもので、胴内面ヘラ削り、



第102圖 第2号住居跡出土土師器実測図 1 (1/3)



第103図 第2号住居跡出土土師器・砾石実測図 2 (1/3)

外面細かい縦ハケ施す。粗砂多く含み、焼成良く暗～灰褐色を呈する。この他に竈体内出土のわりと大形の甕胴部下半片がある。丸底で球形胴に近いものとなり、内面ヘラ削り、外面はわりと粗い縦・斜めハケの上ナデ消している。6は、床面出土で、球形胴に近くなりそうな胴下半である。内面ヘラ削り上げ、外面は全面に細かいハケを横・斜め・縦に交錯させる。粗石英粒かなり含み、内面暗褐色、外面淡茶～黒色（煤付着）。

小型甕（7～9） 熟れも床面出土で、7は内面上半横ナデ、下半は斜めナデ調整で、外面は粗く極めて雑なハケ調整で、中位には横方向削りのままの部分が残る。口縁外面僅かに中ぶくらみし、全体に厚手で下半には煤付着する。口径13.1cm、復元器高16.1cm、胴最大径16.2cmを測る。8は頸部の強い指ナデにより口縁が内面内湾気味に外面に稜をつくり立ち上がる形態となり、胴内面は頸の後のやや下よりヘラ削り、外面肩部まで横ナデ、以下雑なハケ調整を施す。胴中位以下は煤こびりつく。内外に二次焼成による赤変部がみられる。9は復元口径11.5cm、器高14.1cm、胴最大径14.8cmを測り、内面上半ヘラ削り、下半はナデ調整、外面上半は細かい縦ハケの上ナデ消し、下半は器表剥落し煤付着する。

小型壺（10） 薄い粘土板を難に貼り付けて平底状にした厚ぼったいつくりで、口径10.0cm、器高9.3cm、胴最大径11.2cmを測る。肩部と口縁内面に細かいハケ、胴内面は斜めナデ上げ、底内面は指オサエ痕を残す。外面下半は手捏ねのままで粘土のシワがそのまま残る。胎土に粗砂幾らか含み、焼成良好で淡白褐色～黒褐色を呈する。

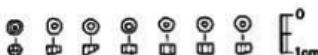
鉢（11） 小型甕或いは小形丸底壺の広口化したような器形で、底部が厚く、口径13.8cm、器高9.2cm、胴最大径12.9cmを測る。頸部内面は粗いハケ、口縁外面は縦ハケの上横ナデ、外面下半～底部は雑なハケとなり、内面はナデ調整。胎土に粗石英多く含み、内外に二次焼成を受け淡茶～灰茶褐色を呈す。床面出土。

高杯（12・13） 熟れも覆土中出土の小片であるが、内面に縦をつくり、その上は横方向ヘラ削りを施し、胎土精良で焼成良く橙茶色となる。13の外面上半は縦ヘラ磨きが行なわれる。

椀（14～23） 14は覆土中、他は床面出土。調整手法により、外面下半がヘラ削りによるもの（14～22）と、ハケ調整を行なうもの（23）に分かれ、前者は、内面上半にハケを残すもの（17）、外面上半にハケを残すもの（18・19）もみられる。14は小型で内湾気味のまり状をなし、16は僅かに端部が外反するが、他は大旨直線的に開く傾向を残す。23は不安定な鉢状をなし、全体に薄手で精製である。内底面はナデツケをみせるものが多い。15～22は口径11.7～12.8cm、器高4.3～5.7cmと規格性がみられる。

玉類

白玉（第104図1～7・第6表） 滑石製の小型の類で、ほぼ至近内に出土したもので7点のみを採集し得た。1のみ算盤玉状をなす。径3.7～4.1mm、厚さ



第104図

第2号住居跡出土玉実測図（2/3）

第6表 八ヶ坪遺跡第2号住居跡出土玉計測表

図番号	径 × 厚(mm)	重 量 (g)	備 考
1	3.7 × 2.7	0.1	算盤玉状、外面焼で黒度
2	4.1 × 2.0	0.08	白玉
3	3.9 × 2.6	0.06	◆ 半欠
4	3.9 × 2.2	0.08	◆
5	3.9 × 2.9	0.1	◆
6	4.1 × 2.8	0.1	◆
7	3.9 × 2.4	0.09	◆

2.0~2.9mm, 重量0.06~0.1gを測る。

須恵器

甕胴部 (第 105 図 4) 小片で東壁際の貯藏穴出土。内外面横・斜め方向のナテ調整。胎土に細砂かなり含み、焼成堅緻で外面灰黑色、内面暗灰色を呈する。

ミニチュア土器 (第 105 図 2)

貯藏穴出土の完形品で、全体に手捏ねである。胎土精良、焼成良く、淡茶~黒色を呈する。手捏ね土製品 (第 105 図 3)

覆土中出土品で、粘土を紐状にしただけの断片の如きものであり、細砂若干含み、焼成良好で淡灰茶褐色をなす。

鉄器

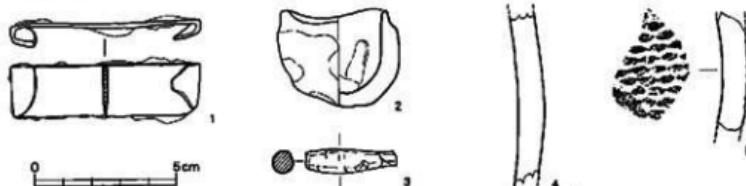
手鎌 (第 105 図 1) 覆土中出土で、両端を折り曲げ、木質は残存しない。長さ 6.6 cm, 幅 1.7 cm, 厚さ 2 mm 強を測る。

楢文土器 (第 105 図 5)

覆土中に混入していた小片で、外面に横位に楢円形押捺文を施す。胎土に粗砂少量含み、焼成良好で、淡黄褐色を呈する。

石器

砥石 (第 103 図 25) 覆土中出土で、淡黄灰色の砂岩製の粗砥。極めて良く使用したとみ



第105図 第2号住居跡出土鉄器、土製品、須恵器、楢文土器実測図 (1/2)

えて、各面が凹状をなし、最終的な研磨面は上半に6面、下半に5面の計11面ある。

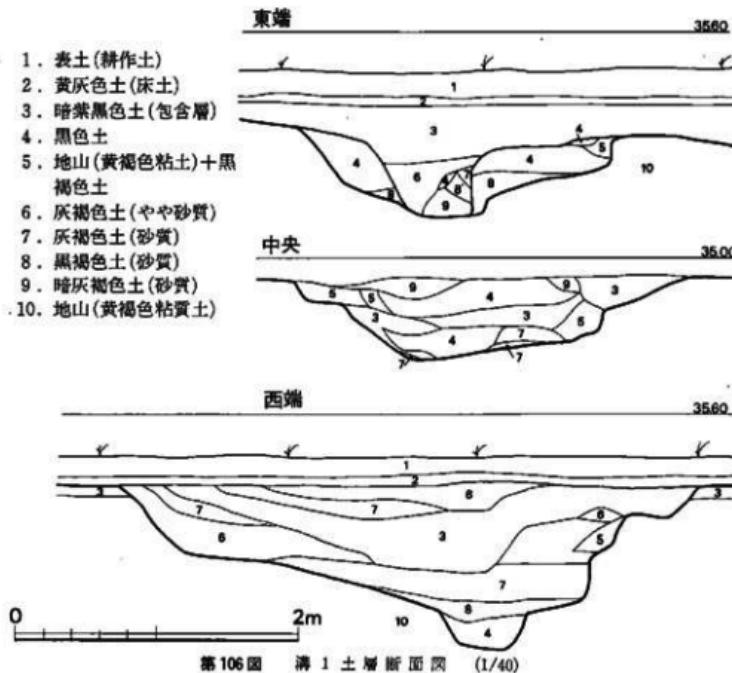
磨石（第103図24） 暗緑黒色の堅い自然転石の平坦面のみを使用している。やや中央が凹状となる。覆土中出土品である。

(2) 溝

発掘区域内に、縦横の溝状造構8本が検出された。各々、形態・規模・時代ともに異なり、その性格も全容を掴み得ないままに不明な点が多い。

溝1（第106図）

北半発掘区のほぼ中央に、N83°Eのほぼ東西方向に掘削され、溝底は西へ低くなる。幅2.2m（東端）～3.0m（西端）と幅を拡げる。深さ60～115cmと深く、全体に北壁が急傾斜をなし、南壁は緩やかで、中途で段をなす部分もある。断面図でみるとおり、溝2に切られている。埋



第106図 溝1 土層断面図 (1/40)

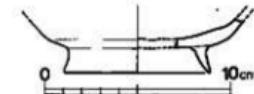
土は黒色土、砂質灰褐色土を主体としており、弥生終末期土器を多量に出土したA区東南隅段落ち部の埋土状況と似る。遺物は、最上面より弥生終末期土器小片少量をみるのみであり、ほぼその時期の造構であろうと考えられる。

溝2（付図3）

溝1を東端で切り、大きく略東西方向に蛇行して、溝底は西へ低くなる。5~7mと幅広く、深さは20~60cmと浅い。茶褐色土及び砂を埋土とし、氾濫時の自然流水路的な様相も感じられる。遺物も殆んど無く、図示した1点のみである。平安時代前半期の造構。

土師器（第107図）

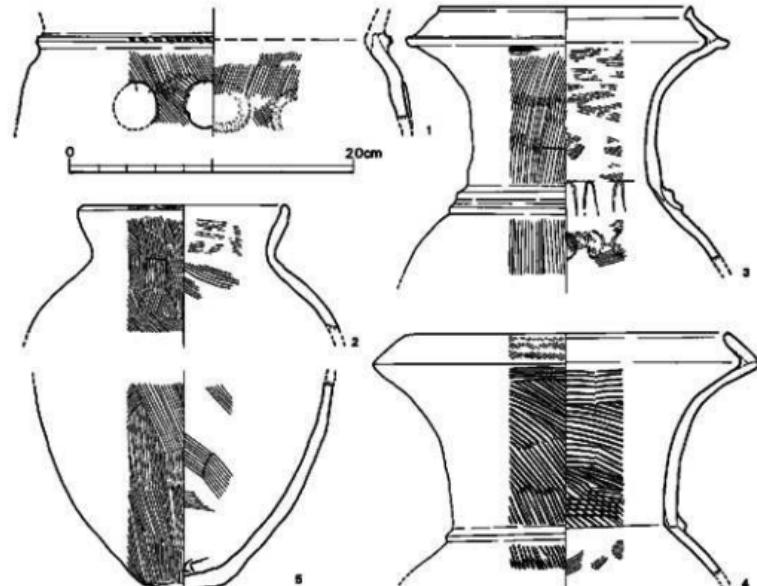
高台付椀 高く外へ張る高台を付け、体部との境に不明瞭な稜をつくる。1/4程の小片で、器表磨滅著しく、胎土に細砂若干含み、焼成やや不良で淡白褐色をなす。



第107図
溝2出土土師器実測図 (1/3)

溝3（付図3、図版58—1）

N55°Eのほぼ南西から北東に直線的に延びて、A区から続く段落ち部へ落ちる。幅0.5~1.5



第108図 溝3北端出土土器実測図 (1/4)

三、深さ30~40cmの断面V字状をなし、黒色土の埋土である。溝4・5に切られており、その北東端で弥生終末期土器が出土する。

弥生土器（第108図）

甕（1） ややくびれた頸部に断面コの字凸帯を付け、あまり張らない胴部上端に円形浮文を連続して貼る。内外面粗い斜めハケを施し、浮文内面は凸状をなす。胎土に粗砂多く含み、焼成良く、淡黄褐色を呈する。

壺（2~5） 口縁が單に外へ開くもの（2）と、複合口縁のもの（3・4）に分かれる。2は、外面はやや目の細かい雜なハケ調整で、内面はハケの上をナデ消す。口唇端面にも斜めハケの残る部分が多い。3は、口唇部が内外に突出し、頸部と胴部の接合部に連続した2条の三角凸帯を付ける。頸部・胴部外面にはやや粗い継ハケを施し、内面は、横ハケの上をナデ消す。胎土に粗石英・雲母が多く含み、焼成やや良くなじ黄茶褐色をなす。4は、口唇端部が丸味を持ち、内外面に極めて粗いハケ調整を行ない、胴内面はナデ消す。外面は丹塗布され、胎土に粗石英粒かなり含み、焼成良好く淡茶~淡褐色をみせる。5は、全体に厚手で不安定な小さな凸面をなした底をなし、外面にやや雜な継ハケ、内面は部分的な斜めハケを施し、内底部はオサエナデ。胎土に粗石英粒多く含み、暗灰黄褐色を呈する。

溝4（付図3、図版58-2）

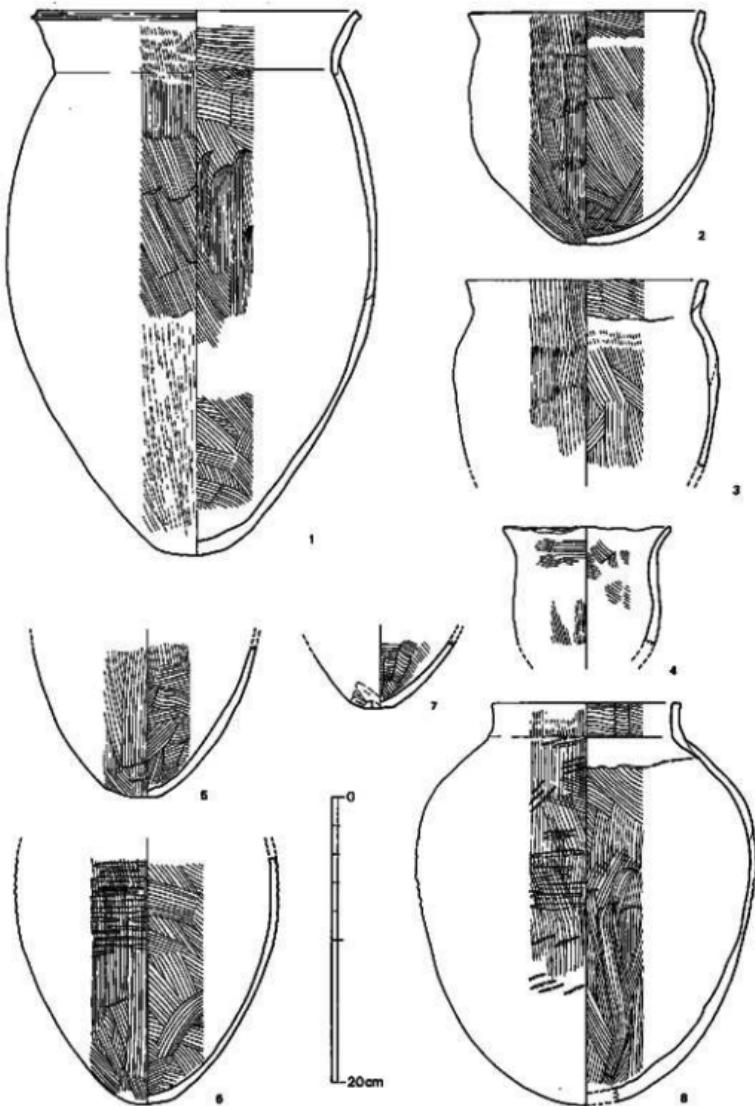
略北西から南東へ大きく円弧を描くように、東端の段落ちへ流れる。その西半は幅80~40cm、深さ30~10cmのわりと溝らしい溝であるが、中央部で砂層となって浅く拡がり、東半では、水流によって大きく抉られて、穴状の部分が連続した如くなつておらず、粗い砂が堆積していた。その東半の最深部60cmほどの砂中より多量の土器が検出された。自然流水後に溝の大きく抉られた部分に次々に投棄したものであろう。

出土遺物（第109・110・111図）

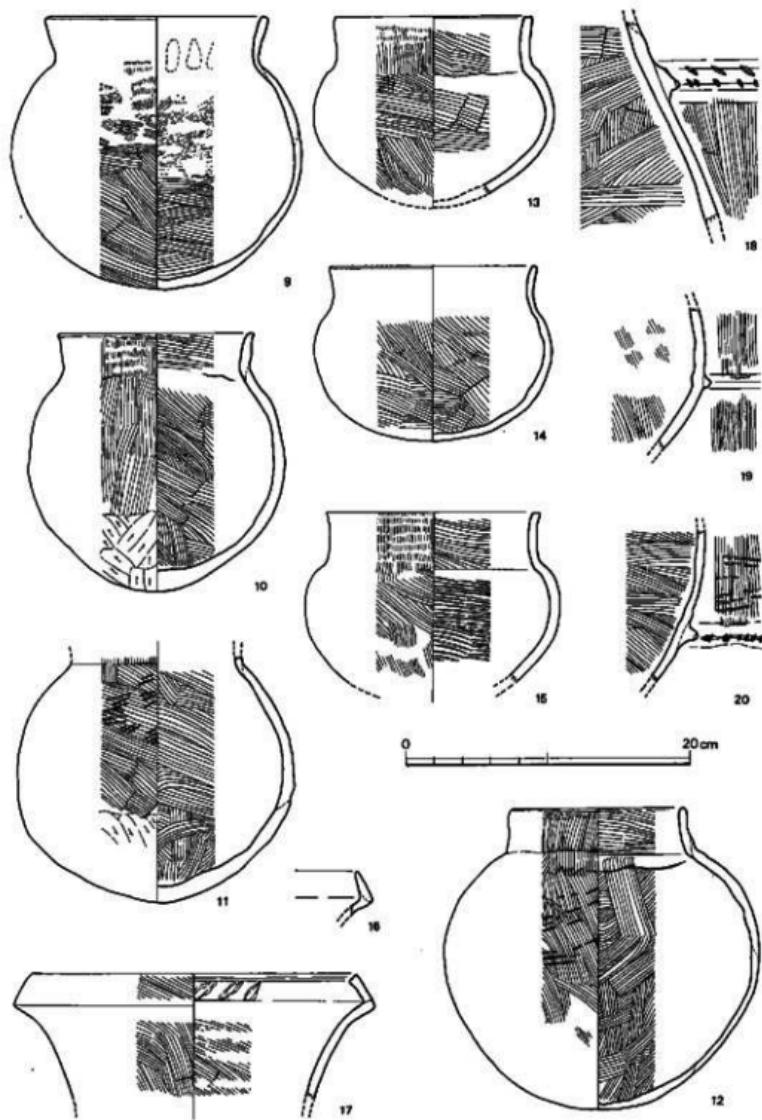
甕（1~11） 大型で長胴の形態をなすもの（1・5~7）、大型で卵倒形の胴に短かく直行する口縁を付けるもの（8）、中形であまり開かない口縁をもつもの（2・3）、小型で丸く開く口縁をもつもの（4）、短かくやや開く口縁に球形飼を付けるもの（9~11）などがある。1は、長胴の不安定な器形で、口唇端部が凹状となり、外端は突出する。口径22.5cm、器高38.4cm、胴部最大径25.6cmを測り、胴上半と内面には粗いハケ調整を行ない、胴外面下半は下から上へ板状工具により長く擦り上げるような擦過痕がみられ、胴部内面中位は過度の使用のため器表が磨滅し以下は黒色炭化物付着する。外面は口縁まで煤がこびりつく。胎土に粗砂かなり含み、焼成良く内面上半は茶~淡褐色をなす。2は、口唇端面凹線状となり、内外面にわりと粗いハケ調整を施す。口径16.6cm、器高16.4cm、胴最大径17.3cmを測る。焼きは良く内面灰

黄褐色、外面淡黄褐色を呈し、口縁の一端部と対称位の胴下半に黒斑部をみる。器表外面はかなり凹凸はげしく、1と同様ほぼ完形品。3は、内外面に粗いハケ調整後、口縁上端をヘラで削り取ったようで、口唇部はシャープな平坦面をなす。口縁外面は僅かに中ぶくらみとなる。口径17.0cm、胴最大径18.6cmで、胎土に粗砂多く含み、焼きは良く内面淡茶褐色をなす。外面は煤付着して黒色。4は、口径11.9cmの小型品で内外に雜なハケを残すが、全体に作り・器面調整とともに雜で手捏ね的である。焼成不良で、内面淡茶褐色、外面は二次焼成を受けて赤茶～暗褐色をなす。5は、僅かな平坦面を残すが不安定な長脚のタイプで、内外面に粗いハケ調整を施す。粗石英粒をかなり多く含み、焼きは良く内面淡茶色、外面淡灰黄褐色で、外面中位は煤付着し下半は赤変部が幾らかみられる。内底面には炭化物がこびりつく。6は外面中位に横位の太い叩きを行ない、その後内外面に粗い雜なハケ調整を施す。焼きは良く淡褐色を呈し、底内面に一粒の輪圧痕がみられる。7は、底外側がヘラ削りされ、外面ナデ、内面は押し引きによる放射状の粗い横ハケを行なう。焼きは良く淡黄褐色をなす。8は、卵型形の胴に短かく直立する口縁を付けた直口壺状の形態をなすもので、外面に横位の太い叩きのあと粗いハケを施す。外面下半は上下方向の擦過状のナデ調整を行ない、粗砂多く含み、焼成良好淡褐色をみせる。9は、口径15.7cm、器高19.2cm、胴最大径20.5cmを測り、球形胴に直立して僅かに外傾する口縁を付ける。胴外面上半は横位の叩きの上にわりと細かいハケを施し、更にナデ消している。内面上半もナデ消し、焼成やや不良で、外面淡白褐色、内面灰褐色をなす。10は、口径13.8cm、器高18.2cm、胴最大径18.1cmの厚手の球形胴につくる。口唇外端は部分的に突出し、胴外面上半は粗いヘラ削りのままで、他は雜な粗いハケ調整を行なう。焼きは良く淡褐色をなす。11は、10と器形・調整が類似するが、やや下ぶくらみの星をみせ、外面下半はヘラ削りのままで底面周辺は更にナデる。上半は細身の叩きの上にかなり粗いハケ調整を施し、上半内面は淡茶褐色、下半は黒～灰色をなす。

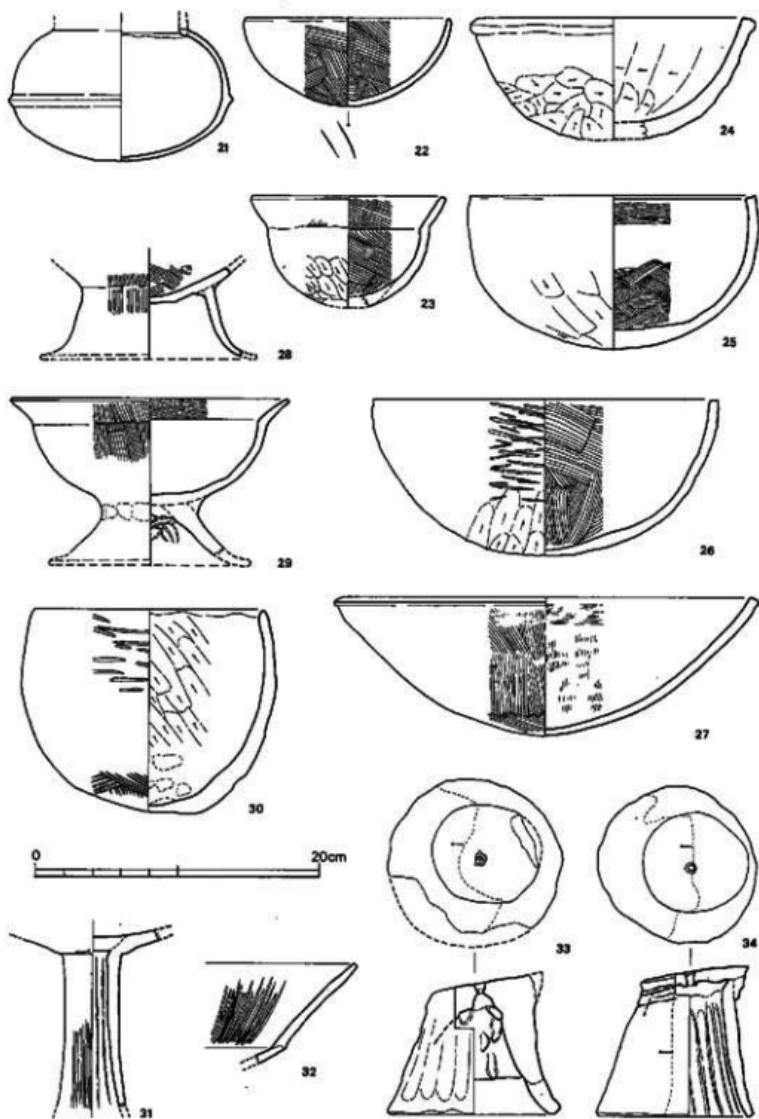
壺 (12・16~21) 球形胴の直口壺 (12), 複合口縁壺 (16・17), 長頸壺 (21) などがある。12はやや内傾する短かい口縁につくり、ほぼ完形で、口径12.4cm、器高21.3cm、胴最大径22.2cmを測る。胴外面上半に横位の叩きを施し、その後粗い雜なハケを行なう。下半は板工具による擦過状となる。焼きは良く、淡茶～白褐色をなす。16は、逆「く」字状に立ち上がる口縁部小片で、内外面横ナデ調整、胎土に粗砂かなり含み、焼成良好、淡茶色をなす。17は、口径23.0cm、口縁端凹状となり、内外面に粗いハケ調整を行ない、内面は後ナデ消す。口縁内面には強い指頭圧痕をみる。胎土に粗砂かなり含み、焼きは良く、淡茶褐色をなす。18は、やや幅広い「コ」字状凸部の上下端にハケ工具端押圧による斜行刻目を施す。内外にやや細かいハケ調整を施し、胎土に粗砂かなり含み、焼成やや不良で赤茶色をなす。19は、胴部のやや下位に三角凸部を付け、外面はやや細かい継ハケ、内面は粗い斜めハケを施し、上半はナデ消す。粗砂少量含み、焼きはやや不良で内面淡茶、外面黒～灰褐色を呈する。20は、胴部下位に不整な



第109圖 满4出土土器実測図 1 (1/4)



第110図 满4出土土器実測図 2 (1/4)



第111圖 漢4出土土器実測図 3 (1/4)

三角凸帯を付け、ハケ工具端押圧による刻目を施す。外面上半は横位の粗大な叩きの上を縦ハケ、下半は雑なナデツケ状とする。内面はやや目の細かいハケ調整を行なう。粗石英粒かなり含み、焼成やや不良で内面黒色、外面淡白褐色をなす。21は、通常の細頸扁平胴の長頸壺と異なり、頸部径9.6cmと大きく、肩部が丸く張り、胴中位よりやや下がって三角凸帯を有する。全体に薄手・精製で、粗砂若干含むが大旨精良、焼成やや良く外面赤茶色、内面暗褐色をなす。外面ヘラ磨きかと思われ、内面は丁寧なナデ調整を行なう。

鉢 (13~15, 22~27・30) 鉢と一括したが器形は多様である。直立或いはやや外傾気味の短かい口縁に丸い胴を持つもの (13~15), 小型の碗 (22), 小型で屈曲して外反する口縁を有するもの (23), 粗作りで鉢状のもの (24), 半球状のボール状のもの (25・26), 大口径のもの (27), 粗作りの深いもの (30) などがあり、今後、用途により更に分類され得べきであろう。13は、口径14.0cm, 復元器高13.3cm, 胴最大径17.0cmを測り、内外面に粗いハケ調整を施し、内面頸部直下は横ナデで消し、下半はナデツケ状となる。粗砂かなり含み、焼きは良く内面淡黄褐色、外面淡褐~黒色をなす。14は、口径14.7cm, 器高12.4cm, 胴最大径16.8cmを測り、口縁内外面横ナデ、胴内外面は粗いハケ調整を施し、外底部はナデ消す。肩部以下に焼付着し、下半は器表剥落部分が多く、煮沸に使用されている。胎土に細砂多く含み、焼成やや良く内面上半灰褐色、下半は暗褐色をなす。15は、口径15.0cm, 胴最大径18.0cmで、内外に粗いハケを施し、胴内面は特に太く粗い。口縁外面は後横ナデを施す。粗砂かなり含み、焼成良く淡褐色~暗褐色をなす。22は、口径14.7cm, 器高6.2cmで、内外に粗い雑なハケ調整を施す。底外面に粗い2本の平行線のヘラ記号がみられる。23は、口径13.7cm, 復元器高7.8cmで、内面は粗いハケ調整、口縁外面はハケの上ナデ消し、外面下半はヘラ削りのままである。24は、厚手で全体に粗作りで、上半内外面は粗い横ナデ、内面下半は横方向ヘラ削りの上をヘラでナデツケ状とし、外面は粗いヘラ削りのままでする。胎土に粗石英粒多く含み、焼成良く暗黄褐色をなす。25は、口径20.1cm, 器高10.9cmで、口縁端やや凹状となり、内面上端と下半に雑なハケ調整を行なう。外面上端は横ナデ、下半は削りの後、全体にナデまわしている。胎土に粗砂かなり含み、焼成良好、内面淡灰褐色、外面灰褐~黒色をなす。25は24と同様ほぼ完形で、内面にわりと粗いハケを施し、外面上半は横方向の粗い叩きの上をナデて、下半は粗い削りのままとする。口径24.4cm, 器高10.9cmで、胎土に粗石英粒多く含み、焼きは良く、内面淡茶褐色、外面淡黄褐色をなす。27は、口径30.0cm, 器高9.8cmの大形品で、内外面にわりと細かいハケ調整を施し、内面はナデ消す。粗大石英粒かなり含み、焼成良く、内面淡茶色、外面淡黄褐~灰褐色をなす。30は、内面ヘラ削り上げ、外面上半は粗い叩きの上ナデ、下端は粗く大きな雑なハケ調整を行ない、全体に歪で凹凸著しく粗い作りである。粗砂かなり含み、焼きは良く暗茶褐~黒色をなす。

台付鉢 (28・29) 28は、径の大きい薄手の脚台を付け、脚上半と鉢部内外にハケ調整を

行なう。脚下半は横ナデを施す。29は、細かいハケを口縁内面と外面上半に施し、厚い擦拡がありの脚を付ける。粗石英かなり含み、焼成やや甘く淡褐色をなす。

高杯 (31・32) 31は、脚柱外面ヘラ削りのあと縱ハケ、杯部外面は縱ハケのあと縱ヘラ磨き、内面ヘラ磨きを施す。胎土は大旨精良、焼成やや不良で淡茶色を呈する。32は、杯部屈曲部から更に長く開く類で、内面横ハケの上に密な暗文状の縱ヘラ磨きを施す。胎土精良で、焼きは悪く、内面淡灰黄褐色、外面淡灰褐色をなす。

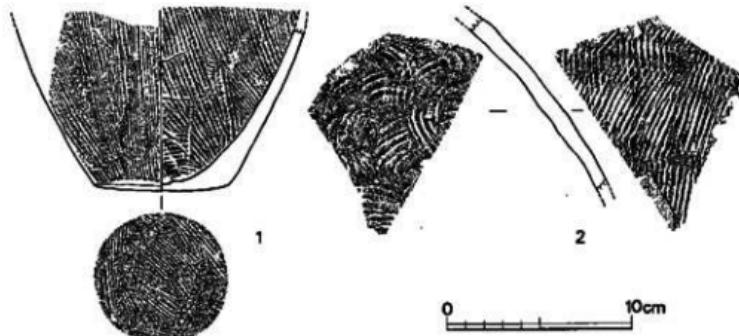
支脚 (33・34) 独れも所謂沓形器台の類であるが、上面は梢円形となり舌状突起部を作らない。33は体部外面指ナデ上げ、内面は指オサエ痕が著しい。孔は小さく、上面の傾斜した側の約半分(図中点線・矢印)が強い二次焼成を受けて赤変する。これは34でも同様である。粗砂多く含み、焼きは良く外面淡褐～赤茶色、内面暗灰褐色をなす。全体に厚手で手捏ね状である。34は、内面に強い指縱ナデがみられ、薄手で、孔は棒状工具で穿つ。粗砂多く含み、焼きは良く淡白褐一茶色を呈する。

溝5 (付図3、図版58—3)

B区のほぼ中央に溝6と平行してN81°Wのほぼ東西に走る。西端で溝3を切り、東端は地山面と同レベルとなり、幅50～80cm、深さ20～25cmの断面U字形をなし、底面は東へ低くなる。遺物は皆無で、埋土及び形態より、溝6と同時期かと考えられる。

溝6 (付図3、図版58—3)

溝5の南に平行してやや弧を描くように、ほぼ東西に走る。東端で溝7を切り、底面は東へ低く下がる。幅0.5～1.6m、深さ0.2～0.5mで断面U字形を呈し、中途で2箇所南側へ不整長方形の張り出部分がみられ、埋土下半は砂層となり水流により抉れた部分と判断される。遺



第112図 溝6出土弥生土器・須恵器実測図 (1/3)

物は少なく、下記の須恵器片より、古墳時代後半以降の溝と考えられる。溝5との間は約4.5m幅で、道の側溝説もあるが判然としない。

弥生土器（112図）

壺（1） 凸面状となる平底で、内・外面に、更に底面にまで粗いハケ調整を施す。粗砂多く含み、焼成良く外面暗褐色、内面黄茶褐色をなす。

須恵器（第112図）

壺（2） 肩に近い頸部片で、内面青海波で上半を部分的にナデ消す。外面平行線状叩きで、粗砂僅かに含むがかなり精良で焼成堅緻、外面灰黒色、内面暗青灰色をなす。

溝7（付図3、図版58—4）

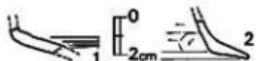
B区の南半にN40°Eのほぼ北東から南西へ直線的に細く延びる。幅30~70cm、深さ20~30cmで、遺物の出土は少なく、第2号住居跡と同時期の所産かと考えられる。底面は殆んど変らないが、南半では南西へ低くなる。北東端で溝6に切られ、南西端の第5号掘立柱建物より古い。

土師器（第113図）

高杯（2） 頸部小片で、内面ヘラ削りにより稜をなす。胎土精良で焼成良く、橙茶色をなす。

須恵器（113図）

壺（1） 頸部～肩上部小片で、肩外面にカキ目上のナデ、他は回転ナデ調整を行なう。胎土精良で焼成堅緻、外面灰かぶりで暗灰色、内面灰色をなす。



第113図

溝7出土須恵器・土師器実測図 (1/3)

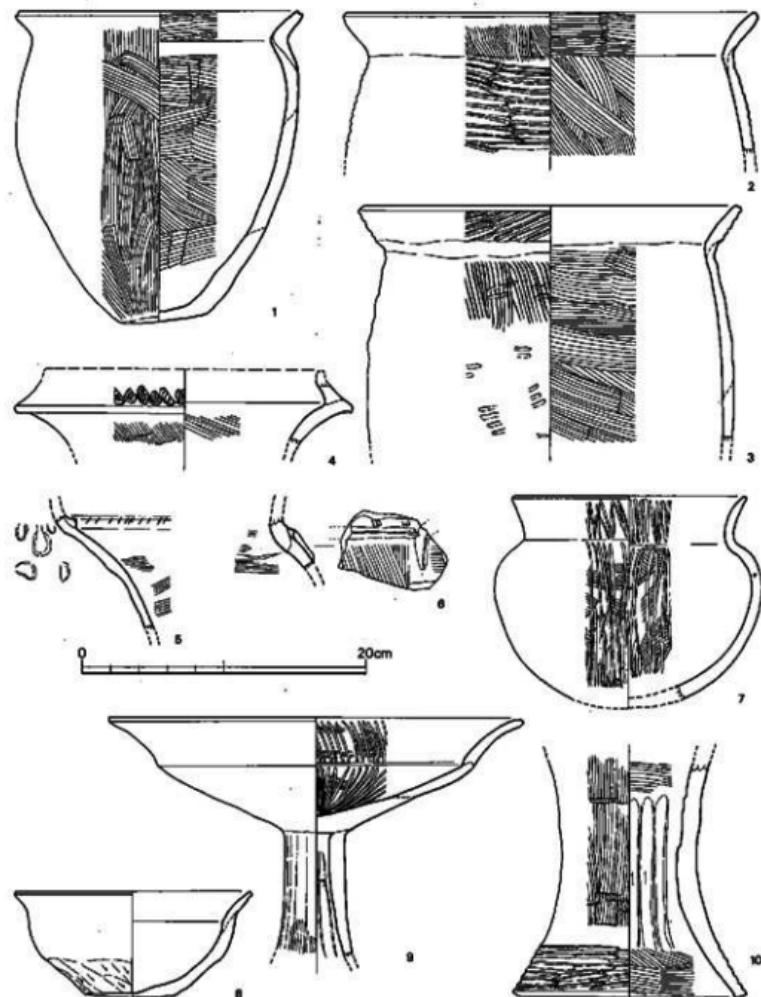
溝8（付図3）

發掘区の南端にN85°Wのほぼ東西方向に走る。幅0.9~1.1m、深さ20~40cmで、底面は西へ下がる。遺物は皆無で時期は明確でない。

(3) A区東南隅包含層

A区東南からB区北東にかけて大きく段落ちとなる部分がある。これはB区東辺中央段落ち部とも繋がって、南へ開く小支谷の谷頭及びその西辺にあたると考えられる。一段(50~80cm)下がって後はそれ程急に下がらず、緩やかに傾斜してゆき、往時の水田面へと続くものと想定される。黒紫色土の遺物包含層が厚く堆積し、段落ち部発掘範囲ほぼ全面に遺物がみられるが、段落ち直下周辺に特に多量に集中していた。遺物は統て、弥生終末～古式土師器に限られる。

壺（第114図1～3） 1は、厚手の短かく「く」の字に外反する口縁で、上半でやや張る胴部につくる。底部は僅かに凸面状となる不安定な平底で、内外に粗い雜なハケ調整を施す。口径20.1cm、器高21.9cm、胴最大径19.9cmを測り、口縁端は凹状をなす。胎土に粗砂かなり含



第114図 A区東南隅包含層出土土器実測図1 (1/4)

み、焼成良好で、内面茶褐色、外面灰茶褐色をなす。2・3と比べて古式で、弥生後期中頃の所産である。2は、あまり張らない長胴の大型品となるもので、復元口径29.3cmを測る。内面と口縁外面に粗いハケを施し、胴部外面は太く粗い叩き目のままとする。胎土に粗砂多く含み焼成良好で、内面暗茶褐色、外面煤付着して暗褐～黒色をなす。3は、口径27.0cmの張らない長胴の大型品で、口縁外面と胴部外面に粗く太い叩き目を施し、胴上半は極めて粗い縦ハケで、下半は縦ナデで叩きを消す。胴部内面は粗いハケ、口縁内面は横ハケの上を横ナデで消す。胎土に粗砂多く含み、焼成良好で内面暗褐色、外面は煤付着して黒～暗褐色をなす。

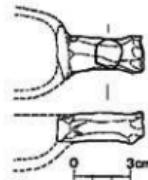
壺（第114図4～7） 複合口縁壺（4）と磨きをかけた短頸広口壺（7）とがある。4は、稚拙な櫛描反転連続による波状文を口縁外面に施し、頸部内外面に斜めハケ、他は横ナデとする。胎土に粗砂かなり含み、焼成良好灰褐色をなす。5は、頸部に三角凸帯を付け、鋭い工具による細い刻目を斜めに施す。胴外面には横ハケが残り、内面は指オサエで凹凸著しい。胎土に粗石英極めて多く含み、焼成やや不良で外面淡褐色、内面黒色を呈する。6は、頸部に断面三角凸帯を付け、その一端は下方へ垂れるように貼付する。内面は粗い横ハケの上をナデる。粗砂かなり含み、焼きは良く、淡白褐色をなす。7は、口径16.5cm、復元器高15.0cm、胴部最大径18.8cmを測る。胴部内外面に粗いハケを施した上から縦方向のヘラによる暗文状の磨きをかける。下半ではこれが密となってゆく。口縁内外面も鋸歯状に施された暗文状のヘラ磨きをかける。胎土に粗砂若干含み、焼成良好淡赤茶色をなす。

鉢（第114図8） 凸面状の底部から丸味を帯びた体部へ、更に屈折して外反して開く口縁につくる。口縁端は僅かに凹状をなし、内外面横ナデで、体部下半は大きく抉るように削る。胎土に粗砂多く含み、焼成良好淡茶褐色をなす。口径16.7cm、器高7.4cm。

高杯（第114図9） 杯部口径29.2cmで、屈折して更に外反する口縁は全体からみてやや短かい。杯部内面は横ハケの上に放射状のヘラによる暗文が施され、外面は縦位の密な丁寧なヘラ磨きとする。脚柱内面は縦の指ナデ上げ、外面は縦削りによる面取り状の棱線を残して、上から縦ハケの上に更に縦ヘラ磨きを行なう。胎土に粗石英粒かなり含み、焼成良好で茶褐色をなす。

器台（第114図10） 上下に開く鼓形となり、外面下端に太く粗い横位の叩きを施し、中位は縦ハケを行なう。内面上下が粗い横ハケ、中位は強い縦ナデ上げのままとする。胎土に粗砂多く含み、焼成良好、茶褐色をなす。

土製品（第115図） 断面不整多角形をした手捏ねの短柱状品で、一端で折損がみられ、一応土匙の柄と推定したが、他のミニチュア製品の可能性もある。胎土精良で淡茶色をなす。



第115図

A区東南隅包含層
出土土器実測図 2

(1/4)

(4) B区東端段落ち

前記のA・B区東端に連なる段落ちが、B区東端の中央付近でも検出され、その出土品が前述遺物と全く異なる為、別にして記すこととした。わりと急な段落ちで、最深部まで90cmほどあり、遺物はその縁及び直下付近に集中した。その内容は、古式の須恵器、高杯などの土師器、土製模造鏡、ミニチュア土製品、滑石製有孔円盤・剣形模造品など、祭祀的な様相を示し、第2号住居跡との関連も注目される。

須恵器（第116図1～5）

壺（1～3） 1は、内面稜線以下は粗い横方向のナデツケ状とし、他は回転ナデ。胎土に細砂僅かに含み、焼成堅緻で内面暗青灰色、外面灰かぶりで部分的に濃緑の自然釉がみられる。2は、胴部外面中位の沈線以上にカキ目を施す。胎土に細砂僅かに含み、焼成堅緻で外面灰色、内面青灰色をなす。3は、小形の壺の可能性もあるが、内底面に残る暗灰色の灰かぶり部分から、最小内径5cm程の頸部を有するものと考えられる。底外面はヘラ削りのあとナデしており、内面はあて具痕のためか凹凸著しい。胎土に細砂幾らか含み、焼成良く、外面黒～暗灰褐色、内面淡灰色をなす。

甕（4） 頸部直下から肩部にかけての破片で、内面青海波、外面平行線状叩きを施す。頸部直下内外面は横ナデ、内面上半にも部分的に横ナデがみられる。胎土に粗砂かなり含み、焼成堅く外面暗青灰色、内面青灰黒色をなす。

器台（5） 捩括がりで脚端部は丸味をもち、透し部はやや曲線的な1縦側辺のみ残り、全体に配置・形状等、明確でないが、台形状の透しとなるかと考えられる。透し部直下に両側を沈線状に押さえて僅かにつまみ出した凸線がみられる。胎土は僅かな細砂を含むが大旨精良で、焼成堅緻で外面灰黒色、内面淡青灰色をなす。

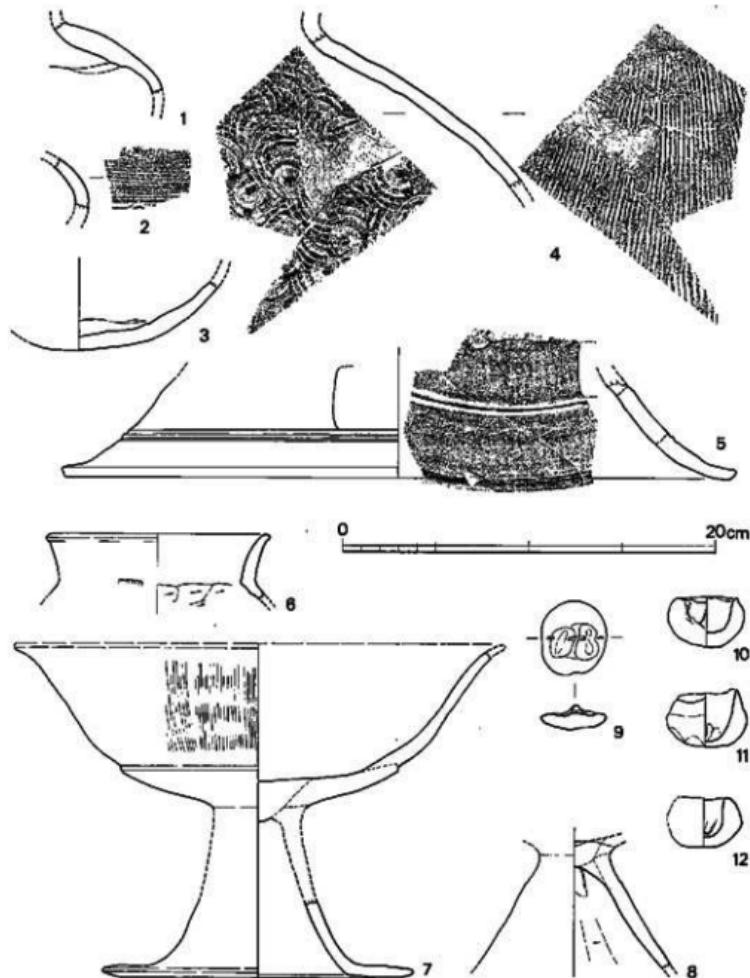
土師器（第116図6～8）

甕（6） 外傾状に開く口縁の外端部が突出し、胴内面ヘラ削り、外面に縦ハケを残す。口縁内外面横ナデで、粗砂かなり含み、焼きは良く淡灰褐色をなす。

高杯（7・8） 7は、復元口径26.0cm、器高18cm前後と考えられ、脚下半部とは、胎土・焼成ともに同じで、同一個体と考えて図上復元を試みた。杯部は全体に丸味を帯びて端反り状となり、外面は縦ハケの上を横ナデ、内面は横ナデで中心付近はナデつける。胎土精良で焼成良好、淡黄白褐色をなす。8は、脚柱部分から大きく拡がる類で、内面下半は横方向ヘラ削りの上を縦にナデる。胎土精良で焼成やや良く、橙褐色をなす。

土製模造品（第 116 図 9～12）

模造鏡（9） 径 4.0～3.5cm の不整円形をなし、鉢上面までの厚さ 1.3 cm で、指頭で鉢部をつまみ出し、細い工具で穿孔し、両端にその圧痕が残る。胎土精良で淡茶色をなす。



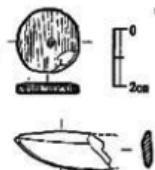
第 116 図 B 区東端段落から出土須底器・土鐘器・土製品実測図（1/3）

模造品（10～12） 熟れも手捏ね小品で、内外面に指頭圧痕・粘土のシワ等を残す。胎土精良で、最大径4.0～4.3cm、高さ2.6～3.0cmを測る。

滑石製品（第117図）

有孔円盤（1） 径2.2cm、厚さ0.3cmの小円盤に1孔を穿つ。乳橙色をなし片麻岩に近く、側面と表裏同方向の擦痕を残す。重量2.8g。

剣形模造品（2） 下刃が湾曲し、表面中心よりやや上方にずれて稜線をつくる。縁辺は丸味を持ち、乳橙色の片麻岩質で、刀子様の模造品となるか。



第117図
B区東端段落ち石製
模造品実測図（1/2）

（5）掘立柱建物

発掘範囲の北半に4棟分、南端に1棟が検出された。南端の第5号掘立柱建物は柱穴も小さく、全く他のものと様相が異なる。北半の4棟も他の官衙的性格をもつ遺跡のものの如き大規模なものではなく、後記する如く平安期を中心とした小規模な類である。

第1号掘立柱建物（第118図上）

2間×(1+α)間で主軸は真北より17°31'東へふれる。梁行7尺等間、桁行9尺と考えられる。柱穴は径30～60cmで、深さ6～34cmと浅く全体に更に北へ延びると考えられる。第2号棟と直角方向となり、双方が関連した建物となろう。

第2号掘立柱建物（第118図下）

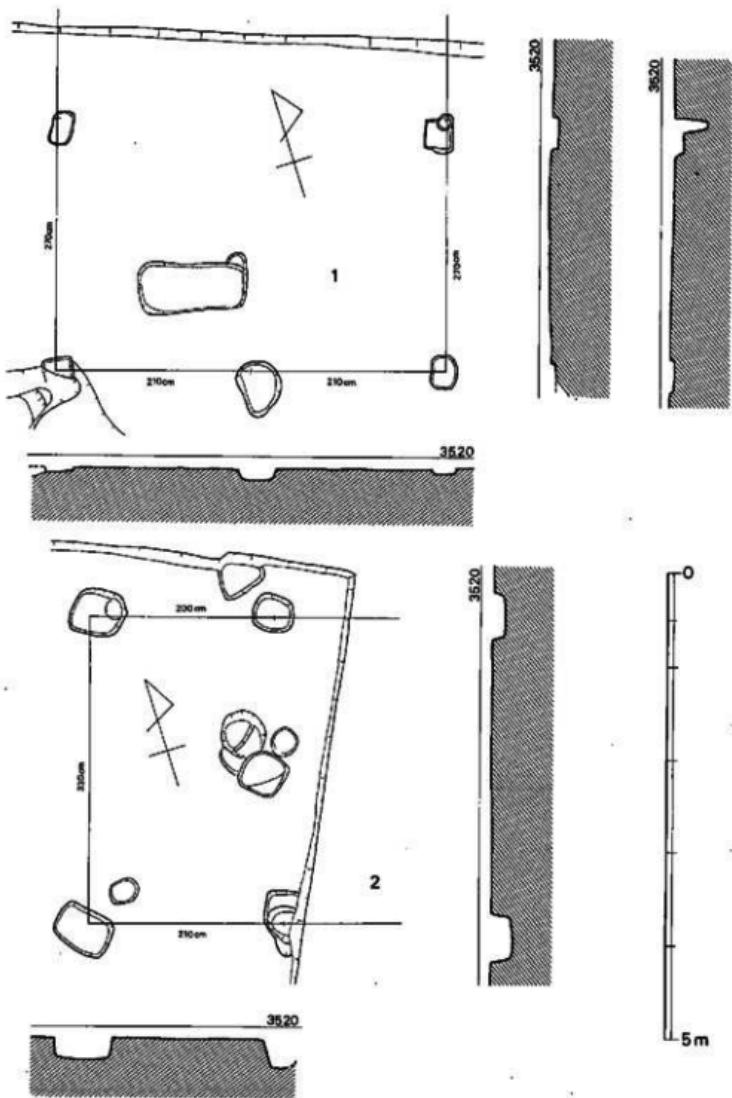
第1号棟の東にN72°30'Wの主軸をとり、1×(1+α)間の東西棟となろう。梁行10尺、桁行7尺となるものと推定される。柱穴掘立は不描いで、径40～60cm、深さ15～30cmでレベルは一定しない。更に東方へ延びる可能性がある。

第3号掘立柱建物（第119図上）

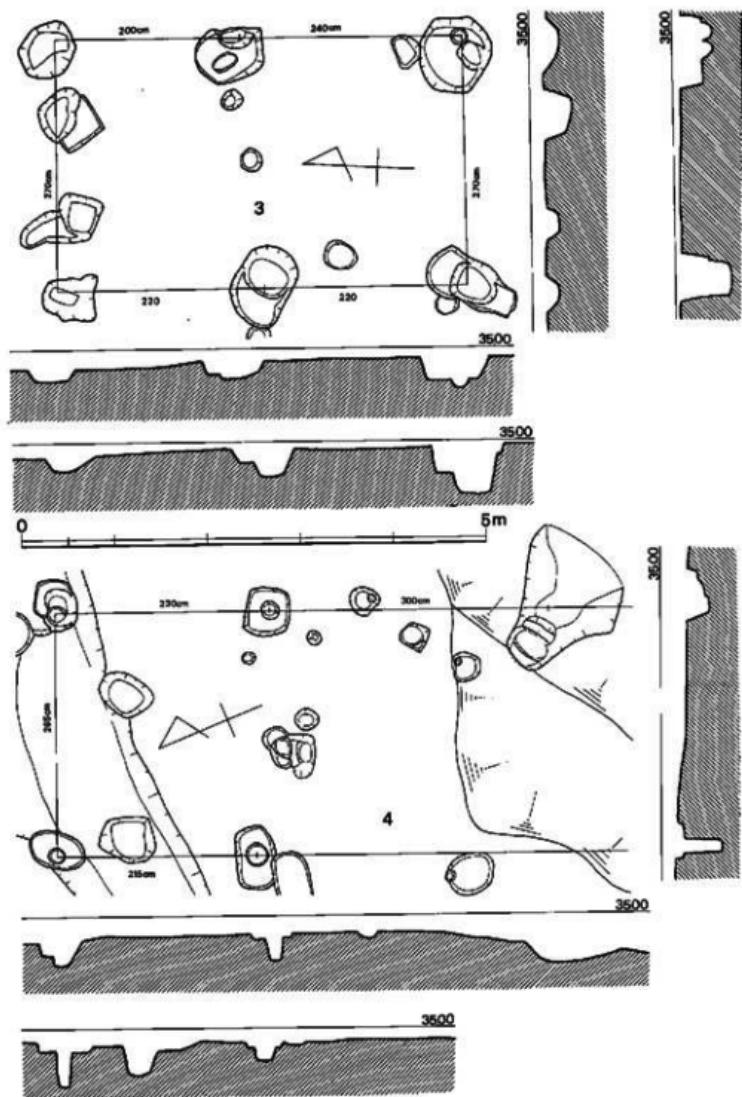
主軸をN4°Wにとる1×2間の南北棟で、梁行9尺、桁行7尺の基準が考えられる。柱穴掘方は不描いであるが、径60～80cmと他棟に比べやや大きく、深さは14～55cmと描わない。

第4号掘立柱建物（第119図下）

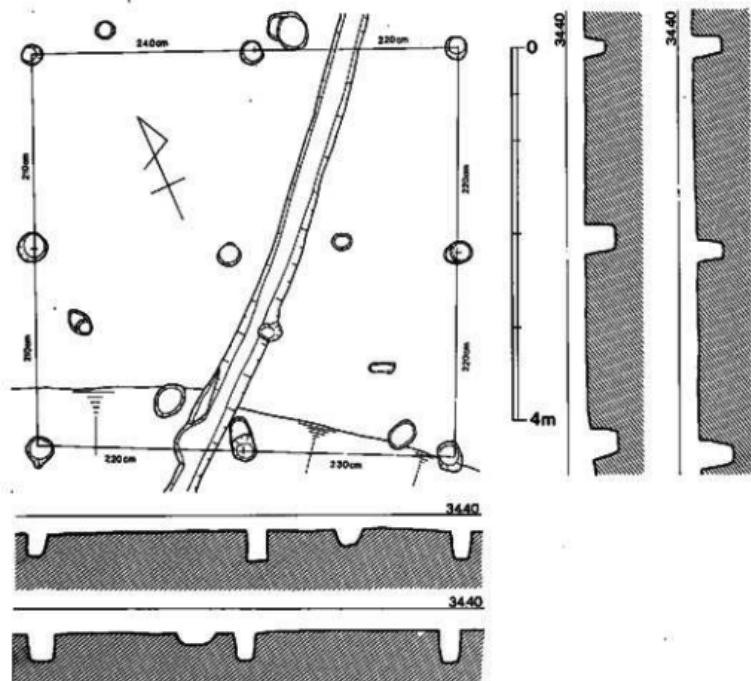
主軸をN22°30'Eにとる1×(1+α)間の建物で、南半は削平・段落ちによりどれ程延びるか不明である。梁行9尺、桁行7(8)尺が想定され、残存する4柱穴掘方間にには各々ほ



第118圖 第1・2号掘立柱建物実測図 (1/60)



第119図 第3・4号据立柱建物実測図 (1/60)



第120図 第5号掘立柱建物実測図 (1/60)

中心に、径15cm程の柱痕が残る。深さは20~50cmと揃わない。第3号棟の東隣に在るが、主軸方位も異なり、各々時期を異にする単独棟かと考えられる。

第5号掘立柱建物 (第120図)

遺跡の南端の段落ち上縁に當まれ、主軸をN23°Eにとり、2×2間の東西にやや長い方形に近く、梁行7尺、桁行7.5尺等間を基準とする。溝7より新しく、柱穴は径22~30cmと小さく、深さは22~35cmである。

以上の掘立柱建物の他に並ばない小ピットが多く散在する。これらのうち大部分は弥生終末期土器小片を含み、歴史時代の遺物を含むものは極く少數



第121図 A区各ピット出土須恵器・土師器・白磁実測図 (1/3)

である。以下A区各小ピット出土の遺物を、掘立柱建物群の時期判断の状況証拠として図示したい。(第121図)

須恵器杯(1) 低く内端で接地する高台を付け、体部への境に稜をつくる。胎土に細砂若干含み、焼成堅緻で体部外面暗灰色。他は灰色を呈する。P.21出土。

須恵器頸部(2) 平瓶或いは捷瓶の頸部小片で、内径4cm弱となろう。細砂幾らか含み、焼成堅く、黒色をなす。P.20出土。

土師器小皿(3) 底部糸切りの小片で、復元底径6.9cmで器表磨滅し、細砂かなり含み、焼きは悪く灰白色を呈する。P.8出土品である。

白磁(4) 壺胴部下半の小片と考えられ、外面は横ヘラ削りで、下端付近までややオリーブ色がかった釉をかけ、胎土は密で灰白色を呈する。内面は回転ナデで無釉のまます。3と同じくP.8出土品である。

3. 小 結

a. 弥生終末期を中心とする土器群について

本遺跡では既述の如く、A区東南隅包含層、溝4、溝3北端等に弥生後期から古式土師器の時期の土器が多量に出土したが、各遺物には若干の時期差がみられる。

まず、A区東南隅包含層出土分(第114図)においては、壺1が後期中頃まで造り得るものであり、高杯9も反転して開く口縁部がやや短く後期後半と考えられ、更に鉢8も凸状をなす平底につくり古相を残す。これらに対して、壺2・3は胴外面に叩き目を施し、長胴となるタイプで、後期終末の地元系の特徴を示すものである。

次に、溝3北端出土土器(第108図)は、包含層としてはA区東南隅包含層に連続するものである。5のような凸面をなした平底も残り後期後半となる。3のような磐瀬沿岸~遠賀川下流域に多くみられる複合口縁の壺の如く、4の壺とタイプが異なるものも出土するが、終末に近い時期に考えてよさそうである。

以上に対して溝4出土土器(第109~111図)は、長胴の壺も尖底の如き丸底となり、直口状で球形胴の壺の類(9~12)、或いは鉢の類(13~15)などでは器形・調整等の手法・法量等にも或る程度の共通性、更には規格性も認められてくる。台付鉢(28・29)や、各種の鉢(22~27)等においては薄手の精製品もみられ、古式土師器的様相が強くなってくる。高杯(31・32)は、いまだ長脚であるが、杯部口縁が長く開き、深くなっている。長頸壺(21)は、細頸扁平

洞のタイプと異なり、頭部径が大きく、肩が張り、凸帯をつまみ出すものである。このタイプは、春日市門田遺跡谷地区大溝I(註1)より弥生終末土器多量とともに細頭扁平胴のタイプのものとともに出土しており、福岡市西区西新町遺跡(註2)からも出土している。

以上の各遺構出土土器を考える上で同地域として参考としなければならないのが近年調査された甘木市大字平塚所在小田道遺跡(註3)である。報告によれば、当該時期をI～III期に分けて編年されており、朝倉地方における成果が得られている。八ヶ坪遺跡出土土器は、大旨、A区東南隅包含層と溝3北端の古手のものが小田道I期、溝4の大半が小田道II～III期に含まれ得るものである。ただ八ヶ坪遺跡は朝倉地方でも西端に位置し、細部において異なる点もかなりみられ、今後の検討課題として残る部分も多い。ただ、くの字口縁に長胴のタイプの甕においては、当地方から筑後・佐賀平野に特徴的に分布し、更に糸島平野～古賀の北部沿岸地域まで広くみられることから、畿内・瀬戸内系土器群との比較の上からもこの類の編年の必要性を痛感していたところであり、小田道遺跡において変遷の傾向を掴むことができたのは喜ばしい。前原町三雲遺跡においてもこの手の甕が多く出土し、後期後半から終末期、更に布留式期土器に伴うものまで地元系土器として残る。これらの各遺跡の例から概見してみると、この手の甕は、後期後半では胴最大径が上位にあり、凸状の平底を残し、終末期では中位近くまで最大径が下がり、更に長胴となり、丸底に近く、外面に叩きを施すものがみられる。その後は頭部内面の稜が不明瞭あるいは丸味を帯びて、胴の張りが少なくなる傾向となる。当八ヶ坪遺跡においては、当該時期の確実な造構が検出されず、現状での他の遺跡に於ける研究成果に負う所大であった。今後の当地方の研究進展に期待する次第である。

b. 突付設の豊穴住居跡について

本遺跡では、第2号住居跡に竈が設けられ、出土土器等からその時期が問題となる。また未だに竈を持たない第1号住居跡との時間的関連についても若干の問題点を示してみたい。

まず、出土土器より各住居跡の年代的位置付けを考察したい。第1号住居跡(第101図)では、甕(1)は胴最大径を上位に有し肩の張る器形をなし、口縁辺にシャープさを残す。高杯(3)は小径化するものがみられ、小型鉢(5)では口縁内面に稜をつくり短かく外反するタイプである。小型化・定形化しない手捏ね土器(6～8)もみられる。以上と比較して第2号住居跡(第102・103図)では異なる様相がみられる。甕では覆土中混入小片(1・2)の庄内式系のものを除き、他は、胴部中位に最大径を有し、僅かに長胴化の萌しをみせるもの(3)もみられ。口縁中ぶくらみの特徴を残すものもありあるが、外反の度が弱くなり傾きが少なくなる傾向を示す。口縁辺は既にシャープさに欠け丸味を帯び、小型甕では器壁の厚くなるものが多い。更に8のように起きを異にするものもみられる。瓶においては、覆土中の14を除い

て他は、未だ明瞭に丸く内湾するものはみられず、孰れも、外面下半をヘラ削り又はハケ調整のままとする特徴が指摘される。高杯は脚柱部から広がる類である。

以上の観察から、第1号住居跡出土土器は第2号住居跡のものより、より古相を呈しており、本遺跡においては、各々、竈出現前夜と出現当初の住居跡であると位置付けられる。これらの土器は、斐においては、布留式新とされる春日市下原遺跡出土土器群(註4)の傾向を残しながらも明らかに新しい段階に入っているもので、春日市門田6号住居跡(註5)出土のものとの共通性が多くみられる。更に、那珂川町今光遺跡溝2(註6)のもの、甘木市池の上遺跡D-1棺外副葬土器(註7)との近似性もみられ、全体に斐において、5C前半代の特徴を残す。ただ椀においては、丸味を帯びて、内湾的なものに近付いているものもみられ、貯蔵穴内の須恵器小片の存在をも勘案するに、本遺跡第2号住居跡は5C後葉に近い中葉期と比定されよう。第1号住居跡はより古く、5Cの前葉に近い中葉期に位置付けることができる。

本遺跡B区東端段落ち出土品についても若干旨としておく。須恵器は斐においても古式であり、斐は内面一部ナデ消しをみせ、器台は5Cの「中葉に近い後半」とされる大阪府野中古墳(註8)出土品等に端部や凸線の手法等に近似点を見る事ができる。土師器斐は口縁がかなり立ち、安徳・中原5号住居跡(註9)のものに近く、高杯は脚柱上部から聞くもので、杯部は全体に丸味を帯びる。更には、土製模造鏡や定型化・小型化した手捏ね土器がみられる。全体としては第2号住居跡に近い時期から、遅れて、5Cの後半以降のものまでを含む時期の所産であると考えられる。

九州における竈付設の整穴住居跡は、関東におけるそれよりも発見・研究史的にも遅れて一昔前までは珍らしいものであったが、現在では、北半九州を中心に、300例を優に越える発掘が為されている。それらの殆んどは、7C代を中心にして5C前半から8C中葉までに集中している。より古い例を探すと、春日市赤井手遺跡(註10)で須恵器I-1型式を伴う例があり、また、太宰府町裏ノ田遺跡(註11)の須恵器II型式を伴う2(3)例等があり、大旨、竈出現の時期は、このあたりに從来おさえられてきた。例外的なものとして、筑紫野市八隈9号住居跡(註12)で布留式を伴うものがみられるが、いまひとつ明確でない点もみられる。また、熊本県阿蘇町宮山1号住居跡(註13)では免田式の長頸壺等の弥生終末的な土器群が出土しており、一隅にベッド状遺構がみられ、著しく片寄った位置に竈が付設されるという。通有の竈の系列の中に位置付けるには異論を唱えるところではあるが、年代的には現在では最古の例であろう。また、未報告ではあるが、吉井町塚堂遺跡(註14)では5C前半代の時期の竈付設住居跡が16軒発掘され、陶質土器も伴っている。

北九州においては、弥生後期～古式土師器の時期までのベッド状遺構を伴う住居跡における中央炉の存在から、次に炉の位置が明確でなくなる時期を経て、竈が出現・盛行し、更に奈良時代に至って移動式土製竈の出現をみると概略的な一連の流れがみられる。この中で、竈

の初見は、各地域によっても当然若干のずれも考えられるが、発生そのものは、その背景となる生活変革の原因を掘む必要にも繋がる問題である。少なくとも当地方でみる限り、須恵器の初見(註15)、土器製作上の粗雑化・定型化傾向、鉄製農耕具(鍬・鋤)の普及による生産拡大、地域的にもみられるようになった大型古墳築造等の大土木事業にみられる技術進歩とその動員力となる権力の集中化等の諸点と、窓の発生とほぼ期を同じくすることが考えられ、これらの社会的変革の中で、生活様式も一変していったことが認められるところである。(中間研志)

c. 掘立柱建物と条里について

発掘調査を実施した「八ヶ坪遺跡」の周辺、山家川付近では、土地割の方位をN28°Eに沿うる条里の方格地割が存在している。この周辺の条里造構については、日野尚志によって「筑後川中流域右岸における条里について」として調査・検討が加えられた論考がある。(註16) 部分的に紹介するならば、「坪付小字名は、松延に小字「三十六」、中牟田に「八ヶ坪」(遺跡所在地)、東小田に「五ノ坪」、隈に「六ノ坪」、常松に「八ヶ坪」、下見に「三十六」、山家に「ヤツエ」がある。坪並は、西北隅を一ノ坪、東北隅を三十六ノ坪とする千鳥式で、条・里が坪並の數え方と一致する場合には、造構は条は十四条、里は九里まで存在していたことは確実である。」とされている。

八ヶ坪遺跡の掘立柱建物1~5号棟は、その性格や時期に明確に出来るものは少ないが、少なくとも、遺跡の時期では、最も新しい時期に入る。しかも、偶然かもしれないが、条里造構にきわめて近い棟方向を示す。

遺跡から、出土している遺物について見るならば、平安期頃まで造構の存在が考えられよう。この事実は、この周辺の開田の時期を暗示しているようである。(栗原和彦)

註1 福岡県教育委員会「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告 第11集」 1979

2 朝日新聞西部本社「古代を掘る」所収 1978

3 藤島邦弘・内田俊和・小田道遺跡』甘木市教育委員会 1981

4 井上裕弘「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告 第4集」福岡県教育委員会 1977

5 井上裕弘「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告 第7集 下巻」福岡県教育委員会 1978

6 佐々木隆彦「今光遺跡・地余遺跡」東急不動産株式会社 1980

7 横口達也「池の上墳墓群」甘木市教育委員会 1979

8 北野耕平「河内野中古墳の研究」臨川書店 1976

9 前掲者(6)の中に井上裕弘・森田勉調査の資料として示される。

10 佐々木隆彦・他「赤井手遺跡」春日市教育委員会 1980

11 清井仁夫「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 XV」福岡県教育委員会 1977

12 松村一良「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 VI」福岡県教育委員会 1976

- 13 総方勉「宮山遺跡」阿蘇町教育委員会 1972
- 14 國道210号線バイパス建設に伴い福岡県教育委員会が1980年夏～1981年秋に調査した。馬田弘治氏の脚教示による。
- 15 ここでは、従来陶質土器と呼称されるもののうち5C代の日本生産品の可能性をも考え得る類の時期をも一部含めたものとしたい。
- 16 日野尚志「筑後川流域右岸における糞里について」佐賀大学教育学部研究論文集 第23集 1975

後記

筑紫野の、かつて殿様が女中の両肩にすがりつつ越えたという長崎街道中の難所、冷水峠にトンネルぶち抜いてバイパスが出来るげなという噂を耳にして久しい。

文化財調査も、当課内での担当者の交替などもあり、やっとここまでこぎつけたという感慨でいっぱいである。しかしそう感慨にばかりにはひたってもいられないというのも厳しい現実でもある。がんばらねば。

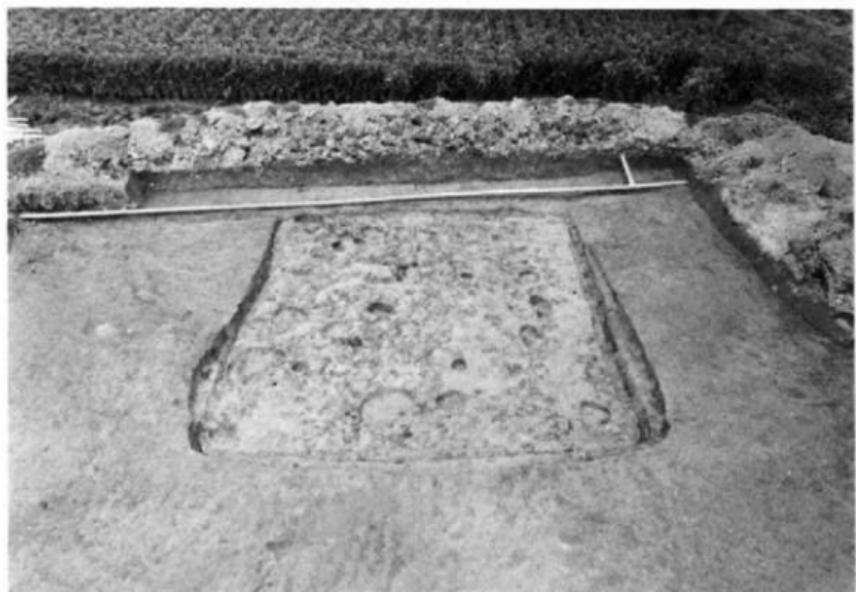
最後に、当バイパス関係担当者で事業中途で帰天された故前川威洋氏の冥福を祈り、本書を捧げたい。



1 八ヶ坪遺跡全景（南より）



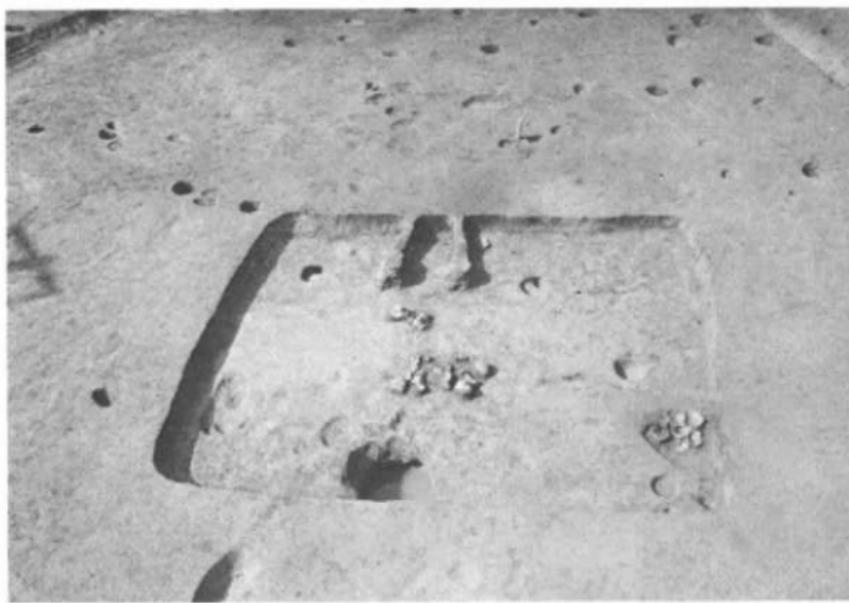
2 八ヶ坪遺跡B区全景（北より）



1 第1号住居路（東より）



2 第1号住居路周壁溝

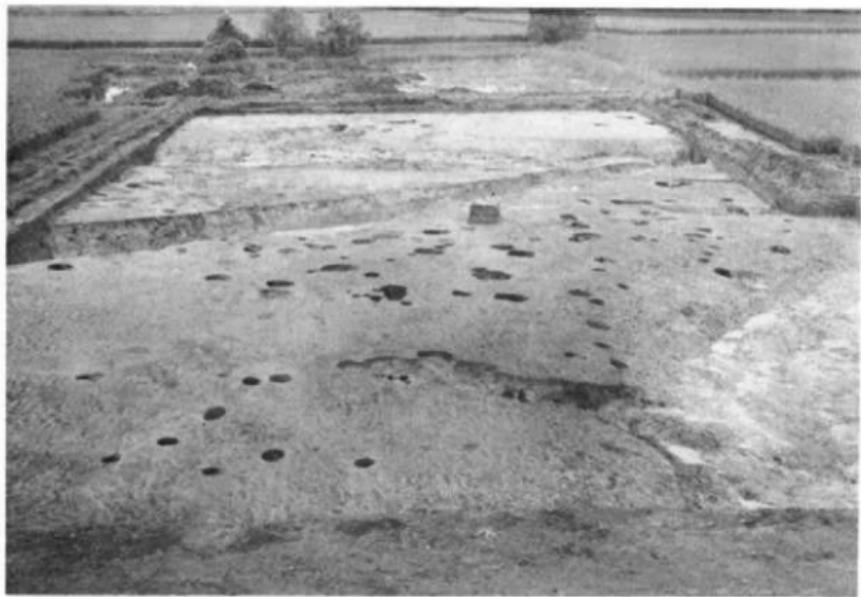


1 第2号住居路（北より）

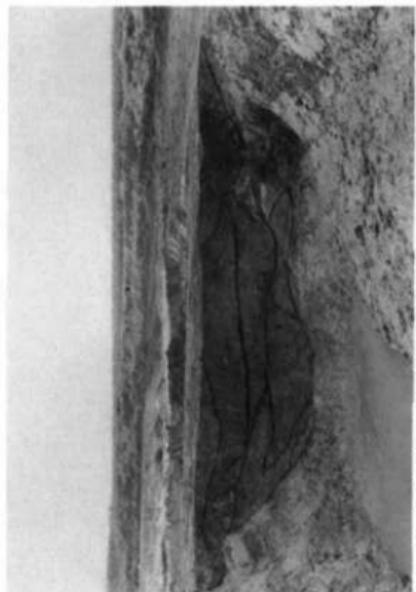
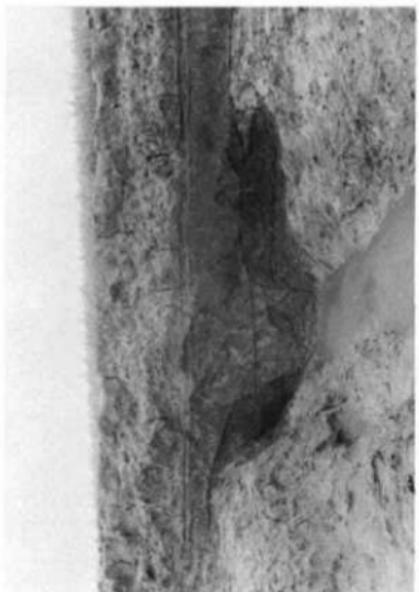


2 第2号住居路床面土器出土状態





1 A区全景(南より)



2 溝1土壤断面(上:草端、下:中央)



1 溝3（北より）



2 溝4（東より）



3 溝5・6（東より）



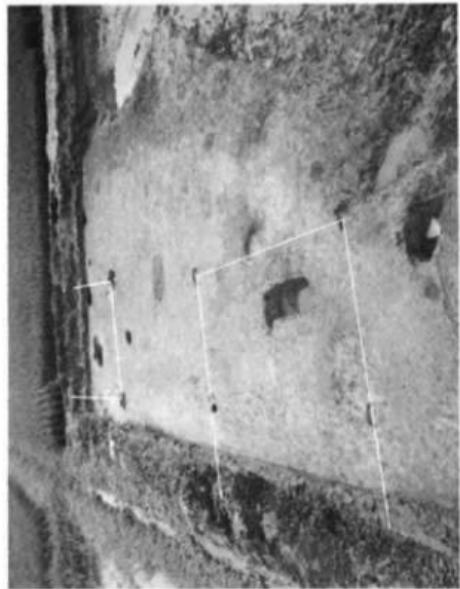
4 溝7（北より）



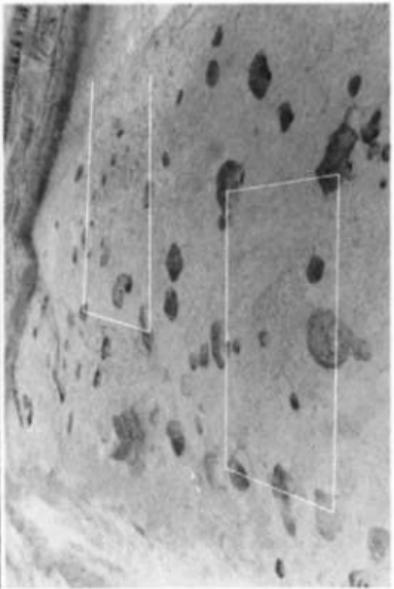
1 溝3北端土器出土狀態



2 A區東南隅包含層土器出土狀態

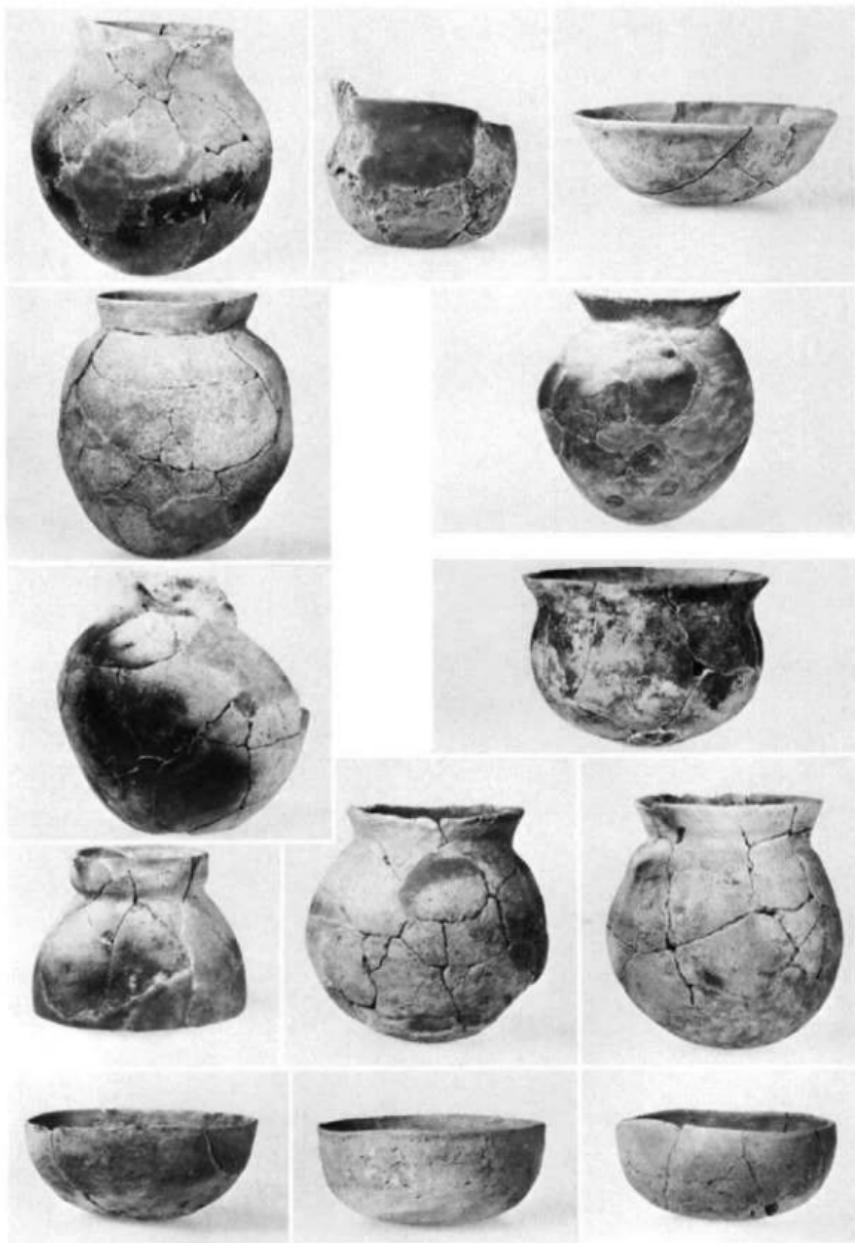


3 第1・2分層立柱堆積物



4 第3・4分層立柱堆積物

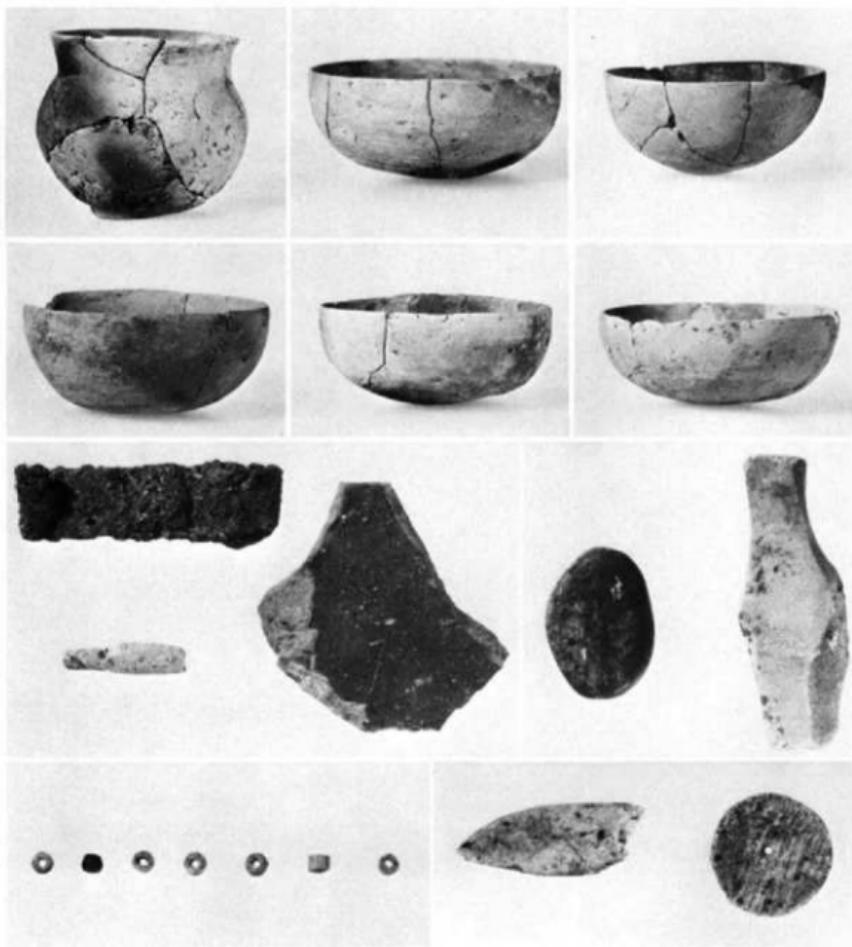
1 第1号住居跡出土土師器



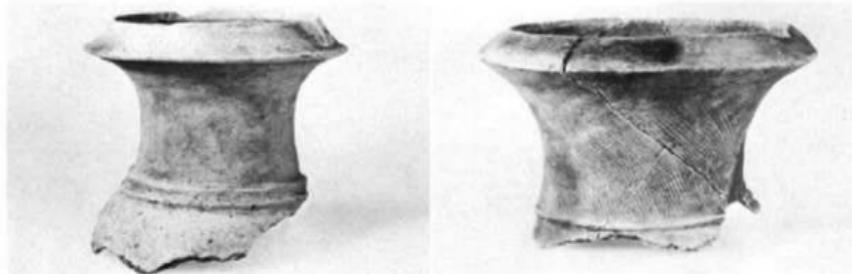
2 第2号住居跡出土土師器

図版 61

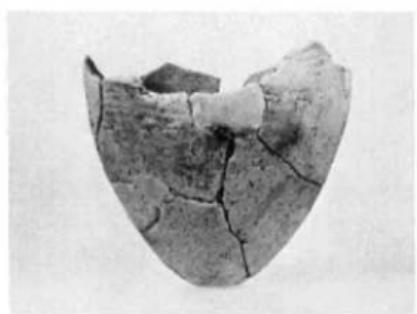
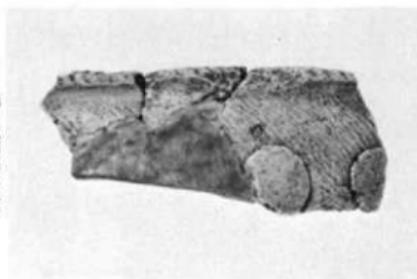
1
第2号住居跡出土遺物



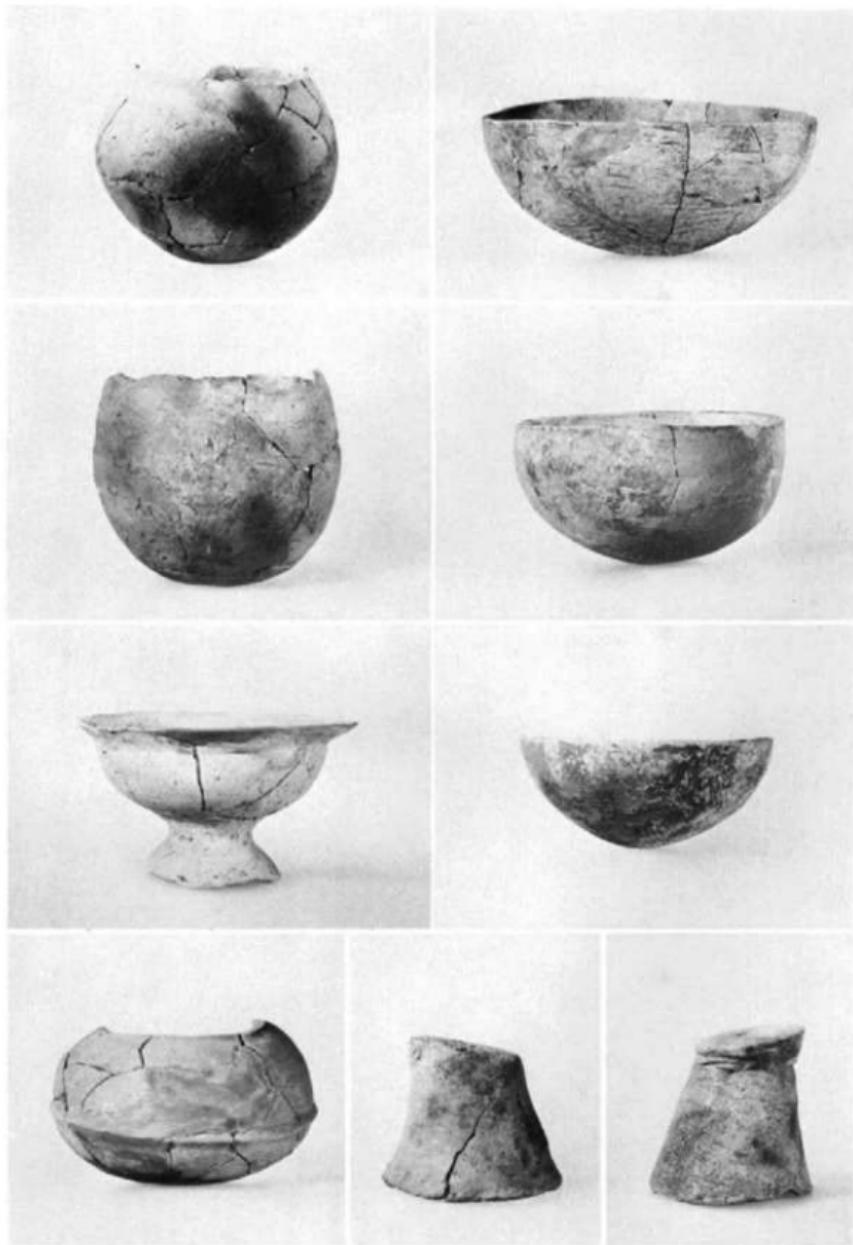
2 溝3北端出土土器



1 溝3北端出土土器



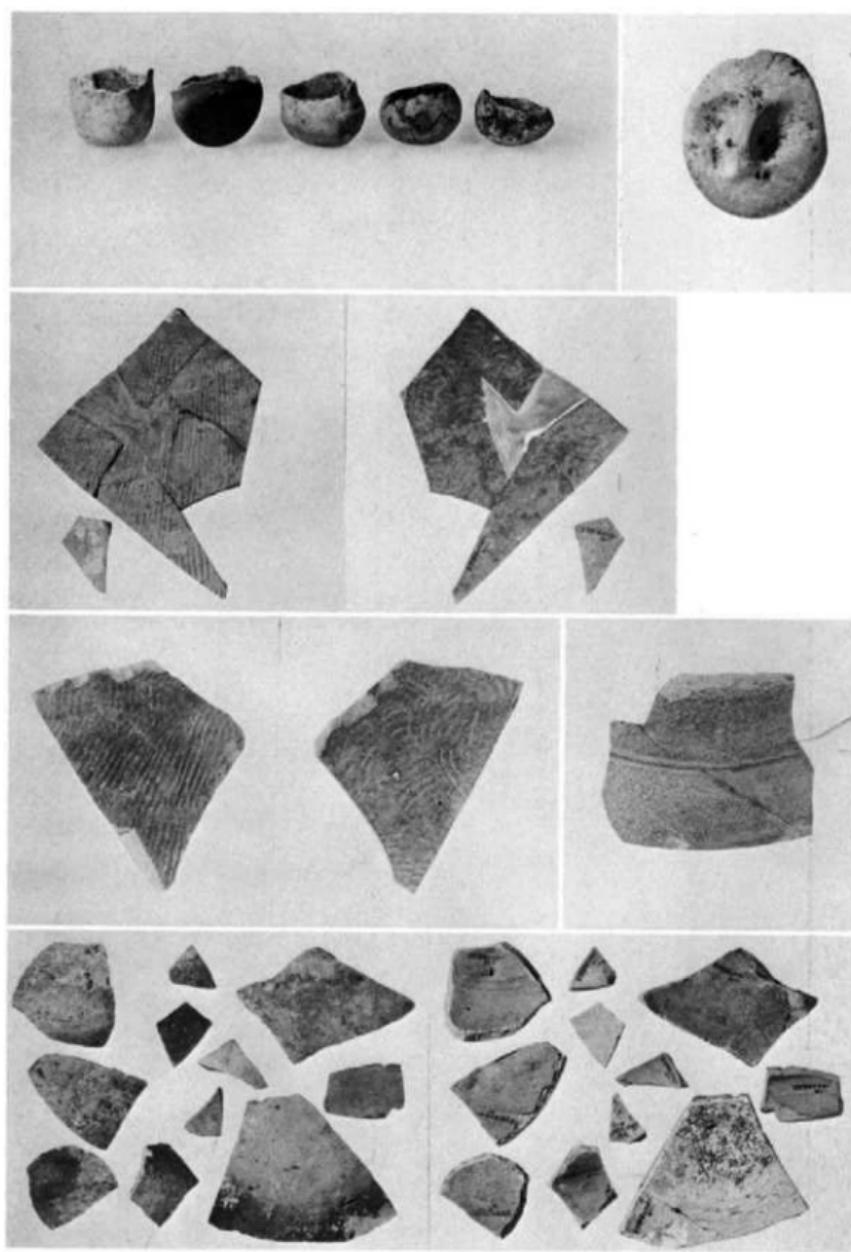
2 溝4出土土器



溝4出土土器



A区东南隅包含层出土遗物



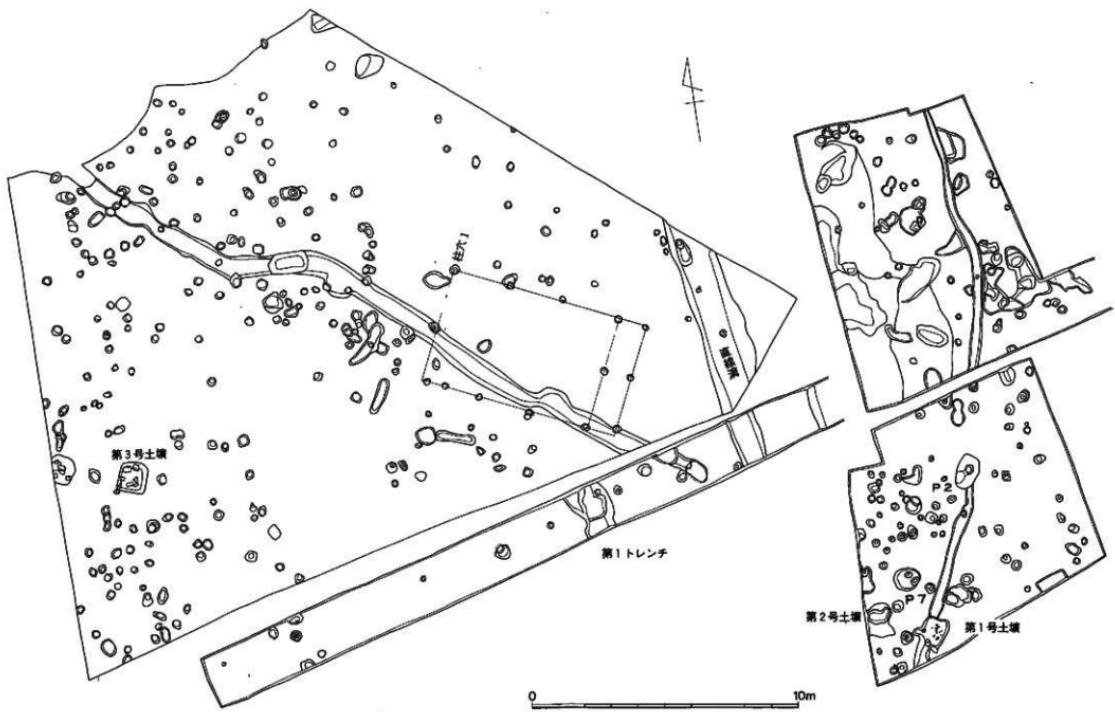
B区東端段落ち出土遺物

冷水バイパス関係埋蔵文化財調査報告

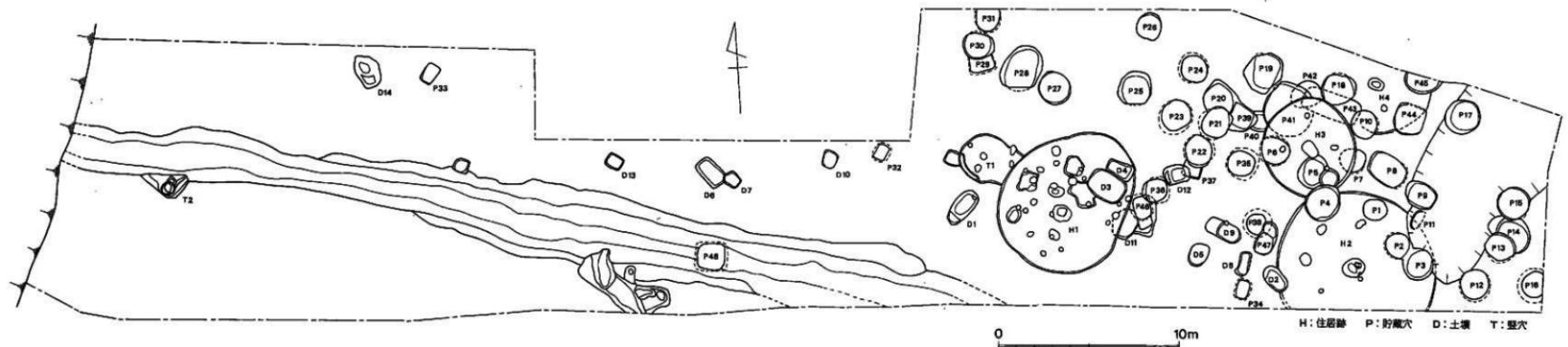
昭和57年3月31日

発行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号

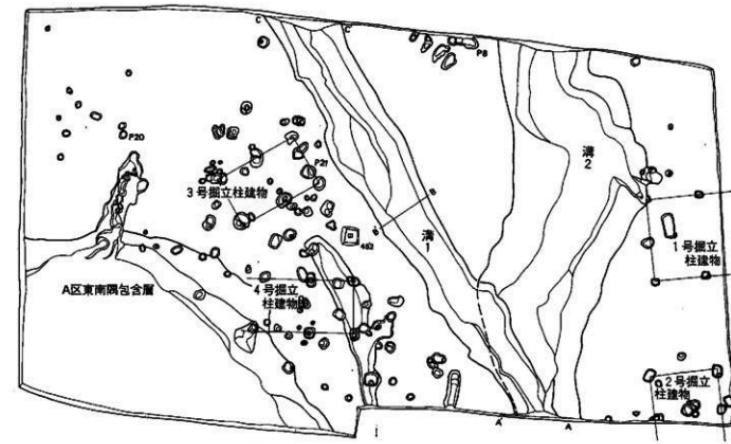
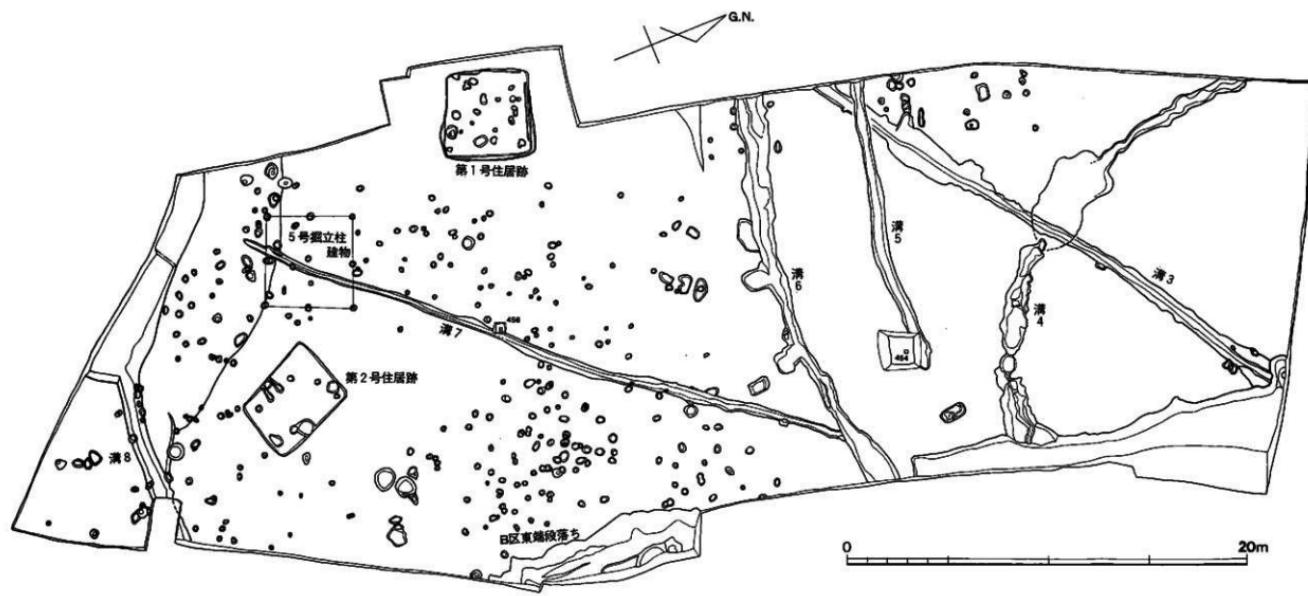
印刷 株天地堂印刷製本所
北九州市小倉北区大学町10番18号



付図1 深堀D造跡造構配置図 (1/150)



付図2 大島遺跡遺構配置図 (1/200)



付図3 八ヶ坪遺跡構造配置図 (1/200)